
世界を渡る少年

高見 梁川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡る少年

【Nコード】

N0121F

【作者名】

高見 梁川

【あらすじ】

渡り神との死闘のすえ相討ちに倒れた少年真人は異世界の地に再び目覚め新たな生を歩み始める……………主人公最強ハーレム（予定）ファンタジー！

第一話

雪がしんと降り積もっていた……

純白に染められた世界のなかに、ポツリ、ポツリと真紅の華が咲く。

全身の感覚が麻痺して指先ひとつも動かすことができない。大腿部の動脈をやってしまったらしい。

左腕も根元から消えている。

血が急速に足りなくなっていくのが自分でもわかった。

あと3分つてとこかな……

自分が出血死するまでの時間を冷静に分析してから思わず苦笑してしまう。

どちらにしろ死ぬことはわかっていたじゃないか……

この、古の怨念を引き継ぐ中御神家の守護司を引き受けたときから

.....

物心ついたときから……いや、おそらくはそれよりもずっと以前からオレは復活を予言されていた渡り神を倒すための道具だった。

あらゆる外法が試され、全身には細胞の超回復を行わせるために24時間身体を傷つけ続けるための呪法が施されていた。

細胞の再生回数は無限ではない。

渡り神との戦いのあとは細胞が自己崩壊することは承知のうえの修行法だった。

約束の日の前に死なないのが不思議なほどの修行が繰り返され、オレは超絶の戦闘力を身につけた。

もちろん逃げることも出来たのだが……

オレが死んだり使い物にならなくなった場合にはスペアが……オレの妹が戦わされることになっている以上逃げることは論外だった。

妹はオレと違って体術に素養がないせいかな絶大な呪力を誇っていたから、オレのように消耗品にならずに生きていける。

オレが渡り神を殺しさえすれば……

……もう、目が霞んで思考もままならなくなってきた。

思いかえすのは滅多に笑わない妹の笑顔

一見無表情だが、本当は照れ屋で甘えん坊で……だけどすぐに別れるのがわかってるからいつも眉をしかめて我慢してばかりで……

なかなか本当の笑顔をみせてはくれなかったけれど……

もうこの地に荒ぶる渡り神はいない。

中御神家の呪縛は解けたんだ。

籠から出て自由な空へ羽ばたいてお行き……………オレはもう見送る
ことしかできないけど、心はいつもお前の元にある。

さようなら……………真砂……………

少年の意志と力が世界の歪みを修正した。

古に封印された世界を渡る外なる神である神奈備・カムナビ・は神
代の刃に浄化されて……………あるべき世界に再構成を果たすだろう。

己の神性を取り戻したカムナビにとって、哀しき少年の無惨な死は到底容認できるものではなかった。

ただ戦って死ぬために生まれてきた少年

妹以外にぬくもりを知らずに死んだ少年

一片の後悔もなく兄妹愛に殉じた少年

彼は幸せになるべきだ。

せめて、幸せがなんであるのか知らずに死ぬべきではない。

だがもはやこの世界で行使しうる力はごくわずかだ……………

しかしあのなつかしいアヌビアの世界に還れば私は神の力を存分に揮うことができる……………

カムナビは弱弱しく輝く少年の純白の魂を、そつと懐に抱え込んだ。

第二話

「私に何の用だ………？」

「ハースバルド伯爵家のご令嬢として生まれた不幸を呪っていただ
こうか……貴女が邪魔な人間は存外多いのですよ？」

………まずいな………こいつ…かなりやる………！

私は短剣しか持ってこなかったわが身の迂闊さを呪った。

愛刀パールシールドがあれば、こんな危惧を抱くこともないのだが…
………

敵は四人

暗殺者の手練らしき男が三人に魔術師らしい男が一人だった。

助けは……望めないだろう。

ここは街道から離れた山道で、そもそも人通りがないのを気に入って私が乗馬コースにした場所なのだ。

でも負けるわけにはいかない。

この国を亡国にしないために、心血を注いでいる父の重荷になるわけにはいかない……！

暗殺者の一人が短剣を手に迫る。もう一人は男の肩を踏み台にして飛び上がり頭上から攻撃してきた。

それだけではない。もう一人の男が投げナイフを投擲している。私一人になんという念のいれようだ！

「くっ……！！」

上下両段の短剣を紙一重でかわしたものの、投げナイフが太ももと左脇腹を擦過していくのは防ぎようもなかった。

ケガの痛みを無視して私は短剣を一閃した。

頭上から飛び掛っていたせいで反応の遅れた男の頸動脈を薙ぐ。

まず一人……………！！

だが、私の反撃もそこまでだった。

「ウィンドブラスト」

満を持して放たれた魔術師の一撃に私は声もなく吹き飛ばされ、巨木に背中を打ちつけられていた。

「かはっ……………」

背中に受けた衝撃は激甚だった。

肺は酸欠にあえぎ脊髄は全身に痺れを訴えている。

短剣が力なく手のひらから滑り落ちていくのが自分でもわかった。

「ニルヴァがいなけりややばかったな……まったくなんて嬢ちゃんだ。」

忌々しげな口調で主犯格らしい男が手際よく私の両手を縛り上げた。

反撃しようにも身体を動かすことはおろか声をあげることもできない。

私にできたのはつめき声をこらえ、涙をこらえて睨みつけることくらいだった。

「……気に入らんな……ハーブル好きにしまっつかまわんぞ」

「ありがてえ……」

「ヒッ……………！！！」

騎士として死ぬ覚悟は持っているつもりのも、これには息を呑むしかなかった。

いやだ！いやだ！いやだ！

私の純潔をこんな奴に汚されるくらいなら死んだほうがましだわ！

だいたい初恋だってまだなのにこんなものってあんまりよ！

呂律の回らぬ舌で、ようやく私は言葉を紡ぎだす。

「……………助……………けて……………誰……………か……………！」

「残念だったな、嬢ちゃん。ここら1キロ以内に人なんかいやしないんだよ」

ハーブルと呼ばれた男が嫌らしい手つきで私の太ももを撫で回すと、あまりのおぞましさに鳥肌がたった。

悔しい……………！こんな理不尽に屈しないために力をつけたつもりだっ

たのに……

力が欲しい……理不尽に対抗する力が。でも、今の私にはそれがない……

ずっと我慢してきた涙が堰をきったように溢れでる。

……彼が現れたのはそんな時だった。

気がついたら森のなかにいた。

失血死にしろ凍死にしろオレは黒又山の奥の宮で死んだものと思っ

ていたのだが。

見ればあれほど深かった刺し傷の欠片も見当たらない。

そればかりか長年オレを苛んできた呪式や拘束術も見当たらないよ
うだ。

爽快だ。何者にも縛られぬという感覚はこれほどにも爽快なものだ
ったのか！

無自覚なままに涙が流れた。

涙を流すなんて何年ぶりのことだろう……そうだ、真砂と離され
た5年前、アレ以来か。

「元気にしてるか………？真砂………？」

どうやらオレは天国って奴にこれたらしい。

真砂に会えなくなったのは残念だけど、オレはいつでもお前の幸せ
を祈ってる。

大丈夫……真砂ならきつと幸せになれるさ。15歳になったはずの……綺麗に成長したお前の心を射止める男には妬けるけれど。

そのとき、聞きなれた金属音がオレを空想から引き戻した。

……どういうことだ？

耳をすませば数人が争う声と闘気を感じる。

この大気中の気の濃さからいってオレのいた世界でないことは確かなんだが……どうやらここは天国ではないらしい。

再び闘争のなかに投げ出されることを思えばがっくりと肩が落ちるのは仕方ないことだろう。

……しかしここではオレの意志でオレの戦いを選べるはずだ。
気を取り直してオレは足に力を込める。

「縮地」

一瞬にして百メートル近い距離を縮めオレの瞳に飛び込んできたのは傷ついて涙を流す女性と獣臭を漂わせた三人の男たちだった。

「……………何をしている?」

少年の静かな迫力に押されて男たちは慌てて少女から離れて身構えた。

年のころは十七・八といったところだろうか。

奇妙な衣装を身に纏ったその肢体は同年代の少年と比較しても華奢といってもいいだろう。

しかし発散される闘気の凄まじさがそんな外見を完全に裏切っていた。

「……………何者だ？貴様……………」

「中御神家守護司、中御神真人だ。事情は知らねど一個の男児として女性の操の危機を看過することは出来ぬ。退かぬとあらば

一戦交えようぞ。」

謡うように流れる美声だが、静かな闘志は隠すべくもない。

しばらく少年を見定めるように観察していた男たちだが、少年が何の後ろ盾もない民間人と見てニヤリと残忍な笑みを浮かべた。

17

「多少は武術の心得があるようだが今度生まれてくるときは身の程というものを弁えるのだな」

二人の男が少年に殺到した。

5本の投げナイフを囷に少年の心臓と頸動脈を狙う。

少年は恐怖のためか、あきらめているのか、まったく避けようとしていない。

青臭い正義漢をきどった報いだ……………！！

「ダメ！避けてえええええ！」

少女の悲痛な悲鳴もむなしく短剣が少年の心臓と頸動脈に吸い込まれた、が……………

「なにiiiiiiiiiiii！！！！」

まるで鋼鉄の鎧を攻撃したような感触に男たちは驚愕の悲鳴をあげる。

雪のように白い艶やかな少年の肌には擦過のあとすら残されてはいなかった。

「どついつつもりです？そんな気の通らぬ武器で向かってくるなんて？」

心底不思議そうに少年は首を傾げた。

神と戦うため、最上級の呪力を付与された武器を操ってきた少年にとって、ただの鉄の刃など水に濡らした和紙にも満たぬものでしかない

ということ少年以外に知るものはいない。

男たちの顔が言い知れぬ恐怖に歪んだ。

「ウインドブラスト」

「術を禁ずれば即ち現ること能わず」

高密度に圧縮された風の一撃も発動しなければただの掛け声と変わらない。

「……………カカカ、カウンターSPELL……………！」

魔術師らしき男がたたらを踏んで後ろに下がった。

発動する魔法を打ち消されるということは、魔力、構成力、速度の全てにおいて相手が上回っている………それもおそらくは

二周り以上は上手だということに他ならないからだ。

「確かに私は若輩者ではありますが、仮にも中御神家の守護司です。あまり遊ばずに本気をだしてください」

冗談ではない！手を抜いてなどいるものか！

少年の言っていることが本気とわかるだけに男たちの恐怖は大きかった。

こいつは正真正銘の化け物だ！………ならば！

男たちは頷きあうと、攻撃の矛先を倒れたままの少女に向けた！

誘拐に失敗したならば命を奪う。それが雇い主からの依頼だった。

「刃を禁ずれば即ち傷つけること能わず」

あるうことか少女に向かって放たれた必殺の毒刃はまるでゴムのように柔らかくなり、かすり傷もつけられずに大地に落ちた。

「物質変換まで使えるのか！貴様いつたいなに……も………」

男は言いかけた言葉を最後まで言い切ることはできなかった。

そこには先ほどまでのどこか茫洋とした少年はいない。

黄金の瞳に殺気を漲らせて男たちを見据える異形の戦士がいた。

「花散」

男たちの耳に少年の呟きが聞こえた。

それが男たちの最後となる。

刹那、首が散り際の花のようにポトリと落ち、噴きあがる鮮血が、
大地に赤い花の絨毯を敷き詰めていった……。

少年の黄金の瞳に至近距離で覗き込まれてルーシアは首筋まで朱に染まった。

……やだ……！なんて綺麗……！！

少年の武力に目を奪われていたから気がつかなかったが絶世の美形だった。

白金の髪はまるで雪の結晶のように光り輝き

肌は極上の磁器のように白く滑らかな光沢を放っている。

女性のように繊細で柔らかな顔の造作のなかで

黄金の瞳だけが男らしい強い意志の光を宿していた。

「土行を以って豊穰の力と為す癒えよ」

少年の掌から暖かい気が注がれるのを感じる。

温泉にでもつかったかのように身体が熱くなったかと思うと、傷は跡形もなく消えていた。

「ななななな………！」

ルーシアから驚愕の悲鳴があがる。

傷跡の欠片も見当たらないなんて……高僧並の治癒力だ。

「……もう大丈夫……」

少年……マヒトの微笑を至近距離で目の当たりにしたルーシアの脳内で桃色の台風が吹き荒れた。

こんな……綺麗すぎる！はうううううっ／／／！

「僕の名は中御神真人……君は……？」

「ル、ルーシア！ルーシア・セアライン・ファル・デ・ハースバルドよ。助けてくれてありがとう」

鼓動の音が頭の先まで響いている気がする。

信じられない……これってもしかして一目ぼれ……？っわあ！どうしよう！

初めての感覚にとまどうルーシアの脳は少年の次の一言に完全に停止した。

「とところでここは天国でないならどこなのだろう？」

……せっかくの初恋の相手がイタい人だったら悲しすぎる……

マヒトのじごく不思議そうな顔は決して嘘をついているものとは思

えない。

……っというか天国ってなによ！

「ここはオルパシア王国の首都ヴァンガードよ……知らなかったの？」

「オルパシア王国……？それじゃ日本の岩手県なんて知らないよね？……はあ……」

「ちょっとそんなに落ち込んでどうしたのよ？もしかして……迷子？」

ルーシアは真人が深いため息とともにガツクリとうなだれるのを見て、咄嗟にそう思ったのだが真人の答えは予想の斜め上に行くものだった。

「迷子といえば迷子かもしれない。異世界から来たというのを迷子と呼んでいいならね……はあ……神でもないのに世界を渡るなんて……」

「異世界いいい??」

ルーシアは悲鳴をあげた。

理性ではなく本能が真人のいうことが正しいと告げていた。

なんだってせつかくの初恋なのに難易度高そうなのよ!

つっこみどころが間違っている気もするが………恐るべきは恋する
乙女の情念ということだろうか………

「……つまりマヒトは異界から渡ってきた神様と戦って気がついたらここにいたというわけね……」

マヒトの口から紡ぎだされた事実は恐るべきものだった。

人の身でありながら神と戦える武量もさることながら、そのためにマヒトが払った狂気の犠牲がルーシアの胸を締め付ける。

にもかかわらずこのマヒトの涼やかさはどうだろう。

それが諦念なのだとするなら哀しい……ルーシアはそう思う。未来は諦めるためにあるものではないはずだ。

「行くあてもないでしょう？私の家にいらっしやい……命の恩人を異郷に放り投げてなんておけないわ」

とりあえずマヒトには重石が必要だ。

放っておけばマヒトはどんどん他人のために自分の命をすり減らしていつてしまう……そんな気がする。

……恋でもすれば……真剣に欲しいと思えるものがあればマヒトも変わるだろうか？

「ありがとうルーシア………」

マヒトの形の良い指先がルーシアの燃えるような赤毛を梳いたかと思つと……

チュッ！

頬に口づけられていた。

……

.....

とりあえずマヒトには恋人が必要よね。

それも腕がたつて権力もそれなりにあつて気立てのいい………具体的にいうと私のような

といつかそれ以外は認めない、認める気もない。

マヒトは私の獲物なのよ………！！

どうみてもマヒトに狩られた獲物にしか見えないルーシアは顔面を朱に染めながら将来の恋人の獲得を心に誓っていた。

第四話

真人にとってヴァンガードの賑わいぶりは驚きの連続だった。

石畳の街路、そして行き交う人々の群れ……百万の人口を飲み込む首都の喧噪は真人の想像を大きく超えている。

真人の記憶にあるものと言えば中御神家の御山にある修練場だけ……

……

真人を鍛えるために捕獲されてきた数々の妖魔

表情を消したまま真人の修練にあたる護官たち

神を殺すべき剣としてうちあがりの出来だけを要求される毎日……

人とはこれほどにも笑うものだったのだろうか

人とはこれほどにも騒がしく目まぐるしいものだったろうか

人とはこれほどにも生氣に満ちて楽しみにあふれたものだったろうか

ハースバルド伯爵家はオスパシア王国きつての武門の名門である。

先祖代々軍務卿を輩出し国防の柱石として活躍してきた。

しかし近年ハースバルド家を押しのけるように軍部内に台頭する勢力があつた。

クネルスドルフ子爵家である。

文官筆頭である国相マンシュタイン公爵家の庶流であるクネルスドルフ家が軍部で台頭した理由はひとつしかない。

文官勢力による軍部の掌握だ。

オスパシア王国はこの百年ほど隣国の戦乱に巻き込まれることもなく平和を享受してきたが、ここ数年でプリストル帝国との関係が急速に悪化している。

平時において絶大な権勢を揮ってきた文官勢力も乱世においては軍部の台頭を抑えきれない。ならばとりこんでしまえというわけだ。

ハースバルド家当主ウーデット・セアライン・ファル・デ・ハースバルドは憂鬱そうにかぶりを振った。

彼の手元にあるのは脅迫状……娘の命が惜しければ軍務卿を辞職しろと書かれている。

古典的な手だ。

しかし妻を失いたった一人残された娘の命は何にも代えがたいものだった。だからこそ生き残るための術を娘には叩き込んだつもりだ。いささか勝気なじやじゃ馬になりすぎたきらいはあるが……死なれてしまうより余程いい。

しかし今は時期が悪すぎる。今日の王室会議の紛糾具合からすると本腰を入れて人数を動員してくる可能性がある。

娘は親のひいき目なしに傑出した剣士だが……それなりに腕の立つ者が五人もいればおさえこむのは難しくないだろう。

なんといつても実戦経験が少なすぎるうえに……やはり女だ。

家人に問うと父親の心配をよそに娘は馬で遠乗りに出かけたという。郎党を差し向けて娘を探させてはいるが、もし真実娘が誘拐されていた場合、自分は毅然として脅迫をはねつけることができるだろうか。

娘を見殺しにして国家の安寧を図れるだろうか……

ハースバルド家は国家の盾

今ハースバルドという支柱を失えばオスパシアは素手でプリストルとやりあうに等しい。

クネルスドルフなど、恫喝と媚を売る以外にさしたる才能はないのはわかっていた。

ルーシア……無事でいてくれ……

父として娘にろくに手助けできないことが狂おしいほどもどかしい。
妻が生きていたら不甲斐ない自分を嘆くだろうか、なじるだろうか

……

「ただいまー！」

能天気なルーシアの声が屋敷に木霊したのはそのときだった。

「無事だったか！ルーシア！」

突然の父親の大声にルーシアの顔が驚愕に見開かれる。

「ええ……彼のおかげで無事だったけど……なんでお父様が知っているの？」

問いに答えてもらう間もなくルーシアはウーデットのたくましい胸のなかにすっぽりと抱きしめられていた。

「……このじゃじゃ馬め！今は空気がきな臭いとあれほど言ってお

いたものを！」

そういわれるとルーシアも一言もない。

最近ハースバルド家の派閥の属する将校や貴族を狙った襲撃が2件ほど続いているので自制するよう父に言われていたのを気にも留めずにいた結果だからだ。

「ごめんなさいお父様……………」

「このバカ娘が…………無事であつたからいいわけではないぞ！心配させおつて…………！」

真人は羨望に胸を突かれていた。

体中で娘の無事を喜ぶ父

戸惑ってはいるものの父の愛情を正面から受け止めている娘…………

真人の父は中御神家の護官の一人だったという。

真人というハイブリッドを生み出すために鬼の力をもつ母と交わったそうだ。

ただ、神を殺す剣を生み出すためだけの性交渉……………それもおそらくは父以外の者とも交わっていたことだろう。

母の自分を見た瞳を今も覚えている。

……………作品の出来栄を見る鑑賞の目……………そこに愛情などあるはずもなかった。

兄妹だけでなく親子もこれほど愛情で結ばれているものだったなんて……………

改めて自分がいかに特殊な存在であったか見せ付けられたような気がして真人は肩を落とした。

それを放っておかれたせいと勘違いしたらしい。

ルーシアは慌てて真人の右腕に自分の腕を絡ませるとウーデットに向かつて告げた。

「彼……ナカオカミマヒトというのだけれど……彼に助けてもらったのよ。暗殺者と魔術師の手練四人をあつという間にやつつけてくれたの！」

「暗殺者に魔術師だと？」

ウーデットは不可思議なものでも見るような目で真人を見た。

ルーシアが手練というくらいだから、実力は間違いないのだろうか……。

しかしその暗殺者と魔術師が連携した場合の戦力は一流の剣士でも一人では屈服を余儀なくされるほどのものだ。

それなのにこの目の前の少年の様子はどうか。

十六、七ほどになるだろうか……女性に見紛うばかりの美形だが、おおよそ武の気配を感じさせるものはない。

もし娘のいうことが真実であるとするなら……この少年は異常だ。

「それでマヒトは記憶喪失で行くあてもないらしいの。しばらくこの家において……できれば私の部下になってもらおうと思うのだけれど……」

ウーデットはため息をつきながらかぶりを振った。

「ルーシア、悪いがそれはできない。」

第五話

「どっしてよ!?!」

ルーシアは思いもかけない父親の反対に思わず嘔みついていった。

「今記憶喪失と言ったな、ルーシア」

「……………うん」

もちろん嘘だった。

しかし真人が異世界から来ましたなどという話をこのお堅い父が信じるはずもない。

真実を話せない以上今の真人を言い表せるのは記憶喪失くらいしか思いつかなかったのだ。

「彼が記憶を取り戻したとき、実はプリストルの生まれ出ないところとして言える？」

真人は違うー！本当は大声でそう言いたいが……ルーシアは言葉を失ってうつむいた。

「それでなくとも今は我が家の落ち度を探そうと国相派の貴族どもが鵜の目鷹の目で狙っておる……今日お前が狙われたのがいい例だ。プリストルの内部工作とていつあるか知れたものではない。いずれこのものとも知れぬ男を屋敷に引き込むわけにはいかんのだ。……感謝はしているのだが。」

さすがのルーシアもそう言われて父に頭まで下げられてはこれ以上ごねるわけにはいかなかった。

「……仕方ないわ……褒美はいただけるのでしょうか？」

「王国金貨で千枚だそう。」

「ええっ？」

一瞬耳を疑う。

金貨千枚という金額はルーシアの想定を遙かに超えたものだった。

ハースバルド伯爵領からあがる年収のほぼ一割に相当する。平民どころか下級貴族でも一生遊んで暮らせる金額だった。

44

ルーシアはようやく父親の真人に対する感謝の深さを悟った。

本当はいくらでも屋敷でもてなしたいのだ。

できることなら真人が軍で一定の地位を得られるよう口を利いてやりたい。

しかし公人たるウーデットはそれができない。

謝礼金で解決するなど、ウーデットの気性からいって不本意に違いない。

その中で最大限の感謝の表象に違いなかった。

「本当に不器用なんだから……お父様は……！」

ルーシアはため息とともにたくましい父の胸に頬をすりよせた。

……そんな父が大好きだ。

父とともにこの国を守る力となる……軍に入ったときの誓いをルーシアは再び思い出していた。

……そうだ

「お父様、傭兵は出身の有無を問いませんでしたかね？」

「確かに傭兵なら腕さえ立つなら問題はないだろうが……大丈夫

なのかね、彼は」

ウーデットは胡乱な目で真人をみやった。

腕のことを言っているのではない。

剣の腕前に関する限り娘の目は確かだ。それは自分が一番よく知っている。

問題は……少女のようにたおやかなで柔らかな顔立ちをした少年が荒くれ者の巢窟と化している傭兵隊でやっていけるのか、ということなのだ。

「何も問題ないわ。どうせ真人に傷一つ負わせられる奴なんているわけないし……ねえ真人、それでいいでしょう?」

ルーシアは傭兵の荒くれどもが腰が抜けるほど驚くさまを想像してニヤリと笑った。

自分の指揮下におくという予定は変わったが大筋で計画に変更はない。

むしろ危険な任務に真っ先につかされる傭兵のほづが頭角を現すには早いかもしれない。

屋敷への帰り道、真人はルーシアへの協力を約束していた。

なんといつてもこの異世界で初めて得た知己であるし、ルーシアを穢そうとした敵のやり口にも憤りを感じていたのだ。

それに真人のいた中御神家ではこうした偶然の出会い……縁の中には神意が介在する場合があるからおろそかにしないように……との家訓がある。

真人には異世界に放りだされてすぐ、たまたまルーシアの命を救うことになったことがただの偶然とは思えなかった。

ならばしばらくは乗ってみるのも悪くはない。それにどうせ一度失われた命だ。

傭兵というのがどういったところかは知らないがいずれにしろ……

……

オレは戦うことでしか人の役にたてない……………

必要なことは正しく戦う時と相手を見定めるのみ……………

「それがかまいません。ルーシア」

真人は艶やかな微笑みを浮かべてルーシアに頷いた。

そんな真人を天空から見つめる一対の瞳がある。

「さて、仕込みは終わった……………次はお主が自分で動く番だぞ、少年よ……………」

アヌビア世界のもっとも強大な五柱の一、カムナビの姿がそこにあ
った。

第六話

ルーシアはそのまま真人の新居を探しに行こうとしていたが、そうは問屋がおるさなかつた。

放置してきた暗殺者の死体の検証と容疑者探しをウーデットに命ぜられてしまったからだ。

ルーシアが苦戦するほどの腕前からすれば名のある暗殺者の可能性が高く、そこから容疑者が割り出せないとも限らない。

しかも、場所がルーシアの秘密の乗馬コースとなればルーシアが参加しないわけにはいかないのだった。

「う~~~~っ！ごめんね、真人。終わったらすぐに顔を出すから」

「悪いが今日中には無理だぞルーシア。この件に関しては徹底的に追求して同じようなことを企む輩への抑止にしなくてはならんからな」

「そんな~~~~!!」

くずれおちるルーシアの前に一人の侍女が進み出る。

「ご安心ください。お嬢様。真人様は私が責任をもって面倒を見て差し上げますわ。」

胸をそらして進み出た少女にルーシアは目を剥いて絶叫した。

「あんただけは真人に近づくんじやないわよシェリー！」

冗談ではない。

屋敷内の侍女のまとめ役でもあるシェリーはルーシアの乳姉妹だったこともあって何かとルーシアに張り合う傾向にあるのだ。

具体的にはルーシアが魅力を感じた男性を誘惑しようとする。

いくら初恋もまだのルーシアとはいえ、憧れる男性くらいはいたのである。

しかし残念ながら肉感的な魅力においてシェリーには圧倒的劣勢を強いられているのが現実なのだった。

「まあ、お客人をおもてなしするのはメイドの勤めでございますわ」

「あんたの場合明らかにいらん奉仕をしようとするでしょうが！」

具体的にはその目障りな乳で！

「いい加減にしろ！いくぞ！ルーシア！」

無情にもウーデットは娘の襟首をつかまえて有無を言わずひきたてていく。

「そんな！ああ……お父様待つて！シェリーはダメなの！ダメなんだからああああ……！」

哀れな悲鳴を残してルーシアは屋敷の外へと消えた。

あまりの展開に真人は呆然と立ち尽くすしかなかった。

結局なにがどうなったのだろうか？

「真人様、よろしいでしょうか？」

「はい……………」

「今日お世話いたします当屋敷の侍女シエルファリア・レンブラン
トと申します。シエリーとおよびくださいませ」

シエリーは茶色がかった髪と利発そうな大きな瞳が印象的な美少女
だった。

年齢はルーシアと同じ19歳だが、体形はといえば、もはやダイナ

マイトというほかはない。

とりわけ釣鐘型の張りのある巨乳は世の男性陣の羨望的なのだ。

「え〜とシェリーさん？それじゃ……よろしくお願いします」

「ではさっそくお屋敷の手配から参りましょうか」

シェリーは己の豊かな胸に真人の腕を抱え込んで艶っぽい流し目を送るが……

54

「ありがとうございます……（ニッコリ）」

そんな機微のわかるうはずもない真人の無垢な微笑にあっけなく墜されていた。

「いいいいいい、しよんな……／＼／＼……そそ、それではこひらくぐりぞ……はぶつ」

クールで常に理知的なシェリーの壊れっぷりはハースバルド家で後々まで語り草になったという……………

ハースバルド家から歩いて30分ほどの場所にその家はあった。

先月下級貴族の家族が手放した邸宅で、伯爵家とは比較にもならないが貴族らしい品のよい造りと手入れのよい庭に恵まれている。

五人程度の家族が暮らすのにちょうどいい広さと、暖色を多用した暖かな色彩に溢れた家の内部はかつてここに暮らした家族の幸せな団欒を想像させた。

「いかかでしょうか？ 真人様」

ニッコリと笑ってシェリーは真人を見やる。

もっとも真人がこの家を気に入っているのは真人の瞳を見れば一目瞭然だった。

あえて言葉にしたのは事後確認にすぎない。

「はい、とっても素晴らしいところだと思います。でも、よろしいのでしょうか？このようなお屋敷を………」

真人の暮らしてきたのが中御神家の座敷牢だったことを思えば天国のような住まいだった。

それに家に浸み込んだ気がなんとも言えず暖かい。

よほど家族仲の良い家庭だったのだろう。

「もちろんでございます。この家の家族は私の旧知のもので、今は新たな領地を拝領してそちらに移り住んでいるのですが……：真人様のような方にお使いいただければきつと喜ぶでしょう。それにこの家の代金も王国金貨10枚にすぎません。真人様は王国金貨千枚を所有しているのですよ？」

「ずいぶんと大金だったのですね……………」

そもそも金銭感覚を養う機会のなかった真人にとって異界の貨幣価値などわかるはずもない。

「念のためご説明いたしますと王国金貨は貴族以上の階級で用いられる特別貨幣で流通貨幣のヘルメス金貨50枚の値打ちがあります。ヘルメス金貨1枚はセレーネ銀貨10枚、セレーネ銀貨1枚はアトラス銅貨100枚となります。日用品ではもっぱら銅貨だけを使うようになると言えばどれほどの資産かわかりますか？」

「想像もつきかねますね……………」

真人にとって買い物やおこづかいなどという言葉はわずかに読んだ書物のなかにしか存在しないものだ。

屋敷内にある程度の家財道具は残されたままになっているようだが、そもそも何をそろえたらいいのか見当もつかない。

頭脳明晰で雑事に練れたシェリーの存在は心強いものだった。

「とりあえず最低限のものは今日中にそろえませんか……まずは両替に参りましょうか」

シエリーは真人の手のひらを握るとくすくすとしのび笑いを漏らした。

まるで年の離れた弟を相手にしているようだ。

同じ年の頃の少年に比べて知っているべき常識を何も知らない。

記憶喪失なのだからそれも当然なのだろうが、彼はたとえ記憶が戻ったとしても変わらず無垢で爽やかなままいられる気がした。

58

あのルーシアがベタ惚れなんてどれほどのものかと思ったけれど……

ルーシアの好みははっきりしている。

父親のウーデットのような男性的魅力に溢れた美丈夫で少しカタブツと言われるような男に弱い。

しかしルーシアに釣り合う年齢の男に、ウーデットのような渋い分

別を要求するのはどだい無理というものだった。

あらかたの男はあっさりとしエリーの魅力に籠絡され、シエリーの魅力が通じない財産目当ての男は裏工作をしてご退場いただいた。

ハースバルドの次代を担うべき男はシエリーの眼鏡にかなう立派な男性でなければならぬのだ。

残念ながら真人様もハースバルド家次期当主としては不合格ですわ……でも私の恋人としては合格にしてもいいかしら

獲物を狙っているつもりで実は自分から檻の中に飛び込んで哀れな獣がぐふふ…とくぐもった笑い声をあげていた。

第七話

両替商の主人は真人のような若者が王国金貨をもってきたことに驚いた表情を浮かべていたが、メイド服姿のシェリーを見て、どこかの貴族のお坊ちゃんあたりをつけたらしい。

「良いお買い物……今日の東街市は庶民のものとはいえなかなか掘り出し物が多いと存じますので……」

愛想笑いを浮かべながらお膝元の市をお薦めするあたりはさすがは商売人というところだろうか。

「ありがとう、ご主人」

にこやかに礼を述べる真人を見て再び主人は首をひねった。

通常貴族という人種はこれほど素直に礼を述べたりしないからだ。

はて………？

両替商というものは王国でもっとも多様な人々と接する商売だ。

他国の通貨ではこのオルパシアでは買い物ができない以上、旅人も商売人も平民も貴族も必ず両替商のもとを訪れる。

なかには王国の治安組織から人物鑑定を任されている者すらいるという。

その自分が、目の前の少年をまったくどう認識してよいか判断がつかない。

葛藤する主人に苦笑を向けながらシェリーは真人の手をとった。

「それではまずはお召し物から参りましょうか……………」

東街市は盛況な様子であった。

露店が見渡す限りに軒を連ね、またもとからあつた商店街の店も溢れかえる人々を呼び込むのにおおわらわになっている。

「こちらで私の叔母が古着屋をやっておりますの」

シエリーは案内したのは商店街のなかでもいささかこじんまりとしてさっぱりとした店構えの古着屋だった。

「おばさま、いらっしやるかしら？」

「おや、シエリーじゃないかね。今日はどうしたい？」

店の奥でお茶を一服していた老女がこの店の主人であるらしい。

人好きのしそうな柔らかい笑みを浮かべてシエリーを抱きしめる。抱きしめた拍子にシエリーの後ろに隠れていた真人を見つけると今度はシエリーの背中を容赦なくバンバンと叩きだした。

「おおっ！シエリーずいぶんと上玉をつかまえたねえ……でかしたよー！」

「真人様は当家のお客人ですわ！」

首筋まで真っ赤に染めながらシエリーは慌てて否定する……内心はまんざらでもないのは「愛嬌だ。」

「異国の方ですのでこちらの衣装をお持ちにならないの。仕立てのいいところをいくつかお願いできないかしら？」

「まかせておきな！今のままでえらい別嬪だが、あんたが惚れ直しそうなのをバツチリ選んでやるよー！」

「おばさま！！／＼／＼／」

シエリーのお客人発言はまったく相手にされていないようだった……。

…

……

……

「まあ、似合うだろうとは思ってたんだけどね……………」

身に着けていた狩衣を脱いで、黒い皮のズボンと貴族らしいデザイン
のゆったりした白いシャツに着替えた真人の艶姿に女主人も呆れ
た視線を向けていた。

正直にいつて綺麗すぎる。

狩衣と足袋を身に着けていた真人は、まだ奇異な印象が目立ってい
たが、こうしてオルパシア貴族風の衣装を身に纏えばその威風は王
族か大貴族の貴公子にしか見えない。

胸の前で両手を組んで、まるで宗教画でも見るように陶醉しきった

表情を浮かべる姪を見ると叔母としてはなかなか複雑な心境だった。

……厄介な奴に惚れちまったみたいだねえ……

露店での買い物はシェリーの独壇場だった。

目利きから値段の交渉、はては品物の運送の手配までその手際は流れるように淀みない。

今は南方からやってきた大柄な商人を相手にカーテンの値段をめぐって喧々諤々の争いを繰り返している。

シェリーの手腕にはいくら感謝しても感謝しきれないところだ。

真人が自分で同じ買い物をしようものなら、材料を揃えるだけであと数日はかかり、値段も最低で数倍はかかっただろう。

何か自分にお礼できることはないだろうか……そんなことを考え

ていた真人の目を引くものがあつた。

見た目にはなんの変哲もない花の蕾をあしらつた銀細工である。

だが、真人の目にはそれが尋常のものでないことが一目でわかる。

まず、発せられる気が違う。

この細工を造り上げた職工の情熱と執念がまるで炎のような気を噴き上げていた。

そして何より……

魔力の流れが感じられる。

「ご主人、これはおいくらかな？」

「おや、お坊ちゃまさすがに目が高い！これは300年ほど昔に活躍した芸術家ジェラルド・ヴィンセントの晩年の作品だよ。まあ、鑑定書があるわけじゃないから金貨3枚にまけておくがね。お買い得だよ？」

「真人様いけません！ジェラルド・ヴィンセントは名工の名も高く今でも貴族の間で人気の作家ですが……そのせいで贗作が多いことでも知られてるんです。こんな露店で売られるような代物じゃありません！」

カーテン購入の交渉を終えたらしいシエリーが会話に割ってはいってきた。

世間知らずの真人には鑑定眼などないだろう。早くからお屋敷にあがって名家ハースバルド家の美術品に触れてきたシエリーには密かに目利きの自信があった。

その自分のみるところ、真人が買おうとしている銀細工はごく平凡な民芸品にすぎない。

「ほほう……坊ちゃまこの彼女にプレゼントかい？それじゃサービスでこの黒檀の手鏡をつけるが、どうだい？」

「真人様！私プレゼントなんて……！」

……いや、正直真人にプレゼントをもらえるなら本当は身体が震えるほどうれしい。しかし、真人が騙されるのには我慢がならない。

「私はそのジェラールさんがどんな人なのか知りませんが……この飾りはシェリーさんにきつと似合いますから……どうか受け取って下さい」

真人から金貨を受け取ると、商人はしてやったりという笑みを浮かべてそそくさと銀細工の髪飾りと手鏡を真人に押し付ける。

その無造作な扱いひとつ見ても商人が銀細工をジェラルルの作品だなどと夢にも思っていないのは明らかだ。

シェリーはくやしかった。

同時に真人に対しても腹が立つてくる。

それは自分の目利きが否定されたようでもあり……真人がジェラールというブランドに目がくらんだことへの反発でもあった。

文句のひとつも言いたくなって開きかけた唇は……真人の人差し指によって優しく封じられた。

「見ててくださいシエリーさん……………」

シエリーの前に差し出された黒檀の手鏡に蕾の髪飾りをつけた自分の顔が映し出されている。

やはり平凡な見栄えでしかなかった。これではシエリーが持つ銀貨一枚のアクセサリーにも及ばない。

「いきますよ……………」

真人の魔力が髪飾りの隅々まで行き渡ったとき、それは起こった。

魔力を通された銀の一筋一筋がまるで形状記憶合金のように動き出す。

蕾から花びらがゆっくりと咲き零れていき、シエリーの髪には艶やかな二輪の釣鐘草が咲き誇っていた。

シエリーの茶色がかった金髪に陽光を浴びた髪飾りの白銀の輝きが

驚くほどによく映えていた。

「ああ……やっぱり似合ってる……綺麗だよ、シエリーさん」

驚きと感動と歓喜が入り混じってもう何も言葉にならない。

シエリーにできたのは涙が零れ落ちるのを見せないように、真人の胸に顔を強く押し当てることだけだった。

「失われし春………！」

この一部始終を見ていた商人がかすれた声で呟く。

ジェラルル・ヴィンセントが晩年、四季を代表する花々の細工を造り上げたなかで、春を代表する花のいくつかが今も行方知れずとなっていた。

戦火のなかで永遠に失われたと思われていたこの春の花たちを、収
集家は失われし春とよんで逸失を惜しんだ……。

もつとも真人にとってそんな話に価値はない。

ただ、シエリーの髪を彩る白銀の輝きが、まるであるべき場所に還
ったような歡喜の気をあげている。

それだけで十分だった。

第八話

シエリーは夢見心地だった。

頬を染め潤んだ目で小さな頭を男の肩に預ける様は恋する乙女のそれに他ならない。

侍女らしからぬ煌びやかな髪飾りを身につけた美少女と、これまたどこの宗教画から抜け出してきたのかと思われそうな中性的な美少年……

街中に100人いれば100人が振り返ってしまう……そんな光景にいけなと思うつつも優越感を感じてしまう……

だから気付かなかった。

真人に甘えながら焼き菓子をつついていっている間に、露店の並びがときれ王都の裏路地にさしかかってしまったのを……

「まだ何か買うものがあるんですか？」

真人の言葉にシェリーはようやく我にかえった。

いつの間にか市場通りからはずれた裏路地に入り込んでいる。

まだ、市の喧噪からそう離れてはいないが早く戻るにこしたことはない。最近の王都は一步間違つと治安が極端に悪化しているのだ。

「……………悪いが戻すわけにはいかねえなあ……………」

男の野太いダミ声にシェリーはヒツと短い悲鳴をあげた。

ショートソードを腰に差した傭兵風の男が一人、二人……………六人!?

いくらなんでも多すぎる……………もしかして最初からつけられていた?

「私たちがハースバルド家縁のものと知っての狼藉ですか……………?」

こいつらが無頼とはいえ傭兵ならハースバルド家の威光が効くだろ

う……

「上玉だと思って目をつけてはいたがよ。その髪飾りといい、そっ
ちの兄さんといいー石三鳥とは旨すぎてこたえられんなあ……」

シェリーの顔から血の気が引いた。

最悪だ……こいつらは……

「奴隷狩り……」

最近王都でささやかれている犯罪集団……

平民はおろか貴族でさえ躊躇なく誘拐し奴隷として売りさばくのだ
と、恐怖とともに語られていた噂の存在にまさか自分たちが出くわ
すとは！

「あんたぐらい別嬪ならきつとたつぷり可愛がってもらえるだろうさ。まああまり趣味のよくない金持ちに買われないことを祈るんだな！」

「……しかしもったいないな……オレたちで味見しておくか……」

ゾワリと鳥肌が立つと共に、シエリーは思わず自分の身を抱きすくめた。

……言葉がでない

いつも冷静で、能弁で、勝気な自分が嘘のように、ただ、震えることしかできない。

奴隷の烙印を押されいずことも知れぬ国の貴族に慰み者にされる自分を想像してしまつて力なく首を振る。

誰か助けて……

ピシリ

世界が凍りつく音がした。

真人の様子の激変に傭兵たちもさすがに気づいたようで遠巻きに様子を窺いながら真人を囲む。

「あまり余計なことを考えるなよ兄ちゃん。生きてさえいれば富豪の色ボケ婆さんに大事に飼ってもらえるかもしれないからな」

「恩に報いるに恩をもってし、仇に報いるに仇をもつてす。汝が剣に報いるに剣を受くる覚悟はありや？」

詩を詠うような独特の抑揚に男たちが訝しげに顔を顰める。

もしここに真人の気を見ることのできる人間がいたならば、真人の身体の中で膨大な気が凝縮され、精錬されようとしているのがわかっただろう。

古めかしい言い回しと独特の抑揚は真人の戦闘用のスイッチのようなものだった。

「何言つてやがんでえ……………」

「力をもて人を制するは力もて制されるなり。剣もて命を奪うは剣もて命奪われるなり……………めぐる因果の糸を恐れぬとあらば我が中御神の戦舞見せようぞ」

「殺れ！」

リーダー格らしい男の一言と同時に六人の男たちが真人に向って殺到した。

彼らも気づいていたのだ。

この男はヤバい。

根拠はない……………およそ武の気配を纏った人間ではない……………だけど恐ろしい、と。

その直感は正しい。ただし選択が決定的に間違っていた。彼らは感

じた恐怖に忠実に逃げるべきであったのだ。

「火行を以って金気を克す、溶けよ」

真人の身体に触れる間もなく男たちのショートソードが溶けて消えた。

「魔術師か！」

驚愕に目を見開きつつもこんどは体術で真人の急所に狙いを定める。

彼らも数々の国の追手から逃げ切り、幾度も死地をくぐり抜けた一流の傭兵であった。

予想外の事態に陥ってもその行動には澁みがない。

しかし……………

「中御神流陰陽道 戦舞 一番……………参る」

それは妖しくも美しい舞だった。

どこから取り出したのか扇子を片手に真人が舞う。

くるりくるりと大小の円を描きながら、はらりと舞い落ちる花びらをすくうように扇子が振られる。

だが、扇子に掬いとられるのは花びらではなく……………首

「ば、化け物め！」

「剣に倒れる気概なくば最初から剣など振るわぬがよい」

再び首が宙を舞う。

それを見てたった一人残ったリーダー格の男は両手をあげて降参の意思を示した。

「あんたには参ったよ。そこでものは相談だが……オレたちが攫ってきた連中の居場所を教えるから見逃しちゃもらえんか？オレを殺したら……そいつらの場所がわからなく

なるぜ……？」

言われてみればそうだった。

大本の誘拐犯は奴隷商人だろうし、この男たちが戻らなければ商人はトラブルの発生を知って今日中にもこの国を去ろうとするだろう。

なんて汚い男……！

シエリーはくやしさのあまりに男を睨みつけるが真人は意外にもあっさり男の条件を呑んだ。

「案内しろ……」

ヒュー！と口笛を吹きながら男は雇い主のアジトに向って歩き出す。

そこに躊躇や罪悪感、微塵も感じられない。

……仕方ないのよシェリー。これで攫われた人たちが助かるのならば……！

真人はただ冷めた目で男を見ている。

戦舞は武術ではない……あれは一種の呪踊だ。古神道でいうところの反べいに似ている。

彼らは真人の武術によって首を打ち落されたのではない。己が犯した因果に従って自ら首を差し出したのである。

その呪にかけられた男が、今真人に見逃されたからといって無事に済むはずがなかった。

「ここだ」

奴隸市の中でもひと際大きな天幕を指さして男は目的地の到着を告げた。

第九話

「最後に聞くがおまえが今までに攫った人は……………？」

男は嗤いながら真人を見た。

「大したもんだよ、あんた。オレという証人を本気で逃がす気でいるとはね。オレはてつきり案内するだけ案内させたら捕まえられる覚悟をしてたつてのにな。……………まあ礼代わりに教えるが平民の娘が五人と……………貴族の娘が一人だ。確か……………シエレンベルグとか言っただか……………あと一人貴族の娘がくる予定だったんだが、そっちはどうも失敗したらしいぜ」

「シユレンベルグですって？」

シエリーが予想外の男の告白に目を見張る。

シエレンベルグ侯爵家といえは外務卿として王国の外交の中枢を担う大貴族であり、かつ文官勢力のなかでも軍事に理解ある数少ない人物だった。

その御令嬢が誘拐されていたとは……………

「おそらくその失敗したというのはルーシアさんですね」

「えっ？」

真人の指摘にシエリーは思わず声をあげた。

もしそうなら、これはただの奴隷狩りなどではない。

…………… オスパシア王国を標的にした要人誘拐か王国内の勢力争いか…………… いずれにしろ陰湿な政治的陰謀だ。

「一ノ式 簞」

真人の肩に一羽の川蝉が出現した。

「ルーシアさんたちを呼んできてくれ。それと、ことの次第を伯爵に報告を」

「承知しました。主様」

可愛らしく首を振ると、川蝉は矢のような速さで天空に舞い上がる。

「使い魔か……初めて見たぜ……」

シエリーも知識として魔術師の中に使い魔を生み出すものがあることは知っている。

しかし人語を話すとなると少なくともオスパシア王国内では聞いたことがない。

魔術先進国であるヘイドリアン公国にしてどうにか噂に聞ける程度であろう。

……… いったいこの人はどこまで………

「……… どのつやらの人間の気がついたようです。……… 一応忠告しておきますが神域で1年殺生を断ちなさい……… でないと死にますよ?」

後半部分はさっさと逃げ出した男の背中に向けられていた。

「……… 忠告、痛みいるねえ………」

おそらく彼が真人の忠告を守ることはないだろう。それが彼にとつて生涯最後の失敗になるとしても。

「お前ら! こんなところで何をしてやがる!」

数人の男たちが真人を囲むように天幕から現れた。

「客なら見せ場に行くはずだ……なんの用でここまで来た!？」

どうやらこの男たちは先ほどの傭兵より上位にいるらしい。

武装もショートソードではなく、バトルアックスやシミターさらにはクロスボウまで装備しているし、真人を貴族のボンボンだと思っ
て油断してもいない。さらに……

「逃がすな。そっちの女はハースバルドの身内のはずだ……」

傭兵風の男たちに続いて現れたのは見るからに危険そうな暗い眼差
しの男だった。

「……………ルーシアさんを襲ったのはあなたの手の者ですね…………」

真人は目の前の男にルーシアを襲った暗殺者と同じ匂いを嗅ぎ取っ

ていた。

感じる技量は今までの男たちとは次元が違う。おそらく、この男が実行部隊の責任者だろう。

「女を確保しろ……………」

そう言い終わらぬうちに男は真人に向って針を投擲する。

ダガーと違って視認することが難しい武器だが真人には通じなかった。

かわしざま針のひとつを男に投げ返すと、針は誤たず男の右腕の神経節を貫いた。

「二ノ式 太郎丸 三ノ式 飯綱」

シエリーを狙った男たちの前には巨大な犬と雷を纏った鼬が立ちふさがる。

どこからやってきたのか不思議に思うが所詮は動物……………そう考えた男たちは己の命でその考えがいかに甘いものか味わう羽目になった。

巨大な漆黒の猛犬、太郎丸はまるで豆腐のように男たちの腕を噛み切り、宙を疾駆する魃、飯綱は目にもとまらぬ速さで男たちの頸動脈を断ち切っていった……………

感情を表さぬ暗殺者の瞳に動揺の色が走る。

この少年は異常だ

人が持つ強さの限界を超えている

大陸中のどの国に追われても逃げ切る自信はあるが、この少年には

……………

……………どうせ逃げ切れぬなら為すべきことはひとつ……………！

懐の煙幕玉を炸裂させ天幕のなかに身を躍らせる。

なんとしてもシエレンベルグの娘だけは殺さなければ……………我が冥き残月の名にかけて！

そんな思考を最後に名も無き暗殺者の意識は永遠に闇に堕ちた。

「シエレンベルグのご令嬢とお見受けいたします。ご無事ですか？」

真人が猿轡をはずし、両手を拘束していた鎖を断ち切ると、令嬢は満面に笑みを浮かべて真人を抱きしめた。

「待っておったぞ！お主が妾の運命か！」

……シエレンベルグ家というのは占星術師の家か何かなのだろうか……？

「妾のような絶世の美女の危機を天が放っておくはずがない！きつと天の御使いが助けに現れると信じておったぞ！」

「……なにか勘違いをされているようですが……」

背筋が寒くなるような嫌な予感とともに開きかけた真人の唇は令嬢の濃厚な口付けによって塞がれた。

「ちょっと！何やってるんですかああああ！！！」

シエリーが嫉妬むき出しで二人を引き剥がしにかかるまで、真人は酸欠で遠のく意識を必死に繋ぎとめていた。

第十話

「さあ、妾とともに参るがよい。そして心ゆくまで甘いときを過ごそうぞ！」

「真人様は当ハースバルド家のお客人です！勝手にお連れしようとしないでください！」

「妾はシェレンベルグ侯爵家の一人娘ぞ。頭が高いわ！」

………かなりカオスな空間が広がっていた。

当年とつて22歳……豪華な金髪を腰まで伸ばし、相手を圧倒せずにはおかぬ深い翠色の瞳が印象的なシェレンベルグ侯爵令嬢と楚々としたメイド服に身を包んだ色香の高いシェリーがにらみ合う迫力

は余人の介入を許さない。

それにしても真人を白馬の王子様にして運命が定めた恋人だなんて

.....

シエレンベルグ侯爵令嬢アナスタシア・ティレース・ノルド・シエレンベルグはいささか夢見がちな傾向にあるようだ。

ルーシアなら「あれは妄想癡っていうのよ!」と絶叫しそうだが。

「.....真人殿と申されたか。貴方もハースバルドのような無骨なところより、優雅な我が家のほうが過ごしやすかろう?」

「そんなことはありませんよね!真人様!」

「.....異国から参ったばかりゆえお話が少々わかりかねますが.....私のような得体の知れぬものを置くのは如何なものでしょうか?」

自分はこの世界にとって異邦人のはずだ。

神を殺すためだけに特化された人の形をした凶器……………

なのにこれほどの好意を受ける理由がわからなかった。

戦うことは我が使命……………彼女の命を救ったのも成り行きの結果にすぎない。

「命の恩人を招くのになん差し障りがあるうか。それに……………妾は聞いたのじゃ。真人殿こそ我が背の君だという神の言葉を」

「空耳でしょう」

シエリーが一言でばっさり切って捨てる。

「ハースバルド家は家人の教育がなっておらぬようじゃな……………」

「いいえ！よく言ったわシエリー！……」

息を切らしながら現れたのはルーシアだった。

ルーシアの後ろから数人の衛兵とウーデット伯爵も姿を見せる。

「伯爵様たちをお連れしました。主様」

「ありがとうございます。戻れ、篝」

篝が空気に溶けるように消えていく様を見てウーデットが驚きの目を向けた。

「今の使い魔はどこへいったのかね？」

「使い魔……私の流派では式神と言いますが……。実体化してないだけで、私のそばに控えていますよ」

自分がどれだけ特殊なことを言ったか、この少年はわかっているだろうか。

この世界の使い魔とは魔力と肉体の合成物………知性があり、変形が可能であったとしても、隠しようも無く肉体が存在する。

もし、真人の言うとおり実体のない使い魔がいたなら、それは目に見えぬ武器を隠し持つに等しい。

特に武器の携帯を禁止された王宮内などに潜入した場合、それは恐るべき戦力になるだろう。

そんな伯爵の危惧をよそに女たちの争いは激化の一途を辿っていた。

「だいたい貴女、ラウンデル子爵とお見合いしたって聞いたわよ。いきなり浮気してんじゃないわよ！」

「子爵が妾に釣り合う男と思うか？冗談ではない。父上の頼みゆえ、あつては見たが到底妾の夫たる器ではないわ」

轟然と胸をそらすアナスタシアに真人は思わず首をひねる。

……夫って自分で選べるものなんだ……

中御神家では結婚の自由は認められていなかった。

結婚とはより強い血統を残すための交配作業にすぎなかったからだ。

真人も知識として恋愛の結果としての結婚を知らないわけではないが、いかんせん情報源が古すぎた。

……ただ、戦って神を殺すために生まれた真人にとって必要外の知識を蓄える情報源は基本的にない。

ごく稀に陰陽術を記した書籍の中に混じった宇治拾遺物語のような昔語りと、他家から指導にきた導師との雑談が真人の一般常識の全てだった。

ちなみにその偏った知識上、真人のなかで世界は一夫多妻制である。

「だいたいルーシア嬢のような、凹凸の乏しい女性らしからぬ体形の者では真人殿と並ぶのはいささか見劣りがするというものじゃ」

「それについては同感なのですが……………」

「ちょっとシエリー！あんた帰ったら覚えてなさいよ！」

ルーシアが己の胸を抱きかかえてシエリーとアナスタシアを睨みつける。

たわわに実った二人のふくよかな果実と自分のいまだ青さの抜けぬ蕾を見比べる……………」

「女の魅力は胸だけじゃないわよおおお！」

「負け惜しみだな」

「負け惜しみですね」

「……んちくしょおおおおおおお………」

ルーシアのただでさえ少ない忍耐力が限界に達した。

アナスタシアとシェリーに向かって飛び掛ったかと思うと、髪を引っ張り頬をつねる………完全にお子様のケンカが始まった。

頭痛を抑えるようにこめかみに手をやりながらウーデットは真人に囁いた。

「今のうちにここをでて家に戻ったほうがいいぞ。貴公がいると収まるものも収まらなそうだからな」

伯爵の言葉に真人はルーシアたち三人に目を移す。

「真人こそは妾の運命じゃ。運命を邪魔することは何人にもできぬ
！」

「何言つてんのよ！真人はこれから私とオスパシアの軍を担っていただくんですから！」

「真人様は私のような庶民と心穏やかに過ごされたほうが幸せだと思います！」

髪を振り乱し、擦り傷と痣だらけになって罵り合う三人の般若がそこにいた。

「お言葉に甘えさせていただきます……………」

「頭が冷えたら私からうまく言っておこう。今日はご苦労だったな……………」

「いえ……………」

神をも殺し、超絶の武量を誇る真人にも勝てないものがある……
…そういえば拗ねた真砂にも全く勝てる気がしなかったっけ。

天幕を出ると、そこは王国兵が慌ただしくいきかっていたが、奴隷市自体は続いているようだった。

檻の中の少女を値踏みする男

筋骨隆々とした美丈夫の競りに興じる貴婦人たち

人を物として売買することを日常として肯定された世界……

真人の胸を黒い霧が覆い隠していく。

……ここにはいけない。ここは……中御神を思い出させる……

……

家路へと急ごうとした真人は己の耳を疑った。

「てめえみたいな粗ンじゃ、あたしみみたいなガキだって満足できないね！出直しといで！」

言っていることは無茶苦茶だが、聞き間違えようも無い。

……妹の……あの懐かしい真砂の声だった。

第十一話

どこだ？

真人は声のした方角へ駆け出した。

まさかお前までこの世界にやってきてしまったというのが真砂？
いたいどうして……………

「いい加減しつこいんだよ。あんたに買われたら、あたしはその貧
相なのを食いちぎるよ！」

……………いた

声はそっくりだが、真砂とは似ても似つかぬ少女だった。

年のころは10歳ほどで、分かれたころの真砂を思い出させるが、
収まりの悪い金髪に意志の強そうな大きな鳶色の瞳は、漆黒の黒髪
に紅眼の真砂とは対照的だ。

ホツとしたようなガツカリしたような……………脱力感が身体を襲う。

しかし通りがかりの次の一言が、真人の心臓に氷柱のように突き刺さった。

「ダメだな、ありゃあ……………殺されるぞあの娘……………」

今なんと言った……………コロサレル……………？あの娘が……………誰に……………？

「あの程度の暴言で殺されるほど奴隷の地位は低いのですか……………？」

真人のあまりに真剣な様子に通りがかりの老人が怪訝な顔をして首をひねる。

「まあ奴隷の地位が低いってのは当たり前だが……………別に客に暴言を吐いたから死刑ってわけじゃないよ。だが、奴隷はあくまでも商品だからねえ……………売れない品物に金をかける馬鹿はいない。飯を抜かれて体力が弱ったらあんな環境じゃすぐ病気になるちまうが、医者と呼ぶ金なんざ出してもらえはすもない……………大概は半年も持たずに死んじゃうんだよ。奴隷だってできるだけいい主人に買われたい

からね、わざと嫌な客には嫌われようとするもんなんだが……あの娘は様子が違う」

何がどう違うのだろう……そのあたりの機微が読めない真人に苦笑を浮かべながら老人はゆっくりと語りだした。

「理由はわからないが買われたくない理由があるんだろうよ。あんな年端も無い娘がああ態度をとるだけでも十分だが……あの娘は

自分の顔にわざと擦り傷を作っているからね。奴隷はやはり顔が大事だから、奴隷商人だっていくら折檻をするにしても、顔にだけは傷をつけない……ってこたあ、あの娘が自分でこさえたんだろうよ。それにあのやせ具合……今に始まったことじゃないだろうさ」

「それはあの娘が以前からあのような態度をとっていたせいで、既に食事を抜かれ始めているということですか……？」

老人は痛ましそうな顔で頷いた。

「まあ、まず間違いないだろうよ」

……………あの娘が死ぬ……………？

仕方の無いことのはずだ。いくら子供でも今のまま時が過ぎれば自分がどうなるかくらいは容易に想像できるだろう。

それでもなお、買われたくない理由が彼女には存在する。

死してなお、守りたいものが……………

真人の視線を感じたらしい。

少女が歯を剥いて怒鳴り声をあげる。

「いやらしい目で見てんじゃないよ、こらあー！」

……………私のことは放っておいてください、兄様……………

罵声が何故か真砂の鈴の音が鳴るような声に重なった。

…………… 兄様にはもっと自分のことを考えて欲しいです。真砂は……………
兄様が傷つくたびに悲しくなります……………

あれは最後にあつた時だつたらうか……………

……………どうか逃げてください…………… 兄様……………！

あの瞳は……………彼女が妹の真砂ではなくとも真人にはわかった。

誰かのために自分を犠牲にする覚悟を決めた瞳だ……………！

気がつけば少女の檻の目の前にいた。

「……………彼女はお幾らだろっ？ご主人」

奴隷商人の主人は狐につままれたような顔で真人を見た。

まさかこの乱暴な少女を買う物好きがいるとは思わなかったのだろ
う。

「はは、はい。金貨10枚になります。こんなあばずれですが、お
となしく体裁を整えさえすればナリは立派なもので……………」

成り行きを呆気にとられて見ていた少女が火がついたように喚きだ
した。

「冗談じゃないよ！あんたみたいな気障なガキはこっちの方から願
い下げだね！あんた私を買おうってんなら下手すると今晚が命日に
なるよ！」

「このガキ！なんて口をききやがる！」

奴隷商人が慌てて鞭を振るおうとするのを真人は止めた。

「いいのです……彼女を檻から出して下さい……」

真人から金貨を受け取った商人は嬉々として少女を檻から連れ出して首輪を引き渡した。

「まったくいい主人を引き当てたじゃねえか！新しいご主人様に誠心誠意お仕えするんだぞ！」

「いやだ！私いかない！どうして？どうして私なんか買うの？私頑張ったのに……ここにいられるようにいっぱい頑張ったのに！」

罵声を通じないとわかればそこにいたのはやはり年端もいかない少

女だった。

とるべき手段を失ってうろたえる様子は、少女が本当はどこにでもいるごく普通の少女であることを告げていた。

あの乱暴な様子は彼女なりに奴隷市に残り続けるため考え出した演技だったのだろう。

「それは君が死んでしまつたら残された人がきつと悲しむからだよ」

真人の言葉に少女の目が驚きに見開かれる……………きつと覚えのある言葉だつたに違いない。

111

「……………でも、私がいなくなつたら……………お姉ちゃん死んじゃう！悲しむこともできなくなつちゃうー！」

「ならば君の姉さんも私が買おう……………」

「え……………？」

常識では考えられない言葉に少女が戸惑いの声をあげた。

「……………本当に？」

「ああ」

「本当の本当に……………？」

「約束する」

「お姉ちゃん、足が動かなくても？」

「もちろんだよ」

やさしく真人の手が少女の頭を撫でると、それが合図のように少女の瞳に涙が溜まり……………

「うわああああああああああああん！！」

こらえていたものが一気に堰を切ったように少女は泣き出した。

食事を抜かれ、鞭で打たれ、慣れない言葉を吐きながら守ってきた……………自分の命よりも大事な宝物……………

それは少女の身には手に余るものだったが、もう心配はいらない。

片時も休まることのなかった心を癒すように、少女は泣き続けた。

「それではこの娘の姉さんを連れてきてもらえますか？」

「いいんですかい坊ちゃん？オレが言うのもなんだが、こいつの姉は暴れた馬の下敷きになって以来、両足とも動かせずに起き上がる

こともままならねえお荷物ですぜ？ただ飯食らいのごくつぶしだ。連れて行ってもらえりゃ助かりますがね」

「私に二言はありません。今までの世話代に金貨をもう一枚お渡ししておきましょう」

商人の顔がだらしなくも笑み崩れた。

「今すぐ連れて参りませあね。いやあ……なんてお優しい……坊ちやんみたいな人もいるもんですねえ……」

何がお優しいものか

所詮は自己満足……妹に良く似た声を持つ少女を見捨てられなかっただけ

彼女たちと同じくらい不幸な境遇の奴隷など、この奴隷市のなかには履いて捨てるほどもあるだろう。

だからといってその全てを救う気など自分にはない。

「お姉ちゃん！」

少女の声に振りかえると商人の男が、少女に良く似た病的に白い肌の女の子を抱えて現れた。

確かに両足が正常ではありえない方向に曲がっている。

骨折したあとろくな治療を受けずに癒着してしまったのは明らかだった。

「私はシエラファイター…妹の名はプリムローゼと申します……—
人で立つこともかなわぬこの身ではありますが、わずかなりともご主人様のお役に立てるよう全力をお尽くしいたします。どうか末永くお仕えさせていただきます……」

「私がお姉ちゃんの方まで働きます！」

改めてみると美しい姉妹だった。

特に姉のシエラファイータは足のケガさえなかったら、たちまち好事家を買われていたであろう美少女で栄養状態の悪さから肉付きが悪いが肌のきめ細かさや整った鼻梁は不健康さを補って余りあるものだった。プリムローゼもあと数年もすれば人もうらやむ美少女になるだろう。

姉とともに暮らせるうれしさから、年相応の無邪気な笑みを浮かべて胸をそらせるプリムローゼの可愛らしさに真人は自然と口元がほころぶのをおさえ切れなかった。

「厭魅の法は得意ではないんだが……」

真人は懐から取り出した紙をシエラファイータに似せた人形に切り始めた。

「シエラファイータさん、髪の毛を1本いただけますか？」

「……シエラとお呼びくださいませ、ご主人様。このようなものでよろしければいくらでも」

栄養状態が悪いせいで潤いに欠けた金髪を受け取って、真人は人形に結びつけた。

「人形に依りて因縁を結ぶ。人形欠ければ人欠け、人形癒えれば人癒えるべし。」

そして真人が折れ曲がっていた人形の足を伸ばすとシエラフィータの曲がり歪んだ足がみるみるまっすぐに伸びていくのを姉妹は信じられないものを見るように呆然と見つめていた。

「立てるか？シエラ……」

真人に差し出された手を握り締めながら恐る恐る大地を踏みしめるシエラフィータの顔に歓喜の笑みが浮かぶ。

「ああっ！立てる！立てます！ご主人様！」

「ご主人様ありがとうございます！」

喜びに抱き合い、笑いあう姉妹に真人も微笑みを返す。

本当はこの姉妹のように、自分と真砂も笑いあってみたかった。

それはかなわぬ願いだったけれど……………

「……………信じられねえもんを見ちまった……………」

にこやかに家路についた真人たちをまるで夢でもみているかのように奴隷商人はいつまでも見送っていた……………

第十二話

檻から出たばかりの姉妹は服というのもおこがましいボロ布を纏ったようなものだった。

「シェリーの叔母さんにまたお世話になるか」

真人はシェラとプリムを伴ってもときた道を戻り始めた。

「……………いらっしやい。……………たった数時間で女を入れ替えるとは見かけによらずあんたもやるもんだね」

どうしてだろう？ 女主人から非難の目を向けられている気がするの
は……………

「ごらんのとおり二人には衣装らしきものがありませんので……いくつも見繕っていただきたいのです」

「ご主人様……あの……こんなことを申し上げるのは恐縮なのですが……侍女服もあればお願いしたいのですが……」

シエラが申し訳なさそうに真人に告げる。

真人としては二人を奴隷として扱うつもりはなかった。

むしろ二人を両親のもとに返してやろうと考えていたのだが、奴隷として登録を受け烙印を押された彼女たちにそんな自由はないのだと言っ。

「それに……帰る家はもうありませんから……」

結局二人は真人の家で侍女として働くことが決まっていた。

「それじゃ侍女服のほうもお願いします」

「任せておきな。下着も可愛いの見繕ってやるよ」

女主人の言葉にシエラとプリムの頬がパツと朱に染まった。

……そういえば女の子なんだから可愛い下着も履きたいのだろう。
男のオレには気がつかないことだ。女主人には感謝しなくては。

「よろしくお願いします」

「「ががが、頑張ります！／＼／」

シエラとプリムがやけに気合をいれて試着室へと入っていった。

服を着るのにもなにか頑張りが必要なのだろうか………？

女主人が呆れかえったようにため息をつくといささかの軽蔑をこめ

た眼差しで真人を見つめた。

「あんたみたいな男はいないほうが世の女のためのような気がするねえ……………」

……………おずおずと恥じらいながら二人が現れる。

「いかがでしょうか……………」

二人とも萌黄色のロングスカートにクリーム色のブラウスを着ていた。

襟元の赤いリボンがアクセントを添えている。

つい先ほどまでボロを纏っていた奴隷とも思えぬ可愛らしさだった。

「……………とっても可愛いよ、二人とも」

「」「」「」ありがとうございます！」「」

花が咲いたように笑い、抱き合う二人の様子に思わず笑みがこぼれてしまう。

……………ああ……………こんなに自然に笑えるのはいつ以来だろう……………

永い間忘れていた……………これは楽しいという気持ち

一緒にいることで心が暖かくなる気持ち

真砂と過ごすほんの短い時間以外に感じられなかった気持ち……………

この世界でなら取り戻せるのだろうか

武器ではない、人としての自分を……………

愛くるしくじゃれあう姉妹が急にまぶしいものに思えて真人は目を細めた。

オレは人として生きてもいいのかもしれない……………

彼女たちの笑顔がそういつているような気がして真人は心からの微笑みを浮かべた。

……………姉妹は仲良く真赤になって固まってしまったが。

「ここがご主人様のお屋敷ですか？」

「まあ、今日買ったばかりの我が家だけどね。今日からはここが君たちの家だよ」

真人の甘い言葉に姉妹は陶然となってしまふ。

あと半年生きながらえることができるか、と諦めかけていたのはほんの数時間前のできごとなのだ。

それが、今は美しくも優しい主人をいただいて姉妹が離れ離れになる心配もなくなった。

もしも神様がいるならいくら感謝してもしきれないと思った。

世界の片隅で鷹揚に頷く神様がいたようだが気がつくものはいない。

「……………部屋のかたづけもまだなんだけど……………まずはお風呂に入る
うか」

真人は純粹に姉妹の健康に気遣っただけだが、姉妹はそうは受け取らなかった。

……せめてプリムに肌を拭ってもらったわ……

……うええ〜ん！売れないために身体を汚くしすぎたよ〜！

「火行を以って炎の風と為す、爆ぜよ」

一瞬で風呂に張られた水が沸いた。

こんな魔術の使い方をするのは世界中探しても真人しかいないかもしれない。

現にシエラもプリムもあんどりと口を開けて絶句している。

「ゆっくり浸かって温まっておいで」

羞恥に顔を首筋まで赤く染めながら二人はこくこくと首を振った。

「あがらせていただきました……………」

「気持ちよかったです」

風呂上りの二人の艶やかさに真人は少し目を瞠った。

真人に傷を癒されたプリムは、わざとくせをつけていた金髪をさらりと伸ばしてタオルで水気をぬぐっている。

赤ん坊のようなプリプリした肌が、どうやら闊達でお転婆なプリムの本性を象徴しているようだった。

姉のシエラは寝たきりであった不健康さが抜けきっていないが、白雪のように白い肌を桜色に上気させ、腰まで伸びていた髪を結い上げた

様子は思春期特有の危うい色香を滲ませていた。

「それじゃあオレも入ってくるから二人は飲み物でも飲んで待つておいで」

自分でも理解のできない居心地の悪さを感じて、真人はそそくさと風呂場のなかに逃げ込んだ。

「……………ふう……………」

大理石で造られた浴室は貴族らしい広さで、全身を伸ばしてゆっくりとくつろぐことができる。

中御神家の檜の風呂桶とはまた違った味わいだった。

ふと思い返してみれば、この世界にやってきてまだ一日もたっていないなかつた。

それなのに何人も知り合いができて、そのうえ女の子一人といっしょに暮らすという現状が真人は可笑しい。

初日からこの有様では明日以降はどうなることやら……………

ガラリ

「ご……ご主人様……お背中をお流しいたします…… / / / /」

「流しまゝす！」

タオルを身体に巻きつけた姉妹が風呂場に入ってくるのを、真人は信じられない思いで見つめていた。

波乱の初日はまだ終わってはいないようだった……

第十三話

姉妹の乱入は真人にとってよほど想定外のことであつたらしい。

おそらく、17年の人生のなかで初めて真人はパニックに陥つて
た。

………おかしい。男と女は別れてお風呂にはいるものではなかつ
たか？

少なくとも中御神家ではそうであつたし、男が女の素肌を見るのは
慎みのない行為だと教えられていた。

胸が膨らみ始めた真砂の着替えを偶然見ってしまったって泣かれてしまつ
たのを今も覚えている。

現に二人とも林檎のように顔を朱に染めているのに………何故だ？

「……………それでは……………」主人さま……………どうぞこちらへ……………」

シエラがタオルに石鹸を泡立てながら真人を洗い場へと促した。

「ご主人さま早く〜！」

プリムもタオルを片手に手をわきわきさせていた。どうも羞恥心より楽しさが勝っているようだ。

「いや、ちょっと……その………なんで？」

もはや何を言っているのかわからない真人であった。

「……………少しでもご主人さまのお役に立ちたいんです……………いけませんか？」

シエラに悩ましそつに上目づかいに見つめられては真人に拒否できるはずもない。

「……えくと、その……お世話になります……／＼／」

……目のやり場がない

真人の左手にシエラ、右手にプリムが陣取って嬉々として身体を洗っている。

背中を流すだけじゃなかったのか………？

流石に腰まわりは死守したが頭のとっぺんから足の指のつま先まで洗われてしまっている。

ふと左を向けば薄いながらも、くつきりと自己主張するシエラの胸の谷間

さりとして右を向けば幼いゆえの無頓着さで大きく割れたタオルの裾から覗くプリムの太股

水を吸いタオルが肌にじつとりと張り付いていることとあいまって艶かしいことおびただしい。

見てはならないとわかっているのに吸い寄せられるように目が追ってしまうのは真人自身も自覚していない男の哀しい性だった。

……………お兄様を不潔です！

真砂が血相を変えて怒っている姿が目に見えかぶ。

……………ごめんよ真砂……………オレにも何がどうなってるんだか……………

ご主人さまの髪って……………しなやかで枝毛もないし……………本当銀細工みたいだわ……………

ご主人さまって脱いだらたくましいんだ〜えへ〜／／／

哀しい性に振り回されていたのは真人だけではなかったかももしれない。

夕食はシエラとプリムがごちそうを作ろうと奮闘している。

特にシエラは喜びの余りその透きとおった声で唄を唄いはじめプリムと真人を苦笑させていた。

「お姉ちゃんは料理が大好きなんです」

そういうプリムも笑み崩れている。

手際よく姉を手伝う様子からいってプリムの料理好きも相当なもの

だろう。

内心参加したい真人であったが、これは姉妹によって頑として拒否されていた。

「厨房は女の戦場です。殿方がお入りになるものではございません」

止む無く真人はリビングで一人ぼつんと夕食の到着を待つはめとなった。

………寂しい

違和感が真人を包む。ちょっと待て、オレが寂しいだって？

誰かといいたい……誰かに触れたい……そんなことは考えたこともなかった……真砂以外は……

中御神家は一族全てが渡り神を殺すための道具でなければならなかったから………

ああ、そうか

真人は自分でも知らなかった己の望みを、深い歓喜とともに受け入れた。

オレは……本当は寂しかった……ただ、真砂以外は無理だと諦めていただけだったんだ……

「ご主人様、夕食をお持ちしました！」

「頑張りました〜！」

「……………ありがとうございます……………」

こんなオレと一緒にいてくれて……………

シエラがすっかり元気になって好きな料理にうちこんでいる様子うれしい

プリムが大好きな姉の周りをせかせかとまわりついて無邪気な笑顔
顔を浮かべているのがうれしい

二人が自分の傍で働くことを心底喜んでることがうれしい

何よりこれらをつれしいと感じることのできる自分の心の変化が…

………

真人の歡喜を重ねた透徹な微笑の直撃を受けた姉妹は、せっかくで
きあがった料理を取り落とすところであったという………

夕食はかつてないほど楽しいものとなった。

濃厚で味わいの深い姉妹の故郷のものだというシチュ・には真人も
素直に感嘆した。

こんな風に食卓を囲むというのは真人にとって生まれて初めての経

験である。

座敷牢で与えられる精進料理か、修業先の御山で自炊するサバイバルな食生活が真人の食のすべてなのだから……

「美味しいね……すごいや……」

真人の満ち足りた笑顔に姉妹は顔を見合せてお互いの健闘を称えあっていた。

一方姉妹たちにとってもこの夕食は特別なものである。

なんといっても初めて父親以外の男性のために作る食事だった。

真人のいかにもご満悦な反応を見ると、やはり女性特有の満足感が湧き上がる。

そして……切実な理由として、奴隷商人に与えられた食事はあまりにお粗末すぎた。

これほど腕をふるい贅を尽くした食事は奴隷として捕えられたこの1年見たことすらない。

「んぐんぐ……ご主人様！このスナギモっていうのすごく美味しい！」

頬をプックリ膨らませるほど料理をかきこむ妹をはしたないと思いつつも、自分もフォークとナイフの手が止まらなかった。

それにしても、ご主人様のリクエストで作ったこのスナギモノサシミというのは絶品だ。

シエラとしては内臓を生で食すというのはいささか抵抗があったのだが、一度口に入れてしまえば病みつきになりそうな味わいだった。

最初は作りすぎたかと思われた料理はこうして無事三人の胃袋へ綺麗に収まってしまっていた。

食後の紅茶でのどを潤した後、真人はリビングのテーブルにシエラとプリムを座らせると意を決したように切り出した。

「二人に聞いてほしい話があるんだ……」

第十四話

「…………オレの師匠の一人が教えてくれた言葉に一家同人という言葉がある。ひとつ屋根の下で暮らす人は立場がどうあれ家族だ、という意味だよ。オレはもう…………シエラもプリムも家族同然に思ってる。だから、隠しておきたくないんだ。」

家族、という言葉に反応したのだろう。シエラとプリムの表情に喜色が浮かぶ。

だが、真人が次に発した言葉は姉妹の想像を超えていた。

「……………オレはこの世界の人間じゃない」

真人は目を閉じて語りだした。長い長い物語を……………

約1400年ほどまえ、日本と呼ばれる島国の一角に一柱の神が降り立った。

この国の言葉で異世界から稀に訪れる神を渡り神という。

ほとんどの場合、渡り神はもといた世界との接点を失い力を失ってしまうため大事には至らずに退治されてしまうもののだが、この神は違った。

その神の名をカムナビ……………カンナビとも称される。

狂気の中に身を浸しながらもカムナビは己の力を取り戻すため人口的なエネルギー供給源を作り出した。

東北地方に数多く存在する三角錐の形をした御山……………神奈備山と呼ばれるものがそれである。

ピラミッドと言ったほうが一般には分かり易いかもしれない。

この神奈備山がレイライン上に魔法陣のように展開したことで、カムナビはこれまでの渡り神とは比較にならぬ力を入れた。

時の朝廷がこの渡り神の討伐を図ったのは呆れるほどに遅かった。

既に神の力の半ばを取り戻したカムナビは朝廷に反抗する勢力を信者に加え、更に力を増大させようとしていた。

信者たちもまた、カムナビへの信仰を礎に仲間たちを結集して朝廷に立ち向かう決意を固めていた。

こうして発生した戦いが巢伏の戦いである。

カムナビに仕えるシャーマンの名をアテルイと言った。

アテルイ率いる縄文系民族蝦夷の手強さを知った朝廷はここにいたって切り札を投入した。

征夷大將軍坂上田村麻呂である。

文武の力量において竹内宿禰以来の傑物であろう田村麻呂の登場により、朝廷軍はじわじわとではあるが蝦夷を押し返し始めた。

しかし神懸かったアテルイの精鋭によるゲリラ戦において朝廷軍は全く対抗ができずいたずらに損害を重ねていた。

日一日と減っていく兵力をもつてしても、アテルイの精鋭が山岳の不規遭遇戦において無類の強さを発揮するのは何ととってもカムナビの加護があるからだった。

人外の膂力を持ち、憎悪に燃えた炎のような紅眼を持つ彼ら蝦夷が籠もる御山をいつしか兵士たちはこう呼んだ。

………神無火山と

田村麻呂は苦悩していた。

朝廷軍は陸奥の厳しい冬を耐えることができない。

アテルイはただ、冬の訪れまで耐え忍ぶだけで朝廷軍は勝手に撤退してくれるのだった。

いくら占領地が拡大したところで、冬の間は全て奪還されてしまっ
てはこれまでの犠牲が全くの無駄になってしまう。

そんな時、配下の参謀三船真鳥が二人の若い行者を招き入れた。

「この者の才を用いることをお勧めいたします……………」

男の行者の名を中御神飛遥、女の行者の名を中御神華玉と言った。

驚いたことに二人は修験道の開祖として有名な役小角の玄孫にあたるらしい。

二人は世を捨てともに修行を積んでいたが、丑寅から立ち昇る瘴気を見るに見かねて駆けつけたことを告げた。

アテルイにはこの国のものではない外なる神が憑いている。

そしてその神は善神でも悪神でもない……………狂える神なのだ。

二人の告げた真相は田村麻呂を深く納得させるものだった。

田村麻呂は二人の忠告を受け入れ地脈を抑えるよう北斗七星の形に神社を建立した。

さらに都から春日大社の宮司を派遣してもらい、建御雷男神の神気を吹き込むことで結界の威力を強化したのだった。

このころを境に、蝦夷の抵抗は目に見えて衰えを見せていく。

そのころ中御神兄妹は最後の仕上げにかかっていた。

神奈備山に潜入して、頂上に置かれたエネルギーの送信機である要石を破壊してまわったのだ。

カムナビは所詮この国に地縁を持たぬ外なる神であり、要石からのエネルギーの供給を絶たれればその辺の魔物と大差ない存在へと成り果てるはずであった。

カムナビの力が失われたことでアテルイも遂に田村麻呂の前に膝を屈した。

田村麻呂の巨大な度量がアテルイの誇りを理解し、共存の道を示すことでこの戦役は明るい未来を得たかに見えた。

ところが……………

まつろわぬ蝦夷を生かしてはおけぬ

この時代、京に住むものの感覚として東北地方は外国に他ならない。

歴史を紐解けばこの国では大きな政変を、内乱を、外

国との戦争を「の役と呼ぶ。

モンゴルが来寇した文永・弘安の役が代表的であろう。

そして東北地方の豪族安部頼時・貞任父子が起こした反乱を前九年の役と呼ぶことこそ、蝦夷に対する朝廷の見識の表れに他ならなかった。

田村麻呂の嘆願もむなしくアテルイの誇りは見るも無惨に踏みにじられた。

対等な一人の人として向き合うことを朝廷は拒否したのだ。

アテルイは都の人々に見世物のように晒されたあげく首を落とされた。

巨大な怨念の瘴気とともに、アテルイの首が故郷へ向かって飛びあがったのはその時だった。

腰を抜かし逃げ惑う貴族を尻目にアテルイの首は亡者たちの怨念を吸い上げるだけ吸い上げ、三日飛び続けた後遂にカムナビが住まう黒又山へと達した。

腹をすかした狂える神のもとに届けられたアテルイの底知れぬ怨念

は、カムナビをしてさらに狂気の奥底へと駆り立てることとなった。幾筋もの雷光が京の都に降り注ぎ、アテルイの処刑を唱えた貴族たちを家族ごと焼き払った。

さらに全国に渡って地震が多発し、季節はずれの大雨が各地を襲った。

カムナビの狂気がこの国を破滅させようとしているのはもはや誰の目にも明らかだった。

しかし神の力を半ばとはいえ取り戻したカムナビに人の力で抗することはできない……

神の力を封ずるためには一時、一瞬でも神の力が必要だった。

中御神飛遥は神奈備山の要石を逆操作してそのエネルギーを自分へと向けることで、一瞬でも人の力を超えようとした。

もちろん人の身にそんな力の耐えようはずもない。

しかし飛遥は物部の神宝である十拳剣を借り受けることでその一瞬の制御を可能にした。

「華玉よ。我が力は神を殺すには及ばぬ……………今より千二百年の後、渡り神の封印は解け、千二百年蓄えられた怨念は容易くこの国を討ち滅ぼすだろう。たとえ鬼畜外道の道に堕ちようともその時までには神殺しを育て上げねばならぬ。できぬときは……………その日がこの国の終焉と知れ！」

目も眩む閃光が夜空を駆け抜け……………飛遥の命と引き換えにカムナビは永き眠りについた。

一人残された華玉は、田村麻呂の寵愛を受け、一人の男児を授かるとともに男児もろともいずこともなく姿を消した。

その日から千二百年……………嘗々と受け継がれた神殺しの業は、中御神真人という稀代の刃をこの世に産み落とした……………

第十五話

「無我夢中で剣を振るった。内臓を潰され左腕をもがれ太股に穴が開いたが負けるわけにはいかなかった……どう戦ったか自分でもよく覚えていないが……気がついたらカムナビの心臓に十拳剣を突き立てたまま倒れていた。もっとも、助かるような浅手じゃない。すぐにオレも後を追ったと思ったんだが……」

「いつの間にかこのアヌビアへと渡っていたのですね」

シエラの言葉に真人はこっくりと頷いた。

「……………」
「ご主人様が私たちに打ち明けてくださったことを誇りに思っています。……………」
「ひとつ質問をしてよろしいですか？」

「もちろん」

「カムナビ様は死んだのですか？」

「厳密な意味で神を殺すことはできないんだよ。ただ、在り方を変えられることはできる。ある者は大地に還って豊穡の力となり、またある者は新しい神として生まれ変わることもある。しかしカムナビは外なる神だ。つまり、オレのいた世界で新生することのできない神だ。……………おそらくもといた世界に還っていると思う」

目に見えてシエラの顔に安堵の色が浮かぶ。

だが、改めて顔を真摯なものに変え重々しい口調とともにシエラは言った。

「我が父母の名にかけて、我ら姉妹はご主人様の過去について沈黙を誓います。プリムも……………いいですね？」

そのあまりの真剣な目に真人は戸惑いを隠せなかった。

……もしかして受け入れられなかったのか……？

そんな思いが脳裏をよぎる。

ルーシアにはあっさり受け入れられたので気にしていなかったが、よくよく考えれば常人が納得できる話ではない。

ただそれだけのことなのに、真人の胸に錐でも刺されたような鋭い痛みが走る。

そして真人はシエラとプリムに、いつの間にか自分がどれだけ自らの心の柔らかい部分を委ねてしまったかを自覚した。

「わかってるよ、お姉ちゃん。ご主人様安心して？ 私たちは何があってもご主人様の味方だから」

「……………ご主人様、今の話はご主人様が心から信頼できると判断した者以外にはお話にならぬようお願いします。……………と申しまして、も異界より渡られたご主人様には理由がおわかりになられぬはず……………しばしお聞きください。これは私が幼い日より繰り返し聞かされた創生の神話でございます……………」

アヌビア世界の主神エンリルが目覚めたとき世界は永遠に続く霧の中にあつた。

独り神の寂しさに耐えかねたエンリルは自らの妻として天空神イシスを生み出した。

そしてイシスとの間に大地神アクティア、海神トルネドラ、太陽神アモンを設け創造の御業を開始したのである。

やがて森の女神モイラや音楽神フォイスなど様々な神が生み出され美しい動植物がアヌビアの隅々にまで満ちていった。

後の世に、人はこの時代を楽園紀と呼んだ。

世界が豊穡に満ち、争いも憎しみもなく、飢えも渴きもない……
そんな過去への憧憬を人は忘れることが出来なかつたのだ。

ところがそんな楽園にも不満を抱く一人の神がいた。

戦神ストラトである。

世界が平和を謳歌する現在、戦神である彼が与えられた仕事は宝物庫の番人であった。

有り余る力を決して振るうことを許されぬ毎日にストラトの不満は深く澱のように心の底に沈殿していく。

そしてある日、自らの守るべき宝物庫から宝剣バルゴと神槍ルドラを持ち去ったストラトは事態を把握していないエンリルを有無を言わず討ち取りアヌビア世界の征服に乗り出したのだった。

主神エンリルを失い戦いらしい戦いも経験したことのない神々が戦神ストラトにかなうはずもなかった。

強力で知られた山の神クエスは討ち取られ、神々の中でもっとも速い風の神スウィードは自慢の羽をむしられた。

宝剣バルゴはどんな強固な盾でも貫き、神槍ルドラは投げれば必ずあたる槍であったからだ。

いつしか神々に残された領土は海神トルネドラの海都アンフィポリスと、天空神イシスの空中宮殿バビロンを残すのみとなっていた。

さすがの戦神ストラトも海戦と空戦では本来の力を発揮できなかったおかげだった。

しかし日に日に勢力を増すストラトに対してこのままではジリ貧は免れない。

事態の打開を図ろうと一人の神が名乗りを上げた。

……………カムナビである。

太陽神アモンと大地神アクティアの息子である彼は現存する神々のなかでもっとも強力な力を持つ神だった。

彼が司る力は……………愛。

愛ゆえに神々の寵児であった彼はストラトの部下の中にも複数の協力者を得ることに成功していた。

どうやら全て女性であったようだ。

彼女らの手引きによってカムナビは宝物庫から最強の盾であるレブロスと最強の弓と矢であるカトラシアを盗みだすことに成功した。

しかも、たまたましまわれていた神槍ルドラをへし折ってしまうというオマケつきであった。

戦局は変わった。

当たったが最後、たちまち傷口が腐れ落ちるカトラシアの矢と、どんな攻撃も防いでしまう最強の盾レブロスを身に着けたカムナビは戦えば必ず勝ち一挙に失われた領土を取り戻した。

その美しくもたくましい雄姿は敵味方を問わずに女神たちを虜にし、カムナビの妻は最終的に16人にまでふくれあがったと言う。

そしてかつての王都、始まりの地アーデルにおいて二人の一騎打ちが始まった。

流石は戦神だけあって戦いはストラトが押し気味に進めるがどうしてもレブロスの防御を突破できない。

対してカムナビもなんとか距離を取ってカトラシアを使おうと試みるがストラトがその猶予を与えなかった。

戦いは膠着し、容易に決着はつかぬかに見えた。

実はカムナビは一つの失策を犯していた。

宝物庫に潜入し目的の武器を手に入れるばかりではなく、その場に

あつた宝物をすべて破壊してしまつべきであつた。

なぜなら……………

いつの間にかどこまでも暗い闇の空間がカムナビの後ろにポツカリと大きな口を開けていた。

暗黒珠ドルゴーン……………宝物庫に残されていた異界への扉だつた。

自らの策があたつた歡喜の笑みを浮かべてストラトが圧力を高める。

見守っていた女神たちから悲鳴があがつた。

そして遂に、ストラトの攻撃に耐えられなくなったカムナビが異界の扉へと身を飲まれかけたその時、一瞬の油断をついてカムナビは弓を投げ捨て矢をその手に握つてストラトの両足に突き刺したのだつた。

魂切る絶叫があがる。

カトラシアの矢は突き刺さつた傷口からたちまちその身を腐らせてしまふ。

やむなくストラトは自らの両足を宝剣で断ち切ることでかろつじて命をつないだ。

無様に大地に転がるストラトを配下のものが抱えていった。

しかしそれを咎めるものはいない。

神々の目は若き英雄を飲み込んでわだかまる闇に呆然と注がれていた。

やがて闇が溶けるように虚空へと消える。

……慟哭が世界を包んだ……

「カムナビはこの世界の英雄だったのか……」

狂っていないければ良い神だったんだろう。

狂ってはいてもこの世界に還る望みだけは捨てていなかった。それは直に剣を合わせた真人だけが知っていることだった。

「これはあくまでも私の故郷に伝わる神話です。ストラトを崇める軍人国家プリストルではカムナビ様とストラトの役が逆になっていると聞き及びます。いずれにしろ神と戦い神をも倒すご主人様の力は力を欲するものにとって何を犠牲にして手に入れるべきものです。そして神を倒したという一事を持って信仰の敵と考える狂信者が、まだまだこの世界には根強く残っています。これが私がご主人様にカムナビ様との戦いを話さないで欲しいと願う理由です。」

シエラもプリムもこれ以上真人が理不尽な争いに巻き込まれるのを己が身にかえて食い止めるつもりだった。

真人ばかりでなく、シエラとプリムにとっても、真人は家族同然のなにかになっっていたからだ。

「わかった。カムナビの話はもう二度としないよ。二人とも心配してくれてありがとう」

真人の言葉に二人はパツと顔を輝かせて勢いよくうなづいた。

あんな過去を聞かされたのに、怖がるどころか自分の身を案じてくれる二人がたまらなく愛しい。

「……………そういえば……………どうしてカムナビだけ様つけなんだ？」

真人の問いにシエラとプリムの顔が耳まで赤く染め上がる。

「その……………カムナビ様は年頃の女性にはとかく人気のある神様なんです……………なんといっても……………恋愛の神様ですから……………」

そういいながら紅くなった頬に手を添えるシエラを見てみると、真人のなかで狂える渡り神だったカムナビの印象が薄れていく。

もしかなくものならばシエラの願いは真っ先になんかやっつけて欲しいものだ。そうしたら少しは見直してやってもいい。

もっとも16人も妻のいる男のご利益が当てになるかは疑問だが…

……………

「男の甲斐性がわからぬとは……………若いな」

16人どころか、さらに数人の妻を追加した神の弦音が世界の片隅で聞こえたとか聞こえないとか……………

第十六話

真人が目を覚ましたのはきっかり午前四時……異世界にきても習慣は変わらないものらしい。

すぐ隣の部屋でシエラとプリムの姉妹が寝ているはずなので、足音を忍ばせてそっと部屋を出る。

もっとも二人とも泥のように眠っているだろうが……

真人がいかに治療術にたけていようと一年間を奴隷小屋で過ごしたストレスまで癒すことはできない。

せめて今朝の目覚めの安らかならんことを願うのみだった。

それにしても夕べは……

思い出すのを拒否するように真人は頭を振った。

大波乱の一日の最大の衝撃は就寝間際にやってきた。

「……………え…と……………その……………なんと申しますか……………こんなことをご主人様にお聞きするのもなんだか変と申しますか……………下世話なことかとは思いますが……………」

シエラの様子が激しく挙動不審だった。

よくみればプリムも太ももを擦り合わせるようにして何か妙にはにかんでいる。

真人の第六感が未曾有の危機の到来を告げていた。

「いちおう、奴隷小屋で殿方の喜ばせかたは一通り聞いてはいるのですが……………実践はまだでして……………いや、でも知識はバツチリですから

どんどこい!と申しますか……………もつ…何言ってるのかしら私……………／／／／」

反則的に鈍い真人でもさすがにシエラがなにを言わんとしているの

か理解した。

「ふつつかものではございますが……ご主人様の夜伽を勤めさせていただきます。どうか可愛がってやってくださいませ……」

「プリムはまだ何も習ってないの。ご主人様それでもいい？」

いったい何を習ったとか習ってないとか言っているのだろうか？。

……現実逃避している場合じゃないな。性的な媚術に決まっている。女奴隷の一番身近な扱われ方なのだろう。

頼むからそんな殺人的な可愛らしさで身を委ねきつたような視線を送らないでくれ……／＼／＼

真人とて木石ではない。

性欲も健全にあるし、というより実は豊富な性経験を持っているのであった。

陰陽道において房中術はむしろ基本である。

人が持つ気の量を増やしたければ他人から奪えば良い。気の侵奪においてセックスは非常に効率的な手段なのだが……

当然のことながら修行の一環ではなく、しかも心を許した女性との性経験など真人にあらうはずもない。

「……………おやすみなさい……………」

「「ご主人様!!」」

聞かなかったことにするのは無理であるらしかった。

というよりなんでそんなにやる気まんまんなのだろう？

「オレはシエラもプリムも家族のように思っていると言ったと思うが……………」

「立場は別としてもおっしやいました」

シエラ……………君はオレにどうしろと……………？

「では逆に二人に問うが、君たちにとってオレは奴隷の娘を買って夜伽をさせて悦に入るような人間に見えるのか……………？」

古めかしい口調の言い回しが実は真人もかなりテンパッていることの証なのだが、そこまでは二人も気づかない。

「……………わかってます……………本当はご主人様がそんな行為をお望みにならぬぐらい……………でも！私たちはご主人様に御恩返しをしたいんです！」

「プリムにできることならなんでもしてあげたいの！」

命を救われたのみならず、足を完治させ、さらに家族同様に遇してくれる……………それだけの恩をことうむりながら己の身体以外に返すべきものをもたない二人は二人なりに必死であったのだ。

……そんなことはない。

二人がこうして傍にいてくれるだけで自分は十分以上に救われている。

真人は二人にそう告げるべきであったし、それは真実でもあった。

出会いかたは普通ではなかったけれど、これからゆっくり時間をかけて本当の家族になつていこう。

たとえ離れていても決して消えない……血の絆より濃い心の絆を結べるように……

そんな内心の決意はどうあれ、真人はむくむくと湧きあがる誘惑の魔の手を振り払えずにいた。

それは真砂との間には果されることのなかった密やかな欲望……

プリムのような幼い娘を抱くなど言語道断だが、これくらいは許されるのではないだろうか……？

そんな言い訳を内心に言いつつ真人は決定的な言葉を紡ぎだす。

「夜伽はいらないけど……オレを”お兄様”と呼んでみてくれるかな？」

プリムの鳶色の瞳が喜色に輝いた。

「いいの!？」

「むしろこっちがお願いしている。」

「お兄様」

プリムが満面の笑顔で真人の腰に抱きついてすりすり頬をすり寄せる。

兄として至福の感触に真人は酔いしれた。

ふと気がつけば、控え目ながらシャツの裾をつまむ小さな手の感触がある。

「…………お…………お兄様…………／／／／」

恥じらいに頬を染めながら上目づかいに潤んだ瞳を向けるシエラがそこにいた。

神さえ殺す超絶の武力を誇りながら、もう何かいろんなものに敗北してしまった真人は二人の柔らかな肢体を抱きしめながら、己の弱き心に涙するのだった……………。

真人が朝の日課をこなし終わったころ、シエラが起きだしてきた。

「おはようございます！…ご主人様」

「お、おはよう………」

夕べのシエラの恥かし気に頬を上気させる表情を思い出して思わず真人はどもる。これではどこぞの危ない人のようだ。

真人の反応を敏感に察したシエラはくすくすと笑いながら人差し指を口元にあてた。

「侍女服を着ている間は、ご主人様でご勘弁くださいませね」

シエラなりのけじめとして、協議のすえ侍女として働いている時間はご主人様、夕食以降とプライベートな時間についてはお兄様と呼ぶという取り決めがなされていた。

それにしてもたった一晚にして精神的優位を手中に収めるとはやはり女性は強いというべきか、それとも真人が弱いだけだろうか………

「ううご主人様、おはようございます」

シエラに無理やり起こされたのか、プリムはまだ寝ぼけ眼を擦って

いた。

それでもシエラとてきはきと朝食の用意をするのはさすがといっづべきか。

コンコン

控え目なノックの音がリビングに響く。

「お客様でしょうか……………」

シエラとプリムが連れだって玄関へと出迎えに赴いた。

「いらっしやいませー」「」

ドサリ……………と女性の手から朝食の材料らしい袋が滑り落ちる音がした。

もう一人の女性はワナワナと震える指でシエラとプリムを指さして口をぱくぱくさせている。

「ルーシアにシエリーさんじゃないか」

真人の呼びかけに我を取り戻した二人の口から絶叫が屋敷に轟いた。

「「真人（様）ってロリコンだったの（んですか）？」」「

第十七話

「これより弾劾裁判を開始します」

おごそかにルーシアが宣誓する。

「被告人中御神真人は真実のみを述べ決して虚偽の答弁をしないことを誓いますか？」

「誓います……………ルーシア……………これ、本気で続けるの……………？」

真人には何故ルーシアとシェリーが般若のような形相でこんな弾劾を始めたのか理解できない。

もつともシエラとプリムは苦笑いとともにルーシアたちの弾劾を受け入れていたのだが。

「…………おとなしくお座りください。真人様…………このオルパシ
アではロリコンに人権は認められていないのですヨ?」

たおやかな笑みとともに真人の肩に手を置くシェリーだった。

口元はたしかに笑っていてもその瞳は氷原のブリザードのごとくど
こまでも冷たく輝いてる。

「被告人中御神真人は昨夜、奴隷であるシェラファイター、プリムロ
ーゼの両名に淫らな行為に及びましたね…………?」

「異議あり!」

どうしてそういうことになる!? 全く事実無痕とも言えないが、オ
シはそこまで鬼畜じゃないぞ!

「参考人シェラファイター…………被告人の証言は事実ですか?」

うっすらとシエラがいたずらっぽい微笑を浮かべるのが真人にはわかった。

そして彼女がおしとやかそうな外見とは裏腹にお転婆でいたずら好きなのを思い出して祈るような思いを目で訴える。

……………タノムカラタスケテ

好奇心いっぱいキラキラした目があえなく返事を告げていた。

……………イヤ

「一緒にお風呂に入るのには淫らな行為にあたるのでしょうか？」

「もちろんです……！」

.....死んだなこれは.....

真人は諦念とともにやってくるであろうルーシア・シェリーの折檻に耐える覚悟を固めた。

「検事シェリー、求刑を述べなさい」

「決まっています！女の敵には死を！」

涙目でシェリーとルーシアが拳を鳴らす。

おいおい、それは淑女としてどうなんですか？

「お兄ちゃんをいじめないで！」

「お」

「兄」

「ちゃん？」

「あ、今はご主人様でした〜えへ〜…………… / / / /」

一斉に注目を浴びたプリムは顔を真っ赤に上気させながら照れ笑いを浮かべた。

お兄ちゃん…………その甘い響きに陶然とする真人をとりあえず殴ってルーシアはプリムに向き直る。

「プリムちゃん。どうして真人が”お兄ちゃん”なのかな？」

「プリムとお姉ちゃんは奴隷小屋でもうちよつとで死ぬところをご主人様に助けられたの。しかもどんなお医者様でも治らないっていわれたお姉ちゃんの足も治してくれた…………だからお姉ちゃんと相談して、恥ずかしいけどお風呂のお世話と夜伽をして少しでもご恩を返そうって

言ってたの。でもご主人様はそんなことしなくていいって。私たちはもう家族になったんだからこれからはご主人様をお兄ちゃんと呼んでもいいんだって言うてくれたの。ご主人様は何もエッチなことしてない、だからご主人様をいじめないで!？」

プリムから昨夜の真相を聞かされたルーシアとシェリーの顔から一筋の冷や汗が流れて落ちた。

「被告人ルーシア・シェリー言い訳があれば述べたまえ」

「「本当は真人（様）を信じていたわ（ました）!」「」

「うそをつけ!」

真人は思わず間髪おかずに絶叫した。

「「「ごっごめんなさい……………」」」

真人に罰としてルーシアとシェリーは正座させられていた。
畳など存在しないこの国では正座はかなりきついようだ。

「反省したか？」

「しました！反省しました！」

伯爵令嬢とも思えぬ言葉使いでルーシアが正座の解除を求める。

「じゃあ戻ってよし！」

「あ、足が痺れて立てない〜!!」

慣れない正座で足を痺れさせて転がりまわる様子に真人も姉妹も声をあげて笑った。

パンツ姿のルーシアはともかくメイド服のシェリーはいささか目の毒だった気もするが……………

「ふ〜ひどい目にあった」

「お互い様だ」

ようやく落ち着いて朝食が食べられるようになったのは九時を回ってからだった。

シェリーが持ってきてくれた材料でさらに品数が二品ほど増えている。

シェリーは最初メイドは主人といっしょに食事などできないと言いつ張ったが、ここは家族の食卓であり、ルーシアとシェリーは対等の客人だということを押し切った。

今では苦笑しつつも、ルーシアの隣で舌鼓をうっている。

「……………これは美味しいわ……………特にこのスープ……………お店で
お金が取れるわよ……………」

「あゝそれはですね」

プリムがニヤリとシエラを見て笑う。

「あっ！プリム、それは……………」

羞恥に顔を染めて妹の発言を止めようとするが相手が悪かった。

「なになに！？何か特別な理由でもあるの？」

身を乗り出して野次馬根性全開のルーシア。本当に君は伯爵令嬢なのか？

「うちのママはパパのハートを射止めるためにパパの好物だったスープの腕を磨いて特製のスープを作り上げたの。狙った男を一撃で落とす名づけて必殺スープ！」

「必殺スープ??？」

熊でもコロリと殺せそうなのは気のせいだろうか？

「そしていつの日か自分も狙った男の人のハートを射止めるためお姉ちゃんはスープの腕を磨いてるのでした〜！」

「もう……………プリムのほか！後で覚えてなさい！／／／／」

（それって聞きようによつては真人のハートを射止めるために出したとも受け取れるんじゃない……………）

（ほぼ間違いありませんわ……………プリムちゃんとはともかくシエラさんは要注意ですわね……………）

また場の空気が不穏になってきたのを察した真人はなんとか話をそらすべくルーシアに話しかけた。

「そつといえば今日は何のようだったんだ？」

真人に言われてようやく思い出したようにルーシアの目が瞬く。

「ああ……………昨日は時間がなかったけど傭兵の登録をしいって
からおつと思っていたのよ……………」

第十八話

「傭兵……………ですか？」

シエラの声に籠められた感情の険しさに真人は驚いた。

「いったい何が気に入らないというのだろうか？」

「ご主人様、こうして健康にさせていただいた今、ご主人様が自ら働く必要はないように思います。なんでしたら私が外働きに出てもかまいません。お考え直しただけませんか？」

シエラの意図は明白だった。

真人を戦場に出したくないのだ。

戦場に出れば真人の武力は白日のもとに晒され、その武力を狙って真人を食い物にしようとする者がきつと現れる。

昨夜話した通りではないか！

まるで仇でも見るような目で睨まれてルーシアはひるんだ。

「な、何か問題あるの？だって真人ほどの才能を埋もれさせるなんて世界の損失よ？」

なぜ裏切りものでも見るような目で見られなければならないのか、ルーシアにはわからない。

自分は真人のためを思って提案したのであり、その提案は真人とオルパシア王国の双方に益をもたらさずだった。

「……………ご主人様は確かに強いです。ただ強いだけなら私もこのように反対したりしません……………だけどご主人様は強すぎる……………その強すぎる力がハースバルド家と結びついたらとすればどんな陰謀に巻き込まれないとも限りません。それに……………ご主人様はご自分を省みるところが少なすぎるお人です。なんの躊躇もなく他人のために御自身の命を晒すでしょう……………それがわかってなおご主人様を傭兵にしようと言つのですか！？」

言われた言葉の意味が脳に浸透するにつれてルーシアは蒼白となった。

全く想定していなかったことだからだ。

軍人であるルーシアにとって強さとは正義であり、理不尽にあらがう力だった。

故にこそ、真人が王国のために功績をたて、その力量に見合った地位に昇ることを夢想していた。

しかし真人の武量は人の範疇を超えている。おそらくはシエラも真人から世界を渡った真相を聞かされているのだろう。

味方にすればこれほど頼もしい存在はないが、敵に回せばこれほど恐ろしい存在もないに違いない。

ならば今の現状はどうだ？

ハースバルド家とマンシュタイン家は権力闘争の真つただ中である。

ブリストル帝国の介入もあって誰が敵で誰が味方かを見定めるのは容易ではない。

ルーシア自身誘拐されかかったばかりなのだ。

そんななかで超絶の武力を誇る出自不明の戦士がハースバルド家の息のかかったものだとは知れたらどうなるか……………

天下無双の勇者が政治的な陰謀で抹殺されることなど歴史を紐解けば掃いて捨てるほどありふれた出来事だった。

……………今の私に真人を守りきれぬ力はない……………

ハースバルド家が家名をかけて真人を守ろうとするならば敵も迂闊な手だしは出来ないだろう。

しかし、あの父がそこまで真人を庇ってくれるとはルーシアには思えなかった。

娘すら国のためには見捨てるであろう父なのだ。

「じゅめん……………私の考えが甘かったわ……………」

そう言って頭を下げようとするルーシアを真人が止めた。

「万象に因果あり、これ太極の定めるところ。という言葉があまりま
す。この世に偶然などというものはない。全ては必然だという中御
神家の家訓です。……………この世界にきて初めて出会ったのが暗殺
者に襲われているルーシアだった……………これは偶然だろうか？オレ
はそうは思わない。」

そこにいたのは先ほどまで女性陣にからかわれていた純情な真人で
はなく……………中御神家の守護司だった。

「たまたま誘拐犯を追った帰り道に妹に良く似た声の奴隷に出会っ
た。その奴隷は姉妹で、本当の妹ではないけれどオレに家族の暖か
さを思い出させてくれた……………これも偶然なのか？昨日助けたシエ
ンベルグ令嬢もこの国の外交の重鎮の娘だという……………これも？…
……………そんなはずはない。これは神の配剤だ。大道に背かぬ歩き方
をしていれば自ずと自らの運命に出会うという……………だからオレはこ
う思っている。君たちに出会ったことがオレのこの世界での運命な
のだ。」

真人の静かな迫力に気おされて誰一人言葉も無い。

ただシエラだけが何かを言いたそうに口を開きかけては言い出せず
に俯いていた。

真人はわかっている、とでも言いたげにシェラにむかって頷くと楽しそうに微笑した。

「それに家長には家族を守る義務がある。プリストル帝国がこのオスパシアに攻め入ろうとしているのならこれと戦う。まあ可愛い妹を守るために兄として戦う………戦う理由としては十分だろう？」

不敵に笑う男らしい笑顔を正面から見せられて姉妹は首筋まで真っ赤に染まって轟沈した。

もっともルーシアとシェリーはいかにも不満気に拗ねていたが。

「それじゃそろそろ傭兵の屯所にいくとしようか………」

「お待ちください」

腰を浮かしかけた真人たちを止めたのはシェリーだった。

「どつしたの？シエリー？」

「相変わらずおつむが足りませんわねお嬢様は……少々わかりかねる言い回しがありました。がそれについてはいいですわ後でお嬢様を締め上げれば済む話ですから。……でもここで聞いておかなければならないことができましたの」

シエリーの理知的なはしばみ色の瞳がシエラとプリムを射るように貫いた。

「真人様のような異常な強さを見ればほとんどの人間はうかれてしまつものですよ。うちのお嬢様のように……なぜなら強さとは普通の人間にとつて目に見えるものであるからです。でも、本当の強さは目に見えないところにこそあり、目に見える強さは目に見えない強さによつてごく簡単に抹殺されてしまうのだということを知っているのは……目に見えない世界を知っている者だけ……それにハースバルド家がこの国の権門によつて槍玉にあげられていることをシエラさん、貴女は知っていましたね…そしてそれが真人様にどんな影響を与えるのかも」

ようやくシエリーの言わんとしていることを理解してルーシアが息を呑む。

「真人様が家族と認める信頼にかけてお答ください……………」
「……貴女は誰です？」

第十九話

息の詰まるような沈黙が続いた。

「ご主人様が運命とおっしゃったのがわかるような気がします……
……………」

今にも泣きそうな声でポツリとシエラが呟いた。

内心の葛藤を隠しきれずに両手を胸の前でもむように合わせながら、
やがてあきらめたように顔をあげる。

「もう名乗ることもないと思っていた名ではございますが……
シエラフィータ・ラルフ・グランデル・デ・アウストリアとあるも
のは呼びます。」

「……………それはもしかしてメイファン王国の……………」

ルーシアが気づいたようだった。

「はい……………メイファン王国枢機卿アウストリア侯爵が私の父です。」

メイファン王国……………プリストル帝国が滅ぼした三つの国の中でも最も古く豊かな国であった。

一年ほど前に味方の裏切りから王都を攻め落とされている。

その時に王都にいた王族の全ては虐殺されたという……………プリストルの野蛮性を示す事例のひとつとしてルーシアも幾度か聞かされていた。

「アウストリア侯も王家に連なる方だったと思うけど……………よく無事だったわね」

「さすがにプリストルも奴隷の身元までは確認いたしませんでしたから……………」

執拗を極める追求を逃れるため自らの娘を奴隷に売ったということか。

実際に他の王族が生きてメイファンを逃れることはなかったのだからアウストリア侯の判断は正しかったのだろうか……
昨日の弱りきったシエラを知る真人はなかなかそれを素直には認められずにいた。

「では貴女たちはメイファン唯一の王位継承者ということですか……？」

「違います！」

シエリーの問いかけを強い口調でシエラは否定する。

「メイファンは国の命数を使い切ったのです。命数を使い切った国が再興することはありませんし、王位継承者ももはや存在しません。ご主人様の信頼にかけて私は捨て去った過去のお話をいたしました。が、貴女方もご主人様の信頼を得た方なら、このことを他言の無き

ようお願いします。」

そう言いきったシエラの瞳から一筋の涙が伝って落ちた。

「ご主人様……私はご主人様の奴隷です。メイファンなんか知らない……どうか…お側に居させてください……」

言うまでも無いことだ。

真人は綺麗に撫で付けられたシエラの手を優しく梳きながら言った。

「ここに居るのは奴隷でも王族でもない。オレの家族のシエラフィータだ。それでいいじゃないか」

「ご主人様！」

感極まって真人に抱きついたシエラをプリムとルーシアとシエリー

が複雑な顔をして見つめていた。

ようやく落ち着きを取り戻したシエラは名残惜しげに真人から身体を離すと恥ずかしそうに涙を拭った。

「ありがとうございます……………ご主人様……………」

だがシエラの告白はまだ終わってわけではなかった。

むしろこれからのほうが重要であるのかもしれない。

「私の父は枢機卿として国内の神殿を統括しておりました……………そして王都に君臨する大神殿に祭られた神の名は……………」

”カムナビ”

「ご主人様はさきほど運命と言われました。カムナビ様を祭る大神殿最後の巫女である私を、カムナビ様を異世界より帰還させてくださったご主人様が助けてくれたのは偶然でしょうか？……偶然であつて欲しい……カムナビ様を祭る神殿の者たちの中で信じられている教えの一つに……神界が乱れた時地上もまた乱れ、地上乱れる時神界また乱れるというものがあります……カムナビ様が帰還されたとあれば神界になんらかの異変が起こるは必定……それがご主人様の身にどんな災いをもたらすのか……巫女である私が神の思惑でご主人様を戦いに引きずり出しはしないか……心配でなりません……そんな運命なら……私は……」

「シエラ」

真人の瞳に宿る力が変わる。

それはただの真人ではなく中御神の守護司としての真人の証。

「神が人間を自らの思惑で動かそうとすることは確かにある。だが……人間は己の思惑で己を動かすことが出来る……それを忘れるな……神は決して万能の存在ではないことをお前は知ってるはずだろっ？」

そこにいるのは神をも殺す刃

………そうだ。神がいくらお膳立てを整えたからといっても決断するの己の意志………

真人のためなら神の意志に逆らうことなど造作も無い。

「埒もないことを申し上げました……私がご主人様のお側にお仕えするのは私自身の意志でございます。神様に文句なんか言わせませんわ!」

ニコリとシエラが笑う。

この屋敷にやってきてから初めてシエラが見せた、十四歳の娘らしい無垢な微笑みだった。

結局真人たちが傭兵を管轄する傭兵局を訪れたのは太陽も高い昼近い時間となった。

真人にかかる政治的圧力を極力低減させるために、当初付き添う気満々だったルーシアは泣く泣く家に帰されている。

そもそも軍務を放棄して真人の家にきていたらしいから、ウーデットからきついお灸をもらっていることだろう。

登録の手続きも右も左もわからないということでシェリーだけは同行していた。

シェラとプリムも来たがったのだが、荒くれの傭兵部隊にメイドを三人も引き連れていくのは流石にためらわれた。

ライバル三人を出し抜いたシェリーはご機嫌である。

ぶら下がるように真人の右腕にしがみついてシェリーを知る人が見れば目を疑うような愛想をふりまいていた。

「あそこが傭兵局の受付ですわ……………ってなんだかずいぶんと賑やかですわね……………」

砦を改装しただけの石造りの簡素な受付のまえには屈強な傭兵たちが鈴なりになって一組の男女を取り囲んでいる。

男の方は体重が百数十キロはありそうな巨躯であった。年のころは三十に届くだろうか。口元を覆うヒゲがなければ存外二十代であるのかもしれない。鋼のような筋肉とそれに見合うだけの巨大な長刀が異相を放っていた。

女の方は百九十センチはあろうかという長身で短髪に刈った見事な赤毛と黒瑪瑙のような深い輝きの瞳を持った美女であった。シェリ―にも負けぬダイナマイトな体形に巻きつけられた鉄鎖つきの戦斧が静かな迫力を醸し出している。

「あの人たちが何かしたんですか……………」

この騒ぎの中心にいるのがあの男女に相違ない、とあたりをつけた真人は手近な男に尋ねると、男は馬鹿にしたような目を向けながら鼻息も荒くわめきたてた。

「これだから世間知らずは！アセンブラの猛虎と闘神ディアナだよ！あの伝説の傭兵がオルパシア側に来てくれるんだ！こんなに心強いことはないぜ！」

第二十話

アセンブラの猛虎と闘神ディアナ

このユーレイシア大陸で軍事に係わる者なら一度は聞いたことがあるであろう名である。

軍務の名門ハースバルド家に仕えるシエリーはさすがにその名を知っていた。

………アスローン共和国連邦の紛争がひと段落したから新たな仕事を探しに来たってわけね………

それでも彼らがブリストル帝国へ士官しようとしなかったのは僥倖と言えるだろう。

百人力という言葉があるが彼らの力は比喩ではなく現実として百人分の力があるのだ。あるいはそれ以上の。

………彼らが大陸に名を轟かしたのは五年ほど時を遡ったポストニア戦役が佳境に達しようとする時であった。

大陸公路とベルグーノ街道の結節点にあたる要衝ボストニアは以前からエルネスティア公国とワルサレム王国の間で度々紛争の舞台となっていたが、五年前は開戦当初のワルサレムの奇襲攻撃が奏功し、陥落は時間の問題となっていた。

死守命令が出た孤立無援のボストニアの守備隊の中に一際目立つ巨躯の男がいた……………。

戦力比は10対1……………しかも早急な援軍は望むべくもない状況で傭兵たちの逃亡が相次ぐなか敢然と逆襲を敢行したのが後のアセンブラの猛虎ことフィリオ・セベステロス・アセンブラその人であった。

勝ち戦を目前にした兵は命を惜しむという。

勝利の美酒と報償に生きてありつきたいと思ってしまうからだ。

古来より生きようとする兵と死を覚悟した兵が向き合えば死兵が勝つのが運命だった。

わずか一個中隊の傭兵たちがワルサレムの包囲に大穴を空け獅子奮迅の勢いで自らに数十倍する敵を屠ったのである。

中でもフィリオの活躍は群を抜いていた。

並みの男では持ち上げることすら難しい長刀を振りまわし、首級をあげることおよそ百以上その中にはワルサレムの将軍の首すら含まれていた。

しかし死兵が圧倒的な数の前にいつしか力尽きるのもまた古来よりの運命だった。

一人また一人と櫛の歯が欠けるように中隊の仲間が倒れていく。それは個人の武勇ではどうにも覆すことのできぬものだ。

だが、彼らは幸運だった。

戦女神が彼らに祝福を与えていたのだから。

援軍などありえないと考えていたワルサレム軍に射放たれた矢のように疾走する騎馬の群れが襲いかかる。

闘神ディアナ……ディアセレーナ・ヴォルフラム・サンナゼールの来援だった。

闘神ディアナと称されるディアセレーナの恐るべきところは個人の武勇のみならず戦術指揮官として超一級に優秀であるということである。

ディアセレーナが軽騎兵で一撃を加えただけでワルサレム軍は部隊
同士の結節を失った。

まるで結んでいた糸が綻ぶように統制のとれぬ烏合の衆に成り下が
ったのだ。

ことここにいたって立て籠もり続けるほどポストニアの防衛司令官
も無能ではなかった。

全軍をもって反撃に打って出るとワルサレム軍はたちまち雪崩をう
って敗走した。

後にポストニアの奇跡と呼ばれる戦史に残る戦いはこうしてエルネ
スティア公国の勝利に終わったのである。

この戦いを皮切りに大陸の戦雲渦巻く場所で二人の名が聞こえるよう
になっていく。

ある時は心強い味方として、またある時は手強い好敵手として。

つい先頃まではアスローン共和国連邦で起こった剣闘士奴隷の反乱
鎮圧に赴き大功あったと伝えられていた。

「しかしかくも名高き二人とともに戦える日がこようとはなあ……

……」

「おいおい待てよ。オレはまだこの国のもとで戦うと決めたわけじゃないぜ。」

フィリオは苦笑しながら男の言葉を否定した。

「勝ちそうなほうに雇われるのは楽だが高くは売り込めねえ……不利なほうについてこそ己を高く売り込めるってもんだが……要はこの国がオレにいくら値をつけるかってことさ。割に合わないきや余所をあたらせてもらっぜ」

あえて負けそうな側につく……そうやってのけた圧倒的な自負に傭兵たちの間からため息が漏れる。

男なら一度は言ってみたいセリフのひとつではあるだろう。

慌てたのは傭兵局の管理官である。

これほどの逸材を手放すことはできない。ましてブリストル帝国などに行かれたりしたら利敵行為ですらある。

かといって彼が要求するに足りる給料を用意することは難しい、というよりそこまでの決裁権がないのであった。

「……………明日まで待ってくれ。なんとか希望に沿うよう努力しよう。」

そついうのが精一杯だった。

「しょうがねえ……………明日の昼にまた来る……………色よい返事を期待してるぜ」

フィリオの言葉に管理官はこの後の上司との折衝の難しさに思わず苦笑を浮かべる。

それを見たフィリオはいたずらを思いついた小僧のようにニカリと笑った。

それはまるで十代の少年のように無垢な笑みだった。

「あんたの苦勞を少しでも軽くしてやるためにちよつとひと肌ぬいでやるうじやないか。おい、野郎ども……………肩慣らしにひとつ付き合えや！」

空気の比重を十倍にしたような重苦しい闘気を叩きつけられた野次馬が蜘蛛の子を散らすように我さきにと逃げていく。

冗談ではなかった。フィリオの膂力は手加減してさえいとも簡単に人を殺す。

「ちっ……………これじゃなんの示威にもなりやしねえ……………」

「無茶を言うな。お前にとっては肩慣らしでも彼らにとっては命に係わる問題さね」

いや、十分示威にはなっている。

アセンブラの猛虎という名が傭兵たちにどれほどの脅威を与えるかという意味においては。

人垣がなくなつて閑散とした石畳に真人とシェリーだけが残されていた。

「私も傭兵として登録していただきたいのだがもっご都合は善いのだろうか……………」

帰りかけていたフィリオが信じられないものを見るような目でグルリと振り返る。

ディアセレーナもまた驚きを隠せない様子で目を瞬いていた。

見れば少年としか言いよの無い年齢である。

ただ少年であるというだけなら傭兵の世界にはままたあることだが、この少年は絶対に違う。

なにせまず武装をしていない。

長剣を佩いてはいるが鎖帷子どころか皮鎧すら身に着けていない。

貴族の御曹司のような絹であつらえたシャツと黒一色に染め上げられたズボンといういでたちは断じて傭兵と言えるようなものではない。

しかも絶世の美形だ。

黄金率をかくも体言できるものかというスラリとした体形。

女性に見紛うばかりの美しく整った鼻梁。

陽光を受けて光輝く白銀の髪。

どこをどうすればこの少年の口から傭兵などという言葉が出てくるのか。

「坊や………来る場所を間違っつてやしないかい？」

王立騎士団に入隊するというのならまだ納得できなくもない。

この線の細さではまず使い物になるまいが。

「私の名は中御神真人と申します。それでもこの国に一家を構える身、心配はご無用に願いたい」

二人の呆れとも侮りともつかぬ視線を受けて真人もいささか気分を損ねていた。

自然言葉がぞんざいな口調になる。

管理官は呆れてものが言えなかった。この少年は伝説の傭兵に本気で腹を立てている！

「坊主、お前も傭兵になろうってんならさっきのオレの台詞を聞いていたな」

「もちろん」

「いい度胸だ。それじゃひとつ肩慣らしに付き合ってもらおうか。それが嫌なら家に帰ってベッドのなかで震えてるんだな」

そっぴいなながらもフィリオは少年がこのケンカを買うとは微塵も考えていない。

こんな華奢な少年がフィリオの超人的な武技と争うのは自殺行為以外の何者でもないからだ。

ディアセレーナもフィリオの大人気ない態度に呆れつつもこれが少年のためだろうと思っっている。

これほど見目麗しい少年が戦場で屍を晒すのはディアセレーナの趣味ではなかった。

美しい少年は傍にはべらせて愛でるのが一番だった。

「肩慣らしと言わず全力を出して下さい。貴方なら私も手加減せずに戦うことが出来そうだ」

真人の暴言とも言える一言に空気が凍りついた。

フィリオの瞳に狂気の色が宿る。

「いいだろう。オレが全力を出すまでお前が生きていたらの話だがな！」

第二十一話

「おい、フィリオ！ちょっと冷静に……………」

ディアセレーナが止める間もなかった。

フィリオの超速の斬撃が少年の肩口めがけて襲いかかる。それでも峰で撃ちかかっているのはフィリオがギリギリのところだ。

理性を保っている証だろう。

それとて当たり所が悪ければ死は免れないだろうが、傭兵同士の私闘は死に損が決まりである。

自業自得だ……………とはいえ、自分好みの美少年が出来そこないの人の形のように醜く折れ曲がる様はディアセレーナの精神衛生上非常によろしくないのも事実だった。

まったくなんてもつたいたい……………」

あの黄金の瞳で愛を語られ、あの白磁の指先で肌を撫でられたらどんなにか深い官能と陶酔を与えてくれたらうと思うと、ディアセレーナはいくら惜しんでも惜しみきれない。

だが……そんな心配は杞憂に終わった。

キン！という甲高い音とともに石畳の一部が真っ二つに裂けて割れている。

本来そうなるべき運命であったはずの少年は……

己の侍女らしい美少女を横抱きにして受付脇にある待合室に移動していた。

……そんなバカな！

ありえない出来事にディアセレーナは目を見張った。

フィリオも追撃にかからぬところを見ると同じ思いらしい。

仮にも大陸中に名を轟かす傭兵二人が、いまだ新米の傭兵ですらない一介の少年の動きを見失ったなんて……………

「シェリーさんは悪いけどここでひとまず待って……………」

ゴスッ

鈍い音とともに少年がガツクリ膝をつくのが見えた。

長椅子に下ろされようとしていた少女が少年の股間を蹴り上げたのだ。

少年の死角をついたディアアセレーナも感嘆するほかないほどの一撃だった。

最近は何メイドも格闘術を嗜むのだろうか？

「あれほど目立つことは控えるように言ったのに、よりもよってアセンブラの猛虎に喧嘩を売ってどういうことですか！

それともこれは真人様をお嬢様に任された私に対する嫌がらせですか？そんなんですか！？」

残念ながら男以外には決して理解することのできぬ激痛に真人は反論の言葉もない。

「はああああああ？？？」

あまりの出来事に顎が外れんばかりに大口を開けて固まるフィリオとディアセレーナを誰が責められるだろう。

そもそもフィリオの神速の一撃をなんなくかわしながら少女の蹴りにあっさり沈んでしまうというのはあり得るのだろうか？

管理官はあまりの成り行きに呆然としつつも

……いきなりメイド連れで傭兵局にきておいて目立つなどというのは無理なんじゃないか？

などと至極真つ当なことを考えていたという……………

氣勢を削がれた形にはなつたがフィリオの戦意はまだ失われたわけではなかった。

もつとも当初感じていた敵意はとうに失われている。代わって増しているのが好奇心であった。

いまだ見ぬ武に己の武を問うことこそフィリオの本懐なのだ。

強敵があればこれに挑み、強敵がいなければ負けそうな戦に己の武威の咲き場を求める。

ただひたすら強さというものに憑かれた根っからの武人……………それがフィリオ・セベステロス・アセンブラの本性であった。

「おい、管理官……………練兵場を借りるぞ。それと……………しばらく誰も近づけるな」

どうやら少年の連れは少年が必要以上に目立つことを嫌っているようだ。

理由は何にしろ、それで少年………真人の全力が見られぬのでは意味がない。

「あたしはかまわないのだろうね？ フィリオ」

ディアセレーナが不敵に笑う。

無論のことなんと断られようがこれほど面白い勝負を見過ごすつもりはない。

それ以上にディアセレーナの血も沸き立っていた。

フィリオさえいなければ今すぐにも自分が手合わせを願いたいくらいだ。ここで蚊帳の外に置かれたりしたら欲求不満で精神がどうかしてしまうだろう。

「オレの楽しみの邪魔をしないのならいいぜ」

そう言ってフィリオは真人について来い、と顎をしゃくつてみせる。
拒否権は認められてはいなそうだ。

これ以上シエリーの機嫌が悪化するようなことは真人としても避け
たかったが仕方あるまい。

「……………今日の件はお嬢様とシエラさんたちに報告しますからね
！」

背中から瘴気を漂わせながらポツリとシエリーが言った。

自分はどこで間違っただろう？

この世界で初めて遠慮せずにもむ使い手に出会った。

この世界にやってきて拘束術式や呪法から解き放たれた自分だが、
それによって戦闘力が一部では上昇し、また一部では低下している。

それがどれだけ実戦で影響するのはやはり実戦で試さなくてはわ
からないのだ。

言いつけどおり宝具と魔術は封印しているのに……………どうしてシエリーさんはあんなに怒ってるんだらう？

真人にはフィリオと互角にやりあえるということが、この世界でどれだけ非常識かということが全くわかっていなかった。

ただ一つだけわかっていることと言えば……………

「……………どうかそれだけは勘弁してください」

シエラとプリムに知られたらおそらく自分が針のむしろに座らされたあげく火で炙られるような目に合うだろう、ということだった。

いつの間にかシエラたち姉妹に首根っこを完全に押さえ込まれている真人であった。

何のためらいもなく土下座を敢行する真人にフィリオとディアセレ
ーナは再び顎がカクリと落ちるのを押さえることができなかつた。
……。

第二十二話

本来なら数十人の傭兵が技を磨くであろう広々とした練兵場でフィリオと真人は対峙していた。

フィリオは得意の長刀を上段に構え、真人は自然体からやや前傾姿勢した姿勢のまま肩口からつま先までの全身の力を抜いている。

ゆらりゆらりと左右によるめいているようにも見えるその様は謡曲弱法師の遊僧に似るが、もとをたどれば中国拳法の禹歩に行き着く。

大陸系の忍者集団である伊賀忍者が得意とする歩法でもあった。

一見隙だらけに見える。

しかしフィリオの第六感は大音声で警報を鳴らしていた。

迂闊に踏み込んだ瞬間にあの華奢な身体から自分の巨体すら吹き飛びそうな反撃がくる………そんな予感だ。

「中御神家守護司……………中御神真人、参る！」

先手をとったのは意外にも真人だった。

瞬速の踏み込みでフィリオの長刀との間合いを詰める。

虚を衝かれたフィリオはやすやすと自らの間合い内に真人の侵入を許してしまっていた。

ありえない……………！

こんなにやすやすと懐に飛び込まれてしまうほどフィリオの武量は安くない。

長刀はリーチが長い分、懐に飛び込まれるともろい……………であるが故にフィリオは飛び込まれないための様々な工夫をし、また自分の間合いの読みに絶大な自信を抱いてきた。

それが根こそぎ覆りかねない事態だった。

真人の抜き打ちの斬撃を、フィリオはほとんど戦場で培ってきた勘だけで防いでいた。

これを幸いに真人の長剣を力任せに押し返していったん間合いを取る。

どう考えてもおおかしかった。

真人が剣を抜いたのはわかっているはずなのに斬られる瞬間まで気づかないなどということがあり得るだろうか？

いや……気づいていないわけではない。

むしろ目に見える情報と意識の間に齟齬が生じているような違和感が………

「フィリオ！重心だ！重心と体裁きがおかしいぞ！」

無粋とは知りつつもディアセレーナも声をあげないわけにはいられなかった。

長年の僚友が見知らぬ少年に手もなくひねられてしまうのは流石のディアセレーナも寝覚めが悪い。

女性と男性の骨格の差を利用して男性には不可能な身体の動きを切り札にしているディアセレーナだからこそ気づいたことだった。

歴戦の腕利きになればなるほどそこには経験からくる無意識下の摺り込みがある。

その摺り込みこそが反射速度を向上させ咄嗟の判断を保障してくれるのだが、経験にない動きをされた場合には反応が極端に遅れてしまうのだ。にもかかわらず真人の斬撃を受けきったフィリオはさすがは大陸に名だたる英雄だと言えるだろう。

「中御神流 戦舞 六番」

真人も素直に感心していた。

フィリオの膂力のすさまじさはいかなる真人でも術を使わずには対抗しきれぬものであったし、初撃で戦舞の肝を見破ったディアセレーナには恐れすら抱いている。

フィリオがとまどっている重心のズレの秘密はガマクの使い方であった。

横腹にある滅多には使われぬこの柔らかな筋肉は使いようによっては腰の重心を見た目とはまるで違うものにしてしまうのだ。

琉球舞踊では今も頻繁に使われる言葉だが、一部は古式唐手にも伝えられたという。

そして真人は本来自由に動かせる随意筋とは違って、自分の意思では動かせぬ非随意筋を自在に操ることができる。

それが、フィリオが認識しきれぬ真人の体裁きの正体だった。

「……………驚いたな……………長年この世界にいるが初めてお目にかかる代物だぜ……………」

この美しくも妖しい舞のような動きを自分がこの勝負中に把握しきることはない。

ならば防御は本能に任せて斬ることに全力を注ぐべきだ、

いかにも戦士らしい決断を下すとフィリオは一気に攻勢に転じた。

目にも留まらぬ速さで長刀を突く。

避けしかたが甘ければ突いた長刀をそのまま雑ぎに転じる、フィリオの得意技であった。

長刀が槍と異なる最大のものは薙ぎ技が存在するということだ。

槍でありながら刀でもある。一見便利なようだがフィリオのもつ並外れた膂力があってはじめて可能な使い方だった。

これには流石の真人も回避に徹するしかなかった。

真人といえど術の行使なくフィリオの一撃を食らえば絶命は免れない。

突き技に目が慣れて来たと見て、フィリオは今度は薙ぎ技に転じた。動作の大きい薙ぎ技だが遠心力が働いたため当たるもの全てを叩き壊す破壊力がある。

しかも懐に飛び込もうとすればその膂力をいかして、どんな体勢からでも一瞬で長刀を引き戻す。

その引き戻す行為すのものが凶悪な斬撃であり、引き戻された長刀はすぐさま突きに転じるのだ。

付け込む隙も逃げ出す隙もない。

力で勝てぬなら力で勝負を挑む法はない。

力の及ばぬところで決着をつけねばならなかった。

真人は自然に瞳を閉じ観想に入った。

右から左へと流れるフィリオの長刀の野太い音を感じる。

ひとつの円周そのものが刃であるが如き速さだ。

そんな轟々と渦巻くつむじ風のような音の中で稀に突風のような鋭い音が混じる。

フィリオが長刀を突く音であった。

音を見始めた真人はいつしかフィリオの攻撃をそよぎわたる風のようにかわし始めていた。

「……………かわすだけじゃ勝てねえぞ、小僧……………」

焦りの色の欠片も見せずにフィリオが笑う。

確かに、攻め手を見出せないままなら真人の負けは動かない。

その時真人の顔面を狙って突き出された長刀に向かって真人の長剣が伸びた。

真人はずっと機を窺っていた。

フィリオの長刀が突き出され伸びきった瞬間をである。

運動エネルギーを使い切ったその瞬間が長刀にとってもっとも無防備な瞬間に他ならないからだ。

鞘に収めた長剣を鞘の中で加速する。日本刀ほどの加速は得られないが片刃の長剣を腰を切る事でさらに加速させる。

十分な加速を得た長剣はそのおそるべき切れ味をフィリオの長刀の柄に向かって存分に発揮した。

「な……んだと………」

カラン……と乾いた音を立ててフィリオの愛刀が柄の半分から先を切り落とされて大地に落ちた。

鋼鉄の芯に細かい鉄鎖を編んだ剛刀である。

あまりの衝撃にフィリオは唇を震わせた。

それは自分の技が完全に見切られたうえ、相手の技に完全にされてやられたという証に他ならなかった。

こんな自分は知らない。

こんな自分を認めることはできない。

「小僧………ハーสบルドの傭兵に加わると言ったな………」

「中御神真人ですよ、フィリオ殿」

すずやかに笑いながら真人が答える。

「強き者を倒すことこそわが望み……戦場で再び相ま見えよう……！」

真人にとって……ハースバルドにとっても危険な敵が誕生した瞬間だった。

第二十三話

フィリオに続いて挑んだディアセレーナだが、善戦したものの鎖の間合いを見切られると長くは持たなかった。

真人は小石を投げつけて鎖の先端の分銅の軌道をそらし、戦斧をかいくぐると何の苦も無くディアセレーナの喉元に長剣を突きつけて見せたのだ。

アセンブラの猛虎と闘神ディアナが年端も行かぬ少年に敗れた。

その目で見ぬかぎりおそらく誰も信じようとはしないだろう出来事だった。

「あゝあ……負けちゃったかい。あたしの鉄鎖もさび付いたかねえ……」

そういつて天を仰ぐディアセレーナも本気で言っているわけではなかった。

本物とまぐれの区別がつかないような技量ではない。

「……さて、オレはこのままブリストルに行くつもりだが……お前はどつする？」

フィリオがディアセレーナに尋ねる様子を見て真人は首を傾げた。

てっきり二人はペアの傭兵だと思っていたからだ。

確かに気の合う男であったがお互いに命を預けあう仲ではない。

たまたま激戦区を商売の種にしているとがち合うことが多かっただけだ。

それに……

「あたしはブリストルは好きになれないからねえ……悪いが一人で
行っておくれ」

「お前と敵同士になるのは久しぶりだな……これでまた楽しみが増えた……」

こういう男なのだ。

強敵と戦うことにしか興味が無い。だからといって戦ってやる義理も気力もなかったが。

「悪いがあたしはあんたの相手をするほど敵に不自由しちやいな
いからねえ…坊やに相手してもらったね」

「当面はそういうことにしといてやる」

そう言ってフィリオは真人たちに背を向けて歩き出した。

途中管理官の哀切を極める悲鳴があがっていたが、哀れとは思いつつも気持ちよく見捨てたディアセレーナは真人に向かって微笑みながら言った。

「ところで昼飯に連れてっておくれでないかい？もちろんあたしの
おじいちゃん！」

シェリーの案内で訪れた食堂はちょうど昼をやや過ぎた時間であったせいかすぐに入ることが出来た。

昼のピーク時は長蛇の列ができる人気店であるらしい。

「エールを頼むよ。そっちの坊やにもね」

「もう飲む気ですか？しかも真人様にまで……………」

オルパシアに限らず、この世界では昼から酒を飲むのはそれほど非常識なことではないし未成年の飲酒も常套化しているがあくまでもそれは平民に限ってのことだ。

貴族の家で暮らすシェリーにとっては少々はしたないと感じるのも無理からぬことであった。

「今日から坊やとあたしは同じ釜の飯を食う同僚さね。ここはお互い乾杯するのが傭兵の流儀ってもんさ」

さすがに闘神ディアナに流儀を説かれてはシエリーも納得せざるをえなかった。

「『乾杯！』！』」

運ばれてきたエールを三人で乾杯する。

実のところシエリーも酒好きなのだ。お屋敷ならともかくせつかくの真人と飲む機会を無駄にする気は毛頭なかった。

酒が進むに連れて口のすべりがよくなり雑談に華が咲き始める。

「よろしかったのでしょうか？ディアセレーナ殿……フィリオ殿と別れてしまって……」

真人は先ほどから気になっていた件を切り出した。

「これからはディアナって呼ぶんだね坊や。フィリオのことは放っておくがいいさ。別にあたしはあいつの保護者でもなんでもないからね。たまたま敵にならずにいただけさ」

「では私のことは真人と。私のいたらぬせいでお二人を別れさせてしまったかと気が気ではありませんでした」

ただ別れたというばかりではない。そう遠くない未来、二人は互いに殺し合わなければならぬかもしれないのだ。そのことが真人には重くのしかかっていた。

「……坊……真人は優しいねえ……まあ、あの台詞を聞いただろうか？ あいつは強い人間と戦うことと、自分の武名をあげることだけが生きがいの男でねえ……敵に回すとやっかいな男さ。気をつけるんだね」

こと、その執念にかけてはディアナも遠く及ばない。

どんな手段をとろうともフィリオは真人の前に立つだろう。今度こそ手加減のいらぬ敵同士として。

「真人様なら大丈夫ですよ！」

シエリーがエールを飲み干しながら真人の肩を叩く。どうやらかなり酔いが回っている様子である。

「……確かに真人ならそう遅れをとることはないだろうが……戦場つてのは特別な場所だからね……」

戦場では個々の強さもさることながら生と死の境界を感じ取れない人間が生き抜くことは難しい。

勘にしろ偶然にしろ、戦場にしかない何かを味方につけられる人間は恐ろしく強いのだ。

戦場でのフィリオの強さはおそらく今日の比ではないだろう。

「ご安心ください。私は決して負けませんしディアナさんも私が守って見せますから」

「……………はい？」

誰が誰を守るって……………えくと…坊やがあたしをかい？

予想外の真人の言葉にディアナは狼狽を隠せなかった。

この闘神ディアナに向かって、守ってやるなどと大言壮語した人間はいまだかつて居なかったからだ。

身長190センチの巨体。鍛え抜かれたたくましい肉体。重量武器である戦斧を軽々と振り回す怪力。

ものごころついたときには既にディアナは特別な存在だった。

男娼をはべらせ、ある意味で女になった今も厳密な意味で女性として扱われたことは無い。

「じよ、冗談はおよしよ。あ、あたしが守られるようなタマかって

んだ」

動揺のあまり口調が怪しくなっている。

真人は意外そうに首を振るとディアナの健康的に灼けた頬を撫であげた。

「それに貴女のように可愛らしい女性を守るのが男子たる者の役目というものです」

「かかかかかか、かわ、かわ、可愛いだって!？」

ありえないことだ。

雲をつくような巨人で、並の男が百人いてもかなわない闘神ディアナの二つ名を持つような女が可愛い？

同時にそれはディアナのコンプレックスをはげしく刺激する言葉でもあった。

実はディアナは儂く可愛いものに目が無いひどく少女趣味なところを持ち合わせていた。美少年好きはその歪んだ表れであろう。

「か、からかわないで欲しいね。こんな図体の女が可愛いなんて聞いたことが……っっ！」

ディアナのしどろもどろの言い訳は最後まで言わせてもらえなかった。

真人が隣に座っていたディアナの巨体を軽々と抱き上げて膝の上に乗せたのである。

目にも留まらぬは早技だった。

生まれて初めて男の膝に抱かれたディアナはもはや羞恥のあまり言葉もない。

「……………／／／／！！！」

「ちょ、ちょっと真人様！やや、やりすぎじゃないですか……？」

さすがにこれにはシェリーも心穏やかではいらなかった。

ロリコン疑惑の次はマザコン疑惑だろうか？まさか真人が年増趣味だなんてそんなことは……………！！

「シェリーさんも可愛いですよ。そのかしこそうで好奇心いっぱい
の瞳なんかとても」

肩を引き寄せられたかと思うとおもむろに頬にキスを落とされる。

もうそれだけで、ただでさえ酔いが回っていたシェリーは目を回して沈没した。

「いや！ちよ……………離して真人……………恥ずかしい……………！」

そう言いながらも何故かディアナは膝から降りようとはしなかった。

否、降りれない。

「ディアナさんは本当に甘えるのが下手ですね……………」

真人の手が柔らかくしなやかなディアナの赤毛を優しく梳き始めると、ディアナは陶然とした表情で目を細めながら受け容れることしかできなかった。

ディアナはおそろおそろ真人の背中に手を回し…やがて意を決したように抱きしめた。

「本当にあたしは可愛いと思うかい？」

「女性は女性であるだけで可愛らしいものですが……ディアナさんはそんな不器用なところが特に可愛らしいですね」

もうだめだ……

たぶんあたしはこの男からも二度と離れることはできない。

真人の前でだけ、あたしは闘神ディアナではなくただの一人の女でいられる。

これが普通の男なら戯言で終わる話なのだが真人にはディアナをしのぐ武量が現実にある。

「……うゝ真人真人真人真人真人真人オ！」

ディアナはぐりんぐりんと頬を真人の胸にこすりつけた。呆れるほど見事な壊れっぷりであった。

「……お客様……恐れ入りますがお食事中にそういった行為は遠慮いただきたいのですが……」

はたから見ればいちゃつくのもいい加減にしろ！というところなのだろう。

給仕の女の子は恐々と顔を引きつらせつつも敢然と真人に告げた。

「そんな顔をなさらないでください。貴女は笑っていたほうが何十倍も美しい……」

給仕の女の子、撃沈

ここにいたって沈没していたシェリーが、ようやく真人のただならぬ様子に気がついた。

「真人様……もしかして酒乱ですか??」

第二十四話

「それは本当ですか？お父様！」

アナスタシアは驚愕にその美しい翠色の瞳を見開いた。

「勅命だ。私は明日ケルドランに発つ。」

ブリストル帝国との最終交渉に赴き王国に譲歩なき和平を、しからずんば宣戦の布告を与えよ。

先刻の王室会議の最終決定は下った。事実上帝国との開戦が決定した瞬間でもあった。

国王陛下の勅命とあらばラスネール・テイレース・ノルド・シエレンベルグ侯爵も深いため息とともに己が運命を受け入れるしかなかった。

……こうなる予感はしていた。

度重なる王室会議での紛糾にもかかわらず遂にこれまで決定的な対策を講じることができなかったツケを払わされる時がきたのだ。

「どうしてお父様が犠牲にならなくてはいけないの？これもみんな内務卿や財務卿がくだらない駄々をこねるからじゃありませんの！」

「たとえそれが事実であつたとしてもわが身の職責を全うするのが誇り高きシェレンベルグ家の勤めだ」

……とはいえ内心忸怩たるものがあることは否定できない。

これが1年以上まえ…メイファン王国の陥落前であつたならまた別の交渉が可能だった。

メイファン王国侵攻直後ならさらに多くの選択肢が存在した。

そもそもその時点でラスネールは一度は対プリストル戦の開始を提言している。

軍部の権限拡大を嫌った門閥貴族どもに否決されてしまっていたが。

戦争になれば莫大な費用がかかるのが彼らには気に入らないのだ。

予算が減れば己の権限……つまりは富の源泉が減るということなのである。

門閥貴族を頂点とする巨大な官僚組織は時として組織の都合を国家の都合に優先させるがこの場合がまさにそうだった。

戦争に負ければ元も子もないはずなのだが……。

それからメイファン王国の陥落以後オルパシア王国を取り巻く情勢は悪化の一途をたどっていた。

仮にブリストル帝国とオルパシア王国が開戦にいたった場合ネルソンやロドネーといった小国がオルパシア側にたって参戦する見込みは限りなく零に近い。よくて好意的中立、下手をすればブリストル側について参戦するかもしれない。

それもこれもオルパシアがメイファンが陥落するのを手をつかねて傍観したせいだった。

オルパシア王国は小国にとって頼りがいのある大国ではなくなっていたのだ。

……すでに間諜からの知らせではブリストルは旧メイファン王国からの部隊の移動を完了したとある。

それすら脳みその温かい連中には軍事統治がひと段落して占領軍にいったん休暇をとらせるためだと思えるらしい。

確かに人間には休暇が必要だが、こと軍隊に関しては通常ではありえない無法がまかりとおるのが常識ではなかったか。

ブリストル帝国の辺縁部であるケルドランで最後の交渉を行うという帝国の意図はみえみえだ。

ひとつは宣戦にいたる外交的儀礼を形だけとはいえ満たすこと。

そしてより重要なひとつはオルパシアの外交の中枢たる自分を捕縛あるいは抹殺すること。

長年に渡って培われてきた各国とのパイプ……熟練の交渉術と外交センスはひとえにラスネール一人の担うところだった。

ラスネールを失えばオルパシアが外交交渉で優位にことを進めることなど不可能とあっていいだろう。

それが降伏の交渉であるにしてもだ。

それがわかっていてもなお、和平に一縷の望みをかける国王陛下の期待に背くことはできない。

マンシュタインやタンネンベルグのような門閥どもの思惑など取るに足らないが、陛下は真実国民を戦に駆り立てることにお心を痛めておられるのだ。

ならば万に一つもない可能性ではあるが自分も非才なる身の全力をあげるのが臣下たる己の本分であろう。

ラスネールが悲壮な決意を固めたその時だった。

「そつですわ！」

アナスタシアが喜色も露わに立ち上がった。

「……………いったいどうしたのかね……………」

ラスネールはいささか娘の教育を誤ったと感じずにはいらなかった。

この日あることを予想してラウンデル子爵とお見合いをさせてみたものの全く相手にすらしようとしなかった。

子爵はえらく肩を落としていたが本当にかわいそうなことをしたと思う。

確かに親の欲目なしに美しく聡明に育ってくれたと思うのだがいかんせん理想が高すぎた。

しかも空想癖があるのか現実を物語の一部のように捉えている節がある。

残念ながら現実は娘の思うようにドラマティックなものではなく泥臭く侘しいものなのだ。

「あの方がいらっしやるじゃありませんか！」

………あの方？

呼び方から察するに個人名らしいが帝国領土に単身赴いて無事にすむ一個人がいたら合わせて欲しいものだ。

「お父様………確か外交官には侍従武官を一人選任する権利がございましたわよね………」

国を代表する使節団には慣例として軍から護衛の武官が派遣されることになってはいる。

多くの場合無礼を働かないよう教養ある貴族の子弟を外務省が指名していたが……それがどうしたというのだ？

「ハースバルドの小娘に借りをつくるのは癪ですけど……王国騎士千人の護衛より頼もしいお方を紹介していただけははずですわ」

王国騎士千人だと……？

ラスネールはまた娘がありもしない夢想を語りだしたと考えていた。

「一個人が千人に敵することはありえない。戦において数の論理は絶対である。それはこれまでの数多の戦が証明している。」

一部の傭兵の間で百人に匹敵する武を持つものがあるなどと噂されているがラスネールに言わせればそれはごく限定された環境でたとえば一対百ではなく、一対一が百回という地の利を得た場合でのみ成立する話である。

互角の条件で戦えば数の多い方が勝つ。ゆえに互角の条件で戦わないために数々の戦術が存在するのだ。

そんなあたり前のことを愚直に守ることこそラスネールがウーデックトを高く評価する所以だった。

「信じられぬのも無理はありませんわ……敵国の真っ只中から無事抜け出そうというのですもの……」

ふふふ……とアナスタシアは妖艶な笑みを浮かべて舌なめずりをした。

かつてこれほど娘から女を感じたことはない。

雄を惹きつける引力が女であるとするならアナスタシアは今こそ女の中の女であるに違いなかった。

今までどんな男にも見向きもしなかった娘がいったい……？

「それでも妾は見ましたのよ。大陸でも指折りの暗殺集団冥き残月がたったひとりの男に手も足も出ずに全滅されましたの。それも指ひとつ動かすことなしに……ですわ。」

「……そんな報告は受けていないぞ！流れの傭兵に助けられたとか！」

ラスネールの背中がじっとりとした冷や汗に濡れようとしている。

確か冥き残月の構成員は二十人を超えていたはずだ。それを指ひとつ動かさずに……とは魔術を使ったということか？

いや、それはありえない。魔術の行使には集中が欠かせない。乱戦で連射できるものではないのだ。

「ねえお父様……彼を……真人様を護衛に首尾よくお戻りになった暁には真人様を当家にお迎えするのはいかがかしら？我ながら名案だと思つのですけれど」

第二十五話

朝靄に包まれた王都の街路を一頭の白馬が疾走する。

馬上で揺れる赤毛がまるで湯気でも出ているようにたゆたっていた。否、噴火した火山のようにと言っべきか。

「真人おおおおおおお!!」

ルーシアの耳をつんざくような絶叫とともに中御神家の平穩は破られたのだった。

何故か正座させられている真人がいる。

ついでこの間も似たような展開になったような気がするが……………

「……………ところでオレはどうしてこんな目にあっているのでしょうか……………」

「だまらっしゃい！」

ルーシアの返答はにべもなかった。

「どうして真人が侍従武官に選出されたりするのよ！確かにアナスタシアを助けたのは真人だけど真人の力は外務省には秘密にしておいたはずよ！」

「あの……………侍従武官に選出っていったいどなたの？」

シエラはかつての貴族であった知識から侍従武官が貴人の護衛に派遣される軍人であることを知っていた。

もっとも傭兵がそれにあたるということとはなかっただろうが……。

「外務卿ラスネール侯爵よ……夕べ急にお父様のところへ使いが来たの。そちらの中御神真人というものを侍従武官としてお借りしたって……傭兵だと知ったら驚いてたけどそれでも構わないからって……貴方また何かしたでしょう！真人！」

大ピンチであった。

昨日アセンブラの猛虎と死合ったことは真人の多大な努力によって緘口令が敷かれている。

といってもシェリーの口止めをしたただけだが。

「べ、別に何もしてないよ！だいたい初めて聞いたし、そんな話……」

「初めて聞くのは当たり前よ！今のところお父様と私しか知らないしね。誰が仕組んだか知らないけど厄介なことになったわ……」

ルーシアの言葉尻に不安を感じたのかシェラが眉を顰めた。

「外務卿……とおっしやいましたわね……するとまさか……」

ルーシアは嫌そうな顔を隠そうともせずに頷いた。

「ブリストルの国内に行くことになるわ。しかも十中八九戦争になる」

「お兄ちゃんいつちゃうの?」

戦争と言う言葉にプリムが泣きそうな顔で真人にすがりついた。

プリムの頭の中ではブリストルの侵攻によって当たり前だった日常が理不尽にもあつという間に崩れ去った日が走馬灯のようにめぐっていた。

真人は優しくプリムを抱きしめてサラサラの金髪に指を通す。

「戦う理由があればオレはいく。でもオレはシェラヤプリムをおいで死んだりしないよ。約束する」

どこまでも優しく愛おしさに満ちた声音だったが言っていることは傲慢そのものだった。

真人は決して死なない。それは真人がそう決めたからだ。この地上に真人を殺せる存在はいないのだから。

「確かに真人なら無事に戻ってこれるでしょうね……………それでも問題は残るわ……………それも厄介な」

ルーシアはわずらわしげに前髪を払うと続けた。

「まずラスネール卿も一緒に救いださなにかぎり帰ってきてても責任追及は必至よ。かといって敵中から卿を無事生還させたとなれば真人に対して注目が集まるのは避けられないわ。ただでさえ真人は正体不明で押し通すほかないのに……………シェラちゃんやプリムちゃんのお秘密まで嗅ぎつけられたら大事よ！最悪真人に対する強制手段として二人を狙う連中が現れても不思議じゃない……………」

つい先日までは真人を表舞台に立たせようとすることに疑いを持たなかったルーシアだが考えれば考えるほど現実の非情さに背筋が冷たくなる。その舞台に真人の幸せを見出せないのだ。

「……………お断りするわけには参りませんか？」

シエラが青ざめた表情でルーシアに問いかける。

「私から何度もお父様をお願いしたけど……………」

ルーシアは力なく首を振るだけだった。

ウーデットが私事で慣例を曲げるはずがないのだ。

「大道に誤りなし。ブリストルと戦になるといつのならばは一手交えよというのが天の意志とお見受けする。もとより我が友我が家族を守るため戦う志に偽りはない」

真人は既に戦う覚悟を固めていた。

おそらくはあの場でアナスタシアを助けたのが縁だったのだろう。そして縁は決して偶然ではない。

神は時として人間に選択を迫る。しかし選択するのは常に人間の意志だ。

真人は自分の守るべき乙女たちのためこの戦いを受けて立つことにした。ただそれだけのことだった。

ふと真人が顔を上げた。

親しい気配がやってきたのを感じたのだ。

「そして大道に恥じるころなくば必要なとき必要な味方にめぐりあう……………」

かつての師匠の言葉を思い出す。

ならばこの邂逅も必然ということか。

「いったいどうしたんだい？ずいぶんと暗い雲行きじゃないか」

闘神ディアナの登場だった。

「真人！」

「「ご主人様！！」」

ルーシアとシエラとプリムが声を合わせてディアナを指差して叫んだ。

「誰ですか？この人は！」

一転して窮地に陥ったことを感じ取った真人だが、なぜ窮地に陥ったのかを理解していないのだから脱出する術はなかった。

「え〜と……昨日同僚になったディアセレーナさんです……」

「おや、ディアナって呼んどくれよ。もう……真人のい・け・ず」

ディアナが顔を赤らめながらとろけきつた瞳で真人の胸に抱きつく
と指向性をもった殺気がざくざくと真人に突き刺さる。

「……いいご身分じゃない。私が一人でお父様に叱れてる間に真人
はよろしくやっていったってわけね……」

これでもかと言わんばかりに瘴気を噴き上げながらルーシアは拳

を固めた。

「やってない！やってないったら！」

しかしディアナは真人の必死の言い訳を許さない。

「私を甘えさせてくれるって言うてくれたじゃない」

……………頼むからディアナさんは黙っててください。

真人としてはともに戦う仲間としてディアナを認め、ディアナが持つコンプレックスを可愛いとも感じていたが女性として特別な存在と認識したわけではない。

とはいえそれを周囲に納得させようとしてもごろにゃんという擬音が聞こえそうなほどの勢いで胸にすがりつかれた状態では到底納得できないだろうこともまた事実だった。

「シエラ、プリム……違うんだよ、これは……」

せめて妹たちだけにはわかってもらいたい……！そんな真人の希望はあえなく打ち砕かれた。

ディアナの登場からぶるぶると身体を震わせていたシエラ・プリム姉妹が爆発する。

「お兄様^{ちゃん}なんて大嫌い！！」

「ぐはっ！」

アセンブラの猛虎の一撃ですらしのぎきるはずの真人であったが妹たちの叱責にはひとたまりもなく悶絶するのだった……。

第二十六話

「お父様を御頼み致しますわ！真人さま！」

シエレンベルグ家に向いた途端、真人はアナスタシアの熱烈な抱擁に出迎えられていた。

……… いったい誰だこれは？

ラスネールは呆然として真人にすがりついている娘を見つめている。娘がこれほど無防備に甘えている光景など想像すらしていなかった。ラスネールにはハンマーで頭を殴られたような衝撃だった。

それだけでなくもこの少年は存在そのものが衝撃である。

侍従武官の黒と赤を基調とした儀礼服に身を包んだ真人は冴え冴え

するほど美しい。

とうてい出自不明の傭兵とは思われぬ気品に満ちた姿だった。

しかもその少年が冥き残月……あの暗殺者集団を一人で殲滅した
というのだから開いた口が塞がらない。

てつきり今日会うまでは筋骨隆々とした武辺を予想していただけに
驚きは隠せなかった。

朝日に輝く白銀の髪と黄金の瞳は大陸のどの人種の特徴とも異なる。
おそらくは一代限りの変異種であろうがあるいは警戒が必要なのか
もしれない。

「いい加減離れろ！このーっ！」

いつまでたっても絡めた手を離す気配のないアナスタシアにルーシ
アが痺れをきらしたのか二人を引き剥がしにかかった。

「んもう……愛し合う二人を引き離すなんて……なんて無粋な女
でしょう……」

「誰が愛し合う二人かあああああ！」

真人を挟んで女の戦いが始まっていた。

争いの中心である真人は苦笑いを浮かべながら二人の仲裁に回っているが全く効果を挙げられていない様だ。

ウーデットの娘をここまで虜にするか……………

ラスネールの脳裏で真人への疑惑の念がわきあがる。

主戦派の外務卿・軍務卿の娘二人を虜にする美貌の少年とくればその疑惑はむしろ当然であった。

しかし浮かびかけた疑惑をラスネールは頭を振って取り消す。

もしそうであれば暗殺団からアナスタシアを救い、そして今ほぼ生還のおぼつかない自分に同行する理由がないからだ。

それにしても二人のこのリラックスした雰囲気はなんだというのだろう。

夕べ、ラスネールは娘に生涯の別れを告げたような気持ちだった。

敵中に囚われりことがほぼ確定している以上生きて再会する確率は決して高くはないだろう。

なのにいまだに言い争いを続けている二人の娘にラスネールは首をひねらずにはいられなかった。

二人とも一線を越えた好意を少年に対して抱いているはずなのだ。

それはよほどの朴念仁でもなければ見て取れるほどだ。

……少年が朴念仁である可能性は否定しないが。

それにしてはしばしの旅行に出かけるような気安さである。

実際のところ二人とも真人の生還に関してはそれほど心配をしていない。

それは見送りに来たのがルーシアだけでシェラとプリムが留守番をしていることから明らかだった。

本当はシェラとプリムも来たがったのだが、腕利きの外交官であるラスネールに万が一にも見咎められる可能性がないとはいえないので自重することにしたのだった。

馬車への荷造りが終わりラスネールと書記官ら5人が乗り終わるのを確認すると。真人もまた騎乗の人となった。

その颯爽としたしなやかな物腰にルーシアとアナスタシアは思わず目を奪われてしまう。

誰が知ろう。この圧倒的な存在感と美貌にして彼こそは地上最強の騎士なのだ。

「……………どうかご武運をお祈り申し上げますわ……………」

「帰ったら忙しくなるわよ真人……………」

帰ったら、というルーシアの言葉に書記官の男たちが皮肉気に晒う。

彼らは生贄なのだ。

戦争の始まりを彩る尊くも無意味な贄……………ラスネールを除いて同行するものは王国にとって厄介者ばかりが集められていた。

王国にとって彼らを失うのは既に定まりきったことなのだ。

だが、真人にとって生きて還るのは既定の事実にすぎない。

問題はいかにして無傷でラスネールを生還させるか、ということだけである。

生還の暁に受けるであろう注目も、なんとか分散できるように手は打ってあった。

「二人ともお心安らかに……………」

静かな闘志と自信に満ちた透明な笑みを浮かべつつ、真人はルーシアとアナスタシアの手をとると、その白魚のような手の甲に優しく唇を落としていった……………。

「ふにゃあ〜ん!〜!」

子猫のような悲鳴とともにルーシアとアナスタシアが仲良く腰から
くだけて座り込む。

何度経験しようとも真人のキスは麻薬並に凶悪だった。

「名残惜しいだろうがそろそろ出発してくれるかね」

ラスネールはこれ以上の濡れ場を見せ付けられるのに耐え切れず真
人に出発を催促した。

書記官たちがわが意を得たりとばかりにいっせいに頷いていた。

屋敷がゆっくりと遠ざかっていく。

こちらに向かつていつまでも手を振っていた娘たちが街路の向こうに見えなくなるとラスネールは真人に尋ねた。

「中御神真人……………と言ったかね？君はアナスタシアとずいぶん親しいようだね」

真人は小首をかしげると自分でもよくわからない、とでもいうように首を振る。

「今日で会うのは二回目ですが……………そんなに親しく見えますでしょうか？」

……………「どうやら朴念仁ではないか、という危惧は当たったようだ。」

「あれはなかなか人見知りの激しい娘だな。君ほど親しげな男はちよっと思いませんくらいだ。これからも仲良くしてやってくれ」

男に興味がないのではないかとすら危惧した娘の成長がうれしくもあり、またせっかくの相手が正体不明の傭兵であるということが困りものでもあり、そしてその男をわが身の道連れにしなければならぬことがたまらなく哀しかった。

ラスネールのなかで国境沿いとはいえ敵国のれっきとした城塞都市でありケルドランから脱出するという選択肢は入っていないのだ。

「もちろんそのつもりです。それにしてもどうしてお嬢様はルーシアとあんなに仲が悪いのですかねえ……………」

朴念仁にも限度があるのではないだろうか？娘よ……………お前の想い人は相当手強そうだぞ……………！

王都の城壁を越えると黄金色に色づいた丘陵がなだらかな曲線を描いている。

そのひとつの丘を見詰めると、真人は莞爾と笑って右手を振った。

「誰かいるのかね？」

ラスネールは丘に向かって目を凝らしてみるのが人影の欠片も見つかることが出来ない。

「どうやら私の妹が見送りにきてくれたようです」

「相変わらず人間離れた御仁だねえ……この距離で気づくたあ、
どういふ目をしてるんだい？」

遠眼鏡を手に苦笑いをしているのはディアナだった。

留守番をよしとしなかったシェラとプリムを連れて王都の外にまで見送りに出っていたのだ。

「お兄様が私たちに気づかないはずございませんもの！」

「えへへ……さっすがお兄ちゃん！」

シエラとプリムは遠眼鏡を覗きながら満面に笑みを浮かべていた。

「なんだか君を見ているとまたこの王都に戻れそうな気がするよ……」

ラスネールは真人の嬉しげな横顔を見ていると言っとはなしにそう呟いていた。

もちろん真人は還ることを信じて疑わなかったし、それを阻むものはいっさいの情けもかけず掃滅すると心に決めていた。

第二十七話

丘陵を超え、王都が遠ざかっていく。

この世界にやってきてまだわずかな時間しか経っていないが、それでもシエラやプリムと離れることに感慨があった。

当たり前のように生を奪い

当たり前のように死を喰らい

当たり前のように孤独を友にしていた

すべては最強の渡り神カムナビを倒すために……

だが今は

当たり前のように笑い

当たり前のように触れ

当たり前のように傍にいる新しい家族と初めての友がいる。

彼女たちを守るためにならいつでも修羅にまいもどる覚悟がある。

問題があるとすれば、それは彼女たちが妹と友と呼ばれるのをよしとしないであろうことなのだが……それは真人にはまだ想像の及ばぬところなのだった。

「真人君……君はいつたいどの生まれかね？差障りなければ教えてくれないか？」

地平線まで続く大陸公路を馬車で揺られることに飽いたのだろうか、ラスネールが真人に話しかけた。

もっとも娘の心を捉えた男に対する好奇心という親心にかられたことも否定できないが……

「残念ながら私は記憶喪失でして……森でルーシア様に拾われる時には自分の名前と妹がいたことくらいしか覚えていませんでした。もっとも、武術については身体が覚えておりましたが……」

ラスネールは歴戦の外交官である。

真人のつたないウソを瞬時に見抜いたが同時に悪意のないウソであることも見抜いていた。

拾ったのがルーシアであるというし、おそらくあの娘の入れ知恵なのだろう。

オルパシアの敵……ブリストルではないにしろ公にはできない人間……もしかするとメイファン王国の王族の生き残りかもしれない。

「それでは今のオルパシアを取り巻く状況もわからないということかね……?」

「ブリストルという隣国と戦争になりかけているということくらいしか」

……………これは確かに素人だ。

ラスネールは内心で首肯する。

仮にも真人は侍従武官として軍務省から派遣された人間だ。そのことが意味することをわからないような人間が間諜や純粋な武官ではありえなかった。

「侍従武官がこれではちと困るな……………基本的なことは教えておくとするか……………」

侍従武官とはいざというときの護衛であるだけではない。

今回に限っては活躍の機会はないだろうが、本来外交官とは違った人脈とアプローチで情報を探る準外交官というのがその役割なのだ。さきほど真人の言った言葉がどれだけ致命的なことがわかるだろう。

場合によっては軍務省の責任問題になりかねない。

「このアヌビア世界に大国と呼ばれる国が五つある。オルパシア王国、プリストル帝国、ザイドリッツ帝国、アリアナーテ王国、クネルスドルフ王国がそれだ。現在国境を接しているのがプリストル帝国でそのさらに西にあるのがザイドリッツ帝国となる。アリアナーテとクネルスドルフは東方にあるベルディオ大湖のさらに東だ。この五大国を軸に数々の中小国が存在する。オルパシアの隣国としては北方のネルソン公国にロドネー王国……………レナセルダ河の南方

にエルネスティア公国とワルサレム王国が存在する。どれも国としての規模は大国の一割に足りるか足りないかと言ったところだ。本当はあと三つほど隣国が存在したのだが、この十年の間に全てブリストルの攻め滅ぼされていてね……………」

わけてもメイファン王国が滅ぼされたのは痛恨事だった。

本来であればメイファンは大国の中に数えられてしかるべき歴史ある国だったからだ。

「オルパシア王国はその攻め滅ぼされた国を助けなかったんですか……………」

真人の言葉にラスネールは目の前の少年に対する認識を若干改めた。なかなかどうして政治に通じる力を持っているのかもしれない……………もつとも将来の話ではあるだろうが。

「もちろん援助はしたよ。先年滅ぼされたメイファン王国は今でも残党たちに資金面で援助を続けている。しかし……………純軍事的に言えば見捨てられたととられても仕方ないな。困ったことにわが国では主戦派は少数派で出兵することはできなかつたのだよ」

メイファン王国の残党が今も存在する……いつかシエラたちに害な
す恐れが無いとはいえない……その名を真人は脳裏に刻んだ。

「私は戦いしか知らぬ男ですが……相手に自由を許し先手を与えて
はよほどの実力差がないかぎり勝つことは難しいでしょう……オル
パシア王国はそれほどに強大なのでしょうか？」

噂に聞く限りその可能性は低そうではあるが……戦い以外の部分
で上回っていれば相殺は可能だ。

若い……が凡愚ではない、とラスネールは真人を評価していた。

政治的環境さえまともなら真人の言は正鵠を得ている。

しかし残念なことにオルパシアの官僚組織は経年劣化が激しい。そ
れはまるで滅ぼされたメイファン王国を見ているかのようだった。

戦争という劇薬を糧に体質改善をせねば勝利どころか引き分けに持
ち込むことすら危ぶまれるだろう。

「……戦争には莫大な金と人命がかかるのだよ。できることなら戦争などしないにこしたことはないのだ。無論戦うべきときに戦わないのは愚か者の結論だが」

そんな愚か者の見本にはなりたくないものだ。

無能な外交官として後世の史家に指弾されるのはラスネールとしても耐えがたい。

「……然り。されど戦う覚悟なしに戦いを選択することはさらに愚か者の選択になりましょう」

真人の口調が変わった。

低く平坦な物言いでありながらひどく比重の重そうな口調にラスネールはなぜか胸を衝かれていた。

覚悟………戦う覚悟だト……？

戦争もやむなしと考えてはいた。

国家の行く末を睨み利害得失を天秤にかけて莫大な予算と人命に変えても守らねばならないものがあると決意していた。

だが……………己が戦うという覚悟を本当にしていただろうか？

答えは否

この戦争が不可避と知ったときから己の外交官人生の幕引きを図っていたのではないか？

己の無力さから逃れたくて全てをあきらめようとしていたのではないかったか？

それが一個の男としてあるべき姿であろうか？

否、断じて否。このラスネール・テイレース・ノルド・シエレンベルグの値はそれほど安いものであつてはならない。

「君のような少年に覚悟を諭されるとは思つてもみなかつたぞ」

ラスネールの顔にふてぶてしい歴戦の外交官だけが持つ覇気が漲ってきた。

まだまだオルパシアにはオレが必要だ。

五大神を奉ずるザイドリッツやアリアナーテ・クネルスドルフにはまだ援助を望む余地がある。

ネルソンやロドネーの然り。ストラトを奉ずるプリストルとは信仰の基盤が違うのだ。神殿に要請して信仰の危機を呼びかけてもらえばその効果は大きい。

それにメイファンの残党も数だけ見れば決して馬鹿にはできない。優秀な指揮官さえ得られればかなりの戦力として期待することができるだろう。プライドの高い連中をうまく使える人材がいればの話だが。

まったくこれだけの果たすべき使命を持ちながらオレは何をあきらめていたのだ……！

………どんな手段を使っても故国に帰って見せる。そしてプリストルに勝つ！

「それでこそもののふでございます。外務卿殿」

真人は半ば死人のような瞳をしていたラスネールの眼に力が戻った

のを見て莞爾と微笑んだ。

美しくも男らしい爽やかな笑みだった。

「私に使命を思い出させたのだ。もちろん責任はとってくれるのだろっね、真人君」

「……………然り。我が中御神の名にかけて」

家名を告げる真人の誓いが氷柱のように肺腑に突き刺さる。

「いったいこの迫力はなんなのだ？これがわずか十七・八の少年が纏う気だというのか？」

……………今なら娘が全幅の信頼を寄せるのがわかる気がする。

この少年なら顔色ひとつ変えずに自分を敵中から救い出してみせるのだから。

ブリストルの戦バカたちが少年の武に戦慄する日は近い。

ラスネールは高らかに笑った。

アナスタシアすら見たことの無い豪快でてらいのない笑いが大陸公路のレンガ通りに反射して、遙かな蒼穹にまでこだましていた。

第二十八話

コラウル山系を越えるとそこはもうブリストル帝国の領土である。

眼下に広がる巨大な石の壁……コラウルからさらに伸びる大陸公路と南へ続くビルセナ街道を管制するケルドラン盆地に聳え立つこの石造りの塊こそブリストルの誇る前線基地にしてこの旅の目的地ケルドラン城塞都市に他ならなかった。

「相変わらず過剰なほどの物々しさよ」

ラスネールは嘆息して苦笑を浮かべるしかない。

高さ十数メートルには達しようとする城壁、さらに城壁を補完する夥しい支砦群……極めつけはマッセナ川の流れを捻じ曲げてまで造りだした

巨大な堀……難航不落を絵に描いたような情景であった。

ブリストルがオルパシア攻略の最重要前線拠点として長年にわたって整備してきたことを知る人は知っている。

これを見てその程度の想像を働かせることのできない人間はラスネールに言わせればクズだ。

現実より己にとって都合のいい空想を大事にする妄想家と言い換えてもよい。

「……………無駄なものを造りましたね……………」

呆れたような真人の声にラスネールは目を剥いて振り返った。

初めてこの城塞都市を見るものは例外なくその威容に圧倒されてしまふ。ラスネールですらその例外ではなかった。

軍事の専門家であるウーデット卿も反応は似たり寄ったりだったはずだ。もちろん攻略のヒントをつかもうと油断なく目を配ってはいたが。

「無駄とはどういう意味かね？この都市は戦争が始まれば最重要拠点として大いに力を発揮するだろうと私は思うのだが」

この城塞を陥落させようとしたらいったいどれほどの兵力が必要に

なるか想像もつかない。

それは国力において劣るオルパシアにとって決して許容することのできぬ損害を強要するのかもしれない。

「別して堀に利用しているマツセナ川がいけませんね」

こともなげに真人は言い捨てた。子供が出来の悪いおもちゃを放り投げるような無造作な言い様だった。

ラスネールには真人の言っている意味が理解できなかった。

川幅三十数メートルになんなんとする水量も豊富なマツセナ川はケルドランの重要な防御障壁である。

川と城とを渡す橋は城壁からの弓が交差する殺し間となっており、川を泳いで渡ろうとすれば自然歩兵は軽装にならざるを得ない。

軽装歩兵に重厚な城壁を突破することは不可能だ。

城門を破るにしろ城壁に登るにしろしかるべき装備なくして歩兵の戦力化は難しいのである。

「お忘れですか？マッセナ川がどこから流れてくるか」

たった今自分たちが越えてきたコラウル山系に決まっている……と言いかけてラスネールは息を呑んだ。

愕然としたと言っていない。

この少年はマッセナ川をせき止めてしまえばいいと、こともなげに言っているのだ。

いや待て、それは現実的ではないだろう。

敵前で強行される大規模土木工事の成功率は決して高いものではないはずだ。

目の付けどころは良いとは思いがこれは……

「兵力的に優位ならそうした戦術も可能かもしれないが残念ながら戦争の主導権はプリストルにある。君の思うようにはいくまいよ」

真人は肩をすくめていたはずらっぽく笑うにとどめた。

溪谷を堰き止めるだけなら真人一人でも可能なことなのだがそれを言うのは憚るべきだった。

ブリストル帝国が大陸に誇る陸軍の12人しかいない將軍の一人であるアウフレーブ・ラスク・フェルゼン・ロームクロイツは憂鬱そうに肩まで伸びた黒髪を玩んでいた。

気持ちが塞いでいる理由はわかっている。

今回の茶番としか言いようのない政治交渉によりオルパシア王国外務卿ラスネール侯爵を拘禁し王都まで護衛するという任務に納得がいかないのだった。

アウフレーブが女性の身でありながら將軍の地位にまで登りつめたのはそうした陰湿な策略によってではなく堂々たる用兵の妙と個人的に卓越した武勇にあるのであり彼女自身その矜持を誇りに思っているのだからやるせなさは積もるばかりである。

……そんな卑怯な手を使わずともオルパシアごとき私が完膚なきまでに打ち破ってみせる！

アウフレーベにはその自信があつたが命令には逆らえない。

逆に嬉々としてこの任務を受け容れている人間もいる。

軍監として王都から派遣されてきたエイディングがその筆頭だつた。

危険からはいち早く逃れるくせに、相手が弱者と見るやいけ高々に現れる輩である。

アウフレーベがもっとも嫌う品性の下劣な連中だが任務をないがしろにしているわけではないので処罰することもできなかった。

「……………哀れな……………」

アウフレーベの眼下を一頭の馬車と一騎の武官が城門に向かつている。

せめて丁重に扱わせることを心に誓つてアウフレーベは使者を出迎

えに身を翻した。

「オルパシア王国全権使節団代表の外務卿ラスネールだ。わざわざのお出迎え痛み入る……と言いたいところだが……何かねこれは？」

ラスネール達はプリストル兵に槍先を向けられていた。

まともな交渉をする気はないだろうと踏んではいたが、まさか交渉自体する気が無いとは思わなかった。

「ふん、もはや開戦は決しておる。わざわざ手間をかける必要もあるまい。この場で捕縛してくれる」

鎖を腕に巻いた兵士が歩み出る。

仮にも侯爵に対して囚人のように手鎖をつけるつもりらしい。

「愚かな…………大陸中にプリストルの無法と野蛮を喧伝したいか」

全く無法というべきであった。

外交官には戦時捕虜になった場合でもこれを虐待してはならないのは一流の国家間では常識である。

戦争になったからといって外交のチャンネルを失うのは通常の場合損失にしかないからだ。

しかしこのラスネールの喧きはプリストルの高官らしき男を激高させたらしかった。

「減らず口を叩きおつて！何をしておる、早くこの者に鎖を……………」

「誰がそんな勝手な真似を許したか！下がれエイディング！」

凜とした鮮烈な響きが男の動きを止めさせる。

「こ、これは將軍……心外なことを申されますな……こやつらを捕縛し連行するのは恐れ多くも皇帝陛下の御意でありますぞ！」

虎の威を借る狐とはこのことか。

真人は薄く笑った。

彼女は本物のもののふだ。そしてもののふが威に屈服することはありえない。

「ブリストルは大陸に冠たる大国の一、それが開戦の宣誓すら満足に行えぬと大陸中に恥を晒す気か！ 皇帝陛下がブリストルの恥を晒せと貴様に命令したとでも言うのかエイディング！」

真っ向から切りつけられた正論にエイディングは返す言葉もない。

ただ、理不尽な怨念を宿した目で睨みつけるだけだった。

「失礼した、ご使者殿。私がこの城塞を預かるアウフレーベ・ラスク・フェルゼン・ロームクロイツだ。遠路のお運びをいただいて恐縮だが、今聞いたとおりわが国の開戦の意志は変わらぬ。無駄な抵抗はせぬがよろしかろう」

アウフレーベが手を一振りすると兵士の列が退いていく。

「開戦の儀が整うまでしばし別室で待たれよ。貴殿たちの待遇は私が保証するゆえ心配には及ばぬ」

明らかな殺意を乗せてエイディングがアウフレーベを凝視する。

自分の獲物を横取りするなら許しはしない。たとえそれが味方であるうとも陥れ命で購わせるまでだ………！

敵国の侯爵という高貴な存在を貶め黜るのを夢見ていた。

エイディングのサディスティックな妄執が蛇のように鎌首をもたげ始めていた。

第二十九話

真人たちが待たされた部屋に柔和な物腰の壮年の男性が入ってきた。

仕立ての良い生地 of 儀礼服を優雅に着こなした様子は男が身分の高い世慣れた人物であることを明瞭に告げていた。

続いてアウフレーベが入室する。

「ラスネール卿、ご無沙汰しております」

「マンフレート卿が自ら参られるとは……いささか驚きましたぞ」

マンフレート・ウィリバルト・デルフ・アウトリンゲンはブリストル帝国の外務卿としてラスネールとは旧知の仲であった。

もつとも敵としてではあったのだが、お互いの力量を認め合い今では友情に近い感情を共有していた。

「今からでも開戦を避けることはできませんか？」

ラスネールはマンフレートに問いかけた。答えははじめからわかっている。しかし問いかけることが外交官としての役目であった。

「もはや戦争は避けられませぬ。……これも天命であるかと」

既に戦争の開始は最高指導者の意志として決定されたことなのだ。

しかしいつか終わるであろう戦争のために今は形式を満たしておくことが必要なのだった。

「ならば今この時から我がオルパシア王国とブリストル帝国は敵同士というわけなのですか？」

「敵はどこにでもいるものだ。ただ、交戦国という冠を与えられただけにすぎんよ。それもあくまでも今のところという話だ……」

マンフレートとラスネールはお互いに顔を見合わせてニヤリと笑った。

外交という世界に真の友人はいない。

今日の敵は明日の友であり、今日の友が明日の敵であることも日常茶飯事だ。

そして政治に携わるものはその命が敵だけでなく味方にも狙われることも覚悟しなければならなかった。

ならば今日このとき、国ひとつが敵になることぐらい何ほどのことがあるろう。

それが真の外交官たるの覚悟なのだ。

「我がブリストル帝国は貴国オルパシア王国に宣戦を布告する。今や剣は抜かれ血を吸わずに鞘に収まることは無い。戦神ストラトの名の下に汝を名誉ある敵と認める。契約神ロプロスも照覧あれ、戦いは誓された」

「我がオルパシア王国は貴国ブリストル帝国に宣戦を布告する。大

地の豊穡が貴国の兵にもたらされんことを切に願う。なんとすれば貴国の兵は死して再び生まれ出でるからである。大地神アクティアの名の下に汝を名誉ある敵と認める。契約神ロプロスも照覧あれ。戦いは誓された」

ここに大陸でも数百年ぶりとなる大国間の直接戦争の幕があがった。

エイディングはいまだ収まりのつかぬ怒りに身を焦がしていた。

あの外務卿をどのようにいたぶつてくれようかこのところそればかり考えてきたのに寸前で獲物を横取りされてしまうとは。

エイディングは貧民の出身であり、本人は認めないだろうが高貴なもの美しいものに対する鬱屈したコンプレックスがある。

それがこのような機会にサディスティックな妄執となって表出してしまうのは今回が初めてというわけではなかった。

しかし、相手が外務卿……侯爵などという大物にめぐり合う機会など皆無である。是が非にも味わいつくさなければ気が収まらなかった。

軍の監察部はエイディングにとって天国だったと言っている。

誰かを貶めるといふ暗い喜びに浸ってエイディングは朋輩の悪事を暴き続けた。

もしも悪事が無ければ悪事を捏造して他人を陥れてきた。

いつしか上尉という地位とともに、決して目をつけられてはいけな
い監察部の蛇……クロムの蛇という異称で呼ばれるようになった。

友人と呼べる存在も家族もない。ただ、他人の不幸を見続けるこ
とがエイディングにとっての全てなのだった。

……あの女をどうにかしないことには侯爵には指一本触れられぬ
……気位ばかり高い馬鹿な女め……

エイディングにとって他国に敬意を払う必要など毛一筋ほども感じない。

困ったことにこのことに関するかぎりほとんどのプリストルの軍人はエイディングの考えと変わりはなかった。

プリストルが標榜する世界の統一………主神エンリルの正統を引き継ぐ唯一の神である戦神ストラトを信奉するプリストルは選ばれた民であるという思想は今代の皇帝が膨張主義を取り出してから急速に国民の間に広まっていた。

………その我々に敵対しようとする国の人間を好きにして何が悪い！

それがエイディングに偽らざる本音である。

………己の居心地のいい場所を守るため冒険は犯さない主義だったが今回ばかりはそうも言っていないようだ。

あまたの人間を陥れてきたエイディングにとってアウフレーベを陥れるための筋書きを描くことぐらい見戯に等しい。

問題はその成功率と保身とのバランスなのだが………

……戦争が始まってしまえば追求も控えられるだろう……

実際戦場では略奪・暴行・横領・逃亡など様々な犯罪行為が発生する。

この非常事態に軍を規律ある集団として押しとどめるべき存在こそエイディングが属する監察部という集団なのだ。

アウフレーブの下には力自慢の准将がいたはずだ。

己の武勇に絶対の自信を持ち、それでいて程よく頭の働きの鈍い都合のいい副将が。

ゆらり……と狂熱の炎がエイディングの心を焦がす。

己の心の奥深くでささやき続ける言葉がある。

壊せ

罨れ

貶めろ

殺せ

エイディングは立ち上がった。

敵を庇う者が味方であろうはずがない。

少なくとも奴にはそれを理解してもらわなければならない。

ケルドラン派遣軍副将、アムルタート・ルイン・ケルダーには。

厳かな宣誓とともに戦争の始まりは告げられた。

「それにしてもまだメイファンも落ち着いていないのによく開戦を
決意したものだな」

ラスネールは砕けた口調でマンフレートに問いかけた。

同時にこれはメイファンにオルパシアの工作員が入り込んでいて
いう脅しでもある。

「あの国は治安状態こそ悪いかもしれんが武力でわが国に齒向かえ
る力はないよ。もっとも戦力化のためには後数年は統治に専念した
かったがね」

「マンフレートも当然その程度のことは承知している。

「まだメイファンを支配下には置いているが自国の領土として一体
化しているとは言い難い現状はマンフレートとしても苦々しく思っ
ているところであった。」

「お話中申し訳ないがラスネール卿には王都にお連れする故、私と
ともにただちに同道願いたい。どうも不心得ものが多そうなのでな」

余計な横槍の入らぬうちに一気に王都まで駆け抜けてしまふべきだ。

アウフレーベはエイディングの執念を甘く見てはいなかった。

ただエイディングの執念が常軌を逸してただけで……………。

「汚らわしいオルパシアの下郎どもはここか！」

完全武装の騎士たちを従えて客間の扉を破壊せんばかりに叩きあける男がいる。

見上げるような巨躯

丸太のような太い腕

脂ぎった猛々しい顔

一介の傭兵から武功をあげて成り上がった武勇自慢のこの男こそケルドラン派遣郡副将アムルタートに他ならなかった。

第三十話

思わず啞然と目の前の巨漢を見上げる。

……何を言ってるんだこいつは？

いきなり開戦の宣誓が行われる最重要な外交交渉の場に武装して乱入するなど聞いたことがない。

我に返るとアウフレーベの中で怒りが沸々と湧きあがってきた。

312

「何の真似だ！アムルタート！」

「もうこいつらは敵国の人間だ。そのの侯爵はともかく他の連中はこの場で血祭りにあげて兵たちの士気を高める生贄になってもらう」

こいつ……馬鹿だ馬鹿だと思っていたがここまでとは……！！

アウフレーベは当惑と怒りで目の前の景色が赤みがるのを自覚した。

「出て行け……………これ以上の無礼な真似は私が許さん……………！」

「くだらん……………やはり女か」

アムルタートのややつりあがった目が自分を見下すように細められるのがアウフレーベには理解できなかった。

何故だ？何故そんな目で私が見られなければならないのか？

見ればアムルタートにつき従う騎士たちの大半もアウフレーベに対して軽蔑の眼差しを送っていた。

アウフレーベにはその意味がわからない。

「出て行けと言っている！」

精一杯の力をこめて命令を発すると同時にアムルタートの長剣の抜き撃ちが浴びせられた。

……しまった！

よけられない。

避わずにはあまりに体勢が悪すぎた。

しかもこの身には身体を守るべき盾も鎧も帯びていない。

手練の剣士だけあって剣帯の逆側からの斬撃である。剣を抜くころには既に腰斬されているだろう。

諦念とともにアウフレーベは目を閉じた。

……来るべき衝撃がいつまでたつても訪れない。

疑念とともにアウフレイベは瞳をあける。

そのマリンプルーの瞳が怒りに燃える黄金の瞳を捉えた。

「味方を……しかも女性を騙し討ちにするとはブリストルの騎士道も墜ちたものだな」

静かな怒りとともに真人はアウフレイベをその右手に抱きかかえていた。

アウフレイベ本人ですら全く感知できない早業だった。

己の腰に回された腕の力強さと、見た目より遙かにたくましい胸のぬくもりと、燃えるような輝きを放つ黄金の瞳にアウフレイベが陶

然と頬を染めているのはご愛嬌だが。

アムルタートはむなしく剣を宙に彷徨わせながら呆然と呟いた。

「……………馬鹿な……………」

抜刀の瞬間、確かにあの男は侯爵の隣にいた。

その距離およそ2m……………接近・確保・離脱という三工程を全く覚知させずにおこなうなどということが本当に可能なのだろうか？

ようやくアムルタートのなかで真人に対する認識が変わろうとしていた。

「女狐め！やはり敵と情を通じておったか！恥を知れ！」

こめかみの血管を引きつらせてエイディングが相変わらず真人に抱かれたままのアフレーベを指弾する。

慌てて真人の胸から逃れたアフレーベはことの次第を理解した。

……おそらくこの美貌の武官に情を通じた私が捕虜に便宜を圖っているとも言ったのだろう。

それなら下級の騎士までもが私を見下すような目で見ていることも納得がいく。

納得はしたが傷つけられた矜持はとうてい許されるものではなかった。

「エイディング……貴様は騎士の誇りをなんと心得るか！」

こんな下衆な謀は騎士なら絶対に考え付かない。

本来戦場にはたたない文官のエイディングだから考え付く策略だった。

だが、アウフレーベの怒りもエイディングにはなんの感銘も呼び起こさない。

むしろ誇りを傷つけられ猛る様に快感すら覚えていた。

ざまあみる。これがオレの楽しみを邪魔した報いだー！。

会心の笑みとともに復讐の完遂を確信したエイディングの横面を張るように真人の嘲りの言葉が響き渡った。

「もののふの心はもののふのみが知る。そのけだものに騎士の心などわかるうはずもあるまいよ」

「なんだと貴様……！！」

裏切られたような気持ちだった。

敵中にたった一人孤立した武官……まわりには万に届こうかという大軍勢。

身をすくめて命乞いをすべき弱者であるべき生贄風情が圧倒的強者

である自分を嘲るなどということがあつてはならない。

あつてはならないのだー！

「殺せ！この男を殺せー！」

周りを固める騎士たちが抜刀して真人に襲いかかるのを真人は冷めた目で見つめながらアウフレーベをその背に庇った。

刺突と斬撃が避わす隙間もなく真人に打ち込まれる。

肩口と胸に、そして首筋と心臓に、容赦なく打ち込まれた剣は……

「……そ、そんなバカなことが……！」「……」

薄皮ひとつ傷つけられずに受け止められていた……。

真人にとって気を纏わぬ刃は脅威ではない。

魔術付与された武器かあるいは己の気を剣に乗せられる一流の剣士でもないかぎり真人には傷ひとつ負わせることはできないのだ。

しかし服のほうはそうはいかない。

肩口から大きく切り裂かれて真人の引き締まった肢体が露わになる。

思わずアウフレーベは息を呑んだ。

その瑞々しい肌とは対称的に獐猛なまでに引き絞られた筋肉……それだけで美神の彫像のように均整のとれた肢体……

アウフレーベは確信した。

エイディングたちにこの男を倒すことは不可能だと。

「い、この化け物めっ！」

アムルタートは恐怖にかられつつも剣士としての冷静さを失ってはいなかった。

その剣の切っ先は正しく真人の黄金の瞳に向けられていた。

どんな仕込をしているのかしらないが眼球まではかばえまい！

そんな一縷の望みも一瞬の後には儚く消えることとなった。

眼球の透明な水晶体を前にしてどんなに力をこめてようと剣は1mmたりとも進もうとはしない。

傭兵として戦場を往来してから数十年、培った武勇に対する自信を根底から覆す衝撃がアムルタートの精神を襲う。

.....勝てない。

自らの剣に自信の全てを預けた男にとって、剣の通じぬ男に立ち向かえる気概はなかった。

「おおお、お前たち何をしている！早く討ち取らぬか！」

エイディングの怒号も、騎士たちの動揺を鎮めることはできなかつた。

おかしい。

こんなはずではなかった。

あの邪魔な女を亡き者にし、思う存分獲物を味わい尽くせるはずだったのに…………。

「どうしてオレの邪魔をする？おまえはいつたい何者なんだ？」

狂気に焦点の定まらぬエイディングの瞳がありえぬ光景を映し出した。

「四ノ式、斗浪」

石造りの重厚な広間にはあまりに不釣り合いな猛獣………全長で3mはありそうな巨大な虎がグルル…と喉を鳴らしていた。

騎士たちが恐慌とともに我さきに部屋を飛び出していく。

いかに彼らが訓練されていようとそもそもそれはあくまでも普通の兵士との戦いを想定したものであって、こんな異常を数倍したような相手はもとより想定外なのであった。

想定外の、しかも勝てぬとわかっている戦いに挑めるものはものふだけだ。

………そんな、いったいこれはなんの魔法なのだ？それともこれは悪夢か？

身体能力は人並み以下でしかないエイディングは逃げるタイミングが一步遅れた。

「わが名は中御神真人……中御神家の守護司にして今は故あってオ
ルパシア王国を守護するものだ。自らは戦わぬものよ。戦いを穢し
た報いを受けよ」

虎の獣臭が迫るのをエイディングは呆然と眺めていた。

「こんな……こんなのは夢だ。夢に決まって……」

鋭い牙が首筋に食い込む感覚に肌を粟立たせたと同時にエイディングの意識は永久に闇に落ちた。

第三十一話

真人の凱旋は華々しいものとなった。

無理も無い。敵中のしかも難攻不落をもつてなるケルドランを突破し外務卿ラスネール侯爵をはじめ随行した書記官にいたる全ての人間を無傷で生還させたのだから。

その空前絶後ともいうべき偉業は戦争の先行きに不安を抱く国民に歡呼とともに迎えられた。

いわく黄金の魔術師

いわくカムナビの息子

いわく白銀の暴風

様々な異称を声高に叫びながら国民は初めて目にする真人の美貌に卒然となった。

偶像が完成するにはあまりに出来すぎたシチュエーションだった。

真人は即日にして貴族に列せられ、戦争の勝利の象徴として祭り上げられたのだ。

「ご主人様のバカ……………」

シエラは主のいないテーブルに用意したワインを注ぎながら語りかけていた。

「せっかくパーティーの準備をしたのに……………」

祝うべき主人を失ったテーブルにはメインディッシュの鶏の丸焼きやシエラの得意なパスタや卵料理がところ狭くと並べられている。

もちろん必殺スープも用意しており特に腕によりをかけ味の熟成に3日の時間をかけていた。

しかし真人は王室の催した晩餐会に出席するためここにはいない…

……。

「バカ……ご主人様のバカ……」

自分のわがままなのはわかっている。

真人の帰還を国をあげて祝わなければならない理由も、真人がシェラやプリムにひどく申し訳なさそうな顔をして王宮に出かけていった理由もそれは必要に迫られた仕方のないものなのだ。

それでもなお、胸を締め付けるような痛みは決して消えようとはしないのだった。

真人の無事がうれしかった。

これからまた真人に存分に甘えられるのだと思ったら涙が出てとまらなかった。

でも

もう真人は自分だけの主人には戻らないかもしれない……

大神殿の巫女姫であったシエラフィータは、民衆が偶像に対してどれだけ無遠慮な願望を投影するかを知っている。

真人の一挙手一投足が注目され戦いのひとつひとつにまで真人の責が問われるようになるまでそれほどの時間はかからないだろう。

敗北が始まれば真っ先に生贄のやり玉のあがるのは間違いなく真人だ。

どうして自分たちをそっとおいてくれないのだろうか？

巫女姫である自分も英雄である真人もそんな二つ名など望んだはずもない。

ただ穏やかに平凡な暮らしを営むことだけを夢見ているのに……

「ご主人様なんか……ご主人様なんか……」

私はこの屋敷にきてから弱くなった。

プリムのほうがよほどしっかりしているように感じる。

カムナビの巫女姫として崇められ、息を抜くことすら考えもしなかった私が、今では真人が不在だというだけで幼子のように涙を流し

てしまうなんて……。

それもこれも全部真人のせいだ。

真人がいないから…… 真人が優しいから…… 真人が……

「ご主人様なんか……… 大好きなんだから………」

真人が愛しい。

家族として兄として……… それ以上に男性として愛してしまっているのをシエラは認めないわけにはいかなかった。

ルーシア・シエリー・アナスタシア・ディアナ…… 真人の周りには綺羅星の如く美女が取り巻いている。

だから家族で満足しようと思った。

だけでもうこれ以上は我慢できない………。

「オレもシエラが大好きだよ」

「えっ!？」

いるはずのない人の声にシエラは慌てた。

.....聞かれた？聞かれちゃった!？// // //

「いいい.....いったいいつからそこにいたんですか!？」

「ご主人様のバカ.....ってあたりからかな」

ほとんど全部聞かれてたんじゃないの!!

羞恥に耳まで血が昇る。どうしよう、聞かれちゃった.....って何か大事なことを忘れてるような気がするんだけど.....。

恥ずかしさのあまり言う言葉に一切遠慮がなくなっていた。

「それはあまりにひどい言葉かと思つよ……………」

ひどく傷ついた表情でがっくりと肩を落としている真人であった。

「だって……………私なんか……………シェリーさんやディアナさん見たいに大人じゃないし、ルーシアさんやディアナさんみたいにご主人様と戦うこともできないのに……………こんなの……………夢見たいです……………」

真人の黄金色の瞳がいたずらっぽい笑みを浮かべてシェラの鳶色の瞳を覗き込む。

「夢じゃないってこと……教えてあげるよ……」

真人のしなやかな指先が自分の頬を優しくなでる感触を楽しみながら、シエラはゆっくりと目を閉じた。

ああ、私キスしてしまうんだわ！ファーストキスをご主人様に捧げられるなんて……きっとカムナビ様が祝福なさってくれているに違いないわ！

南洋の花のような濃厚な甘い吐息を唇の側に感じてシエラは運命の一瞬を待った。

ゴワリ

なにかしら？ご主人様の唇っすいぶん毛深くてチクチクするのね

.....

.....
って毛深いわけないじゃない!?

おそるおそる目を開けると、そこにはお気に入りの熊のぬいぐるみ
..... 秘匿名称まーくんがつぶらな瞳を向けていた。

カーテンから薄くさしこんだ光が朝の訪れを告げていた。

「.....あと一秒!どうしてあと一秒寝せておいてくれなかった
のよ~~~~~!」

真人のたくましい腕の感触を

頬を撫でる指先の優しさを

息のかかるほど近くで見たあの黄金の瞳を

今でも明確に覚えている。あと少しで真人の唇の感触まで己のものにできたのに……………

はたから見れば不気味な一人芝居に興じていたシエラは、自分より低血圧で朝に弱い妹が既に起きだしているのに気づいた。

「プリムったら珍しく早いよね……………」

……………胸騒ぎがする。

恋する乙女にしか備わらない第六感が警笛をあげていた。

よく見ればよほど早く起きだした様子である。シーツにプリムの体温が残されていないのが証拠だった。

しかも着替えた形跡がない。

ということはプリムははまだ寝巻き姿のままではずだった。

「あの娘……………まさか……………」

ズダダダダダダダ！！

「プリムあんたって娘は……………」

力任せに真人の寝室の扉を叩き開けると案の定真人のベッドで真人の使っていた枕を両手で幸せそうに抱きしめながら熟睡する妹がいた。

「うゆゆ〜真人おにいちゃん……………もつと……………」

フフフフフ……そう……プリム、貴女も敵なのね……よくわかったわ。敵なら容赦の必要はないわよね。だって敵なんだし。

シエラは極上の笑みとともにプリムの耳をねじりあげ、声のかぎりに叫んだ。

「いったいいつまで寝てるの！今すぐ着替えてお風呂に水を汲みなさい！お風呂が沸くまで戻ってきたらどうなるか……！」

「はいはいはいいいいいいい……！」

姉が極上の笑みを浮かべて目を血走らせるとき決して逆らってはならないことをプリムは身をもって知っていた。

慌てて躓きそうになりながらも真人の部屋を飛び出していく。

シエラを除いて無人となった真人の部屋に再び静けさが訪れた。

「こんなうらやましいことプリムだけにさせておくわけにはいきませんよね」

身体を投げ出すように真人のベッドに飛び込むとシエラはシーツに
浸み込んだ真人の体臭を深呼吸するように吸い込んだ。

それは夢で見た真人に似た甘い濃厚な香りがした。

夢のまままで終わらせる気はありません。

覚悟してくださいね

その日から姉妹のベッドは引越しを余儀なくされたのだった。

第三十二話

ケルドラン城塞はただただ混乱していた。

どこからともなく現れた巨大な虎と馬が大通りへと繰り出したことで住民はパニックに陥り右往左往して追撃を阻害している。

追撃自体も散発的なものであり衛兵が搜索の手をのばしているだけにすぎなかった。

「良いか！決して逃がすな！殺すことだけ考えろ！」

怒号とともに中隊規模の部隊にアムルタートは出撃の指示を送った。

そして自分は城の宝物庫から持ち出した魔力付与長剣を装備する。

あの少年が人間であるとするならば、剣の通じぬ驚異的な防御力はおそらく魔術的な障壁によるものであり、であるとするなら魔力付与によって大幅に攻撃力を引き上げた魔剣ならばその防御力を突破できるはずだからだった。

既に城内の派遣軍の中核たる兵団は冷静さを取り戻し追撃の準備を終えている。

その中であつてオルパシア外交使節団の追撃に係わろうとしない部隊も存在した。

派遣軍指令官アウフレーブ將軍直属の一個大隊がそれであつた。

「今は敵の逆撃に備えよ」

アウフレーブは真人の武量に数で對抗するべきではないと考えていた。

例えていうなら真人は一匹の竜だ。

竜を倒すのに大部隊はかえつて邪魔になる。

サーガに描かれるような少数精鋭のパーティー編成こそ竜を倒すには最適な編成であるはずだった。

「……………本当に追わずによろしいのですか？」

配下の士官の一人がアウフレーベに問いかける。

オルパシアの武官である真人との艶聞はアウフレーベの立場を決定的に悪化させてしまっている。

このうえ、あえて彼らを見逃そうとする意図を掴みかねての質問だった。

アウフレーベは薄く嗤った。

「確かにあの少年には命を救われた借りがあるが……私もプリストルの武人、手心を加えようとは思わんよ。ただ、私の予想が正しければ彼を倒すのは現状では不可能だろうし、オルパシアがこの事態になんの細工をしていないとも限らんな」

真人を脳裏に浮かべるとき胸の奥にある甘い疼きを自覚する。

……埒もないことを……

アウフレーベにはこの淡い想いを誰に告げるつもりもなかった。

この身はプリストルの武人であり、女だてらに軍に奉職した覚悟はいささかも揺らぐものではない。

ただ………

受けた借りはいつかきつと戦場で返す！

その機会はおそらく近いことではないだろう。

アムルタートとエイディングの暴走によるものにして、自分の管理責任を問われることに変わりはないからだ。

しかし今は後日の再戦を期すためにも被害を最小限に食い止めるべきだった。

「無駄かとは思いますがアムルタートに言っておけ。狙うなら文官にしておけとな。あの少年も四人も守りながらではその力を十全には発揮できない」

それでもラスネール卿や書記官たちの命を奪えるとはアウフレイベは考えてもいない。

防戦に徹しさせることができれば味方の損害を極限できると思うだけだ。

ところがそうは考えぬものもいた。

その筆頭がアムルタート・ルイン・ケルダー准将であったのは兵士たちにとっては悪夢にほかならなかった……。

「このまま街道を進んで大丈夫かね？」

馬の式神である伊佐名の鬣にしがみつきながらラスネールは真人に尋ねた。

城門の衛兵を倒して跳ね橋を下ろさせた真人たちは大陸公路をコラウル山脈に向けて進んでいる。

追っ手も式神のスピードにはなかなか追いつけぬ様子だった。

今なら街道を逸れて身を潜めることも可能ではないかと考えたのだ。

「残念ながらそれはできませんね。いくら私でも隠行しながら皆さんを守りきるのは至難の業です。それに下手をすればはぐれる人が出る」

恐れもあります」

ラスネールたちの最大の安全保障は真人の傍らにあり続けることだった。

真人とはぐれた瞬間に身を守るものは運だけとなる。そんな危うい賭けに乗ることは出来なかった。

「それに……………」

真人は楽しそうに微笑んだ。

「この道を進むことには理由があるんです」

アムルタート率いる追撃部隊は齒がゆさに身もだえしていた。

真人たち使節団をようやく視界に収めたものの、なかなか距離が縮まらない。

それもこれも全てあのミステリアスな獣のせいだった。

少年の呪文とともにどこからともなく現れた虎と馬は既に半日以上
の長きに渡って疾走を続けている。

馬はともかく虎のほうはそもそも持久力のある動物ではないはずな
のに。

である以上なんらかの手裏があるのではろうがそれがわからぬ今打
つ手立てはなかった。

しかし……………

「このまま逃げおおせると思うな！」

獣のほうはともかく外務卿をはじめとした人間のほうが限界に達するまでそれほど時間はかからないだろう。

捕捉は夜半になりそうだ……………アムルタートはそう考えていた。

アムルタートの予測はある意味では正しい。

ラスネールをはじめとする文官たちはもはや式神の背中にしがみついていることすらやつの状態である。

しかし既にコラウル山脈の入り口は目前にある。

太陽が西に傾き始めたことを考えれば多少速度をおとしても時間を稼ぐことはできるだろう。

真人は式神たちの速度を緩めた。

「いいですか？速度をおとした以上追いつかれるのは時間の問題ですが式神から離れなければ私が守ることができます。どんなことが

あっても式神の背中から降りたり勝手に山の中に逃げ出したりしないでください。そこまでは私の手も及びませんので」「

ラスネールたちは素直に頷く。

この少年がいなければ今の脱出行はない。

それにオルパシアへの道程はまだまだ遠いのだ。ここで少年からはぐれて生きて戻れるとも思えなかった。

夕陽が山の稜線の完全に沈みこむころになると、先行していたブリストルの軽装騎兵部隊が真人たちを捉えた。

半弓を構えて接近する騎兵を前に真人はゆっくりと抜刀する。

「しっぴかりつかまっています。こちらを振り返らずに頭を伏せて！」

斗浪と伊佐名が真人には目もくれずにゆっくりと山道を登っていく。

真人はブリストル兵の前に立ち塞がるようにして両手を広げた。

「さあ、中御神の戦舞………冥土の土産にとくところろっじろ！」

流石にブリストルの正規軍は真人の威嚇にも動じなかった。

三隊に分かれた射列が微妙な時間差をつけて射撃を開始する。

剣の達者はよく矢を打ち払うが、太刀行きスピードにはおのずと限界があるものだ。

時間差をつけた三連射は一太刀では打ち払えぬよう絶妙に計算されていた。

もちろん二太刀目をふるう時間もない。

「木行を以って戒めの弦を為す、掃え」

真人が剣をふるうまでもなかった。

両脇の木々から無数の弦が伸びて矢を次々と絡めとっていく。

「中御神流戦舞 四番 群雲」

真人は剣を頭上に高々と掲げた。

そして渾身の力とともに何も無い地面に向けて振り下ろす。

ただそれだけの動作だったが不可視の斬撃は見事に敵の騎兵の一人を真っ二つに切り裂いていた。

この少年はいったい何者だ？

ようやくにして騎兵部隊に走った戦慄に真人は苦笑しながら言った。

「命惜しくば去るが良い。我はいまだ未熟者ゆえ殺さぬよう手加減すること及ばぬ」

第三十三話

真人の宣告にもかかわらず軽騎兵部隊が撤退することはなかった。

彼らにも軍人としての矜持があり、恐怖を意志の力で押し殺せるからこそ軍隊は軍隊であり続けることができるのだった。

「ならばよし」

真人もそうした兵士の意気地を貶めるつもりはない。

ただ全力で相手をする事だけが敵に対する敬意の証だった。

森の中に旋風が舞う。

縮地で一気に間合いを詰めた真人は軽やかに長剣を一閃させた。

数十メートルはあった距離を瞬く間につぶされた騎兵部隊は急激な戦況の変化に対応できない。

そもそも軽騎兵の本領は中距離での一撃離脱にあるのであって、間違っても接近戦にはないのだから。

「ひ……………退け！退け！」

どんな手妻を使ったのかわからないがこれでは勝負にならない。

それに目標の少年が得たいの知れぬ魔術を行使することを本隊の指揮官に報告する必要がある。

凄腕の剣士にして異端の魔術師……………何も知らずに交戦するにはあまりに厄介な相手だ。

……………だが、その決断は遅かった。

「紫光雷」

まるでどんぐりのような形をした鉛弾が一条の閃光となって空気を切り裂いていく。

何かが弾けるような音が炸裂するたびに騎士たちが力なくドサリと

馬上から地面に身を投げ出していった。

見れば額に小さな穴が穿たれており、後頭部は見るも無惨な惨状を晒していた。

真人の指弾は指で弾くだけの簡単なものだが、その威力は馬の頭蓋ですら一撃でたたき割るほどのものだ。

生身の人間が受けて無事に済むはずもない。

こうして先行した軽騎兵部隊は後方の味方に貴重な情報をもたらすことなく全滅した。

「いったいこれは何の冗談だ！」

アムルタートは全滅した騎士たちの骸を見て怒りに身を震わせてい

た。

たった一人！たった一人の武官にどれほどの犠牲を払わなくては
いけないというのか！

アウフレーベの指揮を軍令に違反して離れている以上アムルタート
が罪を免れるには輝かしい功績が必要であった。

たとえば抵抗する外務卿とみ目麗しい武官の首というような。

しかしここまで損害が拡大すると二人の首をもつてしても功績とし
ての輝きは失われてしまう可能性がある。

……………このまま外務卿を追いオルパシア侵攻の一番乗りを果たすか

……………

一気に国境を突破して国境沿いの村の一つも略奪してやれば開戦の
景気付けとしては上々だろう。

……………まずはあの小僧の首をあげることだ。

不慣れな山道の行軍は小僧と外務卿たちの体力を否応なく奪うはず
だ。

今はあの小僧をかけずり回らせ疲弊させることができればいい……………。

そして己の腰に佩いた魔力付与された魔剣に視線を落とす。

帝国でも名の知られた魔剣製作者イラストリアスの銘が入った名剣だった。このような機会でもなければアムルタートの俸給で購入できるような品ではない。

とどめはこのオレの手でさしてやる。そしてあの女狐に見せつけてやるぞ………！

アムルタートはようやく己の思考した結論に満足して警弓を中心とした歩兵部隊の前進を下令した。

発射速度こそ遅いが半弓など比べ物にもならない弾速と低伸性を誇

る弩は真人にとっても厄介な武器だった。

射程が長いので同行する文官たち全てが射程内に収まってしまっており、ほとんど全ての攻撃を迎撃しなければならぬからだ。

まさにこの瞬間同士討ちを恐れず全方位的に歩兵を突撃させたなら、真人は外務卿たちをすべて庇いきれたか自信がない。

しかし敵はこちらの疲弊を待つ持久の構えであり、真人たちはジリジリとオルパシア王国国境に近付いていた。

……そろそろか……

既に一つ目の稜線を越え二つ目の稜線へと向かう途中の谷間へ向かって道は下り始めている。

そして真人の人外としか言いようのない黄金の瞳が、遙か先の闇の中で人の悪い笑みを浮かべる友の到来を捉えた。

……成れり

事実上このとき、ブリストルの敗北とオルパシアの勝利が決した。

「あゝあ、また気づいてるよ。相変わらず人間離れしてるねえ真人
……………」

遠眼鏡を片手に余裕の笑みを浮かべるのは誰あろう闘神ディアナであつた。

付き従うのはオルパシア王国傭兵部隊の精鋭約千名…………これはオルパシアの保有する傭兵戦力のほぼ半分にあたる。

「姉御の好きな人つてのは伊達じゃありませんな…………正直この目で
見ても信じられませんや……………」

呆れたような声でディアナに答えたのはマグレーブだった。

ディアナがやってくるまでは傭兵部隊の隊長を勤めていた男だが、

今ではディアナにあっさりその地位を譲り渡し副官に退いている。指揮能力に富んだ人間が指揮を執るのが傭兵の間では鉄則である。傭兵に滅びの美学など存在しない。自分が生き残るための努力を惜しまないのが傭兵という生き物なのだった。

それにしても……とマグレーブは思う。

ディアナが使節団救出のための兵を出すと言い出したときは正気を疑ったものだ。

軍務卿ウーデットの内意を受けているという状況でなければ反対していただろう。

ケルドラン城塞からたった5名の男たちが無事脱出してくるという可能性はそれほど小さい。

あの闘神ディアナがベタ惚れになっちまうのも無理はねえ……。

むしろ歓迎すべき事態であるかもしれない。

何故なら真人を想って愁いを帯びたディアナは大層色っぽいと傭兵仲間の間でもっぱらの評判であるからだった。

真人が考えていた以上に文官たちの消耗が激しい。

そもそもこうした命のやりとりという経験も覚悟も彼らには無い。
消耗するのはむしろ当然と言えるだろう。

「た、助けてくれ……！もう指に力が入らないんだ……！！」

「掴まっつていられない……お、落ちる！」

そして真人たち一行の移動が遂に停止した。

アムルタートはしてやったりという笑みを浮かべて剣を引き抜いた。

「どつやらここまでのような小僧。潔く我が剣の錆となれ！」

無数の弩、長槍の槍衾、ごく少数ではあるものの魔術師に囲まれて
真人たちは進退窮まったかのように見える。

文官たちは殺気の圧力を身近に浴びて気死せんばかりに怯えていた。
しかし……………

「確かにここまでです。もちろん貴方方がね」

アムルタートが答える暇もなかった。

森の奥から弩と長弓の速射が容赦なくプリストル軍に浴びせられる。
真人という極上の獲物を前にして密集していたプリストル兵は朽木
が倒れるようになぎ倒されていった。

「伏兵か！」

アムルタートが気づいたときにはもう遅かった。

超一流の指揮官であるディアナが無能な指揮官の隙を見逃すことはありえない。

絶妙のタイミングで街道の後方に火が放たれた。

退路を絶たれた兵が壊乱するのは当然の戦理である。

兵たちは自らの生存本能に従って我先に森の奥へ奥へと逃げ込み、襲撃からほんの数瞬でブリストルの軍としての機能は崩壊した。

アムルタートは兵卒ほどに虚心にはなれずただ呆然と立ち尽くしていた。

こんな馬鹿な……………オレはここで手柄をたてて今度こそ將軍に……………

…！

ふと気づけば己のほかには誰もいない。

オルパシアの傭兵が自分に向かって弩を向け包囲の輪を狭めるばかり

りであった。

「小僧………！貴様が！貴様さえ………！」

神すらうらやもう美貌の少年は災厄か、はたまた悪魔か………。思えばこの少年にアウフレールが殺害を阻止されたのが自分の不幸の始まりだった。

この少年を殺す！殺さずにおくものか！！

「牙突」

腰溜めの姿勢から真人が長剣を突き出してるのが見えた。

速い！自分の想像以上の速さにアムルタートは即座に相討ちの覚悟を固める。

アムルタートの巨体から繰り出される斬撃は真人のほっそりした長剣に胴体突き通された程度では到底止まることはない。

殺った！

なんともいえぬ酷薄な嗤い顔を張りつかせたまま、アムルタートは叩きつけるような衝撃とともに冥府へと旅立った。

「……………すげえ……………」

マグレーブは勝負の一部始終を目撃していた。

マグレーブもアムルタートと同じく相討ちを予想していたし、経験から言ってもそれは間違いの無い事実であるかに思われた。

しかし真人の長剣がアムルタートの腹に触れたと思った瞬間、不可視の衝撃波がアムルタートの腹を通り越して背中から突き抜けていった…………… いったいなにをどうしたらそうなるのか到底理解できないがそれがマグレーブの目撃した事実であった。

「ん~~~~素敵だわ！ダーリン！！」

ディアナがいつの間にか頬を染めた歓喜の表情で真人に抱きついて
いる。

「「「「「ダーリン???'」」」」」

荒くれの傭兵たちにとってはアムルタートの死に様よりディアナの
壊れっぷりのほうが余程衝撃の事実であるらしかった。

第三十四話

「アスラムは連中をこのまま北側の斜面に追い込め！ ナームの中隊は西街道で待機。 やつらが無事にケルドランに帰すな！」

ディアナの指示が飛ぶ。

指示自体は的確なものだ。 ブリストルの追撃に参加した約五千名の兵はもはや使い物にならないだろう。 だが……………

男の膝の上に乗って思いつきり背中に手をまわしたまま指揮を執るといふのはいささか問題がありはしないだろうか……………？

傭兵たちの痛々しげな視線を困惑とともに受け止めた真人であったが、指定席とばかりにご機嫌のディアナにそれを告げることは真人にとって不可能といってよかった。

散発的な追撃戦の結果ケルドラン派遣軍の大方は無力化を完了したが流石に都市攻略は無理そうであった。

「思ったより居残ってた連中が多かったらしくてね……………どうやら三千以上はいるらしい。防備のほうも完璧だって話さ」

物見の報せを受けたディアナは肩をすくめて笑った。

敵にも先の見える将がいるようじゃないか……………

だが、ディアナの敵を称える余裕も真人が口を開くまでであった。

「それはアウフレーブさんの手腕でしょう。彼女が指揮を執っているらばこの戦いそのものが無かったでしょうからね」

……………彼女？

その言葉がディアナに与えた影響は激甚だった。

空気の变化を察知した勘の鋭いものはさっさと二人のもとから逃げるように離れていく。

「真人……………敵将は女だったのかい？ちよつとどんな女か聞かせておくれよ……………」

ひんやりとした冷氣すら漂わせながらあくまでも口調は優しげにディアナが聞く。

真人の第六感はしきりに緊急事態を告げていたが不幸にもそれがなのであるのかを伝えることはなかった……………。

「？……………アウフレイベさんはあの中ではただ一人の本物の武人でした。将軍というわりに飾ったところの無い方でしたから家柄ではなく戦場の修羅場をかくぐつて来た方でしょう。佇まいも間違いな

くもののふのそれです。」

真人のベタ褒めにディアナの頬が引きつり始めていた。

それに気づいた人間はしきりに真人にアイコンタクトを送るが真人がそれに気づくことは無い。

残念ながらそれが真人という男の哀しい性なのだった。

周りの危惧をよそに真人は特大の爆弾を投下する。

「黒髪の綺麗なしとやかな女性です。私の故郷の女性を見ているよ
うで親しみがわきますね」

ほとんど災厄級の鈍感であった。

「真人の浮気者~~~~~!!!」

ボキリ

聞くに堪えない音とともに真人の男性にとってもっとも大事ななにかが深刻なダメージを負っていた。

あまりの激痛に真人が悶絶する様は、他人事ながら己の股間を思わず押さえる傭兵が続出するほどであったという……………。

後世にコラウルの戦いと呼ばれる一連の戦闘はオルパシア王国の軍事史上でも燦然と輝く武勳となった。

これほどに一方的な殲滅戦は戦史上にもなかなか例がない。

しかし緒戦の勝利という甘い果実をオルパシア国民が味わう暇はほ

とんど与えられなかった。

南部国境で発生したテメレーアの戦いと呼ばれる会戦においてオルパシア軍が大敗したという報が王都に届いたのは、ディアナたちの勝利の報からわずかに二日後のことであった……………。

ワシユタール・マランツォフ・シユライン・デ・クネルスドルフ子爵は焦っていた。

本来なら政敵であるラスネールを排除するはずであったのに、傭兵どもの特殊部隊が彼らを救出、のみならずケルドランに駐在していたプリストル軍を壊滅させたという事実はその指示を出した軍務卿ウーデットの政治的地位を大いに強化するはずであった。

己の属する派閥から軍内部の掌握を命ぜられて少しずつ自己の権力の浸透を図ってきたが、こうして戦争が始まってしまった以上、さらに掌握圧力がかかるのは明白であるのにこの勝利はその難易度を何十倍にも引き上げかねない。

それだけでなくも舅である公爵のワシユタールに対する風当たりは強

まる一方なのだ。

………傭兵どもめ！まったく余計な真似を………！

それにそんな無謀とも言える指示を出したウーデットに対してもワシユタールは舌打ちを禁じ得なかった。

常識的に考えてケルドランに駐留する一万弱の兵力に対してわずか一千の傭兵をぶつけるのは愚策というのも馬鹿らしい、むしろ狂気の沙汰と言えるだろう。この作戦案を聞いたときはむしろ小躍りして喜んだものだ。

しかし現実にはワシユタールの予想を裏切り赫々たる大戦果が上がってしまっている。

オレにも戦果が必要だ。それも大戦果が………！！

幸いにして南部方面に展開する兵力はオルパシア側がわずかにブリストールを上回っていた。

ワシユタールは決断した。

傭兵どもがブリストルを国境から押し戻したのなら、よろしい、我はブリストルの領土を侵すものである！

国家戦略として防御戦略を採用していたオルパシアの戦略が一個人の名誉欲によって犯された瞬間だった。

前進を開始したオルパシアの戦列を見てブリストル南部方面軍司令官フェーリアス・ハスドスバル・ジャンバール大將は唾った。

強兵をもってなるわが国に弱兵のオルパシアが攻勢をしかけるなど笑止としか思えなかった。

50も半ばに達した歴戦の宿将にはオルパシアが自殺行為にも等しい攻勢に打って出た理由がわかりすぎるほどわかっていた。

………小人はいつだって自己の名誉を国家の都合に優先させる………

ワシユタールが先日入ったケルドラン派遣軍壊滅の報に踊らされていることは間違いないだろう。

だが、その報告が実はオルパシアからではなく、ブリストルからも

たらされていたならどうなるだろうか………？

実のところフェアリアスはオルパシアに先駆けて得ていた情報を多少の誇張も含めてあえてワシユタールの耳に入れていた。

派閥争いに窮々とする小人というワシユタールの性格などとうに知悉している。

闘神ディアナは最大の敵は味方にいるということを経験から知っていた。

故に戦果の報告は事後として、まず外務卿の救出のみを報告していたのだがその配慮も無に帰すことになりそうだった。

「せいぜい調子にのっておくとよい、小僧。洩垂れの貴様に戦争というものを教育してやるとしよう」

フェアリアスが右手を肩にあてると、前線の槍兵が退却を開始した。逆に左右の両翼で軽騎兵部隊が前進を開始している。

ところが軍中央で指揮をとるワシユタールにはそれを見抜く能力はない。ただ、前線の主力であった槍兵が退却していくのが見えるのみだ。

「敵は退いたぞ！今だ！押せ押せ！」

打撃戦の主力たる槍兵が敵陣に大きな穴を穿っていく。

槍兵の後方に布陣しているのは剣士だが方陣を保った槍兵を剣士が突き崩すことは不可能だ。

ワシユタールの脳裏には既に敵の本陣を捉える自軍がありありと描かれていた。

「他人事ながら度し難いものだな、小人というものは」

フェーリアスの左手が再び肩に置かれる。

退却したかに見せかけていた槍兵が剣士の背後で再編を終え、左右に向かって展開を開始した。

驚いたのはオルパシア軍である。

槍兵というものは打撃力防御力ともに全兵種中最強を誇っているが運動力が致命的に弱い兵種でもあった。

左右に展開を開始した槍兵に対する方策がたたない。

左右のどちらに運動するにしろ陣の変更に手間取った隙を正面の剣士に突かれることは明白だった。

ワシユタールが決断を迷っているうちに情勢はさらに悪化する。

両翼から背後へと機動した軽騎兵部隊が退路の遮断を完了したのだ。

もはやオルパシア軍に残された選択肢は前進あるのみだった。

たとえそれが敵に誘導されたものであつたとしても……………。

「もはや敵の本陣は目の前だ！死戦せよ！皆のもの！」

ワシユタールはほとんど絶叫していた。

ここにいたって勝たなければ自分の命すらおぼつかない。

左右から槍兵が迫っているが目の前の剣士さえ打ち倒せば敵の本陣はすぐそこであるはずだ。

敵将を討てば戦局の逆転はあまりにたやすい。

剣士たちが崩れるのが見える。

どうやら自分は賭けに勝った。

そう確信したワシユタールの目に飛び込んできたものは………三重に織り敷かれた弩の射列だった。

弩兵の斉射に衝力を失ったオルパシア軍はとってかえした剣士と左右からの槍兵に包囲され歩兵戦力の実に八割以上を失うという大敗を喫した。

ブリストル帝国はケルドランの大敗を補って余りある勝利を手にしたのだった。

第三十五話

「ご主人様お帰りなさいませ」

「お帰りなさいませ〜！」

「ただいま、シエラ・プリム」

王都に帰還した真人たちを出迎えたのは勝利に沸く国民の歓呼の声ではなく、この世界にたった二人の家族である少女たちの満ち足りた微笑みだった。

愛おしげに両手に二人を抱きしめると二人はまるで子犬のように身体を真人にこすりつけるのだった。

……………帰ってきた

そう思える家と家族はなんと愛しいものなのだろう。

失わない…………たてえこの身を再び修羅に落とそうとも。

……………抱き合う三人の男女をたいそうつらやましそうに指を啜えて見つめるディアナがいたのは余談である。

先日の南部方面軍の大敗を受けてオルパシア王国軍は戦略の立て直しを迫られている。

一刻も早く南部地方を侵攻するブリストル軍を押し戻さなくてはならなかった。

南部地方はオルパシアの最大の穀倉地帯であり秋までに取り戻さなければオルパシアが餓えることは確実だった。

しかし天然の要害であったレナセルダ河を越えたブリストル軍は既に二万以上まで達しており生半の兵力では返り討ちにあうのは目に見えている。

思い切った非常の対策が絶対に必要なだった。

「それで話というのはなんでありましたよ？外務卿殿。今はご存知のとおりこの身はひどく多忙なのだが」

ウーデットは貴族としてはいささか非礼ながらラスネールの訪問を手早く終わらせたかった。

反攻計画の策定で手が回らない状態だったからだ。

「反攻計画はいかがなりましたよ？」

ラスネールが尋ねる。外交官だけあって目つきは穏やかなままだが探るような気配だけは隠せない。

「軍機につき全くお答えできませんな」

ウーデットの答えはにべも無かった。

なるほど外務卿としては外交交渉をひとつ取ってみても情報が必要だということだろうか。

しかし明かせる情報などない。今度の戦いに敗北すれば王国は年内すらもたない可能性があるのだ。

だが、ラスネールの答えはウーデットの予想を遥かに超えるものであった。

「忌憚のないところを言わせてもらうが、門外漢の私ですら今度の戦いは危ういと思う。正直次に負ければ小国たちは一斉にオルパシアの敵に回るだろう。だが逆に勝ちさえすれば味方になるかも知れぬ。少なくとも好意的中立はお約束する。」

既に南方のエルネスティアやワルサレムあたりが水面下で蠢動を開始していた。

ラスネールの言葉にウーデットは顔を歪めることしかできなかった。

自分の想像どおり祖国は累卵の危機に立たされているのだ。いや、あるいはそれ以上の。

「私は使うべき札を切らずにいることは愚策だと考えているのだよ。」

軍務卿殿。我々には後が無いのだ。出し惜しみなしにすべきだとは思わんかね？」

ウーデットは悲壮そのものの表情を浮かべて頷いた。

ラスネールの考えている構想がおぼろげながら理解できてしまったからだ。

「この国には英雄が必要だ。もちろんただの御輿などではない、真の実力を有する英雄が。そのために私は全力をあげて軍を支援する用意があるし、この策は既に主上にもご内意を頂いている」

ウーデットの退路は完全に絶たれていた。

できつれば彼には穏やかな生活を送らせてやりたいと考えていたが詮無いことであつたということか。

ルーシアよ。

ことここにいたってはもはやお前の大事なあの少年を庇い立てすることはできない。

いや、私はむしろ少年を英雄に祭りあげ、進んで修羅の巷に放り込まねばならないのだ。

どれだけ娘に恨まれようと、どれだけ人倫の道にもとるといわれようと、それが王国の為ならいささかの躊躇いもなく実行されなければならぬ。

それがハースバルド家に、王国の盾となるべき一族に生まれついたものの宿命であるのだから。

真人はシエラとプリムを抱きしめつつも複数の視線を感じ取っていた。

敵意の見られないところを見るとただの監視ということだろうか。

ディアナの視線を送るとディアナもわずかに頷くことで肯定の意を示す。

おそらくは先の戦で自分たちは必要以上の注目を集めてしまっているのだ。

心せねばならない。プリストル帝国を相手にたった一人で戦いぬいた真人の存在はどれだけ隠してもいつかは漏れるものであるうし、既にこの戦に傾注している各国の情報筋には真人の脅威が広まっていると仮定すべきであった。

自分とはかくシエラとプリムの安全をいかに確保すべきであろうか。

真人は頭を巡らしていた。

姉妹に手を引かれながら屋敷へと入ると真人はケルドランへ出立する前に張っておいた結界にほころびを発見した。

どうやら侵入者がいたらしい。それも複数に及んでいるようだ。

護衛の式神がシエラとプリムに張り付いていたはずなので、侵入は二人の留守を狙って行われたのだろう。

屋敷の防御も考え直さなければならぬ時にきているようだ。

そんなことを考えていた真人の耳に信じられないセリフが飛び込ん

できた。

「ご主人様、出征の垢をお流しできるよう湯を用意しております。お背中をお流しいたしますのでどうぞこちらに」

「流します！」

既にいそいそとタオルや入浴道具を用意している二人がいた。

照れくさそうに頬を染めているが入浴する気満々なのは期待に満ちた目の輝きを見れば明らかだった。

「ちょっと二人とも……………」

「ダメですか？」

両手を胸の前で組んで上目づかいに抵抗の意を乗せてくる。

真人のいない間に女の武器の使い方に磨きをかけた二人だった。

「前にも言ったと思うけど……嫁入りまえの女の子が肌を晒すのはいけないと思うんだよ」

しかも兄妹とはいえ血がつながっていない。

シエラやプリムに情欲を覚える自分というものに激しい抵抗を感じずにはいられない真人であった。

だが……

「どうしてもダメって言うなら……」

二人の妹から鬼気を感じる。

その勢いには真人ですら圧倒されてしまうほどだった。

真砂………女の子ってこんなに強い生き物だったんだな………

「お兄様おにさまって呼んであげないです（もん）！」

「それだけは勘弁してください」

……いきなり深刻な敗北を喫している英雄であった。

この世界の良識はどうなっているのだろうか……？

男女七歳にして同衾せずという日本古来の美德をオルパシアに望んではいけないのか？

ふと良識あるべき年上の女性を思い出して真人は一縷の望みとともに女性を振り返った。

……そこにはいそいそと自らも入浴する気満々で準備にいそしむ女性の姿があった。

それはあんまりです。ディアナさん

真人の視線に気づいたのかディアナはニヤリと不敵な笑みを浮かべて言った。

「なんだい？その顔は。女を甘えさせるのは男の甲斐性だぞ、真人。断っておくがお前に拒否権はないからな。ケルドランでもことをばらされたくないだろう？」

……真砂……女ってみんなこんなに怖くなるのかい？

真人はあきらめとともに現在の境遇を受け容れた。

まだまだ！まだオレは自分には負けはしない！

大切な妹と友人に精神的な苦痛を味合わせないためにも心を木鶏と化して情欲を封印しなければならない。

女性陣からすれば甚だ不本意な決意を胸に真人は浴場へと連行されていった。

「……………これほど自分に向けられた好意に鈍感な人間が存在するとはな……………」

世界の片隅でカムナビはいらだたしげに爪を噛んでいた。

全く計画通りにいかない現状は齒がゆいばかりだ。

少年を幸せに出来るだけの出会いは用意した。

もちろんカムナビが女性陣の心を操作したことはない。彼女たちが真人に心惹かれたのはひとえに真人自身の魅力によるものだ。

だからこそ真人の頑なな心が歯がゆくてならなかった。

「愛すべき女たちに囲まれて暮らす以上の幸せがあるつか。少年よ………」
「己が心を広くもて！」

カムナビの様子に月の女神マリーカは苦笑を禁じえなかった。

「あの子に貴方（神）と同じ男の甲斐性^{ハレム}を望むのは間違ってると思
うんだけどな………」

第三十六話

正しくここは男の地獄であった。

貴族らしくゆつたりした造りの浴槽ではあるが、流石に四人ともなると肌と肌の接触は避けられない。

真人の左にシエラ右にプリム背後にはディアナとそれぞれ思い思いの方法で肌を寄せ合う状況は、いまだ木鶏足りえぬ真人にはかつてないほどの責苦に他ならないのだった。

だめだ……ここで反応してしまったら負けだ！

主に股間が。

真人は必死にこの世ならぬ狂気の修行を脳裏に思い描くことで危機の打開を図っていた。

両手を骨が見えるほど焼け爛らせたところから治癒させる修行をさせられたこともあった。

胃を完全に破裂させた状態で戦わされたこともあった。

失神するまで出ることのできない水牢に三日三晩放り込まれたこともあった。

よく思い出せば生きていることそのものが奇跡だ。

あの狂気の修行に耐えられた自分がこれしきのこと動揺するなど………！

「いったいどういう鍛え方をしたらこんなに柔らかい筋肉をつけられるのかねえ………」

むにょん、と音のしそうな勢いで真人の肩にディアナがのしかかる。よく熟れた豊満な胸が真人の肩に押しつけられ自在に形をかえる様は圧巻ですらあった。

「本当にご主人様のお肌つてすべすべで柔らかいんですね。」

追い打ちをかけるように人差し指で真人の胸をシエラがのの字を描くようにつつき始めた。

栄養不良でうるおいに欠けた以前とは違い、今まさに女としての成長期をむかえた瑞々しさは匂うばかりである。

思春期の乙女だけが持ちうる清純な色気が煙るように立ち上っていた。

「あゝもしかしてご主人様、緊張してる〜？」

そして真人の右腕の緊張を敏感に感じ取ったプリムが目を細めて真人の顔を覗き込んだ。

幼女らしいプリプリした肌と早くも目覚めつつある女としての性が激しくアンバランスで目を惹かずにはいられない空気を纏っている。

そこはかたない色気すら感じられるほどだ。

女性陣の意図ははっきりしていた。

自分を女性として意識させて現状からさらなるステップアップを目指す……これだ！

うりうりとはかりに意図的に肌をこすりつけ始める三人に真人の意識は彼岸の世界に旅立とうとしていた……。

……ごめんよ真砂……不甲斐ない兄を許してくれ……

プチリ

兄妹の縁もこれまでですね

なぜか脳裏の真砂はどす黒い瘴気を撒き散らしながら真人に引導を渡すのだった。

「うわ~~~~~ん!!」

精神力の限界に達した真人は雄たけびをあげながら周りを囲む女性陣には目もくれず一目散に脱衣所へと飛び出していった。

はらり

真人の腰を覆う布が真人の急な動きに耐えきれず浴槽へと落ちていく。

そして露わになったモノを三人の娘たちはノドを鳴らしつつもしっかりと目に焼き付けていた。

「「「大きい!!」」」

その後食事をともにした四人はいつになく無口で頬の血行が良いままであったという……。

シェラの料理舌鼓を打ちつつ、なぜか盛り上がらない昼食が終わった。

食後のお茶を楽しんでいた真人であったが、真人に降りかかる地獄はまだまだこれからが本番であった。

「真人お……女のひとり身に傭兵の宿舎は淋しすぎるよ。私も今夜からここに置いてくれやしないかい？」

ブフーツー!!

ほとんど同じタイミングでシェラとプリムの姉妹がお茶を嘔き出す。

………流石は伝説の傭兵………このような奇襲をかけてくるとは……
……油断しました！

むっっ！お兄ちゃんにはこれ以上近づかせないもん！

「この屋敷には家族以外は住んでおりませんし……ディアナ様も指揮官として宿舎にいらしたほうがよろしいのではございませんか？」

……むむっ……やはりこの女が最大の障害か！？

ディアナとシエラの視線がぶつかりあって激しい火花が散る。

しかし外見はあくまでもにこやかに談笑してるように装いながら。

397

「宿舎にいらなくても副官がいるさね。それに宿舎には男しかいないからねえ……女のひとり身には危険なところさ」

「あら、闘神ディアナ様ともあるつものがご冗談を」

「いやいや私もこれで身持ちの固い女さ」

「ふふふふふふふふ」

「ふふふふふふふふ」

理由はわからないが背筋の寒さに震えを抑えられない真人であった。

「それにこの屋敷には年端のいかぬ妹もおりますので………あまり争いごとを持ち込みたくございませんの」

「争いなんてのは持ち込むもんじゃなくてやってくるもんさ。むしろあらかじめ用心をしておくほうが間違いないね」

ディアナの言葉に真人は真摯なひとかけらを感じ取っていた。

どれだけ逃げても争いから人が逃れることはかなわない。それがひとの業であろう。

だから守らなくてはならないものは守るべく算段を整えておかななくてはならない。決してそれを失わぬために。

「ディアナさんに住んでもらうのはいい考えかもしれませんが。この屋敷もかなり物騒になっていることでもありますし」

真人が張った結界とディアナの武力があれば、この屋敷を落とすには一個中隊では足りないだろう。

腕利きの暗殺者であっても無事の生還は難しい。

もちろん自分がおれば二人に手を出させるようなへマをすることはありえないが真人がいつまでも張り付いていられるわけではないのだ。

自分のやっと手に入れた安息の地をこれ以上踏み荒らさせるつもりは真人には毛頭なかった。

「ご主人様どうして……？」

形の良い眉を逆立てているシエラに真人は言った。

「シエラたちは気づかなかつたらうけど、この屋敷は少なくとも五回以上は何者かによって侵入されているよ。おそらくオレの素性

を探りに来たんだらうけどね。それに王都に戻る少し前から複数の
間者から監視を受けている。場合によってはシェラたちに危害を及
ぼさないと限らない。打てる手は打っておくにこしたことはない
さ」

自分たちを思いやってくれているからこそその真人の発言にはシェラ
も我がままをとおすわけにはいかなかった。

「任せておくれな真人。あんたの大事な妹には指一本触れさせやし
ないよ」

ここぞとばかりにディアナが真人の言葉尻にのつた。

反対をする隙も与えぬ見事なタイミングであった。

……………くっ……………これが私と彼女の間にある十年の経験の差という
ことが……………！

甘いね嬢ちゃん。交渉のコツは相手が何を欲しているのかを見抜くことだ。

シエラは天井を仰ぐとひとつ長いため息をついた。

……いいでしょう。今回彼女を追い出すことはあきらめましょう。しかし私には次善の策があります……！

「そんな……いつの間にか屋敷に得体のしれない連中が入り込んでいたなんて……怖いわご主人様……」

一転して脅えの色を露わにしたシエラにディアナは不審の眼差しを送った。

それはディアナの同居の肯定に他ならない。こつもあっさりシエラがディアナの思惑を許すとは思えなかったからだ。

「プリムもね、すごく怖い。それにご主人様がいなくてすごく寂しかったし……だからお願いがあるの……いい？」

二人に目を潤ませながら上目づかいに迫られて真人に抵抗できるはずもなかった。

「もちろんだよ、プリム。なんでも言ってごらん？」

「今日からご主人様のベッドで私たちといっしょに寝て欲しいの」

「なにiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!?!」

何故かきれいに声を八もらせつつ真人とディアナは叫ぶ。

あまりに想定外の一撃だった。

そ、そうくるか……………だが……………！

「真人、私だけのけものにしたりしないよね？ね？」

ニヤリ……………と邪笑を浮かべてシエラが言った。

「本当に残念ですわ……………ご主人様のベッドには私とプリムの三人しか入れないなんて……………小さいかたならもう一人は入れたかもしれませのに……………」

ピシリ

ディアナのコンプレックスを鋭くえぐるシエラの言葉にディアナの
中で何かかひび割れる音がした。

「私だって好きでこんな図体に生まれたわけじゃないわ~~~~~
」

試合に勝って勝負に負けたディアナであった。

「オレには選択権はないのか……………」

その夜、ピンク色のお揃いの枕が三つ鎮座したベッドを前に背中を
煤けさせた真人が何かを失った男の顔で佇んでいたという。

そんな真人の胸のうちなど意に介する風もなく姉妹は喜々として真人の両手にしがみついていた。

「これで勝ったと思うなよ~~~~~!!」

屋敷のテラスではやけ酒をあおるディアナが月に向かっていつまでも叫んでいたのだった。

第三十七話

真人の朝は早い。

まだ夜明け前の時間には起きだして中御神流の演舞をすることが日課になっているからだ。

しかし今朝に限っては真人はなかなかベッドを抜け出せずにいた。

右腕にシェラが腰にプリムが抱きついてひどく身動きのとりづらい状況に陥っていたからだだった。

……もう少し警戒心を持ってくれないものかなあ……

右腕に感じるシェラの柔らかな胸の感触や寝相が悪かったのか寝巻きがまくれあがったプリムの肢体などはなんとも真人の居心地を悪くするものであった。

正直に言って心臓によくない。

真人にとって女性というものは硝子細工のように繊細で慎重な扱い

を要するものであったはずなのだが、この世界にきてからというものの真人の認識を超える事象が多すぎた。

しかしそんな戸惑いとは逆に暖かな感情を感じてもいた。

このようなスキンシップを伴った親愛表現というものを真人は過去に経験してこなかった。

妹の真砂にすら一歩引いて接していたのだ。

それに対してこの世界の（といっても女性ばかりだが）人々の感情の豊かさはどうだろう。

まだまだ戸惑いばかりが多いがそれが心地よく思えることがうれしかった。

いつか戸惑いではなく正直に自分が感情を表せる日がくるかもしれない。

きつとそれは素晴らしいことに違いなかった。

真人はなんとかシエラたちを起こさずにベッドからの脱出に成功す

るとまず練丹を始めた。

中御神の陰陽道は土御門系の陰陽術の他に道術の流れを多く汲んでいる。

練丹の仕方は道術でいう小周天に酷似していた。

口から入れた気を会陰から督脈・泥丸・任脈を通して丹田に収める。

体内で気を循環させ練り上げるその手法は基本的ではあるが故に真人にとつても欠かすことのできない作法になっていた。

小周天で練り上げた気を大周天でさらに純化させたところで真人の毎朝の日課は終わるのだった。

「うゝ頭が痛い……………」

朝食に来たディアナは二日酔いの頭痛に頭を抱えていた。

酒豪のディアナの無惨な様子からすると、ほとんど明け方まで酒を

喰らっていたらしい。

いつもは活発そうな目にも肌にも勢いが感じられない。

「大丈夫ですか？今ミルクを温めますから……………」

……………ちっ同情するなら真人と寝せやがれ！

……………ふっ……………無様ね……………

何気に女の戦いは続いているようである。

「真人、ちょっとあとで私の相手をしておくれ。ひと汗かいて酒を抜かないとね。いつ出撃が下るかわからないし」

「そうだな……………ルーシアも何も言ってこないけど、南部を放って

おくことはできないはずだし」

二人の会話に悄然となるシエラとプリムであった。

そう、今は戦争なのだ。

真人はいつ戦場に出るかもしれず、またオルパシアが亡国と化さないともかぎらない。

まして実績を示した傭兵部隊が戦いに真っ先に狩りだされるのは確実であった。

真人が帰ってきたことではしゃいでいた二人は厳しい現実に思わず顔を俯かせた。

このまま戦争などなくなってしまうばいい……………

国も家族も地位も名誉も戦争が奪い去っていった。

自分の命さえ危ういと諦めかけていた時に再び与えられた安らぎと家族を失うことなど考えたくもなかった。

「シエラ・プリム……心配しなくてもオレは大丈夫……必ずふたりのもとに帰ってくるよ。だから二人は笑って帰りを待っていてくれ」

気落ちした二人を真人は力強い口調で励ました。

日ごろの鈍感ぶりが嘘のような気の回しようであった。

「はい」

「私のこともしっかり守っておくれよ、真人！」

負けじとディアナも食い下がる。

「もちろん、オレの力の及ぶ限り君を守るよ、ディアナ」

ごく当然といった風で莞爾とほほ笑む真人を見てディアナも相好を崩した。

なんとも女冥利に尽きるセリフであった。

「良かったですわねディアナさん。もつともディアナさんともあるう人がそうそう危機に陥るとも思えませんけど」

「仮にも闘神ディアナと呼ばれてる身だからね。真人が私を守ってくれるなら私も真人を守ってみせるさ」

暗に戦場で真人の傍にいられるのは自分だということを匂わしながらディアナは笑った。

「ご主人様をお願いしますね……………おほほほほほほ」

「任せておきな……………うふふふふふふふ」

陽気な笑い声とは裏腹に空気だけが重くなっていく。

仲がいいなあ二人とも……………

どうやら約一名空気の読めない朴念仁がいたようだ……………。

カラリ

玄関の呼び鈴の乾いた音が鳴ったのに気づいてシエラとプリムが玄関へと向かう。

「いらっしやませ」

「急な来訪で申し訳ないが真人卿はご在宅か？」

そこには穏やかな風貌と知性を感じさせる黒い瞳が印象的な壮年の紳士が佇んでいた。

来客の顔を確認したシエラの顔色が蒼白になる。

シエラは男の正体を知っていた。

オルパシア王国外務卿ラスネール侯爵その人であった。

シエラがラスネールを最後に見たのはいつだったろうか。

二年前に王都レパルスに使節団として訪れたときが最後だったはずだ。

王族とは名ばかりの存在であったから会話を交わすようなことはなかったがカムナビ神殿の巫女であったシエラが外交文書を読み上げる詔書の儀は少なくとも見られているに違いなかった。

遠めに見ただけの小娘のことなど記憶に残っていない可能性もあるが………

「外務卿殿自らのお越しとは……… いったいどういふ風の吹き回しですか？」

ラスネールは笑った。

この愛すべき少年は自らが今まさに生贄の祭壇に捧げられようとしていることをしらない。

自分がどれだけ重要で貴重な人材になってしまったかということ を全く自覚していない。

そして最後のカードがたった今失われてしまったのだということも。

415

「いや、なかなか可愛らしいメイドをお持ちだ真人卿は」

「可愛いのは確かですがメイドではなく妹ですよ」

自分にちらりと値踏みするような視線を投げかけた侯爵の様子はシエラに身も凍るような絶望感を与えていた。

間違いない。

この男は私たちの正体を知っている。

そしてこの男の獲物は無力な自分たちではなく、無双の武人中御神真人にあるのだ。

私の正体を確認するようなあの視線は、私という人間が真人に対してどれだけ影響を与えることができるかを確認する意味の視線であるのに違いなかった。

「……………ずいぶんと汚いやり口じゃないか、真人のその命助けてもらっておきながら」

苦虫を噛み潰したような顔でディアナがラスネールを睨みつけている。

「自分が清廉潔白だ、などと言うつもりはないがね。しかし正当な報酬だとは思わないかね？彼はそれだけの偉業を成し遂げているのだから」

「……………あっ！」

シェラの口から短い悲鳴があがった。

自分の正体がばれた衝撃から見過ごしていた違和感の正体がようやくわかったのだ。

……………真人卿

それは真人を王国貴族として取り込んだという意味表明に他ならなかった。

さらに続くラスネールの言葉にはさすがの真人も度肝を抜かれて息を呑んだ。

「真人卿にはいくら感謝してもしきれないほどだ。私も男親として君のような息子を持ちたかったが残念ながらお転婆娘が一人いるだ

「けでね。そこでとってはなんだが、君を私の養子に迎えたいのだ」

第三十八話

「ダメです(だ)!!!」

シエラ・プリム・ディアナの声が期せずして重なった。

興奮のあまり目が血走っている。それはプリムですら例外ではない。

「絶対ダメです。ご主人様にそんなことをさせるくらいなら死んだほうがましです!」

「お兄ちゃん……他のお姉ちゃんのところに行っちゃおう?」

「アナスタシアとか言ったかね? 鼻もちならないって噂だが……そんなやつに渡すくらいなら……逃げようぜ真人。匿ってくれる国の一つや二つは心当たりがある」

三人とも見栄も外聞も無いよいようである。

思わずラスネールは口の端を歪めて笑った。

「誰も婿養子と言った覚えはないのだが……………」

「……………えっ……………?……………」

三人が一樣の言葉をつまらせる。

どうもアナスタシアに対する先入観から余計な想像を働かせていたらしい。

「そ、そういう意味ではなくてですね」

「じゃあ他のお姉ちゃんのところにいっちゃんっわけじゃないんだね
」!

「ふっ……………驚かすない……………」

「もっとも君が望むなら婿養子であっても私はかまわないと思っ
ているのだが」

「……やっぱりダメです（だ）！」「」

ラスネールと娘たちの騒ぎをよそに真人は微笑しながら首を横に振
った。

「外務卿の申し出は光栄に思いますが父子の契りとは天神の前で己
の本体をさらして行つべきもの。政治の餌にする気はありません」

養子というから驚きはしたが、このような工作があることを真人は
予想しなかったわけではない。

むしろ正確に予想しえたからこそ、外務卿救出の功をディアナに譲れるように手配したのであった。

王国に流れた情報では外務卿たち一行を救出したのは傭兵の特殊部隊ということになっており、その功績は作戦の指揮をとったディアナのものとして認識されていたのだ。

それがどこかでルールを変えられた。

その首謀者は目の前にいるラスネールに他ならないだろうが、ルールを変えるにはウーデットの協力が不可欠だ。

軍務卿もこの件の一味と考えて間違いあるまい。

それは王国内に真人が頼るべき勢力が一切存在しなくなったことと同義であった。

「外務卿の家族となるには私はいささか器が小さいのです。私は私の家族と友を守ることです。精一杯ですので」

暗に国家のためなら家族をも犠牲にする貴方とは違って、と言われた気がしてラスネールは苦笑した。

あるいは己の罪悪感がそう思わせただけかもしれないが。

「しかし今はその家族を守るためにも権力が必要ではないのかね？
武力だけでは家族の生活までは守れんだろう？」

露悪的な表情を浮かべながらラスネールは真人の決断を促した。

歴戦の外交官らしく動揺の欠片もおくびにも出さないラスネールだが、その心中は表情ほどに自信に満ちたものではない。

わけでもディアナの入れ込みようが誤算であった。

ラスネールの知るかぎり真人には頼るべき知人も縁者もこの国以外には存在しない。

まさかメイファンの巫女姫とは思わなかったがシエラとプリムもそうだった環境的には変わりが無いだろう。

世間慣れしていないことも考え合わせれば現在の生活を保障する代わりに真人に地位と義務を負担してもらうことは十分交渉の余地あることのはずだった。

しかしディアナのいう匿ってくれる国の一つや二つ……というのは

この前提を根底からぶちこわしかねない類のものだった。

闘神ディアナを手に入れるためなら多少の国際問題を抱えてもよしとする国は確かに一つ二つは存在するからだ。

幼い姉妹を連れて当てどない旅に赴くことはないだろうと踏んでいたラスネールにとっては背筋を流れる冷や汗を実のところ抑えることができないでいた。

恐るべきは真人のフェロモンということだろうか。

「どうぞご賢察ください。私は中御神真人………狂気を糧に守護を司る者……貴方のような公人が身内に取り込むべき男ではありません
ん」

ぞつとするような凍える瞳と視線を交わしたラスネールは自分が真人という少年を見誤っていたことを知った。

いったいどれほどの過酷な経験を積みばこんな冷たい目ができるというのだろう。

これでは到底少女たちを盾に脅迫するどころではない。

ひとたびこの少年が狂気に身を浸せば、冗談ではなくなつた一人で国を滅ぼしかねないのではないか。

理由はわからないが、この少年は心の奥底で何かが決定的に壊れている……そんな気がした。

とはいえラスネールも王国の柱石を担う男としてこのままやすやすと引くわけにはいかなかった。

真人に託すべき役割はもはや既定の事項であつたのだから。

「……………君のなかの狂気を承知のうえで頼みたい。名目だけでいいのだ。君が我が侯爵家縁故のものとなれば君の立場は格段に強化される。その力は使い方さえ誤らなければ王国と君と君の家族に多大な利益を及ぼすだろう。私を信じてみてくれないかね？」

養子とはいえ侯爵家の息子となれば同じ士官であつても扱いは全く異なる。

武勲次第では佐官に昇進するのも容易だ。

この戦争でラスネールとウーデットは中御神真人という少年にチップを乗せることを決意していた。

彼の軍内での立場の強化を支援し、門閥貴族の介入を阻止する。

そのためにはやはり出自不明の平民では甚だ都合が悪いのが現実であつた。

「それにこれはメイファン王国の利益にもつながらる話でもあるのだ。彼の国はブリストルの占領され国土は荒廃の一途をたどっているにもかかわらず

今回の戦のために重税を課されて国民は飢餓にあえいでいる。現在王国騎士団の生き残りが反乱を企てているがオルパシアの戦況が好転すれば援兵の派遣も可能だ。場合によれば君が彼女たちを故郷に帰してあげることだって……………」

「私たちがかえる場所は真人様のお傍です！」

ラスネールの長口舌は悲鳴のようなシエラの叫びにさえぎられた。

泣きそうな表情がシエラの内心を雄弁に物語っている。

この娘は故郷を恐れているのだと。

シエラファイター・ラルフ・グランデル・デ・アウストリアが巫女として神殿に上がったのは6歳のときであった。

そのときのことをシエラは昨日のことのように覚えている。

それは偶像そのものだった………あるいは虚像というべきかもしれない。

神殿の誰も神の力を信じてなどいなかった。そして失われた信仰のかわりに虚栄だけがあった。

民衆の信仰を糧に莫大な寄進を集め建前だけは立派な説教を垂れつつも神への信仰心を失った神官たちのなんと醜くおぞましかったことだろう。

しかもあるうことが自分はその神殿の象徴たるカムナビの巫女姫であり、神殿の長たる大神官は己の父なのだ。

ただ純粋な崇敬の念を寄せる民が怖かった。

藁にもすがる思いで嘆願にくる信者たちがたまらなく恐ろしかった。

自分は飾り。

なんの力もない大人たちの虚栄を満たすための体のいい道具。

いつの日かそれが暴かれて民衆に責められる……そんな日が来ることにいつも怯えていた。

自分の意志では決して生きられなかったあの日々に戻ることなどとうてい認められることではない。

「シエラ……自分が不幸だと思うかい？」

心の襞の奥深くまで染み渡りそうな優しい目でシエラを見つめながら真人は聞いた。

「いいえ！私は幸せです……だって……ご主人様に会えたのですから」

もう死のうと思っていた。

せめてプリムを生かすために。

あの日、真人と出会ってからシエラは初めて生きることの喜びを知った。

「オレも出会えて幸せだと思っているよ。だからこそ、シエラを生んだ国を、土地を、父母を、無数の人と人の繋がりを恐れてはいけない。彼らの全てが、オレとシエラを出会わせてくれた恩人で……オレとシエラにとっての運命なのだから」

生きているということはそれだけで素晴らしい。

死すべき運命を背負っていた真人にはそれがわかる。

生まれ出でること

己より大切な人と出会えること

それは奇跡のような偶然の集積だ。

その奇跡のような偶然を用意してくれた人々へ感謝しないわけがあるだろうか。

真人の言葉にシェラの胸の奥の何かが溶けていく。

神殿での生活は恐れだけではなかったことをシェラは思い出しかけていた。

父は娘の自分たちには優しい子煩悩な男だった。

自分たちに高価な衣装や人形を与えることでしか機嫌をとれない不器用な男だったが、少なくとも父が自分たちを愛していることだけは感じ取ることが出来た。

幼馴染の少年がいた。

彼の妹が不治の病に犯されて自分がなんの力にもなれないと知ったとき、二度と顔を合わせることなど出来ないと思ったけれど、彼は私の初恋だった。

乳母のマリアンはお菓子を作るのがっても上手だった。

年上の彼女はいろいろなことを自分たちに教えてくれた。

年頃の女の子として気の置けない話をしてくれる唯一とっていい友人だった。

シエラの思いつめた表情が柔らかくなっていく様を真人は満足気に見つめていた。

「外務卿、貴方が私の狂気を許容するというのなら、この戦争が終わるまでの間私は貴方を父と呼びましょう。………もとより戦うことに否やはありません。ただ、たとえ呼び名がどう変わろうとも私は中御神家の守護司であり………狂気を糧に守護を司る者です。どうかそれをお忘れなく」

この世界には中御神と繋がる縁は存在しない。

であるならばシエラとプリムの縁のために一時の絆を結ぶことも許されるべきであろう。

それに国家と民衆のために身を挺する覚悟を背おったラスネールに対して真人は敬意とともに好意を感じていた。

第三十九話

王国に新たな英雄譚が生まれた。

一介の傭兵から決死の敵地潜入を経て外務卿ラスネール侯爵を見事に救出し、いたく感謝した侯爵は彼を自らの養子とすることを申し出たと言う。

彼の名は中御神真人。

ふって湧いたような少年のサクセスストーリーに王国の民衆は悪化する戦況に訪れた一服の清涼剤としてこれを大いに歓迎していた。

433

しかしながらこの事態を苦々しく感じる勢力も存在する。

もちろんのことマンシュタイン公爵を筆頭とする門閥貴族たちであった。

彼らは始末するはずであったラスネールを帰還させた真人を深く恨んでいたし、ウーデットの影響下にある真人の出世を望むべくもなかったのだ。

なんとか理由をこじつけてでも真人を放逐したいところであったが、彼らの思惑とは裏腹に真人の昇進と授爵はとんとん拍子に進み今日の式典を迎えていたのだった。

謀略を策動する間もない電撃的な決定の裏にはオルパシア王国現国王アルハンブラの意向が大きく働いていた。

王家にとってはこの戦争の行く末は他の誰よりも切実な問題である。

メイファン王国で王家の人間が五親等にいたるまで虐殺の憂き目を見たことでもそれは明らかだった。

である以上戦争に勝ち抜くためならば門閥貴族を敵にまわすことも厭わぬ覚悟を国王は固めていた。

「汝、マヒト・ナカオカミ・テイレース・ノルド・シエレンベルグを王国騎士並びに子爵に任ずる。また、王命により南部方面において傭兵部隊と連携して二個中隊を指揮下におくものとする。真人子爵よ。卿が救い出してくれたラスネール侯爵は余の腹心にして数少ない友でもある。改めてここに礼を言うとともに、卿が王国に再び吉報をもたらしてくれることを望む。さあ、称えよ皆のもの！王国に勝利をもたらす英雄の誕生を祝って！」

「王国万歳！」

「アルハンブラ陛下万歳！」

「マヒト子爵万歳！」

宮廷内に歓呼の聲が木霊する。

儀礼官の一人がしずしずと真人の前に進み出ると国王とともにバルコニーで国民に応えるように促した。

真人はただ頷くことで承の意を伝えるとバルコニーへと歩き出した。

既に国王アルハンブラ一世の登場に民衆は大歓声をあげていた。

王城に集った民の数およそ10万人……それは王都に住まう人口の約半数に達する。

その人手と歓声の大きさは国王アルハンブラ一世の人気と、若き英雄の登場に対する国民の期待の表れに違いなかった。

ブリストル帝国は武力に特化した国家形態をとっており、国で地位あるものといえば軍人か軍神ストラトの神官と相場が決まっている。

文化も爛熟した文治の国であるオルパシアの民としては到底容認しがたい相手であった。

なんとしても故国オルパシアに勝ち残ってもらいたい。善良で篤実と噂の高いアルハンブラ国王のためにも。

ひたむきな思いと期待が入り混じった民衆の瞳にまるで稜線から朝陽が顔を出したがごとき煌きが飛び込んできた。

その白銀の輝きは目映く、どこか重厚な白亜の神殿を思わせる厳粛な空気を纏っていた。

見事な円形を描いた髪の色がまるで王冠のようにも感じられる。

期せずして10万になんなんとする民衆の歓声が止んだ。

日のかげりとともに目も覚めるような造形の美貌が露わとなる。

嘆声がいいたるところで漏れ広がった。

ほとんど奇跡のような黄金率の体現された肢体であった。

煌く髪

眼光鋭い黄金の瞳

白磁を思わせる染みひとつない手

しなやかさと頑健さを兼ね備えた引き締まった身体

10万の人間が想像をだにすることができなかった若者がそこにいた。

ゆっくりと真人の右手が息を潜めて見守る民衆に向かって伸ばされる。

「王国騎士にしてシエレンベルグ子爵を拜命したマヒト・ナカオカミ・テイレース・ノルド・シエレンベルグである。我は誓約する。我は己の守るべきものの守護者である。貴君らが我の友であるならば我は貴君らの守護者である。我の敵に災厄を与えよう。二度と齒向かう気の起きぬまで。我の友に安寧を与えよう。敵から守る千丈の壁となって。」

爆発が起きた。

アルハンブラは驚きを通り越して呆れながら隣の若者を見つめるしかなかった。

日ごろ国民の歓声を聞きなれている彼にして、声が爆発するものであるということを知ったのだった。

しかも彼から発散される威風ときたらどうだ。

見た目にはようやく身長が170cmほどに達しようかという決して長身とはいえぬ体型。

肉つきも華奢な部類に入るだろう。

だが身にまとった気配は歴戦の戦士、あるいは治世の賢王も及ばぬ守護者のそれだ。

この少年なら自分たちを守ってくれる。

そう根拠もなしに信じられるだけの気配が一国の王たる自分ですら感じ取れるのであった。

いったいどんな矜持と覚悟があればかくも見事な守護者と成りうるのか……………？

真人の生い立ちに興味をそそられつつも、アルハンブラ一世はそれが決して心地よいものでないだろうことを予想していた。

あれほどに無私で純粋な守護の担い手は、間違いなく人として壊れているはずだからであった。

割れんばかりの歓呼の声をマンシユタイン公爵をはじめとする門閥貴族たちは苦々しい思いで聴いていた。

群集の中には真人を中傷するべく手の者を配置していたのだが、この歓声ではかき消されて何ほどの役にもたつまい。

いささか真人を見目形がいいだけの若造と侮っていたが、今後は考えを変えねばならないだろう。

少なくともただの美貌では説明のつかない風靡の才があ少年にはあるのだ。

「閣下、あの若造どう扱ったものでしょうか？」

マンシュタインに同じく門閥貴族であるダウディング伯爵が問いかける。

本来ならいかなる手段を使っても排除すべき男だ。

しかし今は戦時であり、戦争に負けることは自分たちの破滅でもある以上手心を加えねばならないこともまた事実であった。

要は真人抜きでこの戦争に勝てるかということが問題なのだ。

「様子を見るしかあるまいな。少なくとも当面の間は」

いかにも不本意だ、という顔をしながらもマンシュタインの内心はそれほど焦ってはいない。

戦争に勝ったときこそその甘い果実は自分が独占するつもりであったし、そのための準備も進めていた。

仮に戦争に負けるようなことがあれば、その時は名門中の名門であるマンシュタイン家の名と権益だけは守り抜けるよう水面下でブリストルの高官との接触も開始している。

今以上の待遇が約束されるなら王国を裏切ることもやぶさかではない。

もっとも手のひらを返されたり王国が勝利しないともかぎらないので決断には慎重を要するであろうが……………。

どう転ぼうともわしの掌中を飛び出すようなことにはさせぬ。

長年にわたってオルパシア王国に君臨してきた筆頭公爵家に既に王家への忠誠心はなかった。

あるのは肥大化した自尊心と権力への妄執、それだけであった。

マンシュタインが自らの右に控えていた青年に目を向ける。

礼服に身を包んではいるが、その鍛え上げられた肉体と冴え冴えとした眼光は明らかに軍人のそれである。

もっともその整った顔立ちと気品から察するにそれなりに身分の高い貴族ではあるだろう。

ただ、何かにとり憑かれたような余裕の無い瞳をしていた。

さて、この男どうやって使ってくれようか……………。

男の名はオズヴァルド・ヴァリアント・ソラス・エクゼター伯爵。

メイファン王国からの亡命者でメイファン残存勢力の中心になる人物であった。

「……………どういったご用件でございましたか？」

声音が冷たくなるのは如何ともしがたい。

シエラは目の前の女性が何のために現れたのかくらい問わずともわかっていた。

「せっかく真人さまが当家に来てくれると思っていたのに屋敷を出るつもりがないようですから私から出向いたのですわ！」

大きな胸を自慢げに反らせて見せるその女性はアナスタシア侯爵令嬢……今となつては真人の義姉にあたる女性だった。

「真人さま……いいえ真人。貴方の義姉が参りましたわ！もう寂しい思いはさせませんわよ！」

ご主人様は貴女なんかいなかったって寂しくなんかありません！

思わず絶叫しそうになるのをシエラは必死にこらえる。今の自分はメイドなのだ。分をわきまえなくてはならない。

「どうなさったの？早く義姉上と呼んではくだらないの？」

怒涛のアナスタシアの勢いに真人は口を挟むことも出来ずにいた。

それにしてもどうして自分の周りの女性陣はこつも強いのだろうか。

「あ、義姉上………いったどうしたのです？義父上はこのことを存知なのですか？」

「余計な心配はしなくてよいのです。年下は年下らしく年長者の甘えていればよいのですわ！」

さあ！と言わんばかりに両手を広げいざ抱擁を交わさんとするアナスタシアの前に意外な伏兵が立ち塞がった。

「お兄ちゃん………式典の間お留守番で寂しかったの………このままギョツしてもいい？」

「プリム！」

「なんじゃお主は！」

シエラとアナスタシアの抗議の声もむなしく既に真人は兄馬鹿スイッチが入ってしまってプリムを抱きしめてご満悦である。

「なりは小さくとも女だねえ……………」

ディアナは恋敵たちの暗闘を眺めつつプリムの手強さに舌を巻いていた。

もしかしたらあの幼い少女が一番のライバルであるのかもしれない。時間の経過はあの娘の味方だ。とりわけ自分やアナスタシアのような年上の者にとっては。

しかも真人はどうも庇護欲をそそられるタイプに弱い。

だが、甘いねプリム。戦場での男女の付き合いってもんを私が真人に教えてあげるよ……………。

戦に高ぶった身体は性欲を滾らせる。

何気に真人を戦場で押し倒す気満々なディアナであった……………。

第四十話

「新任の隊長つてのは大丈夫なのか？」

そう口にする兵たちの疑問はもつともだった。

兵たちは上司を選ぶことができないが、長の出来不出来が彼らの生命の鍵を握るとなればとうてい無関心ではいられまい。

だがそれを問いたいのは私のほうだ。

今度の戦の危険度はこれまでの比ではない。

ただでさえブリストルの野蛮人共と正面からやりあわなきゃならぬのに、中隊長は兵の指揮をとったことすらないど素人という噂だった。

確かにケルドランでは活躍したようだがあくまでもそれは兵としての活躍であって指揮官としての活躍ではないはずだ。

しかもこれも噂だが絶世の美形で土気高揚のために仕立て上げられた張子の虎にすぎないという話もある。

どちらにしる激戦区に投入されるのは避けられないけどね……………。

アリシア・クルト・フツケバイン少尉は自嘲とともに哀しげなため息をもらした。

巻き添えを喰った兵たちにはどれほど詫びても詫びきれない。

だからこそアリシアはどんな手段を使っても中隊を生き残らせるつもりだった。

なぜなら中隊が南部戦線に再び投入されるのは元中隊長であったアリシアに対する懲罰人事に他ならないからであった。

アリシアは現在22歳。

下級貴族として士官学校を卒業し、武官としては将来を囑望されるほどに優秀な成績を収めていた。

彼女の人生が狂わされたのはクネルスドルフ派の連隊長に目をつけられてしまったからだだった。

スレンダーながら瑞々しい肢体に切れ長の青い瞳が伶俐な美貌を際立たせている。

いわゆるクールビューティーという部類にアリシアは分類されるだろう。

どうやらそれがいたく連隊長の好みを刺激してしまったらしい。

まわりつかれ意味もないスキンシップは日常茶飯事、まだそれだけなら兵のために我慢していたが性行為まで求められると丁重に断りを入れざるを得なかった。できる限り丁重にしたつもりだったが何故か全身に痣を刻印された連隊長は即日王都への喚問とアリシアの降格を言い渡した。

幸運にも王都に呼び戻されたおかげでテメレーアの惨劇からは逃れることができた。

アリシアの降格を決めた連隊長は敵の弩兵の弓を浴びて戦死していた。

あの戦いに参加せずに済んだことは僥倖とわかっていい。しかし再びあの激戦区に投入されることを思えば己が幸運を喜んではかりはいられないのだ。

「嬢ちゃん、今度はうまく付き合えよ。次はまちがいなく命がなくなるからな」

つい黙考に沈んでしまったアリシアに壮年の男が言葉をかける。

口は悪いがアリシアを思っているの忠言なのは男の気づかわしげな瞳を

見れば一目瞭然だった。

男の名はバラール・ヴォルフラム・ヴィンセント……アリシアが中隊長であったときの副官である。

歴戦の古参兵でアリシアとは父と娘ほど年齢が違う。

経験に裏打ちされた堅実な手腕を持つ中隊にとってなくてはならない男だった。

バラールの見るところアリシアは軍人として得難い資質を備えている。

だが個人的には軍人などやめて幸せな家庭に入ってほしいとも思っていた。

綺麗な娘が穢されあるいは命を落とすのは軍歴の長いバラールにとっても耐えがたい何かであったからだ。

それが信頼のおける上司であればなおさらである。

「そうね……確かに命以上にこの身体が惜しいとは思わないわ」

軍は軍律の維持無くして軍ではない。

軍律のない軍は夜盗と同義である。

だからこそ軍という組織は時として理不尽ともいえる処罰を下す。

明らかに間違いだと思われる上司の命令への抗命に対する処罰もその理不尽のなかのひとつだった。

アリシアは己の胸を抱きしめるように抱え込んだ。

抗命の末処刑されるようなことになれば実家の家族にも類が及ぶことになるだろう。

今は女としての甘い幸せは忘れるべきだ。

そう理性では確信しながらも、背筋を貫く不快な震えをアリシアは押さえられずにいた。

バラールはそんな少女の恥じらいを捨てきれぬかつての上司の様子

に、諦念とともに覚悟を固めていた。
もしもアリシアに危機が迫れば自分が命を捨てて相手の命を奪うつもりであった。

「ガンツフェルド連隊長に噛み付いたじゃじゃ馬ってのはお前か」

「はい、アリシア・クルト・フツケバイン少尉です。貴方の副官の任を拝命しております中尉」

アリシアは顔色ひとつ変えなかったが内心では呪詛の言葉を漏らしていた。

中隊長が新米という噂はとんだガセネタであったらしい。

新たな中隊長に着任したのは武勇と軍功には定評のある男だった。

ただし粗野で傲岸不遜なために出世を棒に振っている。アリシアにとって厄介なことに女癖もすこぶる悪いという、まさに最悪の男だ。

リュシマコス・ダムルーク・クレティアス……虎殺しリュシーの二つ名で知られている。

実際に虎を素手で絞め殺したという伝説を持った男だった。

「いいか、オレは反抗は一切許さん。お前もオレの副官になるならそれを肝に銘じておけ」

「……………はっ」

感情を極力排し見事な敬礼を捧げたアリシアは着任の挨拶は済んだ、

とばかりに退出しようとしたがリュシマコスはそれを許さなかった。

「では命令する。今ここで服を脱げ」

予想を上回る暴虐な言葉にアリシアの声も思わず低くひび割れたものになる。

「……………それは軍務には関わりないように思われますが……………」

リュシマコスの目がスツと細められた。

アリシアの返答が気に入らなかったようだ。

「上官に反抗するような出来そこないが本当に更生したのか確かめるためだ！早く脱げ！それともまた上官に逆らうか？」

「くっ……………」

進退窮まった……………とアリシアは感じていた。

このまま逃げることは容易い。

しかしなんの後ろ盾もない自分がそれをすれば今度こそ身の破滅は目に見えている。

理性ではそう理解していてもアリシアの女としての本能は理性に従うのをよしとはしない。

脱ぐことも逃げることも出来ずにアリシアは全身に脂汗をかきながら硬直した。

「どうした？命令が聞けんのか？それとも貴様は脱がされるほうが好みか？」

リュシマコスの野太い腕がアリシアの軍服の襟にかけられるとアリ

シアは湧き上がる生理的嫌悪感に思わず叫んだ。

「……………いや！」

「やはり性根は変わっていなかったか……………だがすぐにオレが変えてやる。オレなしではいられないようにしてやるぞ！」

絶望が目の前を暗くする。

「いやだいやだいやだー！ー！こんな男に穢されるために私は今まで純潔を守ってきたわけじゃない！」

そこにいたのはもはや伶俐で優秀な軍人ではなかった。

幼い日のままにひたむきな理想を追い続ける理想主義者にして潔癖症な一人の少女の姿があるだけだ。

うずくまり己の身体を抱きかかえるアリシアをいやらしい笑みを浮かべて見下ろすリュシマコス。ふと何かに気づいたように天幕の入り口に目を向けた。

「そこにいるのは誰だ？」

まるで突風が吹き上がるような殺気が天幕の外に満ちている。

いかに子羊をいたぶるのに夢中になっていようと、リュシマコスほどの戦士がこの殺気を見逃すことはありえない。

「隠れてねえで姿を現せ！」

抜き打ちの斬撃に天幕の入り口が切り裂かれた。

そこに佇んでいたものは……………

「バロール……………」

猛り立つような殺気とともに天幕の外に佇んでいた男はバラールであった。

そして彼の瞳を見た瞬間にアリシアは自分の犯した失策を知った。

バラールは私のために自分が犠牲になる気である………！

女の身の自分が呪わしい。

ただ、自分が耐えさせずれば誰も犠牲になどせずにすんでいたものを………！

「ふん、この上官にしてこの部下ありといったところか………」

リュシマコスが腰の大剣に手を伸ばすのを見てようやくアリシアは我に帰った。

指揮官としての能力はともかく、個人的な武勇においてバラールは遠くリュシマコスに及ばない。

ひとたび剣を合わせればバラールが血の海に沈むのは避けられないだろう。

「下がりなさい！バラール！余計なまねをしないで！」

命を無駄にしないでほしい。全ては私の不甲斐なさのせいなのだから。

リュシマコスはいやらしい笑みを浮かべながらバラールを挑発する。己の武力に絶対の自信を持つが故の残酷な遊びであった。

「どうした？この女を助ける気ではないのか？それともここでこの女が犯されるのを見物したいだけか？」

一瞬バラールの怒気が増す。
しかしリュシマコスが期待しているように激発はしなかった。むしろ溜息とともに憐れむような目をリュシマコスに向ける。

「ま、最初は嬢ちゃんのために命を張るつもりでしたが風向きが変わりましてね。全く噂ってなあ当てにならないもんですわ」

いったい何が起こったというのか、いたぶるつもりでいた格下の獲物に憐れみの眼差しを向けられてリュシマコスは嚇怒した。

「騷るか！貴様！」

怒気の赴くままに剣を走らせる。

虎を絞め殺す膂力に相応しい肉厚の太い大型の鉈を思わせるような大剣がバラールに向って振りかぶられた。

「……………己すら御せぬ者が剣を御せるなどと思わぬがよい」

天幕のなかの時が止まった。

呼吸の音すら響かぬ石化した空間で白魚のような滑らかな手がリュシマコスの大剣をその掌で受け止めている。

一切の気配も感じさせぬままに白銀の少年がバラールを庇うように立ちふさがっていた。

目の前の現実が受け入れられない。

オレは虎殺しリュシーだ。剣をとっては將軍にすらひけをとるとは思えない。

それがあんな華奢な腕ひとつで受け止められてしまうなどということがあるものか！

「己が心を御すること、剣を己が腕として御すること、遂には己を剣と合一させ感覚を共有すること。貴官には剣士としての基本が何一つできていない。己を省みぬ剣は剣にして剣にあらず。武にして武にあらず。人にして人にあざりし獣の勇といふべきこと貴官も人ならばわきまえるがよい」

いったい彼は何者だ？

アリシアは目の前の現実離れた光景に息をするのも忘れるほど魅入られていた。

銀系のように煌めく白銀の髪

天壤の美貌

言葉にするのも愚かしいと思われるほどの圧倒的な武、そして全身を包む赤子が両親に対して感じるような根拠のない安心感

新任は美貌の英雄だという噂をアリシアは思い出した。

彼はたったひとりでケルドランの城塞から外務卿を救いだしプリストルの将を討ち取るといふ武功をあげたと聞いた。

埒もないつわさととり合いもしなかったが………確か噂の英雄の名は

中御神真人とよんだはずであった。

第四十一話

「くそ！なんで動かねえ……坊主こりゃなんの手妻だ?!」

リュシマコスにとって目の前の現実には受け入れがたいものだった。

身長190cm体重100kgになんなんとする自分の剣が50kgそこそこの少年に軽々と受け止められ微動だにしないなど誰が信ずるだろう。

なにかしらの理由が存在するはずだった。

そうでなければそもそも素手で剣を掴みとることなど出来ようはずがないのだ。

「中隊長……ちょっと冷静になっていただけませだけませんかね？」

苦笑するようにバラールはリュシマコスに声をかけた。

その声音に含まれた嘲りと哀れみの色にリュシマコスは憤然となる。

オレはこの隊の中隊長だ。王国でも指折りの勇者だ。それがなぜこんな取るに足りない准尉ごときに嘲りを受けねばならないのか。

現実離れた光景にわれを失っていたアリシアがいち早く違和感に気づいた。

「し、失礼しました！大尉！」

「大尉イ?!」

驚愕とともにリュシマコスは少年の襟章を見た。

オルパシア軍の徽章である百合の紋章が三つ、その存在を主張している。

馬鹿な……………！

ありえない話だった。

士官学校を出たばかりの18歳の新任でようやく少尉……目の前の少年はどう多めに見積もっても二十歳には届かない。

それどころか下手をすれば15、6にすら見えるほどだ。

唯一の例外があるとすればよほどの権門の子弟だろうが……リュシマコスも貴族のはしくれとして権門の家系は承知しているがこんな規格外の少年など見たことも聞いたこともなかった。

「おいおい、いつから王国軍は託児所になったんだ？」

虚勢を張りつつリュシマコスは改めて少年を見下ろした。

自分の肩口ほどに見える少年の顔を間近に見て思わず目を見張る。

想像以上の美形だった。

肌はあくまでも白く滑らかで極上の白磁器を思わせる。

そのなかで自分の剣を押さえ込んでいる右手だけが異様であった。

あの華奢で美しい女性のような手が何故自分の剣を押さえ込めると
いうのだろうか？

空恐ろしい美しさだが男娼に感じる媚の色を一切感じさせないところを見るとオレの知らない貴族のボンボンであるのかもしれない。

「今の言葉そっくり貴官に返そう。ここは託児所ではない、戦場なのだ。私は貴官のように可愛げのない男の面倒を見るほど酔狂ではないぞ」

少年の言葉は辛らつだった。

リュシマコスのなけなしの忍耐があつという間に底をついた。

こんなガキに……！

こんなガキに邪魔者扱いされるなどという屈辱を許容することは断じてできなかった。

「うおおおおおおおー！！」

全身の力を振り絞って剣を握っていた右手を振りかぶる。

虎を絞め殺したときですらこれほどの力を振り絞ったことはない。まさに渾身の一撃だった。

対する少年はいまだに剣を受け止めたまま身じろぎひとつしない。

少年の意表をついたことにリュシマコスはいきなり喜びを感じるとともにこの一撃が少年の美貌を跡形も無く破壊するであろうことに歓喜した。

だが

「貴官がそちらの女性に言っていたように上官への反抗は重罪だ。まさかそのことに否やはあるまいね？」

自分の拳を顔面に受け止めながら少年は薄く嗤って微動だにしない。

これは悪夢か？

物理法則を超えた現象の前に急速に現実感が麻痺していくのをリュシマコスは感じた。

この体重差、拳に乗せられた衝撃力、百歩譲って少年が無傷であったとしても少年に対して発生した物理衝撃までは消せぬ道理だ。

なのに薄皮一枚にすら衝撃を受けた気配のないのはいったいどうい
うわけなのか。

リュシマコス生まれ初めて個人的な武勇に対して恐怖を感じて
いた。

「……………化け物め」

リュシマコスの捨て台詞は真人になんの感銘ももたらさなかった。

「化外であることはもとより承知。されど我もまたオルパシアの民
なり。国王陛下の勅命により第502中隊と第377中隊は我が指
揮下に入る。アリシア中尉！」

「はっ……………!?!」

自分は少尉であります……………といいかけたがアリシアは真人の有無を
言わさぬ気配を感じ取って口をつぐんだ。

「貴官をこの第377歩兵中隊の中隊長に野戦昇進させるものとする。並びにバール少尉を中隊長代理として我が副官を兼任せよ。南部の情報を知悉する貴官の見識は貴重だ。これから私の補佐をよろしく頼む。リュシマコス少尉は後備軍とともに別命を待て」

「はっ……………謹んで拝命します！」

アリシアの胸をかつてない充足感が包む。

幼い日夢に見た憧れ

汚れなき英雄

正義と誇り

戦場を支配する薄汚れた欲望にいつしか忘れかけていた理想

この人ならば純白の白雪のように王国を覆う汚泥を濯ぎ一面の白銀に変えてしまつかもしれない。

そしてその隣にたっているのが自分ならこんなにつれしいことはない。

激しく高鳴る胸の動悸にアリシアは思わず両手を胸の前に合わせて顔

を俯かせる。

その姿はまるで神の像に向って頭を垂れる敬虔な修道女にも似ていた。

「ふ、ふざけるな！貴様からそんな処分を受けるいわれはないぞ！」

リュシマコスの言い分ももつともだと言えるかもしれない。

いかに野戦昇進や処分をするにしてもそれは上官全てが成し得る権限ではない。

直系の上位組織である大隊長か連隊長が行うべきものだ。

確かにこの少年は中隊ふたつを指揮下におくと言ったが編成上いずれかの上位組織に組み込まれているはずであり、それらの組織にはリュシマコスの所属する軍閥の意向が通じるはずであった。

「貴官は勘違いしているようだが私の指揮する二個中隊は南部軍の編成からははずれることになる。軍務卿の直轄軍として傭兵部隊とともに遊撃の任につく予定だ。」

その点で私が貴官に処分を下すのは全く妥当なものだ」

「そんな馬鹿な！」

想像を超えた事態にリュシマコスはずわんざわんざ叫んだ。

ありえない。

自分の知らない王都でいったい何があったのか。

南部に派遣される援軍であるにもかかわらず南部軍の指揮下には入らない、しかも傭兵と正規軍が独立して作戦行動するなど王国の歴史始まって以来のことだった。

でたらめだ。

しかしそのでたらめを押し通してしまうのが権力であり暴力というものであった。

それをリュシマコスは体験として知っていた。

「何者なんだ………てめえは………」

「わが名はマヒト・ナカオカミ・ティレース・ノルド・シエレンベルグ。王国軍大尉にして王国子爵でもある」

「……………シエレンベルグだとお……………」

リュシマコスはようやく敗北を認めつつあった。

シエレンベルグ侯爵に息子はいなかったはずだからおそらくは養子なのだろうが、シエレンベルグと言えば王国では五本の指には入る権門である。

そうでなければ目の前の小僧が子爵などという位を叙爵しているわけがなかった。

いかにマンシュタイン公爵家の末席に身を連ねるといえども自分がかなう相手ではない。

……………今は退いてやる。しかしこのまままで終わらせることはオレの自尊心が許さない。

王国の派閥はマンシュタイン家を筆頭とする門閥貴族とハースバル

ド家とシエレンベルグ家を中心とした実務派貴族に二分されつつあることはリュシマコスも承知していた。

いつか二派が決別する日がやってくる。その時には……貴様の大事にするもの全てを踏みにじって凱歌を歌わせてもらうぞ小僧！！

背中全体で憎悪と怨念を撒き散らしながらリュシマコスが天幕を退出すると真人は優しくアリシアの頬を撫でた。

「大丈夫だったかい？」

「はははい！大尉のおかげをもちましてっ！」

アリシアはかつてない胸の動悸と熱病にかかったような顔のほてりと戦わなくてはならなかった。

ひとり人生経験豊かなバラールは嘆息とともにアリシアの将来に危惧を覚えずにはいられなかった。

バラールの見るところアリシアには夢見がちな乙女のような一面がある。

その精神はあくまでも清く、どこまでも美しい理想を心のどこかで持ち続けていられる……そんな一面が。

そんな彼女が真人に傾倒していくのは必然といえるだろう。

しかし過度の傾倒はアリシアを平凡な女性の幸せから遠ざけかねない危険を孕んでいた。

真人のために全てを投げ出し奉仕することに喜びを見出す神の信徒のようになりかねない危険が。

願わくばお嬢にカムナビの祝福があらんことを……

アリシアは誰が見ても鼻眉目無しに美人といえる女だ。

積極的に気が惹けるとも思えないが彼女が真人のお眼鏡にかなうことを祈るしかあるまい。

瞳を潤ませて真人に世話を焼き始めた上官の姿を見て、バラールはもう一度肺が空になるほどの深いため息をついた。

第四十二話

南部方面軍バツカニア・パウル・フェルド・カーマイン王国中將は王都からの指令に首をかしげていた。

現状を死守して敵の消耗に勤めよ。

王都の穀倉地帯である南部を収穫期前に取り戻すべく戦略を練っていたはずであったのに思いもかけぬ命令であった。

確かに要塞に籠もっていれば味方の損害は極限できるであろうが時の経過はこの場合敵を利用するのではないのか？

秋の収穫期を今の勢力図のまま迎えれば王国は飢える。

飢えた軍隊が戦に勝つ見込みは少ないのは歴史が証明しているはずだった。

しかも申請していた援軍はおろか傭兵すらよこしてはもらえないとは何事だろうか？

バツカニアにとって傭兵は被害担当役であった。

もつとも損害の集中しやすいエリアを担当し正規軍の消耗を抑えるのが役目であり、それをよこさないということは本営では南部方面軍を捨石にする気だろうかと勘繰りたくもなってくる。

……… いったい王都で何が起きているのだ………

バツカニアには知る術もないことだが援軍たるべき独立混成連隊は彼の想像の埒外にいた。

ブリストル侵攻軍指令官フェアリアス大将もオルパシアの動向には首をかしげていた。

あるいはネルソンやロドネーから食料の緊急輸入でも行えば急場はしのげるのかもしれないが、このまま秋を迎えてしまえばオルパシアの国民は飢え、逆にブリストルの食料は何の不足もなくなる、というのは間違いない。

なのに手をこまねいて傍観するに任せている気がするのは気のせいなのだろうか？

フェアリアスはむしろオルパシア軍が忍耐の限度を超えて要塞から出撃してくるのを心待ちにしていた。

野戦での戦いとなれば敵が自軍に倍していようと恐れるものではな

い。

しかし要塞に籠もられてしまつてはプリストルの誇る野戦能力も宝の持ち腐れでしかない。

オルパシアがいかに弱兵とはいえ、要塞という防御施設のなかで溢れるほどの味方と矢弾に囲まれていればそれなりの働きをしてしまふのだった。

つまらん……………座して死を待つ気が……………？

いずれにしろフェアリアスの脳裏にプリストルが敗北するという想像は欠片も存在しない。

あるのはただ、いかに美しく、あるいは華々しくオルパシアの滅びを飾るのかという感慨だけであつた。

そんな感慨をもともしない人間たちがサティアの樹海の中を縦走

している。

その数およそ四千人……オルパシア正規軍二個中隊五百名と傭兵部隊の総力三千五百名の混成集団だった。

出撃にあたり軍務卿ウーデットから独立混成連隊「ヴァーミリオン」の名を与えられているオルパシアの歴史始まって以来の独立運用兵团である。

「しかし真人も可愛い顔して恐ろしいこと考えるもんだよね」

からかうような口調でニヤリと笑って見せたのはディアナだった。

もっとも笑って見せたのは真人に対してではない。

いかに自分が真人と近いのか、というアリシアに対する牽制であった。

もちろんアリシアも過敏にこれに反応した。

「大尉、傭兵隊長の言は軍律の妨げとなりかねません。かような気安い発言は控えさせるべきと思料いたしますが……」

「わかってないね、私と真人の仲ってものを……」

「あなたは黙っていてください！」

行軍の始まりからこの二人はことあるごとに衝突している。

真人は困り顔を隠そうともせず、苦笑しながらアリシアをたしなめた。

「本来であれば多勢の軍を率いるものが指揮をとるのが軍法です。国王陛下の御情を賜りこうして私が指揮を任されていますが通常であればディアナさんが指揮を執ってしかるべき。中尉もそれを慮って礼を失することのないようお願いします」

「は！……私の配慮が足りませんでした！まことに申し訳ございません！」

がっくりと肩を落としつつもアリシアは真人に向かって敬礼を捧げる。

揺れ動く潤んだ瞳は主人の怒りに怯えるようでもあり、また懸命に許しを乞うようでもある……………。

まるでその姿は主人に叱られた犬が主人のご機嫌を伺う様子を彷彿とさせた。

……………というか犬そのものだけ、嬢ちゃん……………

バラールはアリシアの変貌に驚きを隠せない。

優秀な戦術家にして理想主義者

それが先日までのアリシアなら、今のアリシアは真人の忠犬としか言いようがない。

真人との会話に一喜一憂する様子はバラールの目から見ても可愛らしいのひとことに尽きた。

そうなのだ

困ったことに犬チックなアリシアは普段のクールビューティーな印象とのギャップと相まって殺人的に可愛らしいのである。

すでに傭兵たちの間でもアリシアの人氣が鰻登りでありその人氣はディアナに追いつき追い越さんとしていた。

アリシアに犬耳をつけたい。

尻尾をつけたアリシアを影から応援したい。

アリシアに「らめえ」などと舌をもつれさせたい。

などという倒錯的な声が聞かれ始めているが、趣味の是非はともあれバールも気持ちだけはわからなくもない。いや、最後のはともかく。

大尉に傾倒するのは予想してたが……まさかここまでとは……

ところが当のご主人様はアリシアが目には見えない尻尾を全開で振り回していても気づく気配もない。

とことん鈍くできているくせに要所で発揮される優しい所作がまた悪魔的に性質が悪かった。

この男は女の敵だ……！

幾人の男たちが血の涙とともに真人を呪ったことだろう。

いつの間にか無数の男たちの嫉妬と怨念を一身に背負った真人は今日もまた天然ぶりを発揮するのだった。

「そつ気を落とさないでくれ中尉。そんな可愛い顔で見つめられては私が悪人にもなったような気分になってしまう」

てめえは極悪人に決定じゃあああああ！

目を潤ませて頬を上気させるアリシアを取り巻く男たちの心の絶叫が、真人に届くことは……永遠にないのかもしれない。

サテアの樹海を走破すればレナセルダ河は目の前である。

大陸各国を渡り歩く傭兵たちの中には地元民ですら知らない間道を知悉するものがあるのを真人はディアナから聞いて知っていた。

南部地方に侵攻した敵軍そのものではなく、敵の策源地であるノイシュバイン城を陥す。

真人が作戦目標を提示したときは誰もが正気を疑ったものだった。

まず道がない。

南部に展開する主要街道はすでにプリストルの手に落ちており、敵の哨戒線を抜けて行軍することは不可能と思われた。

第二に兵力が不足している。

連隊規模になったとはいえ、その大半を歩兵が占めるヴァーミリオンには攻城兵器が存在しない。

破城槌も投石機も雲梯もない状態で堅城として名高いノイシュバイン城を攻略するなど無謀を通り越して妄想に等しい。

だからこそ、と真人は言う。

孫子勝戦計に曰く困魏救趙……アヌビア世界の住人にはなんのこともかわからないだろうが、自らも優秀な戦術家であるディアナは感嘆のため息を漏らした。

古代中国でのことである。

趙の国は魏の国に大いに攻められ国都の命運も旦夕に迫るといふ有様となった。

もはや望みは斉の国の援軍以外になく、これ以上の魏の伸長を望まぬ斉は援軍を送りだすことに決したが、軍師である孫？は素直に趙へ救援に赴くことをよしとしなかった。

「闘いから救おうとするなら直接加わってはいけない。要所を突き、虚を突いて、形勢を崩してやれば、糸はおのずから解けていくものだ」

と言いつつたかと思うと魏の国都へ向けて進撃を開始したのである。魏の軍勢は驚いて国都へと帰還を急いだが、急な進軍で疲れ果てたところを待ち受けた斉の軍勢に散々に打ち破られてしまった。

真人の作戦構想はこの故事にちなんでいる。

作戦の有効性を激賞したディアナはすぐさま作戦の具体化に乗り出

した。

平野部を行軍することができないのであれば森林地帯の間道を抜けていけばよい。

幸いサティアの樹海に詳しいものは傭兵部隊内に豊富にいた。

ややノイシュバイン城からは北側に抜け出てしまいがレナセルダ河を下るべく軽舟の手配はアリシアがぬかりなく行っていた。

アリシアの明晰な頭脳は必要なものを必要なだけ揃え必要な場所に運ぶという煩雑な補給に如何なく発揮された。

さすがのディアナもこの事務処理能力だけはアリシアを高く評価しないわけにはいかなかった。

攻城戦の兵器についてはいささか反則だが、真人の力を使えば十分対応が可能と思われた。

戦線の後方であるノイシュバイン城に貴重な魔術兵団が駐留している可能性は少ない。

対魔術防御が薄ければ真人の攻撃魔術だけでも攻城兵器の代用ができるはずであった。

それに無理に城を落とす必要もない……………

ディアナは愛しい男の戦場にあっても涼やかな佇まいに目を細める。
自分が知る限り大陸最強の武を持つ男

しかもその男は闘神ディアナをすら瞠目させるほどの戦術家でもあった。

決して逃しはしない……獲物をしとめる駆け引きにかけてこの闘神ディアナに勝る女などいないのだから。

「……………ディアナ様……………よだれが出ておりますけれど……………」

少々妄想が先走ってしまったようだ。

気がつけばアリシアが疑わしげな目で自分をジッと見つめている。

こつも警戒されてしまったては作戦の成就是おぼつかない。

……………こいつは真人から引き離す必要があるね……………

大尉のもとを離れるのは危険ですわ……………絶対に……………

ここでも熾烈な女の戦いが始まっていた。

第四十三話

街道を一頭の馬が疾駆していく。

既に馬は口元から泡を吹き始めており、目的地が近いとはいえこのまま潰れてしまうことは明白だ。

それでも御者は鞭を緩めようとはしない。

馬はおろか自分の一命にかえても伝えねばならないことが彼には託されているのだった。

「ノイシュバイン城が陥落寸前だと？」

フェーリアス大將は使者の言葉に蒼白となった。

完全に思考の死角を突かれたからであった。

自国を侵し続ける敵軍を目の前にしてそれを無視することは難しい。

まして時の経過が味方に利の無い場合はなおさらである。

しかし……………

「いったいどこから敵は現れたのだ？」

先ほどからフェーリアスが報告に困惑している理由はそれだった。

敵中に奥深く入り込んでいる以上オルパシアはその気になればより多数の兵力を終結させることが可能だ。

外線より侵入する攻撃軍が内戦を利用して集結する守備軍の数を上回るためには鉄道網の普及を待たなくてはならない。

それは真人の世界のみならずアヌビア世界でも同様であるのだった。

だからこそフェーリアスは可能な限り哨戒部隊に兵を割いていたし、使者の報告を信ずるなら一万という大軍が濃密な哨戒の網をくぐり抜けるということはとうていありえぬ事態であった。

一万という軍勢が縦隊を作って行軍すればそれはおよそ一キロになんなんとする長蛇の列を形成することになる。

長槍兵が装備する3m近い長柄槍が林立する様は遠目には林が動いているようにも見えらるだろう。

そして一万に軍勢には一万の軍勢に相応しい食糧が必要であり、その中に騎兵が存在するならば食糧の何倍も嵩張る飼葉もまた必要になるのであった。

そのすべてを、兆候すら気付かず見落とすことなどありうるだろうか？

ここでフェーリアスはある可能性に気がついた。

エルネスティア共和国からレナセルダ河を下ってきたとしたらどうだろうか？

エルネスティアもワルサレムも現在のところ中立を表明しているがオルパシア王国が外交によって王国側として参戦させたという可能性は捨てきれない。

焦燥がフェーリアスの胸を灼いた。

己の武力に絶対の自信を誇りながら武力を発露させる戦の機会も与えられず日干しとなって朽ち果てていくなどということは彼の矜持が許さなかった。

「マティアス！」

「はっ！」

長年にわたって副官を務めてきた信頼する部下を呼びつけるとフェーリアスは決断した。

「お前に一万預ける。要塞から追ってきたら適当にあしらいながら退いてこい。もっとも勝てるならそれでもかまわんが」

「お任せ下さい。要塞に籠ることしか出来ぬ連中に戦の醍醐味というものを教えてやるといたしましょう」

不敵に笑いながらマティアスとフェーリアスは見事な敬礼と答礼を交わした。

二人とも叩いた軽口ほど後退戦が簡単なものではないことを知りつくしていた。

数において劣る軍勢が追撃をはねのけつつ、敵国の領内を後退するのは至難の技である。

補給も支援もなくただ味方の撤退する時間を稼ぐためだけに戦うにはよほどの士気と統率が必要であった。

それは士気が旺盛で軍律の厳しいブリストル帝国軍といえど例外ではない。

しかしフェーリアスはマティアスがいかに逆境において粘り強く戦うかを熟知している。

指揮官が勇敢で的確な指揮を執り続けるかぎり、なかなか崩壊しないのが軍という集団なのだ。

「長くは待たせぬ。……ノイシュバイン城さえ取り戻せば奴らの掘るべき拠点は南部にこのデファイアントの要塞しか残されてはいないのだ。こんな小細工で南部を取り戻せたなどは思わぬことだ。それを貴様らに思い出させてやるぞ………！」

オルパシアが消極的な戦略をとり続けるかぎり勝敗の行方は決している。

すべからず国家は国民を守る義務を負っているのだ。

たとえ戦略的な理由であれ、国民を守る義務を放棄して国家が成り立つ法がなかった。

所詮悪あがきにすぎん……もっともエルネスティアが本格的に参戦しているなら少々厄介だが……

それですら奇貨としてエステトラスをも併呑してしまう底力がブリストールにはあるはずだ。

してやられたと思わなくもないがフェーリアスはこの戦に敗れるなど微塵にも考えていない。

今彼に必要なことは果断と拙速により被害を最小限に留めること、そして攻城戦に溜まっていた鬱憤を小癩な敵に叩きつけること、ただそれだけなのであった。

フェーリアス率いるオルパシア侵攻軍主力四万は強行軍を続けた。
た。

その距離は普通の旅人なら三日で走破可能な距離でしかないが、軍における行軍とは旅とは根本が異なる。

まず人数が膨大である。人の能力に個人差があり、また確率論的に病人や脱走者が根絶できない以上いかなる統制をとろうとも行軍中の軍隊は緩やかな破局へと向かっていく。

そういった破局を遠ざけるためには肌理細やかな休憩とふんだんな食事が絶対に必要なのだが、食事ひとつとっても四万人分の食事となるとそれは大仕事だ。

食料は輜重部隊が運んでいるとはいえ水は最小限でしかない。

馬車を主力とする運送体系では水を十分なだけ随伴させるのは不可能なのだ。

自然炊事する場所は水源の近くとなり、行軍の時間と距離もその水源の所在によって制限がされてしまうのだった。

そして夕食が終われば夜営の準備だが、これもまた旅人のように宿に転がり込んで熟睡というわけにはいかない。

仮にも敵国内で戦争をしている以上不寝番を立てることは必須だ。

そして最低でも全軍の二割以上は即応体制においておかなくてはならない。

とかく軍事力において劣勢な国において夜襲とは地の利さえええればコストパフォーマンスのよい攻撃手段であるからだった。

しかし歴戦の宿将であるフェーリアスは軍の宿命ともいえるそういった煩雑さをよく理解していたし、可能な限り士気を保つべく様々

な手段を講じていた。

すでにノイシュバイン城までの距離は一日を残すのみとなっている。

今夜は英気を養い明日の戦いに備えよう……。

斥候の報告によれば外郭を突破され内郭の半ばまで押し込まれているが、いまだノイシュバイン城は健在であった。

気になるのは敵の兵の数が予想外に少ないことだが、それは最初の使者が夜襲に驚いて敵数を過大に見積もったと考えれば辻褄は合う。

いずれにしろ明日は鎧袖一触に叩き潰してくれる。

二度とノイシュバインを陥れようなどという気が起こらないよう徹底的に。

フェーリアスはまだ見ぬオルシア軍との交戦を夢見て興奮していたが、日々の疲れからかいつしか天幕のなかで眠りについていた……。

アーダルベルド・サターティア少尉は欠伸をかみ殺して暁闇の夜空を眺めていた。

明日にはノイシュバイン城が……ようやくこの不寝番からも解放され、城のベッドで惰眠を貪ることができるな……。

同僚の騎兵将校から聞いた話ではどうやら敵はほんの数千の小勢であるらしい。

四万もの大軍が現れたら遁走に移ることは確実である。

再びアーダルベルドは夜空に目を転じた。

暁闇とはよく言ったものだ。

夜明け前の朝焼けが始まる寸前の闇は底知れず深く暗い。

篝火に照らされた空間の先にはただ漆黒の暗闇があるだけだ。

大きく背伸びをしながらアーダルベルドはあと数時間後にはありつけるであろう朝食に思いをめぐらした。

しかし朝食のメニューが脳裏で描かれる前に、アーダルベルドの意識は永遠に闇に堕ちた。

「我世の理を知り理によりて音を滅す」

闇に溶けるように少年の囁くように甘い声が夜を震わせた。

491

アーダルベルドの胸に深々と突き立った矢は誤たず心臓を射抜いていた。

彼ばかりではない。

既に十人以上が暗闇からの狙撃者によってその命を奪われている。

しかし彼らの死に気づくものはいなかった。

断末魔の悲鳴も、もがき倒れこむ音すらも全ての音が何らかの力に

よってかき消されていた。

約数百メートルに渡って空いた歩哨の穴をまるで飛ぶようなスピードで軽装の男たちが行く。

相変わらず一切の音が失われた空間で、男たちは手振りだけで意思を疎通させ次々と夜営地の中に浸透していった。

「まずは即応兵力を潰させてもらおうよ」

声が空気を震わせぬのはわかっていたが別に誰に聞いてもらおうつもりもない。

ディアナは獰猛な笑みを満面に浮かべて騎乗した。

愉快だ。

全くたまらん。

これほど愉快的な戦はボストニア以来だろう。

まず後方拠点であるノイシュバイン城を狙う。

敵国に孤立する愚を犯すことのできないブリストルが救援に向かうのは間違いない。

そして城を餌におびき寄せたブリストル軍を疲労のピークで夜襲する。

要約すればこれだけのことだが作戦に無理はなく、ブリストルにすればおそろしくあしらいが難しい作戦行動に違いなかった。

城を落とされれば枯死は免れない。

敵中を行軍すれば疲労の蓄積も免れない。

しかも明日は戦だ、というタイミングでこの夜襲。

暁闇の時間帯は人間の脳がもつとも不活性化する時間である。

これはいかに睡眠時間を調整したり、緊張感を持続しようともなくすることが出来ない生理学的なものだ。

古今より夜襲が効果をあげやすい理由のひとつがそれだった。

「最高だ。あんたは最高だよ、真人」

闘神ディアナが抜剣して精鋭百騎とともに突撃を開始する。

その顔はまるで少女のように笑み崩れ、ここが戦場であるのを一瞬忘れさせようかと思われるほどだ。

しかし少女のような笑みを浮かべようともし瞬息に振るわれる鉄鎖は無慈悲にそして確実に敵兵の命を打ち砕いていく。

「哄笑する魔女^{ザミエル}……………」

昔語りに現れる純粋な子供を騙し哄笑とともに悪魔へと生贄に捧げる魔女の名を思い出した一人の兵士が呟いた。

そんな彼の目の前に胸当てしかつけぬ軽装の傭兵が小刀を振り上げて殺到する。

音を失った世界に、またひとりの兵士が倒れて消えた。

第四十四話

ブリストル軍の南方で始まった一方的な殺戮はすぐに全軍の知るところとなったが、知ることと対応することは全くの別物であることは軍を指揮したものなら誰でも知るべきことであった。

まず即応部隊以外は自分の装備を整えなくてはならない。

素手で生身の兵士などいくら数がいってもなんの戦力にもならないからだ。

そしてできつれば鎧の装備もするべきであった。

暗闇での戦闘は昼間における戦闘とは違って急所を外れた攻撃や混乱した味方の誤撃を受けやすいうえ、それを避けることも難しい。

ある程度の負傷を折り込むのが夜戦の常識であるからだった。

だが剣撃の響く喧噪のなかで冷静に装備を整えることは至難の技である。

末端の兵士ほど一人でいることに耐えられず中途半端な装備のまま仲間の姿を探して天幕を飛び出してしまうのが常であった。

そういつた衝動にかられる兵士たちを昼間同様の指揮系統に組み込むことはさらに難しい。

結局その場その場で指揮官は己の見える範囲だけの兵の指揮に専念せざるをえないというのが現状なのだ。

目が覚めたばかりの身体は筋肉がほぐれていないばかりか、いかに脳が覚醒したように感じていてもやはり認識能力が十全ではない。

ディアナの率いる傭兵部隊はそういった人間の特質というものを熟知していた。

戦にできればもつとも被害の集中しやすい方面に決まって投入される傭兵部隊は生き延びるための裏ワザとでもいうべきものを一人残らず知っている。

生理学な人間の特質もまたそのひとつだった。

「即応部隊の頭をつぶしたら手当たり次第に火をかける！」

無音の魔術が解けた戦場にディアナの大音声が響き渡る。

既に先刻よりの奇襲によって即応体制にあつた一万近い兵士たちはほぼ組織的な抵抗力を失っていたが、さすがに指揮官の周りにいた一部の兵は頑強な抵抗を続けていた。

いかに人数が多くとも、戦場の全体を把握できぬ夜戦において指揮の力は絶対である。

指揮官さえ倒してしまえば残るのは同士討ちすらしかねない烏合の衆のみであった。

「こいつあいい手柄首だわな」

マグレープは使い慣れた円月刀を手に手練の小隊を引き連れて奮戦する指揮官らしき男目掛けて呐喊した。

暗闇での乱戦にそこかしこでプリストルの兵が同士討ちを演じているが、ヴァーミリオンの兵に限ってはそんなことはない。

この数日間ずっと闇に目を慣らし、さらには全員にムスクの香りを焚き染めてある状態で同士討ちはありえなかった。

「早く次に移らないと姉御にどやされるんだ。悪く思わないでくれ」

殺そうとしている相手に悪く思わないもなにもないものだが、呟かれた言葉はマグレープの本心だった。

前段の理由のほうが大きいのは当然であったが。

「下郎が！貴様らの思うようになどいくわけが……………」

「いくんだな、これが」

神速の足運びでたちまちブリストル兵を一蹴する。

軽装の傭兵は速さが命だ。

常に先手を取り続けることで、敵の反撃を最小限にとどめ味方の被害を極限する。

そしておのおのが勝手気ままに動いているように見えてその実阿吽の呼吸で連携する傭兵たちの変幻自在な戦い方はブリストル兵を戸惑わせるには十分すぎた。

闘神ディアナがオルパシアの地を踏む以前……傭兵たちの指揮を委ねられていたマグレープ・ベルカ・ジェライル、通称幻惑のマグレープの名が伊達ではないことを血しぶきをあげて折り重なるブリストルの兵士たちが証明していた。

「こんな……こんな馬鹿な話があるか！」

困惑の極みに達したブリストルの指揮官が悲鳴にも似た叫びをあげる。

目の前の現実が信じられない。

自分たちブリストル帝国軍はヴァーラム・マレーヤ・メイファンと
いった王国に一度として敗れることなく大陸最強の名を欲しいまま
にしていたはずではなかったか？

つい先ごろオルパシア軍でさえも鎧袖一触に葬りさつたはずだ。な
のにこんな盗賊同然の連中に好きにされることなどあってたまるか！

499

………悪いが答えてはやれんわな

手品の種を明かす手品師はいない。

既にポツリポツリと幾多の天幕に紅蓮の華が咲き始めているのを見
てマグレープは踏み込みの速度を上げた。

舞い踊るかのような曲線から直線へ

そのあまりの切り替えの早さに一瞬マグレープの姿を見失う。

……あんなところにいたか！

何故マグレープの姿を空から見下ろしているのか、ということには
気づかぬままに暗闇に舞い上がった首は永久に意識を失った。

うつすらと東の空があけかかっても、ブリストル軍の混乱は一向に
終息の気配をみせていない。

天幕にかけられた炎が効果的にブリストル軍の再編を阻害していた。

高度に組織化された兵は組織の枠組みをはずされたときに脆い。

強兵であるはずのブリストル軍がいまだに効果的な反撃ひとつ行え
ないことの理由のひとつがそれだった。

速さを身上とする傭兵たちの軽快な動きも見過ごせない。

奇襲が成功したとはいえ、実際の兵力で十分の一でしかないのは事実である。

決して停滞しない傭兵たちの速やかな行動がブリストルにまだ実数を把握させていないのだった。

「大陸最強が聞いて呆れるね！歯ごたえがないっいたらありゃしない」

ディアナの罵声を浴びたブリストルの将の一人が激昂して撃ちかかる。

しかし徒士のうえ獲物が剣ではディアナには近づくことすら難しい。

肩にかけられた鉄鎖が一筋の閃光となって投擲されたかと思うと、まるで柘榴のように男の顔ははじけて飛んだ。

暗闇ではたださえ見えにくい投擲武器であり、そのうえさらに漆黒に塗られたディアナの鉄鎖の先には同じく漆黒の人の掌ほどもありそうな巨大な分銅が結ばれていた。

分銅がひとたび当たれば爆発したかのように人の部位が宙を舞う。

首が、腸が、もはやどこの部位かすらわからない肉の塊が飛び散る様は兵士たちを恐怖のどん底に叩き落とす。

残虐なようではあっても、重量武器ならではの凄惨な傷口は兵士の士気を著しく阻喪させることをディアナは経験から知っているのだ。った。

……さあお逃げ、そして案内しておくれよ。あんたたちの親父さんのところへ

手を焦がす炎

死神を思わせる漆黒の女神

いつしかブリストル兵の逃げ惑う姿の中にひとつの流れが出来始めている。

その先には自分たちが狙う大物が息を潜めているはずだった。

「また私に格好いいところを見せておくれ……………ダーリン」

戦場を駆ける高揚と恋情の昂りがこれほどに甘美なものであったとは……………

官能の火照りに頬を染めながら熱い吐息を吐くと、再びディアナは

鉄鎖を閃かせる。

ぐしゃりという破砕音とともに唇を彩る返り血のしづきがディアナの下腹部を疼かせる陶醉をより深くしていた。

どこの誰かは知らんが見事な用兵だ。

フェーリアスは自軍が畏に落ちたことを正確に悟っていた。

確かオルパシアには闘神ディアナとかいう傭兵がいたはずだがその者の機知だろうか。

おそらくはほんの数千でしかない軍勢でここまで我が軍を圧倒するとは恐ろしい采配といわねばなるまい。

だが……………

「ブリストルを嘗めてもらっては困る」

味方の悲鳴と怒号を無視してただ黙々と再編された軍勢……その数一万。

それが残る三万の兵たちを見殺しにして整えられたフェアリアスの手勢の全てだった。

おりしも東の空がだいぶ白み始めていた。

奇襲によって実態のしれなかった敵の正体が割れる時が近づいている。

整然と武威を取り戻した味方の姿に、敗残の兵たちが助けを求めて雲霞のごとく取りすがってくるがフェアリアスの手勢はそれを傲然とはねつけた。

「戦神ストラト様の下僕たるものがなんたる失態！なんたる無様！汝らに恥じる心あらば今一度剣をとりて死戦せよ！」

味方すら斬りつけようか、というフェアリアスの獅子吼に逃げ惑っていた兵士たちは急速に戦意を回復させていく。

古来より先頭に立った指揮官の鼓舞ほど兵士たちの戦意をかきたてるものはないのであった。

軍勢の先頭に馬首をすすめ敢然と胸をそらせたフェーリアスの姿は
一幅の絵画のように美しい。

稜線から射し込む朝やけの光が否が応にも兵士たちの胸を熱くたぎ
らせた。

「見よ！あの朝焼けを！いまや奴らの詐術は解け真実が明らかとな
る。我らブリストルの勝利という真実が！」

これほどの被害を出しておいて勝利の美酒など味わえようもないが、
少なくとも兵にとっては目の前の敵を退けることこそが勝利なのは
間違いない。

何よりも大事なことは負け戦に折れかけた兵士たちの心に勇気と誇
りを取り戻させるということだ。

フェーリアスの大呼が猛り立つ一筋の奔流となって全軍が反撃に移
ろうとしたまさにその時、死神は現れた。

「御見事な言、真に感服仕った。されど貴殿と戦場で巡りおうたは
浮世の縁。お命頂戴仕る！」

フェーリアスが軍勢の先頭に姿を現す時こそ真人が待ち望んでいた時であつたのだ。

ただ一騎

いまだ顔立ちに幼さを残した少年がただの一騎で駆ける様に誰もが呆然としていた。

とうていあり得ざる事態

自殺行為といつていい事態に憐憫とも嘲りともいえぬ感情が兵士たちの胸に去来する。

とはいえ敵は敵、まさか最高司令官の御手を煩わせるわけにもいかなぬ。

護衛の騎士がせめてもの慈悲に一刀で……と進み出た瞬間、真人の剣が振られた。

「我世の理を知り理に依りて斬を飛ばす、斬り裂け」

騎士の身体が出来の悪い人形のようにバラバラに解体される様に彼らは己が敵を見誤っていたことを知った。

「魔術師か……いかん！大将閣下を守りまいらせよ！」

騎士たちが槍襖を形成し魔術師たちが防御呪文を唱え始める。

だが全ては遅すぎた。

……ここまで手のうちか……まったく全てに上を行かれた
わ……

「少年、名をなんという？」

「中御神真人……縁あってオルパシア王国を守護するものなり」

この若さにしてなんたる矜持か！一人をして国家の守護者を名乗らしめるとは！

……よかるう、武人の本懐である。

フェアリアスは大剣を空中を飛ぶように突き進む真人に向かって振り上げた。

願わくばプリストルの勇者たちに少年を打ち倒す神のご加護があらんことを………！

膂力の限りを振り絞ってふるわれた剣は、誤たず真人の胸に吸い込まれたかに見えた。

しかし手ごたえがフェアリアスの知覚を震わせることはない。

真人の残像が消えたとき、満足気な表情を浮かべた歴戦の宿将は、四十年近い軍歴に終止符を打った。

第四十五話

フェーリアスの戦死とともにプリストル帝国軍の崩壊は決定的となった。

しかし絶対数に劣るヴァーミリオンは夜明けとともに北方に向けて避退して無理な追撃を控えた。

彼らの戦略的目標は既に達成されており、いかに戦果が見込めるとしても無駄な犠牲を払わせることは傭兵の流儀ではなかったからだ。幸運にも殺戮の夜を生き延びた帝国軍がノイシュバイン城に逃げ延びたとき、そこで彼らを待っていたのは灰燼と帰した食料庫であり、炎に巻かれた傷跡の生々しい外郭陣地であった。

傷つき果てた彼らを癒す食料も医薬品もベッドも、全ては一握の灰と成り果てている。

死者四千名、重傷者八千名を出した未曾有の悲劇はいまだ終わる気配を見せてはいなかった。

陽気な男たちの笑い声がこだましている。

ヴァーミリオンの兵士たちはフサゴデラスの街で戦勝の祝いに酔っていた。

もちろん入念な索敵と哨戒はおこなわれていたが、ブリストル軍が反転攻勢に打って出る可能性は皆無に等しかったしこういった勝利の報奨は軍律を維持していくために必要なことでもあったのだ。

それにしても空前の快挙である。

現にフサゴデラスの自治長も迂闊には信じようとはしなかった。

南部が実質的にブリストルの占領下にある以上無条件にオルパシア軍を引き込めばどんな報復を受けないともかぎらない。

しかし国籍を超えて活動する隊商や斥候の情報が入るにつれ、この異形の軍隊がブリストル軍を叩きのめしたということが明らかとなってきた。

解放と勝利を確信したとき街は歓呼の嵐に包まれたのだった。

「シラデイス・レルドリン・ケルダーの街に使者を送れ！いっこくも早く解放の報を報せるのだ！それぞれの長にも早急に戦勝の挨拶

に参るよう申し伝えよ！商會に祝賀の準備を急がせるのも忘れるな
！急げ！」

フサゴデラス自治長フラグラス・ノイン・シュバリエは喜色も露わ
に盛大なヴァーミリオン歓迎の準備に入った。

このまま収穫期に入れば豊富な食糧はただ、ブリストルに収奪され
るに終わったであろう。

南部の穀倉を商いの主力にしているフサゴデラスの商會にとつても
死活問題であつたのだが思いもかけぬ天の助けでそれも杞憂に終わ
りそうであつた。

それにしても何たる僥倖であることか！

ケルドランの英雄の名は聞き及んではいたがまさか直接南部に赴く
とは考えても見なかつた。

切り札はそう容易く切られるものではなからだ。

それにブリストル軍の練度の高さや士氣の高さを目にしたフラグラ
スの胸にはオルパシア軍がそう容易くブリストル軍を排除できまい、
という予想があつた。

あの精強をもつてなるプリストル軍をいつたいどんな魔法を使ったから四千人以上の連隊が撃破できるというのか！

今回の戦が王国に及ぼす影響を考えた結果、フラグラスはひとつの結論を出した。

それはあの救国の英雄

不敗の指揮官にして立志伝中の人物

マヒト・ナカオカミ・ティレース・ノルド・スエレンベルグ子爵の歡心を買うのは今だ、ということであった。

街をあげての祝賀の祭典は夜になっても活気が衰えるどころか増すばかりであった。

商会の商人たちも自らを破産の危機から救ってくれた英雄に対して多少の散財は惜しむところではない。

大量の酒がただでふるまわれ、その宴に惹かれて周辺の街からも大量の人々が流入する。

フサゴテラスの街は人口に数倍する来訪者に溢れかえっていた。

「それにしても……………旦那の非常識には呆れるねえ……………」

傭兵の一人がエールを呷りながら笑う。

冗談にまぎらせてはいるがその声は好意と崇敬に満ちていた。

「ま、普通の人間はたった四千でノイシュバインまでいこうとは考えんわな」

ケルドランでの戦いからわずかに数週間……………傭兵たちの中で真人に対する評価は最上級のものとなっていた。

本来勝手気ままで無頼なはずの彼らに忠誠心すら植え付けようかというほどに。

もつともそれは真人の圧倒的な武量や卓抜した戦術眼ばかりでなく少年らしく純粹でひたむきな心のありかたに負うところが大きいのかもしれなかった。

そのころ主賓である真人とディアナはどうしていたかという……………

地元の名士たちから次々と歓待を受け対応に追われていた。

そんななかで偵察に出していた斥候から新たな報告を受けてもいる。

それはなんとも表現しづらい苦い内容の報告だった。

主力の撤退のため、殿を任されたマティアス率いる五千名の兵団は固い方陣を組みながらゆっくりと南下していたが、それに対するオルパシア軍の対応は拙劣の一言につきた。

まず第一に出戦のタイミングが遅れた。

突然兵員の八割が姿を消し、残り一万の軍勢が避退していく理由を疑っていたからだ。

何らかの罠があるのではないか……………？

そうした疑いを捨てることができずにオルパシア軍の出戦は遅れに遅れた。

ようやく罠のないことを確信したオルパシア軍だが、今度は逆に甘く見すぎてブリストルの精兵に何の工夫もなく攻撃をし始めた。

いかに兵力に勝つていようと十分な士気を保った方陣を崩すことは難しい。

怒涛のごとき攻撃をブリストルの将マティアスは巧妙な指揮で見事に捌ききった。

それどころか、追撃の行軍で疲弊していたオルパシア軍に対して逆襲にすら転じて見せた。

油断していたところをあつさり中央突破されたオルパシア軍はあわや全軍崩壊か、という危地に立ったものの、予備隊五千がどうにかブリストル軍を押し返しかろうじて敗北を免れるという有様だった。

予備隊の全てを使いきったオルパシア軍に残された手段は総力戦以外には残されていなかった。

お互いに兵を消耗させることは承知で戦いを継続すること二日……

遂に流石のブリストル軍も軍を維持することができずに崩壊……
ノイシュバイン城にたどりついた敗残兵は千名に届かなかったという。

しかし、ブリストル軍四千名の損害に対し、オルパシア軍の受けた損害というのが目を覆わんばかりのものだった。

死者四千名、重傷者六千名……死傷一万である。

今回のブリストル軍の被害が死傷一万六千であることを考えても、先の被害を足すとまだまだオルパシアの損害が上回っている計算であった。

「方陣に真っ向からぶつかる馬鹿があるかい……………」

ディアナのつぶやきに真人も苦笑して首を振ることしかできなかつた……………。

真人なら軽装騎兵に攻撃を反復させ、長槍兵は牽制にして正面からはぶつけず弩を主戦兵器としたらろう。

時間はかかったかもしれないが、それならば味方の犠牲はほとんど考慮にいれずにすむ程度のものになるはずだった。

517

「まこと残念なことではございますがもはや心配はありませんまい。こうしてケルドランの英雄殿においでいただいたからには！」

シエラが青筋を立てて怒りそうな台詞だな……………

真人にも出来ることと出来ないことがある。

しかし今は出来ると思わせておくことが、真人たちの利益に繋がる

のだ…………。

しきりに真人を持ち上げ歓待のかぎりを尽くした宴も深更には終わり、街にはまだ飲みたりぬ兵が徘徊していたがほとんどの人間は宿舎に引き上げて寝所に疲れた身体を横たえようとしていた。

それは真人とても例外ではない。

街一番の瀟洒な宿屋の一室に足音を殺して偲ぶ影がある。

「ぐぶ、ぐぶぶぶぶ……………」

怪しすぎる笑い声を漏らしながらディアナは真人の部屋へと向かっていた。

いっそ宴席で真人に抱きつきその唇を吸ってしまいたい！と何度思ったことだろう。

もはや全身を駆け巡る熱い火照りを冷ますには真人に抱かれる意外の手段はありえない。

この際真人がどう思おうとも押し倒す覚悟をディアナは決めていた。

いかな真人でも木石ではあるまい。

シエラやシェリーのような乙女ならともかく、自分は今のところ真人をとりまく女性陣のなかではただ一人の非処女である。

ならば彼女たちとは違った付き合いかたが許されてしかるべきであった。

具体的には………むふっ………むふふふふ／／／

そして今夜、ディアナの手には秘密兵器が握られていた。

ドルゴンの名酒である。

南部に名高い口あたりの甘く爽やかな酒で酔いの周りが早いことでも知られていた。

この作戦のために宴の間中、真人には酒一滴も飲まさなかったのである。

真人には悪いが葡萄の絞り汁で我慢してもらっていたのは真人のあ

る癖をアリシアに知られるわけにはいかなかったからだ。

真人が酒乱であり、天然ジゴロぶりが爆裂するということを知っているのはシェリーと自分だけの秘密であった。

こんな美味しい情報を他の女に報せることなどありえない。

そして今この場にいるのは自分ひとり……シェリーは遠く北の彼方である。

……悪く思わないでくれ……女の戦に手加減は無用なのだからね

……

真人の部屋の前に立つと下腹部の疼きが強まったように感じる。

……落ち着くんだよディアナ……狩りの基本は身体は熱く、頭は冷たくさ……

第四十六話

ディアナが失意と嫉妬の絶叫をあげた後のアリシアの慌てぶりは尋常なものではなかった。

そもそも叫び声を聞くまでディアナが入室したことすらわからない蕩けぶりだったのだから無理もないが。

「ここここここ、これ、これは違うんです！わわ、私はこんな展開を期待していたわけではなく！ただ、真人様にくつろいでいただこうと、それだけで……………」

そして何やら支離滅裂な言い訳を始めている。

抜けがけをしようとしたわけではない。

自分はそんな邪な感情を抱いているわけではない。

私は真人様の副官、真人様を気遣い、真人様に奉仕するのは任務なのだからと。

「期待してなかったの？」

どこまでも優しい口調で真人に問われるとアリシアの理性はたちどころに決壊した。

「もちろん期待しておりました！」

言ってしまった後にしまった！と思ったがもう遅い。

フサゴデラスの地に紅い死神が降臨しようとしていた……。

「……………ずいぶん楽しそうじゃないか、中尉……………」

口元は笑っているが瞳は既にどこか遠い世界へ逝ってしまっている。

「名酒を楽しむためには安酒には手を出さないことさ……私は眞人と飲みなおすから……そろそろお寝むの時間じゃないかい？嬢ちゃん」

「残念ですがまだまだ夜はこれからですわ……貴女こそゆっくと寝て疲れを癒したほうがよろしいかと」

暗に年増と皮肉られてディアナのこめかみに血管が浮いた。

そうかい、そっちがその気ならあたしにも考えがあるよ………！

526

「……傭兵が疲れるのは平和にだけさ。嬢ちゃんこそ、早く寝ないと育つものも育たないよ？」

「……づぐっ！」

ディアナのひとことはアリシアのコンプレックスを正しく一撃した。

一部の偏った嗜好を持つ人間を除けば、やはり巨乳は正義であるのはアリシアにも否定し難い事実なのだ。

「ぐぐ、軍人たるものそんな見苦しいものをぶらさげてはいけません、というときお役に立てませんので……………」

私はまだ垂れてなんかいないよ！

「そこをなんとかするのが軍人の腕っつて奴さ。なんせ私たちや軍人である前に女なんだからね……………」

それは私が女として魅力がないとでも！？

一触即発の不可視の火花が飛び散るなか真人だけがご満悦な笑みを浮かべていた。

……女の子がいるとやっぱり華やかだなあ……

もはや何も言ひまい。

女の戦いは熾烈だった。

「まったくなんだい？この大平原は」

ディアナが起伏の少ないアリシアの胸を撫であげると

「そういう貴女こそ最近お肉がつきすぎじゃありませんかしら？」

アリシアがディアナのお腹をつまみあげる。

お互いに相手の気にしている急所を本能で見分けているあたりは軍人としての性が影響しているのかそれとも女の情念がそうさせるのか……………。

酒が進みだすにつれて事態はさらに悪化の様相を見せ始めた。

「ねえ、真人、どうだい？こんな余所じゃ味わえないだろう？」

ディアナがその豊満な凶器を真人の肩口にあててぐりぐりと擦りつけ始めたのだ。

ぐにやりぐにやりと変幻自在に揺れ動くそれは、まさに圧巻というほかはない。

「くっ……………」

アリシアが唇を噛みしめる。

彼我の戦力差は圧倒的だ。しかし、女には負けるとわかっていても戦わなければならぬ時があるのであった。

「真人様……………小さな胸はお嫌いですか……………？」

アリシアはなんと真人の手を握るや自らの胸を握らせるといふ暴挙にうってでた！

小刻みに真人の手を動かし、熱く艶めいた溜息を漏らす様子は明らかに確信犯である。

胸の戦力差を見事なまでに妖しくいささかアブノーマルな色気が力バーしていた。

「ちよいと！そんな貧相なもの真人に押し付けてんじやないよ！」

「貴女こそ、そんなでかい図体を真人様に押し付けなさいください
！」

「なにさ！」

「なによ！」

「二人とも……………今はこの時と酒を楽しもうよ……………」

「はは……………はひ……………」

真人にひとりずつ抱きすくめられ頬にキスを落とされると、流石の二人も怒りのボルテージを維持するのは不可能なのであった……………。

しかし経験と器の差はなかなか気合だけでは埋まらないものがある。

「ふにゃあああああ……………」

アリシア号轟沈

甘いわね嬢ちゃん。

酒は飲んでも飲まれちゃ負けなのよ！

いったい何杯の酒杯をあおつたろうか数える気も起きない。

ただ酒豪ディアナを相手によくねばつたということだけは言えるだろう。

ディアナの計画では真人もほどよく酔いつぶして既成事実を作ってしまう予定だったのだが……………。

「あれ？アリシアさん、こんなところで寝たら風邪をひくよ……………」

まったく酔った気配のない真人がいた。

……ありえない、二人がかりで私たちの四倍は飲ませたのに……

規格外の戦闘力を持つ真人は酒の強さも規格外であった。

しばし呆然としたディアナであったがそこは果断の将、作戦を修正して強襲をかける決心を固める。

景気つけにまた一杯の杯をあおると、ディアナは真人にむかって果敢に挑みかけた。

「ねえ真人………お願いがあるんだ、聞いておくれよ………」

素肌も露わな下着同然の姿を強調しつつ真人ににじりよる。

「ディアナの頼みなら、いつなりと」

真人の真摯で無垢な微笑みに見つめられると途端に決心が鈍り始めるが、ここは我慢のしどころだった。

ここで一步抜け出しておかなくてはディアナの戦いは先の展開が厳しい。

具体的には主に年齢が。

「あの晩……血臭を存分に吸ったあの夜襲の晩から……私の身体の奥から疼きが消えないのさ……真人にも経験はないかい？戦場で戦ったあとには、なんだかむしろように人肌が恋しくなったりしたことは？」

いかんせん真人にそういった精神的高揚は経験がないが、知識としては理解できる。

戦場で命をドブにさらした人間は決まって性欲が増す。これは種としての防衛本能が働くからだ。

戦慣れして豪胆なディアナのその例外ではないということなのだろ
う。

「ねえ、真人……早くこの疼きを鎮めておくれ……私の熱くなっ
たここを……慰めておくれよ……」

羞恥に顔を朱に染めながらも、ディアナは誘惑の手を休めようとは
しなかった。

ことさらに己の秘所を強調し、潤んだ瞳を真人に向ける。

死ぬー！死ぬー！恥ずかしくて狂い死ぬー！！！！

内心では慣れない媚態に絶叫していたのだが。

「可哀そうに、そんなに疼いていたなら早く相談してくれれば良か
ったのに……」

こともなげに真人はディアナの後頭部をつかんで抱き寄せるとやさしくディアナの顔中にキスの雨を降らせた。

勝った……………！

これまで経験したどんな戦も、今ほどの達成感を感じたことはあるまい！

ディアナはめくるめく甘い陶醉に身を任せ、自分が賭けに勝ったことを確信した。

「少し強めにいきますよ」

「えっ？」

疑う暇もあればこそ、かつて経験したことのない官能の洪水がデアナのなけないの理性を一瞬で遠い彼方へと奪い去って行った。

「ひゃああああああああああああああああああん」

その一瞬で何度絶頂に達したかわからない。

およそ考え付くことすらできない絶頂の荒波をもてあまし、ディアナはたちまちのうちに気を失ったのだった……………。

仙道から中御神に取り入れられた房中術とは、ようするに体内の気を使って相手を絶頂させ、その絶頂時の純度の高い気を奪うための術である。

女性の快感を操り絶頂に達させることは真人にとっては気の遠くなるほど修行で繰り返し返したごく当たり前の術でしかないのだった。

「これからは疼きを感じたらいつでも言うてくださいね」

真人の言葉がディアナに届くはずもないが、少なくとも今後ディアナが真人を押し倒そうとすることだけは無いように思われた。

人間という動物は痛みには耐えられるが、快感に対する耐性は存外に少ないのだ。

抵抗しようのない圧倒的な快感は性経験のあるディアナですら快感以上に恐怖を心にすりこまれるほどであった……………。

そんな真人の様子を興味深く見守っている天空の目がある。

「むむむむ………なかなかやる………しかし愛の神の名に懸けて
わしも負けはせぬぞおおおお！」

「いやあああああん」

他にすることはないのでらうか？

第四十七話

「まったくなんかならんのか？あの男は！」

マンシュタイン公爵は思うようにならぬ政治状況に憤懣をぶちまけていた。

全てはあの忌々しいマヒト・シエレンベルグの登場から始まったことである。

相次ぐ鮮やかな勝利に王都の評判もつなぎのぼりにあがっておりで爵位を伯爵に進めるべきだ、という意見さえ取りざたされる有様だった。

あんな氏素性の知れぬ男に王国の中樞を担わせるなどあってはならぬことなのに………！

「このままアナスタシア令嬢と結婚してシエレンベルグ家を継ぐようなことになりますと侮りがたい勢力に………あるいはハースバルド家の令嬢という場合もあります。いささかあの男を侮っておりますな………」

甥のルーデンドルフ子爵が困惑した声で答える。

確かに侮っていた。

シエレンベルグやハースバルドに用意された駒とはいえ、たった一人の男になにほどのことができると思っていた結果がこれだ。

このままオルパシア王国が勝利するようなことがあれば、名誉あるマンシュタイン家の権力が衰退してしまうことすら考えられる。

何ら貢献らしい貢献もしていないのだから当然であろう。

現実にマンシュタインの危惧していたとおり、宮廷内において軍部が権力を占める機会が増加しているのである。

こうしてみると軍部の掌握に失敗したのは実に痛い失策であった。

「急ぎあの男の素性を調べる。交際関係や出入りする業者まで細大漏らさず調べるのだ………！」

「ようシエラちゃん！今日はいい鳥が入ってるよ！」

「あまりもんだが、この蕪持っていつてくんな！」

「プリムちゃんにこのお菓子を持ってつておあげ！」

いつの間にか市場で大人気のシエラであった。

ことの発端は市場でもハースバルド家筆頭メイドとして有名人だったシエリーに買い物のコツを教わっていたときに、シエラが真人に仕えるメイドだということがばれたことである。

ケルドランの英雄の名は市場でも知らぬものはいなかった。

救国の英雄を支える美少女メイドの噂はたちまち市場中に広がっていったのである。

……明日にはご主人様が戻って来てくれる！！

それを考えるとシエラは思わず踊りだしそうほどの高揚を感じる。自然顔に笑みが浮かび、その愛らしさがまた市場の人々の格好の憩いになっていた。

ごちそうのメニューを考えることで忙しいシエラの頭は、時折鋭い視線を向ける数人の男たちの影に気がつくことはなかった。

……………他人の空似ではないのか？

シエラを尾行していたものの一人はかつてメイファン王国に潜入したこともある腕利きであった。

先ほどから見ている無防備なメイドは見れば見るほどメイファンの巫女姫に酷似しているように思えるのだ。

しかしそうであるなら何故マヒト子爵のメイドなどをしているものが説明がつかない。

もはや最後であろうメイファン王国の生き残りである。

要人中の要人として各国の保護を求めることが可能であるはずだった。

……これは確かめる必要がありそうだな……。

幸い確かめることについては格好の人材に心当たりがある。

メイファン王国の亡命者、オズヴァルド伯爵が主の屋敷に逗留していたのだ。

「開門せよ！我々はマンシュタイン公爵家のものである！速く開門せよ！」

翌朝屋敷を喧騒が包んだ。

使者としては、こんな貧乏だったらしい屋敷など門を開けさせるまでもないと考えていたのだが真人の施した魔術防壁のために一歩たりとも屋敷に踏み込めなっていたのである。

「……………隠れていなさい」

アナスタシアは事態を正確に洞察していた。

おそらく、どういう経路からかはわからないがシエラとプリムのこととがマンシュタイン公爵にばれたのだろう。

いまや王国で知らぬものない英雄となりおおせた真人の情報を、あらゆる階層のものがやつきになって調べていることをアナスタシアは知っている。

真人のアキレス腱を抑えると同時に政治的カードに使える二人の存在が露見する可能性は十分にありえたのだ。

もちろん二人をおとなくしく差し出すつもりはアナスタシアにはない。

それでなくとも生活を共にするうちに三人は姉妹同然の仲になっていた。

真人のことに関しては三人とも譲る気はさらさらなかったが。

「当家に朝からいったい何用か？」

扉が開かれえてまずアナスタシアがいきなり応対したことに使者は戸惑いを隠せずにいた。

メイドの素性を確かめ、機があれば連れ去ることを主人に命じられているがシエレンベルグ侯令嬢がいることは任務にとって重大な障害であつたからである。

「こちらにメイファン王国の姫巫女がおわすとの情報を得まして……オズヴァルド伯爵が是非にお会いしたいと申されているのですよ」

「シエラフィータ様とプリムローゼ様を出せ！隠し立てするとためにならぬぞ！」

武装したままのオズヴァルドが凄んでみせるがアナスタシアは怯むどころか敢然と反論した。

「礼儀知らずな蛮人に家人を引き合わせる気はない。それが王国外務卿シエレンベルグの娘たる私に対するメイファン王国の礼儀か！」

公爵の使者は苦りきった顔でアナスタシアに詫びざるをえなかった。オズヴァルドの態度はとうてい亡命貴族がとるべき態度ではない。ましてここでシエレンベルグ卿を全面的に敵に回せば公爵にどんな制裁を受けるかわかったものではないのだ。

……………そうした政治的駆け引きの全く通じぬ男がいた。

とうのオズヴァルド伯爵その人である。

彼の心は拠り所を求めていた。

メイファン王国の危機に家財を持ち出して真っ先に逃げ出した負い目、彼をそこに追い込んでいたのであった。

皆殺しにされた縁者たち

なぶり殺しにされた主君

冷たい視線を隠そうともしない残存勢力の戦士たち

裏切り者！卑怯者！売国奴！

誰もが自分に軽蔑の視線を送っているという妄想を振り払うことが出来ない。

……それは違う！私は祖国を救うためにあえて離れ機会を待ったのだ！その証拠に私はメイファンの地を再び取り戻して見せる！

我が身可愛さに逃げ出した過去を塗り替えるためには実績が、あるいは権威の保証が必要だった。

たとえば大神殿の巫女姫にメイファンの正統が自分にあることを保証してもらおうというような。

「これはメイファン王国の問題なのだ！女風情は引っ込んでおれ！」

やにわに剣を振り上げるとオズヴァルドはアナスタシアを押しつけ奥座敷へと突進した。

さすがのアナスタシアもこれには逆らう術がない。

抜き身の剣にアナスタシアの豪華なドレスが切り裂かれ、たまらずアナスタシアは悲鳴をあげて倒れ伏した。

「アナスタシア様！」

悲鳴を聞いて黙って隠れていられる二人ではない。

土間の壁を取り払って駆けつける二人を見つけてオズヴァルドは狂喜した。

「おおっ！お探しいたしましたぞ巫女姫様！もはやなんの心配もいりませぬ。私とともに祖国を取り戻しましょうぞ！」

「下がるがよい！下郎！」

シエラの怒号にオズヴァルドは凍りついた。

今この娘はなんと言った……………？

「大丈夫ですか？アナスタシア様！？」

「大丈夫？お姉ちゃん？」

気遣わしげな二人にアナスタシアは苦笑を禁じえなかった。

人として二人のとった行動は正しいが貴族としては落第である。

この二人がメイファン王国最後の王位継承者というのは何かの間違
いという気がしてならない。

……ようやくシエラに拒絶されたのだということがオズヴァ
ルドの脳に浸透し始めていた。

このオレを下郎と呼んだ！

国を滅ぼした巫女の分際でおレを拒絶するのか？

お前たちがしつかりしていればメイファンも滅びずにすんだものを
………！

「ふざけるな！ふざけるな！ふざけるな！」「ふざけるな！ふざける
ふざけるな！ふざけるな！ふざけるな！ふざけるな！ふざける

な！ふざけるな！ふざけるな！」「ふざけるな！」

どいつもこいつもオレを馬鹿にしゃがって！

「お前らは黙ってオレのことを聞いていればいいんだ！どうせ何の力もない巫女なぞ誰も必要などしないのだからな！」

妄執に自制心を失ったオズヴァルドはもはや暴力をためらうつもりはなかった。

オズヴァルドの合図に配下の兵たちが三人を取り囲む。

武装した兵士八名がシェラたちを連行しようと手を伸ばしたそのとき兵士たちは不可視の刃に切り裂かれ昏倒した。

「終の式、大和推参」

気がつけば風変わりな民族衣装に身を包んだ少年がシェラたちをかばうようにして立ちはだかっていた。

ほんの一瞬の出来事だった。

兵が手を伸ばしたところまでは知覚している。

わずかに風がそよいだような気がした次の瞬間には全ての兵が地に伏せていた。

「こんな……こんな馬鹿なことが…………！」

何故だ？何故どいつもこいつもオレを否定するのだ？

そんな無法な思いを抱きつつも抵抗する勇気をオズヴァルドが持つはずもない。

「………なんと無礼な！我が公爵家に手をあげて無事にすむと思つな！」

使者の男は厚顔にも責任を目の前の少年に押し付けることで目的を果たそうと目論んでいた。

というよりそれで押し通す以外に方法がなかった。

目撃者がアナスタシアだけなら証言者の多いこちらが有利だ。

マンシュタイン公爵の権限をもってすれば司法がどちらを味方するかは明らかだったのだ。

「無礼はどちらだ……………?」

まったく予想もしない第三者の発言に使者の男は慌てて振り返った。

その先にはいてはならない人物がいた。

「……………剣をもって婦女子を囲むのがマンシュタイン家の礼儀とでもいうのではあるまいな?」

オルパシア王国第二王女アリエノールとハースバルド伯爵令嬢ルシアの姿がそこにいた。

どうやら罫に落ちたのは自分たちであったようであった。

「間に合ったようで良かった」

………そしていつの間にか大和と名乗った少年が真人に替わっている。

「ご主人様！」

「お兄ちゃん！」

「真人！」

三人は思い思いに抱きついて再会の喜びに浸ったのだった。

「……………ずるい……………」

王女を連れてくる役割を担った自分も真人に抱きつきたいのに……………

貧乏くじを引かされたルーシアはお冠であった。

第四十八話

「間に合ってよかったよ……………」

真人に頭を撫でられてシエラとプリムはご満悦だった。

アナスタシアとルーシアも真人にキスを落とされて見事に腰が砕けている。

だが、そんななかで全く真人を意に介さないひとりの女性がいた。オルパシア王国第二王女アリエノールその人である。

「厄介なことになったものだな、マヒト卿」

真人はアリエノールの言葉にうなづくほかなかった。

事態はこれで終わったわけではなくむしろ始まりなのだから。

「まさかメイファンの王族がこんなところにいるとは思いもしなかったぞ…………… いったいなんと行って父上に告げたものか……………」

アリエノールの言葉に無視できない響きを感じてアナスタシアは尋ねた。

「陛下の保護をいただくわけには参りませんか？」

そのためにアリエノールを呼び寄せたのではなかったのか？

安易に味方だと信じてしまっていたが、アリエノールといえば王国でもその聡明さを知られた人間である。

シエラたちに利用価値を見出したとしても不思議ではない。

「少なくともこのままマヒト卿の屋敷に置いておくのは無理ね。門閥貴族もだけど、まずメイファンの残党たちが放っておくはずがないわ。下手をすれば」

メイファンの残党軍がオルパシアの敵に回ってしまうでしょう。この亡国の危機に父上がそれを許容するとも思えないし……」

アリエノールに言われてみればそのとおりであった。

メイファンを復興しようとするものたちにとって巫女姫ほど旗頭に相応しいものもないであろう。

彼らにとってオルパシア王国への忠誠心などあるはずもない。

あるのはただ、援助と見返りとしての武力の提供という打算関係があるだけだった。

「……………どうして放っておいてくれないんですか……………！」

ようやく手に入れた幸せを阻もうとする妄執にシエラは叫ぶように言った。

どうして誰も彼もが望んでもいない巫女姫に戻そうとするのか。

「放っておかれて本当に構わなかったのか？シエラフィータ殿。巫女姫でないお前がどう扱われたか忘れたわけではあるまい？」

シエラは愕然とした表情でアリエノールを見返した。

自分たちが奴隷として余命いくばくもなかったことを、どうしてこの王女は知っているのか？

同時に気まずそうに視線をそらすルーシアがいた。

どうやら彼女が機密の漏洩源であるらしかった。

「……………それでも真人様は私を救ってくださいました。巫女姫などではない私自身を」

「なるほど、そうであろう。では巫女姫であるシエラフィータは誰が救うのじゃ？」

虚を衝かれてシエラは絶句する。

巫女姫である私？

無力で偽りの仮面をかぶった私をいつたい誰が救ってくれるというの？

「過去は変えられぬよ、シエラフィータ殿。お主が巫女姫であった事實は変わらぬのだ。たとえお主が将来的に巫女姫の業を捨てようとしていてもな。

巫女姫であった自分をそう拒絶せずに受け入れてやるがよい。まずはそこから始めねばお主はただの駄々っ子とかわらぬぞ」

アリエノールの言いたいことはシエラも理解できている。

だが、それを許容することは難しかった。

それを認めてしまつては今の幸せが失われてしまつとわかつていたから。

「たとえどんな者が敵に回ろうともシエラとプリムはオレが守るよ、約束する」

気がつけば真人が力強く右手を握り締めてくれていた。

この手があるかぎりなにも恐れるものはないような気がしてくる。

真人のぬくもりさえあれば……………。

そう考えて唐突にシエラは気づいた。

そうか……………なんのことはない、自分は真人を失うことを恐れていただけだったのだ……………。

恐れていたのは……それが正しくないとわかっていただけから。

わずか15歳ばかりの少女にはもう我慢の限界だった。
いや、とうに限界は超えていた。

ただ限界を超えていることにすら目を背けていただけだったのだ。

「……………わかりません……………どうして良いのか私にはもう……………！」

真人と離れることなどもはや自分には考えられない。

しかし自分が真人の傍にいてことで真人に災いが及ぶことは確かだった。

真人はなにひとつ迷惑にも思わず自分たちを守ってくれるだろうが、そのせいで真人を失うようなことになれば、シエラは自分で自分が許せない。

そしてなによりも重要なことは、シエラが巫女姫の義務を放棄して同胞を見捨てるのが本当は正しくないとわかっている点にあるのであった。

自らの力不足から逃避してはいたものの、やはりシエラはメイファンの巫女姫であった。

アリエノールの言ったとおりである。

過去は決してかえられないのだ。

それでも離れたくない！

真人のぬくもりを失って残りの人生を生きていくには巫女姫の座はあまりに酷薄すぎる。

真人が好きだ。

好きで好きでたまらない。

たとえそれが正しくないことなのだとしても。

言葉にならずに泣きじゃくるシエラを真人は優しく抱きしめた。同じく生まれてきたときから大きすぎるものを背負わされていた真人にはシエラが何に苦悩しているか臆気ながらわかつていた。

真人の誇る超絶の武力も、シエラの苦悩にはなすすべがなかったが。号泣するシエラとの会話をあきらめたアリエノールは真人へとその矛先を変えた。

「マヒト卿にお尋ねする。メイファンのもたちがシエラフィータ殿に盟主への就任を求めてきたらいかにする？」

「シエラが望むなら手を貸そう。しかしシエラが望まぬならどんな手を使っても守る」

もちろんそこに武力が伴うのであれば手加減をするつもりはない。今やシエラとプリムはこの異郷における唯一の家族なのだから。

「正論だな。しかしここでメイファンと内戦を引き起こせばオルパシアはもたんぞ？それはこの国の守護者たることを誓った卿の言に反するのではないか？」

古来より国が滅ぶときは内部から崩壊が始まる。

いったん始まった崩壊の流れは一個人が止めうるものではない。

もしもメイファン残党と武力衝突するようなことがあれば、門閥貴族は国を見限り、民は逃亡をはじめ、今はオルパシアに好意的な中立国も手のひらを返す

ようにブリストルにつくだらう。

アリエノールはそう言っていた。

そう言われると真人にも答えが見つからない。

戦うことでしか守護者たりえなかった真人にとって、戦いに勝つことが守ることであった。

戦ってはならないと言われて為すすべのあるはずがなかった。

「……………ではどうせよと言うのだ？ 殿下！」

業を煮やしたアナスタシアが会話に割ってはいる。

彼女にとっても妹に等しいシエラとプリムが政治的傀儡として扱われる未来などとうてい許容できない。

もしも暴力によってそれを強要するものあらば、アナスタシアも持てる力の全てで対抗するつもりでいた。

だからといってオルパシアの亡国を見過ごす気もない。

なんといっても彼女はオルパシアの重鎮、シエレンベルグ家の一人娘なのだから。

「王族として言わせてもらうならばシエラフィータ殿とプリムローゼ殿には王族の義務を果たしてもらわなくてはならぬ」

アリエノールは冷たく断言した。

オルパシア王国でもっとも冷徹な識見をもつと言われる彼女ならではの言葉だった。

「これが平時であれば私もこのようなことは言わぬ。しかし今はこのオルパシアの存亡がかかっており、その存亡にはアナスタシアやルーシアの命もかかっておる。それでも己の運命をがんじえぬか？

シエラファイター殿？」

アリエノールの止めとも言つべき言葉は正しくシエラの肺腑をえぐった。

国家の滅亡がどんなものであるか、シエラは不幸にしてその目撃者であった。

姉とも慕うアナスタシアもルーシアもシエリーも、オルパシア王国が滅亡すればその運命は殺されるか鬪り者にされるかのいずれかになる。

目の前のアリエノールなどは死より汚らわしい屈辱を与えられるはずである。

その理不尽さはあらがおうとしてあらがえるものではない。

それでもシエラにも断言できることがある。

それはアナスタシアもルーシアもアリエノールも、故郷を見限つて逃亡を選択したりはしないということであった。

たとえ敗北の先にどれほどの屈辱が待とうとも、力の限りあらがい王国の存続のために尽くすはずだった。

恐ろしくはないのだろうか？

いったいどうしたらそれほど強くあれるものかシエラには想像もつかない。

「どうしたらそんなに強くなれるのでしょうか……………」

自分なら耐えられない。

なぜなら自分がみな期待しているような人間ではないと知っているから。

「守りたいものがあるのだ。愛しているものがあるのだ。弱い自分に言い訳をしている余裕はないのだよ」

アリエノールが莞爾として微笑むのを、シエラは驚きとともに見つめていた。

あれほど毅然として聡明であったアリエノールが一瞬見せたその笑顔は恋する少女そのものであった。

それは決してアリエノールが王族の義務に凝り固まったただけの人間でないことを明瞭に告げていた。

この人も愛する人を守ろうとしているのだ。

恋人を

家族を

祖国を

それに引き換え自分はどうだろう。

愛する人のために自分を犠牲にする覚悟もなしに、ただ失うことを恐れていただけではなかったか。

それに気づいたからには逃げ続けるわけにはいかなかった。

戦って真人を手に入れて見せる。

覚悟を決めた乙女ほど強いものはいないのだ。

「わかりました……………もはや逃げ隠れはいたしませんまい。それに……………この身には最強の騎士がついていてくれますので」

「シエラファイータ殿の覚悟痛み入る。今後同盟者として決して疎かな真似はさせぬゆえご協力いただきたい」

第四十九話

「それでは止むをえませんわね」

ニヤリ

そこにはつい先ほどまでの清純さをどこかに置き忘れてしまったシエラの姿があった。

「もちろん私もいっしょだよね！」

瞬時にして追隨するプリムもなかなかどうしてあなどれない。

幼くとも女性は女性ということか。

「まあ、プリム殿を担がれては後が厄介ゆえ仕方あるまいのう……
……」

「「「異議あり!!!」」」

それを聞いて平静でいられなかったのはルーシアをはじめとする女性陣である。

そもそも真人の意思がない以上断じて婚約を認めるわけにはいかないのだった。

「何も婚約に限ることはないんじゃないのかしら？ 王家で保護してもらって様子を見るとか……」

「そうですね！この状況下では門閥貴族もそう迂闊な真似をするわけは……………」

「しないと言えるところか？」

「……………」

そう言われてしまうと二の句が継げない。

マンシュタイン公爵家にはメイファン王国の残党をかくまってきた実績があるし、オズヴァルド伯爵がこのまま黙って手をこまねいているとも思えなかった。

妥当な選択肢としてマンシュタイン公爵の後ろ盾でシエラと結婚し、メイファン王国を牛耳ろうと謀るのは理の当然といえるだろう。

仮にオズヴァルドが役者として足りぬのであれば、門閥貴族の誰かを選抜してもシエラとプリムを抑える価値はある。

どれだけ権勢があっても王権には届かない貴族たちにとって、メイファン最後の王族という地位はそれ自体が至高の果実であるのであった。

「あくまで仮のことだ。全てはこの戦争に勝ち残ってからのことであるし………それにこの話はお主らにとつてもまんざら利のない話ではあるまい？なんとかなれば国王ともなれば何人側室を抱えようとも文句などないであろうからの」

キラリ

飢えた女豹の前に特大のえさがぶら下げられた瞬間であった。

メイファン国王が相手ならば、たとえ側室であろうともその権威は小国の正妃を大きく上回る。

基本的に男系の王位継承権が優先で、庶子であつても女系より上位の継承権が得られることがその権威を保障していた。

メイファン王国といえば、五大国に次ぐ伝統と権威ある大国であり、その側妃ともなればたとえシェレンベルグ侯爵家のような権門であつても嫁ぎ先としては申し分ないものであつた。

「考慮する余地はありますわね」

「他によい知恵がなければ、暫定的にといいんじやない？」

「次善の策だが悪くはないね」

真人に呆気にとられたまま事態の推移を見守るほかはなかった。

……自分の勘違いなのだろうか？確か自分との結婚について話あっていたはずなのだけれど……

まるでデートの順番でも決めるがごとき気安さで語られる現状がひどく現実感を損なっているように感じられるのだが……真人がいくら現実逃避しようと真実はいつもひとつなのであった。

「では婚約の件は了承ということでしょうか？」

「はい！」

真人に答えを求めないあたり、王女も真人の人間関係を心得ているようだ。

しかし、流石の真人もこの件だけはやすやすと容認はできなかった。

「……………考え直してくれ。必要ならばオレが命を賭して君たちを守る。あらゆる敵という敵を屠り、害なす全てを殲滅し、君たちを守護する盾となる。しかしオレは狂気とともに修羅を生きるもの………
…君たちの相手には相応しくない。オレは戦うことに特化された神を殺す刃………狂気の果てに生み出された罪の忌み子なのだから」

この世界に来てから真人はいかに自分がまともと言える人間でないかをつくづくと感じていた。

家族というものは絆で結ばれ無償の愛を与え合うものだということ。

両親こそは子供の守護者であり導き手であるということ。

時として人は他人のなかにも家族同然の絆を結べるのだということ。

なによりそこには戦いをおす必要がないのだということであった。

戦うことでしか外部とのかかわりをもてなかった自分。

神を殺すこと以外のなにものも求められなかった自分がいかに異常であるかということは、日を追うことに真人の心を苛んでいたので

あつた。

……………この世界のなかで自分だけが決定的に異常な存在なのだ

「真人様は戦うことしかできないなんてことありません!」

常にない意志をこめた声で叫んだのはシェラだった。

「真人様は私の命を救ってくれたばかりか不治と思われた足まで直してくださいました……………」

「プリムの声が生きわかれた妹の声に似ていたからだ……………他意はない」

真砂の声に似た姉妹が為すすべなく朽ち果てるのを見過ごすことができなかつた……ただそれゆえの自己満足のだと真人は信じていた。

あるいは信じる以外に法がなかつたというべきか。

「それはうそです」

明快に、容赦のない声でシエラはそれを否定した。

「ルーシアさんもアナスタシアさんも真人様に救われているのをどう説明するのですか？私とプリムに家族だと言ってくれたあの言葉にどれだけ私たちが救われたか……そのどこに戦いが関係しているというのです？真人様がおっしゃっていることは無茶苦茶です。いったい何をそんなにおそれているというのですか？」

………恐れている？恐れているのか？オレは………？

恐れていた。

確かに真人は恐れていた。

それはかつて味わったことのない愛情に満ちた生活を失うことへの恐れでもあり、

戦いを宿命とする自分の業こそがその平穏を破壊してしまうのではないかという恐れであった。

そして何より、真人は人に愛されるということに慣れなすぎた。

人と鬼のハイブリッドとして、神を殺す道具として生きることを経られた真人にとって、愛し愛され、まして子を産み育てるなどということは考えたことすらない事態であったのだ。

「戦うことにしか価値のないオレが人を幸せにできるはずが……」

「いいかげんにして下さい！」

シエラの平手がパチンと真人の頬を打った。

もちろん真人になんらの打撃を与えるものではないが、シエラが手をあげたという事実には真人は驚きを隠せなかった。

「私が真人様に出会えて幸せだと思っ気持ちは……：……：真人様にだつて否定はさせません……：プリムもルーシアさんもアナスタシアさんもディアナさんも真人様に出会えて心から幸せだと言えます。勝手に私たちの気持ちまで貶めないでください！」

諭すように口を開いたのはアリエノールだった。

「のう、マヒト卿。人の幸せはあくまでも本人にしかわからぬものよ。たとえ死しても愛する者と滅びることを幸せとするものもいれば、日々の平穏な生活に不幸を感じる者もいる。彼女らの幸せを決める権利は卿にはない……：……：では改めて問うが、卿はどうなのだ？ 真実彼女らを愛おしいと思つたことはないか？ 彼女らに幸福の充足を得たことは？ 彼女らに心をときめかせた事が本当にないと言えるのか？ 彼女らが幸せであるという以上、問題は卿が幸せであるかどうか、それだけなのだ。心して答えるがよい」

そんなことは聞かれるまでもなかった。

この世界で初めて会ったルーシアが、自分のような人間に寄せてくれた信頼はどんなにかうれしかっただろう。

ディアナという、生まれて初めて得た戦友がどれだけ心強く感じられたことが。

押しの強いアナスタシアのあけすけな好意も、真人にとっては初めて受ける異性からの好意であった。

そしてこの世界で与えられたシエラとプリムというかけがえのない新たな家族………………。。

どれも幸福に満ち溢れたかけがえのない宝石たちだった。

……………完敗だ

決して敗北を許されなかった真人が生まれて初めて負けを認めた瞬間であった。

シエラたちを受け入れるということは、真人の生き方を曲げる、ということだ。

戦いに勝つことではなく、守護者として守り抜くことでもなく、幸せをお互いに共有していくという過程こそが重要だった。

それでも、もはやこのかけがえのない仲間たちなしの人生は考えられない。

それがどういった類の愛情であるか、経験のない真人には判然としなかったが、彼女たちを愛していることは真実だ。

ならばあとは覚悟するだけであった。

彼女たちを幸せにするために今までの自分を捨てる覚悟を。

……………どうか自分の幸せを考えて下さい

唐突に思い出したのは真砂が最後にかけてくれた言葉だった。

あの時の自分には無理だった。

倒すべき神があり、自分が倒せなければ真砂が犠牲になることは確
実だったからだ。

だが今は……………

真砂……………オレは……………幸せになってもいのかな？

人にして人にあらざるもの

神殺しの禁忌を背負った真人のトラウマは深い。

……………お兄様が幸せになってくれることだけが真砂の望みです。

遠い空の彼方で真砂がそういつている気がした。

……そうそう、それほど多くの女性に手をつけた以上、お仕置
きは覚悟してくださいね

どうしてだろうっ？どす黒い瘴気に身も心も凍てついたような気がし
たのだが。

「……こんなオレでよければみんなもオレと人生を共にしてくれ
ないか？」

「「「「はい……！」「「「「」

第五十話

「それにしても妾がけしかけたとはいえ、本気でいきなりハーレムをつくるとは思わなかったぞ」

アリエノールは呆れ顔で呟いた。
それも無理からぬことだろう。

メイファン王国の後継者に王国でも権門で名高いシエレンベルグ家の令嬢と軍の名門ハースバルド家の令嬢を全て妻として迎えるなど前代未聞もいいところである。

しかも悪友であるルーシアに聞いていたところでは告白もまだだということであつたはずなのだが……。

「ときにルーシア、恋人になるまもなく婚約者になることに抵抗はないのか？」

「そりゃ私だつて恥ずかしいけど……今ここで乗り遅れたら真人は他のみんなにとられちゃうわよ！」

顔を首まで真っ赤に染めながら鼻息も荒く言い切るルーシアはなんとも可愛らしかった。

普段のお転婆ぶりを長年の付き合いで熟知しているだけになおさらだ。

それにしてもなるほど、それは道理だ、とアリエノールは首肯した。ここで自己主張しておかなければアナスタシアあたりが今後優先権を主張し続ける可能性は否定できない。

「しかしこれは父上の説得が大変だぞ。メイファンの巫女姫だけな

ら陛下もご理解くださるとは思っていたが……………」

ようやくにしてアリエノールは自分がけしかけてしまったことの重大さに気づき始めていた。

メイファンの実質的指導者となるものがシエレンベルグ家とハースバルド家の娘を娶る、傭兵部隊の指揮官であるディアナの影響も見過ごすことはできない。

これだけの影響力が真人一人に集中することは、真人のひとりとなり知らぬものたちには甚だ危険に映るであろう。

特に門閥貴族などは真剣に真人を脅威と受け取るはずであった。

「そんなの自業自得よ！責任もって陛下を説得しなさいよね！」

いたずらっぽい笑みを浮かべてアリエノールの肩を叩いたのはルーシアだった。

どうして王女たる自分がお前の恋路を取り持たねばならんのだ！と言おうとしてアリエノールはルーシアの表情に気がついた。

必死に笑いをこらえながら目だけは獲物を狙う獣のように爛々と輝いている。

不吉な予感にアリエノールは咄嗟に話題を変えようとしたが遅かった。

「……………アリエノール……………あなたさつき面白いこと言ってたわねえ……………愛してる男性がいるとかなんとか……………娘を目に入れても痛くないほど可愛がっている陛下はそのことをご存知なのかしら……………」

「なっ！！」

アリエノールの白皙の頬に朱が散った。

ルーシアの言うとおり娘を溺愛する父は自分たちに特定の男性ができるのを望んでいないのだ。
もしばれるようなことがあれば愛する彼にどんな身の危険が迫るか
しれなかった。

「ルーシア、お前……………」

迂闊に本音を漏らしてしまったわが身の不覚とはいえ、親友の思わぬ反撃に咄嗟に言葉がでない。

「……………王女殿下、今事の戦が無事に終われば真人殿の言を陛下も無碍にはできないと思うがどうだ？」

何食わぬ顔でアリエノールに交換条件を提示したのはアナスタシアだった。

「全く、恩を仇で返されるとは……………」

そう言いながらもアリエノールの明晰な頭脳はアナスタシアの提案を目まぐるしく吟味していた。

彼と添い遂げるために何が必要かと考えていた。

あるいは既成事実を作り上げてしまっしかないかと思案していたところだが、この提案は渡りに船といったところだ。

オルパシア王国を勝利に導き、次代のメイファン国王となるべき真人の願いともなれば、とうてい無視することができないのは明らかだった。

……………悪くないかもしれない……………

それどころか成功すればこのうえない切り札になるだろう。

「マヒト卿、他ならぬ卿の妻たちの頼みごとだ。万事妾に任せておけ。そのかわり……………わかつているな？」

背中に冷たい汗をかきながら真人はこくこくと無表情に頷くしかなかった。

どうして恋する女性はかくも強いものだろうか。

シエラもプリムモルーシアもアナスタシアも、自分に対して好意を抱いてくれたことを疑うわけではないが結婚の決断まで下してしまふのはいささか性急すぎる

ように感じられる。

いったいどうして彼女たちが人生最大とも言える決断をいともあっさりくだしたものが、真人にはなんとも理解しかねるのであった。

しかし真人は気づいていない。

真人のいた中御神家が古く世上から隔絶した家柄で一夫多妻制であったのは全くの例外なのだとということ。

そして真人の妻の座を狙う女たちの戦いが、とうの昔に熾烈を極めていたのだということ。

ユラリ

噴き上がる瘴気が悪夢を具現させたような気配を感じて、慌てて真人は振り返った。

「なかなか素敵なお話でございますわね、真人様」

「……………僭越ながら副官としてその傭兵より下に扱われるのは断

じて容認できません」

漆黒の死神すら裸足で逃げ出すほど禍々しいオーラを撒き散らすシエラとアリシアの姿がそこにいた。

「……………マヒト卿、卿の手はどこまで長いのだ……………正直、卿の不実をなじりたくなってきたのだが……………」

もはやあきれ果てた表情でアリエノールは首を振る。

しかし真人は己が不実であるとは全く考えてもいなかった。

真人はごく真摯に彼女たちに愛情を寄せてきたつもりであったし、それは全くの事実であったからだ。

問題は、いまだ真人に家族や友人と男女間の愛情の区別がつかずにいること。（少なくとも本人はそう考えていること）

そして一人の男性が複数の女性と関係することを不実とは考えない真人の、というよりは中御神家のゆがんだ倫理観にあるのであった。妻（予定）たちがそのことに気づき、慌てて真人の再教育に乗り出すのはまだしばらく先のことでなのであった……………。

王国筆頭公爵であるマンシュタインは荒れ狂っていた。

シエラとプリムがメイファン王国の失われたと思われた王位継承者

であつたという情報は当初マンシュタインを狂喜させた。いかに高貴な家柄を誇るうとも、その血からは王位を生み出すことは叶わない。

唯一の王位継承者が女性であり、その配偶者になることが、王族ならぬ身が至高の地位に上るたつたひとつの手段なのだ。

その機会を得て狂喜せぬものがあるだろうか。

ほとんど狂つたようになって支援を求めろオズヴァルド伯爵をマンシュタインはよごれた犬でも見るように傲然と無視した。

そのような魅力的な立場をこんな腐つた売国奴に譲るなど思いもよらなかったからだ。

むしろ短絡的なこの男が邪魔だつた。

メイファン王国の権門の血筋と、まだこりずに襲撃を試みようとしているオズヴァルドを放置しておけばマンシュタイン家の政治的立場を悪化させないとも限らない。

マンシュタインは酷薄な笑みを浮かべ、速やかに障害を取り除くことを決意した。

オズヴァルド伯爵が急な病に倒れベッドの住人となつたのはその日の晩のことである。

高熱にうなされた彼は翌日生命だけはとりとめたものの、精神的な錯乱から回復することはできなかつたのだつた。

マンシュタインはルードヴィツヒ侯爵家との娘と婚約していた三男をメイファンの巫女姫にあてがうことにして、ルードヴィツヒ家には丁重に婚約破棄の旨を伝えた。

ルードヴィツヒ家に見れば青天の霹靂であつたがマンシュタイン公爵家に逆らう力もない以上涙を飲んで受け入れるほかはなかつた。

これでなんの憂いもなくメイファンの巫女姫を掌中に収められると

思った矢先に、その事件は起こった。

真人とシエラファイター・プリムローゼ両姫との婚約が、オルパシア全土に布告されたのである。

ただでさえ戦場の英雄として名声高い真人であるが、この婚約による国民の喝采も実に華々しいものであった。

些細な偶然から死の淵にあった奴隷を救い上げた英雄騎士

その奴隷は実は奴隷に身をやつすことで唯一ブリストルの追求を振り切った王族の姫君であった……………

いつしか騎士と姫の間には男と女の愛情が育まれ、そしてやがて二人は結ばれる……………

いかにも庶民の好みそうなシチュエーションである。

国民の歡呼の叫びのなかで、真人と巫女姫の婚約はもはや動かしたい既成事実として王国に浸透していた。

激怒とともに抗議の声を上げたマンシユタインではあったが、この状況からの逆転が至難であることはわかっている。

国王の話すところでは巫女姫が突然謁見を乞いに現れ、命の恩人である真人との婚約の承認を求めたらしい。

これが臣下同士ならあるいは違った展開があつたのかもしれないが、厳密な意味でシエラやプリムはオルパシア王国の支配下にはないのだ。

まして双方の合意が為されているとあれば国王としても認めるほかはなかった。

であるならば戦意高揚のために役立つてもらふべきであろう。

国王としてオルパシアの存続を願うその判断には流石のマンシユタインも異を唱えることができない。

しかしマンシュタインにとって大事なことはオルパシア王国の存続などではなく、マンシュタイン家の栄光にある。その障害になるならばたとえ王国が滅びることになろうとも排除することになんのためらいもない。

「腕の立つ刺客を用意しろ。それと………プリストルの間者に渡りをつけておけ」

もはやこの王国のために為すべきことはない。

今自分が為すべきことはプリストル帝国にマンシュタイン公爵家を出来得る限り高く売りつけることなのだ。

あのような氏素性のわからぬ輩に大きな顔をさせておく王国など速やかに滅んでしまおうがよい。

そしてこのマンシュタイン家をないがしろにした報いをその身に刻んで逝け。

マンシュタインにとって真人が活躍し五分に持ち込んだ現在の戦況はおあつらえ向きと言えた。

なんといてもマンシュタイン家を高く売りつけるためにはオルパシアが優位に立っている方が都合が良いのだから。

真人と国王を切り離し、遠く前線で真人がプリストルの罠にかかるそのときこそ、マンシュタインにとって最良の時が訪れるはずであった。

すでに新たな遠征計画は発動を間近に控えている。

後はプリストルの望む情報を届けてやるだけだ。

復讐の猛りにマンシュタインは恍惚と身を震わせて嗤った。

我がマンシュタイン家に仇なすマヒト・シエレンベルグは今度こそ

死すべき運命にあるのだ

！

第五十一話

アウフレーベにとってケルドランの敗北以降の日々は地獄と形容するほかないものであった。

常勝を旨とする軍の栄えある將軍職を拝命しておきながら、部下に背かれ、あまつさえ配下の將兵の半数以上を失ったのだ。

12將軍の勇名に傷をつけたとして貶められ、所詮女の身には將軍など務まらぬと宣告されるのは覚悟していた。

しかし降格ばかりでなく、北部辺境への左遷命令を受けたことはアウフレーベにとって痛恨事であった。

辺境は武勲を立て難いばかりか、兵たちも一癖あるものが多く、その掌握に予想される困難は気が遠くなるほどのものだったのである。何より、真人との再戦への道が半ば閉ざされたということがアウフレーベの心を重くしていた。

ブリストル帝国の辺境部にはかつてブリストルによって滅ぼされた国々の残党が闊歩しており、本国の支援をろくに受けられぬ環境も相まって、恐ろしく損耗率が高いことで有名だった。

だからこそ兵たちの間には実力主義が行き渡っていた。

身分が高いだけの貴族のボンボンはここでは一月と生き残ることはできないのだ。

もっとも、アウフレーベはそういった実力主義の世界だからこそ、予想よりも早く部下たちの信望を得ることができたのだが。

「どうやら本国からのお使いのようですね？」

アウフレーベにくださった敬礼を捧げつつ報告したのは古参の下士官

であるマクレーンだった。

だらけた雰囲気には似合わず、軍務には厳格な男だということを、先月の国境での小競り合いを指揮したアウフレーベは知っている。

彼は辺境騎士団の中でも群を抜いた視力を誇っており、偵察斥候の任において、他の追隨を許さぬ功績をあげていたのだ。

アウフレーベが指揮官としてその能力を辺境騎士団に受け入れられたのも、その戦いのなかでのことであった。

信頼する部下の言葉にアウフレーベは心の底から驚いたように目を見張った。

「いまだ着任間もない私への使者とも思えぬが……かといって他に本国にかかわりあるような者もおらんしな……」

辺境騎士団のほとんどは辺境を故郷とする地元兵と、問題を起こして左遷されてきた兵たちが占める。

今のところ貴族の出身はアウフレーベだけであり、本国からわざわざ馬車つきの使者が訪れるような人間といえば、やはりアウフレーベ以外には考えられない。

「わずかこの三ヶ月ほどの間に何があった……?」

おそらくは使者の用向きにはあの男が……中御神真人の存在がかわっているはずだ。

アウフレーベはそれを確信していた。

二頭立ての馬車から降り立った人物はアウフレーベを驚愕させた

言つてよい。

短く刈り込んだ白銀の髪に、見上げんばかりの長身、表情を読ませぬ静謐な瞳はアウフレーベが長年慣れ親しんだよく知る顔だったのである。

「久しいなアウフレーベよ」

「ロンバルティア侯……！！なぜあなたがここに！？」

マンセル・トルフィン・エラト・ロンバルティア侯爵はアウフレーベにとつて特別な存在だった。

目の前の彼はブリストルの誇る12将軍に自分が昇進する以前副官を務めていた元上司なのである。

すでに老境にさしかかり、一線を退いてはいるが鍛え抜かれた身体はいまだ現役で十分通用するだろう。

長年の経験に裏打ちされた深い知性などは、アウフレーベもいまだ及ぶところではないと敬意を払っていた。

「フェーリアスの奴が死んだのでな、短い隠居生活に別れを告げるついでにお主を迎えに来たのだよ」

「フェーリアス将軍がお亡くなり……！！」

フェーリアス・ハスドスバル・ジャンバル大将といえはブリストルの12将軍のなかでも最長の軍歴をもち、その手堅い用兵で陛下の信頼厚かった人物だ。

いつたいその彼を誰が倒したと……いや、考えるまでもない。あの中御神真人を除いてそんなことのできる人物がいようとも思えなかった。

「……………それで私にお声がかかったというわけですね？」

「察しが早いな。そうだ。帝国軍務省はようやくマヒト・ナカオカミ・テイレース・ノルド・シエレンベルグ子爵を第一級の警戒人物と認識した。彼のものに敗北したことはもはや恥でも罪でもない。むしろあの男の武量を直接肌で感じたお主の経験は貴重なものなのだ」

やはり、というべきか。

ロンバルティア侯の発言はアウフレーベの予想どおりのものであった。

いや、ひとつだけ自分の記憶と齟齬をきたしているものがある。

「……………シエレンベルグ子爵……………？」

「ああ、あのケルドランの戦い後彼はシエレンベルグ侯爵家に養子として迎え入れられたのだ。いまや彼はオルパシアでは知らぬものとならない英雄だよ」

一介の武官であつた彼が押しも押されぬ大貴族の仲間入りとは……………よかるう、我が名誉ある敵として不足はない。

そつしたアウフレーベの心の動きを察したのかロンバルティア侯は渋面にわずかな笑みを浮かべた。

「全く……………昇進を喜ぶには厄介な相手だぞ。一兵士であつてもそうだが、兵を率きいらせても危険な男だ」

フェーリアス大将を討ち取つた迂回奇襲などは物理的奇襲と心理的奇襲を併用したいつそ芸術とでも呼びたくなるほどのものだ。

そのうえカリスマと武量を備えた指揮官などブリストール軍にとって

悪夢以外の何者でもなかった。

「近々オルパシア側からの攻勢がある。その指揮官は間違いなくマヒト子爵となるだろう。もはや更なる敗戦は許されぬ。アウフレールべよ。卿の識見が必要なのだ」

アウフレールべは内なる歡喜を隠そうともせず嫣然と微笑んだ。

「必ずやあのものに一泡吹かせてごらんにいれましょう」

オルパシア中にメイファンの巫女姫との婚約の報を鳴り響かせた真人であったが、その祝いはごく内輪のささやかなものにならざるをえなかった。

本来であればルーシア・シェリー・アナスタシア・ディアナ・アリアを含めた七人も妻を得るという非常識さもさることながら、ルーシアの父、ハースバルド卿が真人との婚約に強行に反対したためだった。

「全くあの石頭は~~~~~!!」

ルーシアにとっては計算違いもいいたころであった。

しかし現在の情勢を鑑みて、軍務の柱石たるハースバルド家の一人娘が他国の王の側室になるということが容認しかねるといふハースバルド卿の

見識ももつともなものであり、ルーシアをはじめとする五人につい

ては戦争が終了した後、婚約を認めるということで妥協が成立している。

その後、及んでもなおハースバルド卿が反対するようなことがあれば、国王自ら説得役を引き受けるといふ確約付きだ。

もちろん水面下でアリエノールの暗躍があったのは言うまでもない。国王すら手玉にとつてしまつとは……アリエノール恐るべし！

「あの……真人様……」

シエラはピンクのドレスに身を包み、頭に真紅の薔薇を飾りつけられていた。

いつもは清楚で控えめな印象すら与えるシエラであるが、逆に情熱的な暖色の衣装が普段とのギャップと相まって、人目を惹くことおびただしい。

真人も思わず言葉を失つて見惚れるしかなかった。

「……………その……………ふつつかものですがよろしくお願いします」

ブシュッ

真人のこめかみから何か見えない透明な血がはじけて消えた。

……………もうなんというか萌え殺さんばかりの可愛らしさである。

今となつては異世界の果てとなつた日本の美意識を捨てきれぬ真人にとつて、大和撫子がアヌビア世界に光臨したかと思わせるような光景だった。

目の前でそんな濡れ場を見せられたプリムも黙ってはいなかった。幼くとも女は女、戦うときと場所は心得ているのである。

「パパ」

ゴメスッ

思わず側頭部を反射的に壁へと叩きつける真人がいた。

黄色い薄絹のドレスにフリルのヘッドドレスをあしらったプリムの衣装は、シエラとは逆にプリムの可愛らしさを強調するつくりになっている。

その可愛らしさはそのままに、'パパ'などと呼ばれる背徳感はとも言葉で言い表せるものではない。

真人の右腕に抱きついて頬を摺り寄せるプリムと、左腕に抱きついて真人の肩にしなだれかかったシエラの視線と視線がぶつかり、不可視の火花が散るのを真人は呆然と眺めていた。

人として大事な何かを失った気がするのはいのせいだろうか？

兄様はけだものだったのですね

真砂、許してくれ！オレは！オレは！

永久に許してあげません

すっかり姉妹の軍門に墮ちきつた真人をルーシアたちは齒軋りしながら見つめていた。

「次こそは私があこの立場に……!!」

「全くとんだとばつちりですわ!」

「それにしてもプリムちゃん……やりますわね」

「まあ真打は遅れて登場するもんさ」

「ああ……真人様……」

さすがに宴の主役に食ってかかるわけにもいかず五人は口々に愚痴を言いながらテーブルの隅で自棄酒をあおるしかなかったのである。彼女たちの目には真人に甘えるシエラとプリムの至福の笑みしか映っていない。

だからいつか自分が真人の隣に立つ日を夢見て妄想をたくましくすることでお互いの憂さを晴らしていたのだった。

だが、真人に注目していれば彼の顔色がどんどん血の気を失っていくことに気づいただろう。

もしも真人が戦争後にもう一度婚約式を挙げることを告げられれば、少なくとも心の中ではこう呟くはずだった。

……勘弁してください、と。

第五十二話

「メイファン王国近衛兵団中佐ハイデル・レイヒ・マウザーであります」

「マヒト王国軍准将だ。以後よろしく頼む」

シエラ・プリムとの婚約、二度に渡る救国の大勝は真人をただの士官にしては置かなかった。

それに來るべきメイファン領への逆侵攻作戦を指揮するためには最低でも将官である必要があったからだ。

メイファンへの逆侵攻には王国内でも異論があり、必ずしも最終的な決定がなされたわけではないが、オルパシア王の心算は決まっている。

しかしそのためには旧メイファン領への最大の関門、ケルドラン城塞を突破しなくてはならないのであった。

ハイデルは今回の出征にあたって組織されたメイファン王国敗残兵

のまとめ役を任されていた。

しかしそれは旧メイファン勢力の全軍を意味しない。

メイファン復興を目指す反抗組織には概ね三つの組織が存在した。

ひとつはオズヴァルド伯爵が掌握していた組織である。

現在ハイデルが掌握している兵力がこれにあたる。

マンシュタイン家が援助していたこともあって、旧メイファン勢力のうちもつとも大きな勢力であった。

ふたつめはカニングラム子爵が率いる勢力だった。

こちらはメイファン王国を見捨てて逃亡したオズヴァルド伯爵の傘下に入ることを良しとせず、独自にゲリラ戦を遂行中の武闘派組織である。

今回の再編成に伴って要請は出してみたものの、これまで武力闘争を継続してきた実績から、組織の主導権が握れないなら参加は見送ると返答されていた。

みつつめはバーデルベスという下級貴族に率いられているが、この組織が問題だった。

彼らは失われた王権を認めず、自分たちが新たな主権者にならんとして行動していたからである。

現にシエラファイターとプリムローゼの帰還を、彼らはニセ者と断じ

て認めようとはしなかった。

頭の痛い問題ではあるがハイデルはそれほど悲観してはいない。

彼にとつてもオズヴァルド伯爵は忠誠に値する上官ではありえなかった。

メイファン王国の奪還どころか、組織の維持にすら汲々とする有様であったことをハイデルは覚えている。

それに比べれば現在の状況は天国のようなものだ。

何より、王国の歴史を体現するカムナビの巫女姫と王位継承者がふたつながら見つかった奇跡が彼らメイファン残党軍の力となっていたのである。

その数はおよそ三千名。

かつての大国の戦力としてはむしろ少ない。

三つの勢力を合計したとしても五千に届くことはないだろう。

それはやはり王族という求心力が欠けていたせいかもしれない。

ハイデルが所属していた近衛兵団のように王室と密接につながっていた軍人は特にそうだ。

「ハイデル中佐、貴殿の忠心うれしく思いますよ」

「お言葉かたじけなく……………」

シエラにねぎらいを受けただけで身も震えるような歓喜がある。

豪華な真紅のドレスに彩られたシエラフィータは今やどこに出しても賞賛と羨望を集めずにはおかない一輪の薔薇だった。

王族としての威厳と巫女姫としての神秘性も加わったカリスマはハイデルのような近衛出身の軍人にとって神に等しく思えるほどだ。

シエラももはや王族である自分を否定しようとはしていない。

故郷に真人の妻として凱旋するためならたとえどんな汚い政治的術策であろうと受け入れる覚悟である。

そのためにあえて象徴としての自分を前面に押し出すことに否やなどなかった。

……………真人准将……………もし姫君を泣かせるようなことがあれば我ら近衛決して卿を許しはせぬぞ！

思いもよらぬところで大量の敵を製造してしまっている気がしなくもない。

もつとも真人が全ての男の敵であることは、ある一部の男性陣の間ではすでに確定した有名な事実ではあったのだが。

アウフレーベがロンバルティア侯とともに召還された帝国軍本部には、帝国十二将軍が勢ぞろいしていた。

戦死したフェーリアス将軍の後任にロンバルティア侯が就任し、アウフレーベも十二将軍位に復帰していたため久しぶりの十二将軍揃い踏みである。

一同をまとめる筆頭将軍にして軍務卿であるジェラルド・ヴィンセント・アンドレッティ公爵が重々しく口を開いた。

「アウフレイベ・ラスク・フェルゼン・ロームクロイツ卿とマンセル・トルフィン・エラト・ロンバルティア卿の復帰を歓迎する。特にアウフレイベ卿には言われなき処分と中傷を蒙ったことをここに詫びたい」

「いいえ、敗将が責を問われるのは自明のこと。かようなお氣遣いは無用に願います」

アウフレイベが形式通りにジェラルド卿の謝罪を受け取りつつ、内心は驚愕に震えていた。

自分のいない間にどんな心境の変化があったものだろうか。

アウフレイベの知るジェラルド卿は、決して女である自分の存在を快く思っていないかつたはずなのだが……。

あるいはアウフレイベの疑心を察したものがジェラルドはさらに言を続けた。

「戦死したフェーリアス卿は私の長年の親友であり、好敵手であり、戦友だった。彼を容易く屠った敵将を甘く見ることは断じてできぬ。今日ここに諸将が参集した理由はほかでもない。あの憎き敵将……

「マヒト・ナカオカミに対するアウフレーベ卿の見識を聞いたかったからだ」

そういわれてアウフレーベは深く頷かざるを得なかった。

なるほど帝国でもっとも軍歴の古いだけあって、十二將軍の半ば以上が何らかの形でフェーリアス卿の教えを受け、あるいは共に戦塵をくぐり抜けてきていた。

いわばフェーリアス卿は帝国十二將軍の重したる人であったのだ。

アウフレーベが敗れたただけなら高をくくっていられたかもしれないが、フェーリアス卿を失ってはなりふり構ってはいられないということらしい。

「細作からの情報によれば先日、マヒト・ナカオカミはメイファン王国の王族であるシエラファイター・プリムローゼ両姫と婚約しメイファン残党勢力をその支配下においたと聞く」

アウフレーベの胸が針に刺されたかのようにチクリと痛んだ。

それが何の痛みであるのかアウフレーベが疑問に思う間もなかった。

ふと頭をかすめた小さな痛みに対する疑問は、それを遙かに上回る

アウフレーベの軍人としての驚きに押し流されてしまったからである。

「メイファン軍が奴の指揮下に入ったというのですか?!」

「旧メイファンの戦力は正直恐れるに足りないと考えていた。核になる指揮官が決定的に不足していたからだ」

そういつて穂を継いだのは十二將軍の中でも知将をもってなるフェルナンド・ロンドベル・ヴィルヌーブ卿であった。

ようやくアウフレーベも事態の深刻さを認識した。

この戦争のさなかにもかかわらず十二將軍が一人残らず顔を並べたわけを。

もはや真人は武勇名高い武官でも、戦場の雄たる指揮官でもない。

次期メイファン国王という国際的な戦略級の人物となっていたのである。

これでオルパシア王国は大義名分を手に入れるだろうし、旧メイファン領内でもスパイ行為やレジスタンスが活性化することは目に見えていた。

各国の動向も予断を許さない。

「あのものが我がブリストル帝国に挑戦してくるまでそれほど猶予はない。マヒト・ナカオカミを直接間近に見た卿に聞きたい。卿なら奴をどう見る？あのものを相手にどう戦う？」

聞かれるまでもないことだった。

あのケルドランの敗北以来来る日も来る日もそれだけを考え続けてきた。

マヒトへの借りを返すために。

武人としてマヒトに負けぬ存在になるために。

「彼を人と思っではなりません」

アウフレーブの言葉に将軍の一人が乾いた笑い声をあげた。

どうやら全ての将軍がアウフレーブへのわだかまりを解いたわけではないらしいかった。

「人でないならなんだ？神様か？」

アウフレイベは真剣な眼差しでその冗談を受け止めた。

「それに近い存在です。マールバラの竜退治に出てくる悪竜ロスベルグが表現としては適切でしょうか」

マールバラの竜退治

ブリストルに暮らす者なら誰でも子供のころに聞いたことのある話のひとつであろう。

カンナエ山脈の主ロスベルグを倒すまでの冒険が英雄マールバラとその仲間たちの叙事詩のなかでもとりわけ人気があるのは有名な話であった。

稚気の欠片も感じられぬアウフレイベの口調に將軍たちは一様に沈黙した。

「……………冗談では……………ないのだな？」

「このような場で冗談を言える私でないことは皆様もご承知のはず」

アウフレーブ自身、自分が面白みの欠ける性格であることは自覚している。

そのことを今更のように思い出して諸将は暗澹たる気持ちに包まれた。

竜を相手に戦いたい物好きな人間は物語のなかにしかないのだ。

「数はあのものにとって脅威にはなりえません。なぜなら通常の武器は決してあのものに通用しないからです。現にアムルタートが眼球を狙って剣を突きましたがかすり傷ひとつつける

ことは出来ませんでした。おそらくあのものを害するためには一定の魔力が付与された魔剣か、それに準ずる術が必要となるでしょう」

アムルタートは指揮官としてはともかく剣士としては決して無能ではなかった。

にもかかわらずかすり傷ひとつ負わせることができない。

いや、力の限りに大剣を突き刺しても無駄であるという事実には諸将は息を呑んで瞠目した。

それはもはや人の領域を超えている……………。

「悪竜ロズベルグを倒すためにマールバラはドラゴンスレイヤーを用意しました。竜の鱗は並の剣では貫けないからです。そして竜が空へと逃げ出さないように密かに巢に忍び込んで逃げ道を塞ぎました。あのものも同様に一流の魔剣を用意し、逃亡を防ぐためのなんらかの方法を必要とするでしょう」

ようやく將軍たちもアウフレーベが竜退治に例えたわけを理解しようとしていた。

マヒト・ナカオカミと戦うということは通常の戦とは全く次元が異なるのだということ。

「それで……………卿ならどうするのかね？アウフレーベ」

ロンバルティア侯は薄く微笑みながらアウフレーベに先を促した。

彼は長年の付き合いから、彼女ほどの負けず嫌いがなんの対応手段

も用意していないことなどありえないことを熟知していた。

「我がブリストルの総力を挙げて武勇の士を選抜いたします。傭兵や新米騎士であろうと一向にかまいません。ただ、個人として強くあるならばそれでいい。人数は五人程度が適当でしょう。この五人をもってマヒト・ナカオカミの専任部隊とします。必ずしもあのものを討ち果たす必要はありません。拘束することが出来れば自ずと敵のほうから崩れるからです」

いかに真人といえど第一級の武勇自慢を相手に戦いながら同時に部隊の指揮を執ることはできないだろう。

オルパシア軍は真人の超絶の武力とカリスマによって実態以上の働きを見せているが、所詮真人抜きで戦えばブリストルの勝利は動かないのだ。

自らの武力によって味方の士気を鼓舞する真人が最前線に出てくるのは確実でありアウフレーベの作戦は多少消極的ながら非常に効果的なものに思えるものであった。

「なるほど、味方を見捨ててあのものが逃げる恐れもない。しかも味方が劣勢に立たされればあのもんとして冷静ではおれまい」

「はい。そこにつけこむ隙もあるかと思われます。ただ……………」

「ただ……………何かね？」

公平に見てアウフレーベの作戦案は優秀なものだとジェラルドは考えていた。

おそらくマヒトを実際に見たものでなければこの作戦は考え付くまい。

これでもなおマヒトを警戒するには足りないということなのか？

「あのものは魔術師としても規格外であると聞きます。残念ながら私はあのものが魔術を使う瞬間を見てはおりませんが……………その腕次第では足止めも難しいと言わざるをえません」

鬼神の武力に魔神の魔力……………。

たったひとりを押しとどめることの困難さに再び沈鬱な空気が流れる。

そのとき、これまで無言でジェラルドの脇に控えていた神殿補佐官が立ち上がった。

「われわれ神殿はあのものを戦神ストラト様の怨敵カムナビに属するものと考えております。忠勇なる我が兵士たちには存分にその武を奮っていただきたい。あのものの魔術は我ら神殿が必ずや防いでご覧に入れる」

これまで戦場には介入を控えていたストラト神殿が真人に対し牙を剥いた瞬間であった。

第五十三話

冷徹をもってなるジェラルド卿ですらが目を剥いた。

十二將軍の軍議に神殿が臨席すること自体異例であるのだが、それはあくまでも軍に対する無言の圧力だと思っていたからだ。

あくまでも開戦以来はかばかしいとは言えない戦況に奮起を促しに来たのだと、そう考えていたのだが……。

「我々神殿はマヒト・ナカオカミの存在を軍以上に脅威と考えております。なんとすれば彼の者はストラト神の神殿において信仰に対する重大な脅威として我が神の神託が下された者であるからです」

神殿補佐官であるクルナツフ・ラナート・コーネリアス正司祭の言葉が与えた影響は甚大だった。

国教であるストラト神殿がマヒトを信仰の敵として認めたとということとは、過去の事例からいってそれは国家存亡の危機に瀕していることに他ならないからだ。

そもそも神託はストラト神殿の秘中の秘であって、こうして公開されること自体がない。

例外をあげれば二百年前、エルドリムの悪夢と言われ、国土の半分を連合国によって蹂躪されたとき以来のことであった。

それにしてもブリストルほどの巨大な帝国が、たったひとりの若者によって左右されることなどあり得るものなのだろうか？

將軍たちの空気を察したのかクラナツフは続けた。

「…………… たった一人の人間に…………… とお考えですか？ではもう一度考えて見てください。彼がいなかったときのオルパシア王国の状況を。外務卿と捕らえられ南部穀倉地帯を奪い返せず、メイファン王国の残存勢力を扱いかねる…………… 本来ならばオルパシア王国は本年中には陥落してしかるべきであったはず」

そういわれて見れば改めてマヒトの成した功績には目を見張るものがある。

そしてもっとも恐るべきは、それが彼以外の何者にも成しえなかったという点にあるであろう。

国家間戦争ではたまたま役割を与えられただけの偶然が生んだ英雄がまま存在するが、マヒトの代わりを成しうる人間を誰も想像することができないのだ。

「これは我々も考え方を変えてかからねばなりませんね……………」

フェルナンド卿の言葉が列席していた將軍たちの気持ちを代弁していた。

これはもはや通常の戦ではない。

兵と兵の戦いこそが戦いの帰趨を決めるといふのは有能な指揮官には常識といってよい。

だが、今回に限っては兵たちよりたったひとりの指揮官をこそ万難を排して倒さなければならなかった。

今まさに求められているのは、優秀な戦術指揮官であることよりも獲物を追い詰め、罟を張り、しとめるためにはいかなる労も厭われない、老練な狩人であることなのだ。

「よろしい、では狩りを始めるといたしましょう。戦神ストラトへ捧げられる生贄は、誓って彼のマヒト・ナカオカミでなければならぬのですから」

外務卿シエレンベルグはロドネー王国・ワルサレム王国といった隣国の要人と極秘に会見を重ねつつ、王国の戦力的劣勢を挽回するための手段を練っていた。

しかし結局のところあるひとりの人物の活躍に期待するしかない現実を味合わされる結果に終わっている現状が歯がゆくてならない。

これでは外務卿である自分はただの交渉窓口だけではないか！

「……………まったく……………私は情けない義父だな……………」

ロドネー王国もその他の隣国も軍事支援に踏み切るための答えはひ

とつ。

マヒト・ナカオカミが率いる軍集団が、ブリストル帝国軍に対して決定的な勝利を収めること。

開戦以来、善戦しているとはいえオルパシア王国軍はマヒト以外に目に見える戦果をあげていないうえ、損害は同等かそれ以上というていたらあくである。

これで自国の命運を預けられるわけがなかった。

それでもマヒトがメイファン王国の後継者としてシエラファイター・プリムローゼ両姫と結ばれたことで政治的大義名分はオルパシア王国へと傾いていた。

あとは勝てるという確証さえあればよい。

問題は、その確証を与えてくれる将帥がマヒト以外に見当たらないということなのだ。

唯一軍務卿であるハースバルド卿がマヒトに代わって野戦を任せられる人物ではあったが、彼は軍政上の負担が大きすぎて王都から身動きがとれない。

「結局……………君だけが頼りだ……………マヒト」

もちろんそれだけで終わらせるつもりはない。

マヒトの勝利をきっかけにして対ブリストル包囲網を作りあげ、戦局を一気に逆転させるための準備はできている。

それが王国のために戦場へと駆りだし、策略によって息子と呼んだマヒトへシエレンベルグ卿の出来る唯一の償いなのだった。

「私としたことが……ずいぶんと情を移したものだ……」

近い将来にマヒトとアナスタシアが結ばれて本当の義父となる日を待ち望んでいる自分がいる。

そしてアナスタシアとマヒトの間に生まれる孫にこのシエレンベルグ家を、オルパシアの国を託していけたなら、それはどんなにか幸せなことだろう。

今このときだけは、僚友ハースバルド伯の無骨な頑固さがうらめしいシエレンベルグ侯であった。

現在オルパシア王国が抱えている戦線は概ね三つに分けられる。

ひとつは南部戦線であり、これは真人がブリストルの南部侵攻軍を打ち破ったことでひとまずの小康を見せていた。

レナセルダ河を挟んで堅固な野戦陣地を築城しており、守勢には定評のあるバンデクリフト王国少将が着任した今、少なくとも防御に関する限り不安はない。

もうひとつは北部戦線である。

こちらでも中立を保ったロドネー王国の協力が得られない限りブリストルの侵攻ルートはモールカナル城塞の正面に限定されてしまうため強兵のブリストルをもって

してもはかばかしい戦果はあげられずにいた。

最後のひとつが西部戦線である。

これはブリストル最大の城塞都市ケルドランを戦略拠点としてコラウル山脈を支配し、カーゴイアス丘陵からオルパシア王都へ侵攻しようとするもので、現在最も

ブリストルにとって有力な戦線と目されていた。

しかし開戦当初に真人によって受けた打撃も大きく、ようやく補充

と編成を終えたところには南部戦線から転進した傭兵部隊がコラウル山系でゲリラ戦に転じていた。

軽装で戦い慣れた傭兵にフリーハンドを渡されてはさすがのブリストル軍も捕捉は難しい。

基本的に大陸のどの国でも傭兵の運用は硬直化していて被害担当を押し付けるのが常であるせいだった。

本来の真価を完全に発揮した傭兵との不正規戦を誰も体験していなかったのだ。

この西部戦線を戦局の要として認識していたのはオルパシア王国も同様である。

そのもつとも大きな要因はケルドラン城塞を突破して北西の方角に旧メイファン王国領が存在するためであった。

もしも西部戦線で勝利を収め、さらに旧メイファン王国の解放が実現するならばブリストルに対して劣勢であったオルパシアの戦力比は完全に逆転するだろう。

侵攻部隊の総指揮官に真人が任命され、王国の命運を賭けた大部隊が編成されたのはむしろ当然であった。

「考え直してくれ、シエラ・プリム」

天幕の中で真人は唸るような声で懇願していた。

「真人様が何と言われようと今回ばかりは聞けません」

シエラの言葉に無言でこくこくと頷くプリム、二人とも退く気は微塵もないようである。

「戦場では何が起こるかわからないんだ。せめて攻城戦が終わってからにしても……………」

「この戦はメイファン王国がその主権を取り戻すための第一歩。それに私が同行せずしてどうして故郷に帰れましょう」

あれほど王族たる義務から逃げていたシエラとは思われぬ決然とした物言いであった。

シエラの脇に控えたハイデルたち侍従武官も、戦場から彼女たちを遠ざけたいと願いつつも、その志と威風には震えるほどの感動に魂を揺さぶられずにはおれない。

シエラとプリムの献身は決して我が侘ばかりというわけではなく、戦後のメイファン王国の自立という観点からも無視できない要因を含んでいるのである。

しかし真人としてはそんな政治的術策から婚約者を戦場に引き出すような真似は断じて容認できるものではない。

「……それにカニンガム子爵との交渉が難航していると聞いておりますよ」

真人の否定の言葉よりシエラの追撃のほうが早かった。

このあたりの交渉センスはやはり王族として生まれついたものの経験によるものであろう。

残念ながら真人の真価はその武力にあるのであって、弁舌にあるのではないのである。

それにカニンガム子爵率いるメイファン残党千数百名との交渉が難航しているのも事実であった。

国を見捨てて亡命した旧貴族を旗頭に組織されたオルパシアのメイファン残党軍に対し、彼らは深刻な軽蔑と不信を覚えている。

地下にもぐり多大な犠牲を払いながら亡国から今まで抗戦を継続してきた彼らにとって、オルパシアに逃げた者たちは許し難い裏切り者に見えているのであろう。

その者たちに対し、巫女姫自らが陣頭に立ったという事実はお互いを歩み寄らせるに十分な実績となるはずだった。

「メイファンの兵は既に敗戦に慣れてしまっています。心が折れずに戦うためには拠り所が必要なのです。それに……………」

シエラはここで言葉を区切って微笑った。

「私は真人様を信じていますから……………」

恐ろしいまでの殺し文句である。

真人は深い諦念とともにシエラの説得を断念せざるを得なかった。

まさかここで守りきる自信がないと言うことは、守護者としての真人の矜持が許さない。

「まったく先が思いやられるよ……………」

苦笑とともに真人は敗北を受け入れた。

この世界に来てから自分はいったい幾度敗北してきただろうか。

決して敗北の許されなかったはずの自分だが、この世界で初めて、心許した人に負けるということは心地よいこともあるということを知った。

だからこそ負けてはならないものもいる。

軍議が終わって退席する侍従武官の一人が宿舎に戻ることなく足早に兵站部へと向かっていた。

そして何食わぬ顔で自らの愛馬の世話にかこつけて一人の馬商人を呼びつける。

騎兵隊の飼葉を王都から運んできた温厚そうな商人が、にこやかな笑みを浮かべながら武官のもとへ進み出る様は客観的に見てごく当たり前の情景に見えた。

「急ぎ戻って公爵様に伝えよ。軍団の出発は四日後、兵力は二万。メイファンの姫巫女は王都には戻らずに戦場まで同行する。カニンガム子爵との合流はない、とな」

服のあちこちに飼葉をぶらさげて、いかにも朴訥な馬商人にしか見えない男だが、目だけは笑わずに頭を下げる。

「それはさぞ公爵様がお嘆きになるでしょうな……事を起こすにあの姫巫女は大事な獲物でしたものを……」

「余計なことは言わずともよい……いけー!」

油断なく周囲を見回す男たちの頭上を一羽の川蝉が舞っていた。

第五十四話

「こりゃあ、ちとやべえかもしんねえな……………」

フィリオは居並ぶ顔ぶれのあまりの豪華さに一瞬言葉を失った。このままではアセンブラの猛虎ことフィリオ・セベストロス・アセンブラとしてはいささか不本意な事態になりそうな気配である。だがもちろんフィリオは真人という獲物を誰であろうとも決して譲るつもりはなかった。

真人との再戦を望むフィリオは、敵対するブリストルの傭兵部隊の指揮官として従軍してはいたものの強兵をもってなるブリストル帝国では残念ながら傭兵の出番は少ない。

しかし後備に置かれて気分を害してはいたとはいえ、真人と戦う日が訪れることをフィリオは一度たりとも疑ったことはなかった。

……………あれは兵に殺せる男ではない。

あの真人という男は岩を切り裂き、滝を割るような武芸者がその全能を尽くしてようやく倒せるかどうかという存在なのである。

いかに戦いがブリストルの優位に進もうとも彼を倒すべき資格を持つ人間は限られると見るべきだろう。

そして現在フィリオの予想は半分あたり半分はずれたとも言える。指揮官としても非凡な才能を見せた真人のためにブリストルは開戦当初の予想を裏切り膠着状態を余儀なくされている。

だがもつとも肝心な真人を倒すべき存在の稀少性については全くフィリオの考えたとおりであった。

ブリストル広しといえどもそんな武量をもった人間は数えるほどし

かいはしないのだ。

真人専任にあたる武勇自慢の一人としてフィリオにお呼びがかかったのはつい先日のことであった。

待ちに待った機会に舞い上がったフィリオはつい手加減を忘れてしまい、不幸にもフィリオとともに候補にあがった傭兵仲間を二人ベツドへと送ってしまったている。

もっとも命があっただけ僥倖というべきかもしれなかったが。

あまりに突出したその武量にフィリオの真人専任部隊への選抜は文句のつけようもなく決定された。

問題があるとすればそれは一人ではなかったということだ。

フィリオとしては一対一で心行くまで真人と雌雄を決したかった。

しかし真人の抹殺という命題はブリストルにとって何よりも優先するべき至上のものである。

そこにフィリオ一個人の美学や矜持など入り込む余地はない。

真人一人に対する刺客として選ばれたのは、ブリストルが世界に誇る珠玉の武芸者たちであった。

ウエルキン・アナトリアス

同じ傭兵同士幾度か戦場でめぐりあった相手である。

双剣の使い手で、攻撃よりむしろ守成にその手腕を發揮するタイプの人間であり、フィリオでもこの男の防御を突破することは難しい。現に負けることこそなかったものの戦場ではついに決着をつけられずにいた。

朴訥なシュバーベンの片田舎の出身らしい温厚な男でいささか傭兵のなかでは浮いた存在である。

噂では故郷の子供たちに送金をし続けているとも聞く。

年のころは四十にさしかかろうというあたりだから妻子がいたとしても不思議ではないが……。

敵としては恐ろしい相手だったが味方になってみるとなんと力も

抜ける存在ではある。

ベアトリス・ニノ・ブランカ

おそらくディアナかそれ以上に女傭兵のなかでは知名度の高い女である。

灰の魔女の異名のとおり火炎系の魔術を得意とし、燃やし尽くした人間の数はとうてい千ではきかない。

生粋のサディストで生きながら燃える苦痛を味あわせることを至上の喜びにしていると噂される。

フィリオにとつてはいけすかないが戦歴と実力は確かだ。この手の魔術師にしては珍しく体術を心得ていて近距離戦でもなかなかにあるなどれない。

本人を目の前にしては言えないがディアナと決定的に違うのは大柄ではあるもののディアナは目鼻立ちの整った明らかな美人であったのに対し、ベアトリスは醜女であるということだ。

身長は小さく、顔は下膨れで口が大きく、目は釣りあがっていつも狂気の色を湛えている。

恨みを忘れず些細なことで激昂するわずらわしい女だが、真人の武量に対抗するには彼女の魔術は有効な手段であるかもしれない。

シンクロード・ダリウス・モートラッド

ブリストルに隠れもない人斬りで、もしも真人とのがなければフィリオが標的にしようと思っていた男である。

常に最前線で戦い、数々の武勲を挙げながらも一兵卒であることに拘った真正の戦馬鹿ぶりはフィリオに通じるものがあつた。

すなわち強いものと戦いたいという単純な欲求に忠実な男なのだ。剣士としては正統派の鍛錬を積み、派手さはなく堅実で理になつた手法を好む。

攻守ともに隙のない一対一の決闘でもっとも力を発揮するタイプの男だつた。

いまだ二十代の半ばという若さと戦馬鹿とは思えぬ美貌から兵にも将にも愛される稀有な資質の持ち主であるのだが、あの戦馬鹿ぶりが直らぬかぎり意味はあるまい。

実直にして勇猛、ともに戦うには誰よりも頼りになる戦士であった。

シンクレア・ミナス・ジェイラス

名門ジェイラス家の三男坊でありながら軍を志し、弓の達人として名高い男である。

これまで幾代にも渡って宰相を輩出してきたジェイラス家の人間とは思えぬほど人当たりがよく、将来の十二將軍候補として期待されている。

彼の特徴は神弓と言われるほどの速射ぶりとその命中率にある。

一息で矢を打ち尽くすという早業に加え、遙か先から零れる水滴すら容易に打ち抜くその命中率はブリストルにも並ぶものがない。

しかも彼は矢の速度を自由自在に操れることから、八本の矢を全く同時に着弾させることを可能にしており、かつて国境紛争でブリストルに敵対する国に雇われていた

鉄壁の守備を誇るウエルキンに唯一手傷を負わせるという戦果を挙げている。

一対一ならともかく、強敵を相手にしながら狙われることを思えばフィリオでさえも背筋が寒くなるのを抑えられない男だった。

この五人を揃えてもまだ安心できないというのが真人の恐ろしいところであろう。

神殿からは二人の正司祭が派遣され真人の魔術を封鎖することになっていた。

信じがたいことにその司祭たちは殉教の許可が与えられ………戦場にできればその命を失うことが確定している。

ストラト神の力を直接その身に降ろして行使するには人間の体では

器が持たないのだ。

ゆるぎない信仰心と優れた魔力容量の持ち主だけが、ほんの一時とはいえ神の力を代理行使することが叶うということは本来ストラト神殿の秘中の秘であった。

神殿の幹部を犠牲にし神殿内の秘事を晒してでも真人を倒さなくてはならない。

今まさにブリストル帝国はその総力をあげて真人の息の根をとめようとしていたのである。

「…………… 本当に…………… やべえかもしんねえな……………」

つまらない。

あれから自分は間違いなく強くなったのにそれを確かめることができないうのは納得ができない。

だが全てが思い通りにならないのならせめて自分が真人を倒さなくてはいけなかった。

フィリオは愛槍を懐に抱えつつ居並ぶ味方を出し抜くことを誓っていた。

「それでオルパシア軍は本当に総勢二万で間違いはないのか？」

十二将軍の一人であるアルセイル・ジェリド・ランペール卿は間諜からの報告に首をひねっていた。

ケルドランを守備するブリストルの兵力は三万に達する。

攻撃する側が守備する側より三割も劣勢であるというのはあまりに

戦理にはずれている、とアルセイルは感じていた。実際にオルパシアの動員兵力は予想では四万はギリギリ動員出来たはずなのだ。

「奇兵………でしょうか？」

アルセイルと同様にアウフレームもこのオルパシアの戦備には疑念を隠せなかった。

確かに膠着状態にあるとはいえオルパシアの戦況は決して楽観できるものではないのである。

むしろ真人が敗北した瞬間に一気に崩壊の一途をたどってもなんら不思議はない。

にもかかわらず王都の守備に余力を残している理由がわからなかった。

「いや………情報源を考えれば別働隊は考えずらいな。それにあのマヒト・ナカオカミと連携のとれる将官がオルパシアにはおるまい」

連携がとれなければそもそも兵を分ける意味がない。

集中した敵に各個撃破されるのがオチなのだ。

それゆえに古来より分進合撃というものはよほどの統率力と戦術眼がなければ成功は難しいとされているのである。

「あのものに限って我々を侮っている………などとは思えぬのですが………」

ケルドラン城塞に駐留するブリストル軍の総兵力三万に攻者三倍の法則を当てはめれば本来九万の兵力を必要とされる。

ましてケルドラン城塞の防御力は難攻不落と表現するに相応しいものだ。

それを二万で攻略するというのは愚者の戯言にしか聞こえないのだが、アウフレーベは真人が愚者でも誇大妄想狂でもないことを知っていた。

必ずやなんらかの勝算を見込んでいるのは間違いなかった。

「索敵は徹底させる。それにオルパシア国内も一枚岩ではないし、そうした国内事情があるのかもしれないだろう。メイファンの勢力も分裂しているし、案外マヒト・ナカオカミも計算違いを嘆いているのかもしれないぞ」

実際のところアルセイル卿の見解は正鵠を得ていたといつてよい。オルパシア王はこの乾坤一擲の戦いに王都の守備を擲ってでも兵力を投入するつもりであったのだ。想定していた総兵力は四万人。それができなかったのはマンシュタイン公爵家に不穩の動きあり、という真人からの忠告があったからだだった。

「それにしても獅子身中の虫とはこのことだな」

門閥貴族の目をかいくぐるために王が使う密偵の数は限られている。組織が大きくなれば必ずや情報の漏えいがあるからだ。特に王宮内に巢食った複雑怪奇な情報網は一国の王であるアルハンブラでさえも把握は難しいのであった。

「商人や旅人を装って公爵の領国から王都に入り込む人間がこのところ急増しております。その数およそ三千は下らぬかと」

おそらくは真人の敗報を聞くと同時に国内の数箇所で同時に反旗を翻し、プリストルに恩を売る心算であろう。

おかげでこちらは近衛を含めて予備兵力の多くを留め置かざるをえなかった。

今頃マンシュタイン公爵も予想以上に王都の警戒兵力が多いことに苦虫を噛み潰しているに違いない。

普通であれば謀反を断念してしかるべき情勢である。

「……………果たしてどこまで自制が利きますかな」

アルハンブラの傍らにあつて共に謀報戦の指揮を執るのは外務卿ラスネールであった。

長年外交に携わり数多くの人間を見定めてきたラスネールにはマンシュタイン公爵がもはや止まれないであろうことがわかつていた。

今回の戦いで真人が勝利すれば戦いの舞台は旧メイファン王国を中心としたプリストル国内に移る。

そうなればロドネーをはじめとする小国が一斉にオルパシアの側にたつて参戦し、戦争そのものが講和に向かう可能性すらあるのである。

このまま手をこまねいて戦争が終結してしまうのを公爵が容認できるはずがなかった。

自我を肥大化させた公爵が樂觀論にとりつかれて拳兵の暴挙に及ぶのは時間の問題であるとラスネールは見ていた。

だからといって侮ることは絶対にできない。

なんといつてもマンシュタイン公爵は王国一の所領と豊富な資金を有している。

また門閥貴族の盟主でもあり、成り上がりものに反感を抱く貴族たちとどこまでマンシュタインに組するかは予想がつかない。

この王宮内にもどこに門閥貴族の親派が潜んでいるか知れたもので

はないのだ。

「せっかくマヒト卿が王国を支えてくれているのに味方同士で争わなくてはならぬとはな……………」

アルハンブラは痛恨の極みとばかりにテーブルを殴りつける。

できればプリストルとの戦が終わるまでは事態を引き伸ばしてマヒトの支援に徹したい。

しかし売国奴どもにこれ以上の我慢を期待するのは難しいと言わざるを得ない。

ラスネール卿もまた己の不甲斐なさをかみ締めていた。

いったい自分はどこまでマヒトに重責を担わせれば気が済むのであろうか。

「……………おそらくマヒト卿の陣立ても行程もプリストルには筒抜けでありましょう……………あの義息子には借りばかりが増えてしまいます……………」

それでもなおマヒトには勝ってもらわなくてはならない。

だからこそ勝って凱旋するマヒトを迎えるために、売国の虫けらどもにはここで退場してもらわなくてはなるまい。

そのためにはたとえどんな悪辣な手段であってもためらうつもりはラスネールにはなかった。

第五十五話

いかに大陸公路といえどもコラウルの山を抜ける山道はとうてい軍隊が行軍するのに十分な面積は確保できない。

必然的に隊列は長蛇の列とならざるを得ず、数キロにわたつてのろのろと進むオルパシア軍の列をディアナは複雑な思いで見つめていた。

「ちと、今回ばかりは憂鬱だね……」

同じ傭兵同士のネットワークであるフィリオが参陣していることはわかっていた。

しかも鉄壁のウエルキンまでいるという。ブリストルが真人の首に焦点をあわせていることは明らかだった。

ディアナの戦人としての本能は先日から最大級の危険を告げていた。だからといって今更戦いを回避できるはずもないということもわかっている。

ここで勝手に撤兵などしたら真人は政治的に失脚し、結果的にオルパシア王国は滅ぶだろう。

「ままならないもんだよ、全く」

そう言つてディアナは愛しい男の横顔を見つめる。

真人の表情はいつもと同じく微笑を湛え、焦りなど微塵も感じさせないものだったが、その心のうちでは激しい葛藤が渦巻いていることを

ディアナは知っている。

本来なら常に真人の横に傳っているはずのアリシアがひっそりとい

ずこかに姿を消していた。

その理由は真人しか知らないが、今回の戦の決め手となる大事をアリシアに託したことは想像に難くない。

気に入らない相手ではあるが、ディアナは兵站幕僚としてのアリシアの手腕を高く評価している。

そのアリシアをあえて本隊から切り離しての極秘任務となればよほどのことなのだろう。

真人の内心はそのアリシアや従軍しているシエラやプリムの心配ではちきれんばかりであろうに、涼しい顔で微笑む真人が、ディアナには

哀しい。

「この闘神ディアナ……ほかの女はいざしらず、私だけは真人に守られてばかりじゃなく、真人を守る女だつてところを見せてやるよ」

個人的武勇ばかりではない。

オルパシア軍で真人に次ぐ指揮能力をディアナが有しているのは厳然とした事実であつたのである。

ディアナの指摘したとおり真人の胸中は穏やかなものではありえなかつた。

だがそれを表に出すことはできない。

なんとなればオルパシア王国軍は真人のカリスマに戦意を依存しすぎている。

主将が暗く沈うつな表情をしていればたちまち戦意が瓦解することは明らかだつた。

それだけでなくオルパシア王国軍は、この乾坤一擲の戦いに、当初予定の半分しか動員できないという失態をおかしている。数と練度に勝るブリストル帝国軍との戦いの前に真人が揺らいでいては勝算はおぼつかないのだ。

「……………懐かしい匂いだな……………」

だが真人の不安の大部分を占めていたのは強力無比なブリストルの大軍勢でも、フィリオをはじめとする一騎当千の武芸者たちでもない。

かつて感じていた神の気配……………神気がケルドランから煙るように立ち上っていることだった。

信じられないことだが今回の戦には神の力を相手に戦うことになりそうなのだ。

カムナビとの死闘の記憶が真人の脳裏を駆け巡る。どうやら今度の戦は己の命を賭けることになりそうであった。

しかしカムナビとの戦いでは何のためらいもなく投げ出せた命を投げ出せなくなっている自分がいることにも真人は気づいていた。

戦うことにしか価値のなかったあの世界ではありえなかった感情であった。

神殺しではない中御神真人個人を慕い、必要としてくれる人間の存在が真人の頑なな心を溶かし変えてしまったのだ。

そのことが再び対峙を強いられた神との戦いで吉と出るか凶と出るか真人には想像もつかない。

それでも負けることだけはできない！

先ほどから気遣わしげな視線をよこしているディアナや、御輿のなかでメイファンの近衛に守られたシェラとプリムを守るためになら

戦うための鬼

に戻る事など何ほどのことでもないはずだった。

幸い神気はかつて戦ったカムナビほどに昇華されてはいないようだ。戦いが真人の計画通りに推移するのであれば打ち破ることは決して不可能ではないだろう。

だがそんな不安とは別に胸に沸々とこみ上げる高揚がある。

強者と戦い、雄敵を打ち破る………武人だけが持ちうる業深き高揚だった。

「全く………度し難いものだな………」

戦士として戦うべきときに戦えぬほどの恥辱はない。

今まさにこのときこそは、中御神真人として真に戦い、そして勝利すべき場所だった。

カムナビと戦ったときにはなかった高揚と、カムナビと戦ったときにはなかった死への恐怖が真人の感傷をかきたてる。

勝つこと以外考えたことのなかった過去とは違う。

生まれて初めて真人は勝ちたいと切に願っていたのである。

ケルドランに集結したプリストル軍三万は困惑していた。

コラウル山脈の出口にあたるセンギアにおいてオルパシア軍が停止して陣を布いてしまったからであった。

「いったい何を考えているのだ？」

ブリストル軍の主将を務めるアルセイル卿も、オルパシア軍の動向には不審の念を隠せない。間諜からの情報によれば本気でセンギアに腰を据えて防備を固めているらしかった。

しかしそれでは何のために本国を離れて二万もの大軍を率いてきたかわからない。

それともブリストルは目の前のオルパシアに後先考えず牙を剥く飢狼とも思われているのだろうか？

「アルセイル卿……その間諜は別働隊の存在などは言ってはおりませぬか？」

アルセイル同様アウフレーベもまたオルパシアの行動には何かしらの理由が存在するものと考えていた。

だがその理由が一向に見えてはこない。

オルパシア軍の攻略目標はケルドラン城塞である。

もしくはケルドランに駐留する兵力の殲滅だ。

だがそれはオルパシア軍が能動的に行動しなければ果たされないのは明白だった。

このまま待っているだけなら、時が経過するだけでオルパシア軍は兵站の負担に耐えかねて撤退することになるだろう。

コウラル山脈の奥深くに二万人もの大兵力が滞在するということはそれだけで恐ろしく物資を消耗するものなのである。

それがわかってはいるはずなのに真人ほどの武将が何も手を打っていないわけがないのだ。

「私もそれは考えたが……こちらから打って出るならともかくこの城塞周辺で戦うかぎり別働隊にはさほどの意味はないぞ。

仮に後背に回ったとしても城塞の防御には何の影響もないからな」

そうなのだ。

城塞という建造物は基本的に360度全周囲に偏りなく防御力を発揮するように設計されている。

隊を二つに分けることはむしろ各個撃破の機会を敵に与えるだけであり、戦術的には愚策であるというしかないのである。

「いつそ小当たりしてみるか………?」

アルセイルは精鋭によって出戦して敵の出鼻をくじくことも考えてみたが、それは危険性が高すぎると言えた。

今作戦の目標は真人の命にあるのであり、精鋭はその真人の拘束に欠かせない存在である。

万が一半包囲されてオルパシア軍に殲滅されるようなことがあれば作戦の遂行はおぼつかない。

かといってごく普通の兵と逐次投入するのは愚か者のすることであった。

自らの戦力に絶大な自信を抱きつつも、プリストル軍は城塞内で雌伏を余儀なくされていた。

「土嚢を早く積み上げろ！第二小隊は両翼の樹木をもう少し切り拓いておけ！」

オルパシア陣営では野戦築城の強化に余念がない。

センギアはコラウル山脈の出口として大陸公路が平野に開ける先端にあたる。

道幅は約数十メートルに達し数百名が戦闘機動するのに不足はないほどだ。

だが逆に言えば戦闘に参加できるのは全軍のわずかひとりにぎりに過ぎないとも言える。

こうした地形は兵数に劣る側が持久戦を戦うのに適しているが、ひとたび前線が崩れれば機動の余地のない分後続の兵も一気に敗勢に飲み込まれてしまうという弱点も持っていた。

兵の質でプリストルに劣るオルパシア軍としては、高所を押さえ、野戦築城を利用することでプリストルに対抗しようとしていたのである。

守りきれれば勝ちだ、ということは既に全軍に周知している。

当然疑念はある。

なぜ守るだけで勝ちにつながるのか？われわれはケルドランの攻略に來たわけではなかったか？

一人のあるメイファン士官などは口から泡を飛ばして詰問したが真人は取り合わなかった。

プリストル軍は近いうちに総力をあげて攻撃に打って出る。

真人が地位と名誉にかけてそれを保障すると言われては誰もが引き下からざるをえなかったのである。

もちろんこの発言はケルドランのアルセイル・アウフレーベ両首脳のもとにも当然間諜から届けられていた。

「わからん………いつたい彼の確信はどこから来るのだ？間諜の報告では兵糧の備蓄はあと半月足らずだというが………」

「ケルドラン城塞の備蓄は半年以上………比較になりませぬな」

二人の目にはオルパシア軍………いや、マヒト・ナカオカミがひたすら自滅への道をひた走っているように見える。

複数の筋からの情報でもオルパシア軍の兵力には変化はない。

センギアで待機している二万人がオルパシアの動員できる予備兵力

の全てであった。

つまり別働隊は存在しえない。

ありもしない兵力ではさすがのマヒト・ナカオカミでも奇策の打ちようがあるまい。

決して暗愚ではないはずの二人がいくら考えてもオルパシアの採る策が想像すらつかなかった。

半ばこのままオルパシア軍が自滅してもブリストル軍の勝利は得られる、と考えることを諦めかけていた二人の下に、驚天動地の報告がもたらされたのその翌朝のことであった。

「してやられた……！ 奴が待っていたのはこれが……！」

マッセナ川の水が干上がったところどころに川底が露出してしまっている。

あれほどの水量を誇るマッセナ川が何の理由もなく干上がることはありえない。

すなわちオルパシアの手によるものと考えるべきであった。

「一刻も早く精鋭をマッセナ川の上流にさしむける！ オルパシアにはもう予備兵力はない。おそらくは非戦闘員ばかりが川を堰きとめている

はずだ！ マッセナ川ほどの水量を堰きとめているとすれば……下手をするとケルドランは水没するぞ！」

これまでケルドランを守護してきたコラウルから流れ出る豊富な水が一転して今度はケルドランに牙を剥こうとしていた。

おそらくマヒト・ナカオカミは軍の内情がつつぬけであることに気づいている。

だからこそ軍以外のところで勝負の決め手を打っていたのだ。

マッセナ川の氾濫がケルドランにどれほどの被害を与えるか今は予

想できないが、上流にさしむけた兵が川の決壊に間に合う確率は決して高くないとアルセイルは見積もっていた。

「ひとまずは褒めておくとしよう。だが策を弄して守りを固めなければプリストルの強兵に対抗できないのがオルパシアの現実だということを

忘れるな！」

座して死を待つという選択肢はプリストルにはない。

切り開くべき道は常に後ろではなく前にあるというのが、プリストルの武人たるの信念なのだ。

「全軍我に続け！」

主将の勇氣に感染したかのように、プリストル軍は動揺から立ち直りたちまちその獰猛な本性に立ち返った。

強者が弱者に怯えることがあつてはならない。

それは大陸でプリストル帝国軍のみに許されたある種圧倒的な矜持であつた。

蹂躪すべき弱者の群れであるオルパシア軍へ向けて、怒濤の勢いでプリストル軍の攻勢が開始されようとしていた。

第五十六話

ケルドランの城門を開いてプリストル軍が一斉に出撃するのがセンギアに陣取った真人の目からもよく見えた。

「……なかなか思い切りのいい将がいるようだな……」

思い通りとはいえ、決断に要した時間が予想より早い。

マッセナ川の状況を見るやただちに少数の精鋭を上流に派遣し、残りは後先を考えずに出戦していた。

真人は対応策を実行に移すまでに、もうしばらくの猶予があるものと考えていたのである。

まずもって精鋭を上流に派遣するという決断は勇気を伴う。

上流でマッセナ川を堰き止めているであろうオルパシア軍の捕捉と撃滅が任務である以上、その侵攻経路は川に沿ったものにならざるを得ない。

もしも到着前に堰を切られたら全滅は確実である。

柔弱な将であれば、失っても惜しくない部隊を派遣するか、大きく迂回して現地に向かわせるかを選択したであろう。

またマッセナ川の氾濫がケルドランの城壁を突破するかどうかは、実のところやって見なくてはわからない。

城塞の防御力を信じて守りに徹するという選択肢もあったのである。それらの決断をするまでにはしばしの時間が必要だと真人が考えたのも当然であった。

「お前らぬかるんじゃないよ！せっかく生きのいい獲物が向こうか

ら罨に飛び込んで来てくれるんだからね！」

最前線の主力である傭兵たちに檄を飛ばしたのはディアナだった。さすがに戦場の雰囲気を得ている。

味方の士気を高揚するとともに、防御側の有利さをさりげなく持ち上げて見せるあたりは名人芸だ。

本当にこの人が敵でなくて良かったと真人は思う。

……………無事でいてくれよ、アリシア……………

気になるのは分派された精鋭を引き受けることになるアリシアたちだった。

ろくに戦力らしい戦力を持たない彼女がああ精鋭に捕捉されれば壊滅は必至なのだ。

もちろん策は講じてあるが、あの進軍ぶりだと時間的にはギリギリになりそうな気配である。

あの生真面目なアリシアのことだ。任務を放棄して逃亡するなど考えもよらないだろう。

作戦行動を実現させるための運用力においてアリシアに比類するものがいないために彼女を派遣せざるをえなかったが、唯一その生真面目さだけが心配だった。

だが真人がアリシアを助けに行くことはかなわない。

それを承知で送り出したとはいえ、決して真人の焦慮が消えるわけではないのであった。

「大丈夫だよ、真人。……………だから安心してあいつが戻ってこれるように私らも頑張らなくちゃね」

ディアナに背中から抱きしめられて真人は赤面しながら苦笑した。本来心配すべき相手に逆に心配されてしまったことが恥ずかしく、

何故かそのことがうれしかった。

「然り、中御神家守護司の名に懸けて」

先頭をきつて走っていたアルセイルを守るように、五騎の騎兵がスルスルと集団の先頭に進み出る。

明らかに尋常ではないその武威は、彼らが超一流の武者であることを明瞭に告げていた。

彼らの標的が自分の命にあることを真人は十分に知っている。

だが、負けられぬ理由がまたひとつ増えた今、真人は静かな闘志とともに中御神の名に懸けて彼らを殲滅することを誓っていた。

目論見どおり真人が最前線に躍り出て自分たちの相手をしようとしていることが、騎上にあるフィリオの目にも確認できた。

どうやら雑兵を相手に無駄な力は奮わずに済みそうであった。

全身にみなぎる高揚を抑えることができない。

あの日の敗北からフィリオは真人を倒すためだけに修練を積んできたのである。

強き者を倒すことこそフィリオが人生を賭けるべき望みの全てであるのだった。

「うおおおおおおおおおつ！」

雄叫びをあげて長刀を上段にふりかぶる。

「やだやだ。これだから筋肉ばかは……………」

ベアトリスが突撃に移るフィリオに苦い顔を隠そうともせず莫大な魔力によって一筋の炎の回廊を紡ぎだす。

近接戦が始まってしまつと、高威力な範囲呪文は使えなくなつてしまつからだ。

「ファイアーロード」

射線上の味方まで巻き込みそうなベアトリスの熾烈な上級魔術はさすがに真人も看過できなかった。

灰の魔女とはよく言つたものだ。

あの威力では永久築城した城塞でもないかぎり耐えられまい。

まして即席の野戦築城など鎧袖一触になぎ払われるのは確實だった。

「水行に依りて火行を克す、理に従いその力を現せ！水克火！」

ただならぬ神気が噴きあがつたのはまさにそのときである。

真人が予感し、警戒していた神の気は中軍に位置していたストラト神殿の司祭から発せられていた。

ぶ厚い神気による障壁が、真人を幾重にも押し包もうとしているのが真人にもわかつた。

……………まさかこれは……………攻撃魔術ではなく防御魔術、オレの使用する魔術術式を無効化させるための術式か！

神をいう絶対的な存在と戦つてきた経験のゆえに、真人は神の魔術が攻撃的なものであると思ひ込んでしまつていた。

もとより神は魔術によって補強しなくてはならないほど脆弱な存在

ではないからだ。

まさかこれほどの神気を人の身に扱え切れるとも思っていなかった。もしもあの司祭たちが扱っているのだとすれば、彼らの命はおそらくあと数時間と持つまい。

「まさか……こんな使い方をしてくるとは……な」

愚痴ってばかりもいられる状況ではなかった。

すでにベアトリスの放った魔弾が真人の目の前に迫っているのだ。

もちろん避わすことができないではないが、その場合後方にあるオルパシア軍に直撃することも問題だった。

士気の大部分を真人に依存しているオルパシア軍を、真人が見殺しにするということは戦い自体の帰趨を決めかねないからだ。

「真人！」

奔放に暴れまわる魔力の奔流がついに真人を捉えた。

少なくとも周りから見るとしか見えない状況だった。

真人の武力に絶対の信を置くディアナですらが絶叫し、フィリオもまた雄敵が倒れる姿を幻視した。

「馬鹿な　！」

爆発の衝撃が走り、その閃光と爆風に誰もが真人の死を確信した。なんら防護も回避も試みられていない以上、これで死なねばそれはもはや人ではない。

だが、粉塵が晴れたそのとき全く動じた様子のない真人を確認して、

敵も味方も瞠目することになる。

「……………術を使わねば戦えぬほど、中御神家の守護司は落ちぶれてはおらぬ」

真人が小柄を軽く一閃する。

わずか20センチほどの短い刃が蒼く淡い光を放っているのが遠目にも見て取れた。

退魔用の吸収術式が施され『蛭』と名づけられたこの小柄は、一度だけなら神の一撃ですら吸収してしまうことのできる中御神家の決戦兵器のひとつで

真人がこの世界に衣装とともに持ってこれただただひとつのものなのだった。

「ふははは……！ それでこそオレが追い求めた敵だ！」

歓喜とともにフィリオは馬を飛び降りた。

彼の真価は白兵にあり、馬上にあつてはその力を発揮しきれぬからだった。

これを見た真人も悠然と笑いながら剣を抜く。

左手に小柄、右手に剣を構えた真人の姿はフィリオがかつて感じた威圧感を間違ひなく凌いでいる。

おそらくはこの二刀流こそが真人の真の戦闘スタイルなのであろう。両雄の激闘が始まった。

攻撃の主力はもちろんフィリオだった。

五人の刺客中、最大の臂力と速力によって真人に打ちかかり真人に攻撃の隙を与えない。

繰り出される長刀の刺突は大木の幹すら容易に貫こうという必殺の刃であり、真人といえども容易く捌くというわけにはいかなかった。もつともそれは左から同じく刺突を試みるシンクロードと右から背後へと攻撃の隙を伺うウエルキンの全てに対処する必要があったためだ。

特にウエルキンの間のとり方が絶妙だった。

なんとかフィリオとシンクロードの攻撃をしのぎ、反撃に転じようというタイミングを絶妙についてくる。

ほとんど歴戦のパートナーのような間合いの読みにはさすがの真人も驚きを隠せなかった。

超一流の武芸者が複数集まると、しばしば攻撃力が低下するという事態が起こる。

たとえばフィリオが長刀を斬撃ではなく刺突に絞っているのは、その殺傷半径に味方が存在するからだ。

またベアトリスは大規模範囲呪文によって、一定の面積をまるごと焼き尽くすことを得意としているが、同様の理由からこれも使うことができない。

強すぎる攻撃手段を持つものは、敵よりもむしろ味方によって制約されるものなのである。

ところがそうしたデメリットの割には五人の動きは淀みなくあまりに違和感がなすぎた。

これだけ超高速の近接戦闘を行っていないながらシンクレアとベアトリスの遠距離攻撃も正確に真人を捉えて離さない。

………よほど濃密な連携訓練をしたと見える。

これが真人の誤算のひとつであった。

通常超一流の武芸者ともなると他者に合わせることを好まない。できるできないではなくプライドが邪魔するのである。

一個の最強者を目指す武芸者が、集団として最強を目指すということは武芸者の本質的に嫌悪感を拭いきれないのだ。

だがプリストルの首脳陣はこうしたプライドの高い武芸者に互いの連携強化を半ば強制していた。

この指示に従えぬ者は刺客たる資格なしと判断されてもやむなしとされては、真人の対戦を熱望するものとして否やはない。

五人の統制された連携は確実に真人を追い詰めていた。

そんな真人を救いに行きたいところではあるが、ディアナにもその余裕は全くなかった。

アルセイルとアウフレエベが直卒するプリストルの精兵を相手にしなくてはならなかったからである。

「長弓、速射を崩すな！石弓は確実に指揮官だけを狙え！これだけ密集していれば撃てば当たるぞ！」

街道を埋め尽くすがごとき大軍団ではあるが、戦闘正面は大陸公路の幅を超えることはできない。

つまりは不利を知りつつ真正面から野戦陣地を攻撃しなくてはならないのだった。

さらには両翼に簡易な井楼まで設けたディアナは、最大限に地理的優位を活用するつもりでいた。

もちろんアルセイルもこれが戦術的愚策であることはわかっている。しかしマッセナ川の氾濫が間近に迫っている以上、損害に構って時

間を浪費する猶予はないのだ。

「ベルガー、マンセルは大隊を率いて左翼に進め！残りは私とともに右翼だ！」

さらにはアウフレーベの軍団が隊を二つに割って両翼からコラウル山脈内へ迂回機動を行いつつあった。

道なき原生林に分け入って集団行動を統制することは至難の技だ。こちらにも戦術的愚策と言つていい。

しかしだからといって高所の優位を占めるオルパシア軍の背後への機動を放置するわけにもいかなかった。

これに対しある程度の防御陣地を用意してはいるが、山中での戦闘はおおよそ遭遇戦にならざるを得ず、そうした戦闘ではやはり練度の違いが物をいう。

特に指揮官たるディアナが正面での防御戦闘に拘束されていることで戦術指揮官が不足していることが問題だった。

「……………さて……………真人なら勝利の女神に微笑ませるのは簡単なんだがね……………」

いかにプリストル軍が強兵を誇ろうとも、防御側の優位に加え、高所と野戦築城で強化されたオルパシア軍を一蹴することは難しい。特に兵力的な優位を生かせない現状ではなおさらだ。

しかし連続した激戦は必然的に消耗を強いていく。

今はディアナが絶妙な統率力で正面に貼り付けた戦力を抽出し、後方で待機した兵力とで交替を回しているが少なくとも耐久力という点でプリストル軍が勝っているのは

確実だった。これでアウフレーベの迂回部隊と両翼の伏兵が戦闘を開始すれば消耗は加速度的に激しくなっていくだろう。

「出来ればメイファンのヒヨッコを使わずに済ませたいところなんですがねえ……………」

ディアナの隣で指揮を補佐する副官のマグレープは嘆息とともに首を振った。

現在の激戦が続く以上それが実現しないことがわかっているという口ぶりだった。

「…………馬鹿を言え、彼らは切り札のひとつだぞ。こちらの予想より少々戦闘時間が延びている。彼らがなければ持久は危ういところだ」
マグレープは尊敬する上官の言葉に耳を疑った。

メイファン王国の残存兵は常識的に考えて戦力化は難しいはずだからである。

決定的な敗北を喫した兵が、その勝利者に対して戦意を維持するとは通常ではありえない。

骨の髄まで敗北と恐怖と敵の強さを植えつけられた兵は、たとえ表面上は落ち着いて見えても再び同じ相手と相ま見えればたちまち壊乱してしまうものなのだ。

だから少なくともこの戦いで勝利してみせることで、次戦からは多少期待できるかと思っていた。

ディアナの言葉はそうしたマグレープの常識を完全に逸脱したものであった。

「…………彼らの頭が誰なのかもう一度考えてみるんだね。仮にもこの私が一度は出し抜かれた女が率いてるんだよ」

真人の危機にシエラが手をつかねて傍観することなどありえない。そして彼女のカリスマと手腕はディアナも認めるところなのだ。

真人をめぐって激戦を繰り広げた者同士、相手の力量と行動は誰よ

りもよく知っている。
ただ真人を守るといふ一点において、二人は最も信頼するに足る僚友なのであった。

第五十七話

戦いは一進一退の膠着状態が続いている。

しかしどちらかと言うならばプリストル軍の優位は動かない。

それは先刻から両翼でアウフレーベ率いる別働隊との交戦が開始されたことと無縁ではなかった。

山岳での遭遇戦闘では、オルパシア軍が急ごしらえの野戦陣地を構築していると言えどもある程度の消耗は避けられない。

兵数に勝るプリストル軍は絶え間ない消耗によってオルパシア軍を磨り潰すことを目論んでいたのだ。

損害の大きい愚策ではあるが、時と場所を限定された現在の戦術的状況を考えれば最も効果的な策であることも確かなのだった。

「浸透させるな！押し戻せ！」

マグレープは右翼でアウフレーベ直卒の精鋭の猛攻撃にさらされ防戦に必死であった。

結局のところオルパシア軍がどうにかブリストル軍の攻勢を食い止めていられるのは、あらかじめ優位な戦場を設定していたからであって、兵の質では

ブリストル軍には遠く及ばないのが真実なのだ。

犠牲を省みず地形的優位を奪おうとするアウフレューベの戦術は正しい。要所に設けられた井楼と擁壁がオルパシア軍の防御の要であり、突破して後背に

回り込めば無力化することは容易いことをよくわかっていた。

敵の思惑がわかるだけにマグレープは歯がゆい。

浸透突破を試みるブリストル兵を押し戻すためにはこちらも突破点に兵をつぎ込まざるを得ず、結果押し戻すことに成功したとしても兵の消耗は避けられない。

蟻地獄にはめられたような無力感に苛まれながら、マグレープはなお辛抱強く指揮を執り続けた。

計画通り粘れば勝てる。

彼が戦場を共にしたディアナと真人に対する信頼がかろうじて彼を諦念への誘惑から守り続けていた。

「消耗した部隊を下げる！メイファン軍！出番だ！巫女姫の御前で
いっちょ格好いいところ見せてみな！」

ディアナが指揮する正面の激戦ぶりは両翼の山岳戦を大きく上回っ
ている。

視界が開けているうえ、戦闘正面を両翼よりは大きくとれているか
らだ。

それでも一歩たりとも前線を後退させていないディアナの指揮ぶり
はやはり戦神の名に恥じぬものであった。

だが、それはオルパシア軍の消耗と引き換えのものでもある。

死者こそ少ないが、負傷者の数はうなぎのぼりにあがっており、疲
労で戦闘力を失う者も多数にのぼっていた。

いまだ勝利の時は見えない。

しかしその時は必ずやあの油断ならぬ僚友がもたらしてくれるはず
であった。それも遠い先のことではなく。

「アリシア……しくじるんじゃないよ……！」

ディアナは苦い笑いを浮かべて遠く離れた僚友にして恋敵の無事を祈っていた。

メイファン王国の兵団が前進を開始する。

しかしおせじにもその足取りは決して軽いものとは言えない。

彼らはブリストル帝国の武力を骨身に染みて知っていたし、死力を尽くしてもなおあっさりとした蹂躪された恐怖を忘れ去ってはいないからだった。

「今こそ過去の汚辱を漱ぎ栄光を回復するときは来た！勇をふるって死戦せよ！」

ハイデル中佐は大声で兵を鼓舞するものの、期待したほどの効果があるとも思えなかった。

今こうして剽悍をもってなるブリストル兵を間近に見ればハイデル本人ですら背筋を駆け上がる恐怖を感じずにはいられないのだ。

このままでは兵が崩れる　　！

嗩声をあげて呐喊するブリストルの軍列を前に、目に見えてメイフアン兵が気おされて始めていたそのときハイデルたちは信じられぬものを目撃した。

「カムナビの巫女の名にかけて我が忠勇なる兵に告げる」

純白の巫女装束に着替えたシェラが、あとずさる兵たちを追い越して悠然と最前線へと進み出たのだ。

自分の目が信じられない。

いかに王族とはいえわずか14歳の少女である。

戦場で兵が発する鬼気は大の大人ですら訓練なしに耐えうることはできないのに、少女の堂々として神々しさすら漂う威風はいったいどこからくるものなのか。

期せずして全軍の注目がシエラに集中した。

「この戦は既に我らの勝ちと決まった。これは巫女としての託宣である！ 我の言葉を信ずるものは我に続け！」

そう言っただったひとりでブリストル兵に向かって歩み始めるシエラに狙いをさだめた矢が迫る。

その場にいた誰もが何の防具も身につけていない少女の柔肌にあまたの矢が突き刺さる惨劇を幻視した。

襲い掛かる矢の数はとうていなんの武術も心得ぬ少女に捌ききれるものではなかったからであった。

「……………奇蹟だ……………！」

ほんの数瞬の沈黙。

そしておよそ数十になんなんとした矢の全てが、まるで不可視の力に頭を垂れたかのようにわずかにシエラをはずれたとき、メイファンの軍勢から常軌を逸した氣勢が猛りあがった。

「シエラフィータ殿下を助け参らせよ！」

「おおおおおおおっっ！！！」

弱兵の汚名を着せられてきたメイファンの残存軍が、シエラの前に鉄壁の守りを敷く。

その壁は強兵のプリストル軍をもってしても小揺るぎもないほど厚く、堅く、そして何より獰猛であった。

打ち寄せる波が岸壁に砕け散るように、プリストルの精鋭が打ち砕

かれていく様は、常勝を誇るブリストルの軍兵にとって悪夢としか表現することのできないものであった。

「まさかそんな……！メイファンの残党ごときが……！」

メイファン軍が自軍のもとに引き寄せた戦の流れをディアナが見逃すはずもない。

「右翼を開いて騎兵を出せ！蹂躪するぞ！」

野戦陣地に籠っていたほうが当然防御効果も高く損害も少ないのだが、戦の流れをつかむことのほうがそれより遥かに大切であるということを、ディアナは経験的に知っていた。

メイファン軍の圧力によって乱れた軍列の隙間を騎兵の馬蹄が蹂躪する。

壊乱した前線を収束し立て直すには、いかにアルセイルの手腕が優秀であったとしてもしばしの猶予を必要とするはずであった。

「槍兵を前面に押し立てて侵入を許すな！各自己が兵の掌握に努めよ！」

ここは無理をせずに指揮系統を再編すべきであることをアルセイルもよくわかっていた。

今無秩序に戦線を拡大してしまえば、オルパシアの指揮官はここぞとばかりに各個撃破に打って出るだろう。

指揮系統が明確な軍隊と不明確な軍隊とでは大人と子供ほどにその戦力の差が開いてしまう。

ブリストルが強兵を誇ろうとも、軍隊という組織の宿命から逃れることはできないのである。

それにしてもなんと戦場の呼吸を知り尽くした用兵だろう。

マヒト・ナカオカミだけではない。

オルパシア軍には彼以外にも十分警戒すべき用兵家がいることに、アルセイルは暗澹たる思いを隠せなかった。

旧メイファン王国の残党の奮戦も想定外の事態である。

あの巫女の無謀を通り越した自殺行為がなければ、メイファン軍などほとんど鎧袖一触に壊乱していたはずであった。

なぜあれほどの矢が全てはずれてしまったのかについては神の気まぐれを呪うしかないが、それでもあの巫女姫の勇気は賞賛されるべきだ。

情弱で無能であったあの旧メイファンの王族の一員とも思われぬ。

手強い敵がマヒト以外にもこれほど存在したことは、こちらの情報収集の手落ちであろう。

だからこそ今このときに殲滅しておかなくてはならない。

マヒトと巫女姫がメイファンの地を奪還すれば、彼らの力がいったいどれほど強化されるか想像もつかないのだ。

たとえ自分の命尽きようとも、プリストル帝国の未来のためにここで彼らを打ち倒さぬわけにはいかなかった。

メイファンの士官であるウイレム・モートラッド中尉にとって眼前の状況は最悪を極めていた。

彼は旧メイファンの腐敗した体質からいち早くプリストルに鞍替え

した男であり、間諜としてブリストルの勝利に大きく貢献してきた人物で莫大な恩賞を約束されていた。

彼にとって誤算であったのは、その貢献ぶりからメイファン残党での諜報活動を命じられてしまったことだ。

しかしそれもこの無謀な戦いが終われば、ブリストルでの階位の昇進と、恩賞をふたつながら手に入れて何不自由ない生活を送れるはずであった。

ところが現状はどうだ。

士気も練度も最弱であったはずのメイファン軍がブリストルの強兵を相手に一歩も退かずに戦っている、いや、逆に押し返してさえいるのである。

このままでは手に入れるはずだった栄達も恩賞も全て泡沫の夢のごとく消え去ってしまうことになる。

これが悪夢でなくてなんだろうか。

……………あの小娘が余計な真似をするから……………！

全てはあの巫女姫のカムナビ神の力に守られたとしか思えぬ奇蹟の託宣から始まった。

あの託宣のせいで負け犬であったはずのメイファン軍は神の僕としての使徒に生まれ変わってしまったのだ。

くだらない幻想にすぎないとウィレムは吐き気すら感じる。

そんな都合のよい神の力があればそもそもメイファンが亡国の憂き目を見ることもなかったはずではないか。

血筋以外に能のない無能な上司を排斥し、有能な自分に活躍の場を提供してくれたはずではないか。

この悪しき世界に神などはいない、もし仮にいたとしてもその力が自分たちに及ぶことはない！

そんな単純な真実すら察することのできぬ無能な友軍が憎かった。

どうしてオレが幸福になろうとするのを邪魔するのか？

メイファンが勝ってしまったえば自分はまたうだつのあがらぬ士官の一人に成り下がるだろう。

この成功にいたるまでどれほど危ない橋を渡り、神経をすり減らしたことが。

認められない。オレの成功を阻むものは全て斬り捨ててやる。

狂気を宿したウィレムの瞳は、その視界にいまだ決然とした表情で兵を鼓舞するシェラの姿を捉えていた。

………落ち着け

側近の連中もブリストルとの戦いに目を奪われてオレに注意を向けていないとはいえ、さすがに主君に手を出されれば気がつくだろう。

そうならばここからオレが生還することは不可能とっていい。

ならば人質にとってはどうか？

巫女姫が人質に取られたとなればメイファン兵の動揺は必至だ。

おそらくほんの少し時間を稼ぐだけでブリストルの兵が前線を突破して駆けつけてくれるに違いない。

乾坤一擲、このウイレム・モートレット一世一代の見せ場というやつだ。

そう考えるウイレムだが、実のところ失敗することなど露ほどにも考えてはいなかった。

自身の才覚と武量からすれば、小娘一人無力化することなど見戯に

等しい。

それに自らを特別視するものにありがちなことに、ウィレムもまた自分の壮拳に天運の導きがあることを信じて疑ってはいなかったのである。

愚かだ、全く愚かだ。

こんな場所まで敵に接近を許すなんてお前たちは護衛失格だ。

メイファン王国近衛士官の軍装に身を包んだウィレムは何ら障害を感じることなくシエラに向かって接近していた。

その足取りは確信に満ちていてよもや敵対する刺客のものとは思われない。

拳動不審に陥ることが、もっとも警戒を呼びやすいということを知っていることをウィレムは知っている。

それ以上にウィレムは自分が冷や飯を食わされてきたメイファン軍というものを低く評価していたのだった。

あと二歩………！！

あと三歩でシエラは自分の間合いに入る。

護衛が気がついても対処する暇を与えられない完全な間合いだ。

既に半ば成功は約束されたようなものに思われた。

後は歯噛みして悔しがる連中を尻目にシエラを手土産にして自分より一層の高みに登ることができるだろう。

甘い未来絵図を夢想してウィレムがニンマリと笑ったそのとき、ウィレムの両足は不自然に柔らかな凹凸を感知した。

「我が主の奥方に仇なす者よ。七の式、水名裳が冥土への引導を渡してくれようぞ」

ウィレムが悲鳴をあげる間もなかった。

生臭い吐息を頬に感じたと思った瞬間、悲鳴ごとウィレムは巨大な何かによって飲み込まれていた。

もしもそこに陰行を見通す霊視能力を持つものがいれば、あまりの非常な光景に肝をつぶしたであろう。

大木に見紛うばかりの巨大な一匹の白蛇が、その顎で哀れな男の頭からかじりつき、たちまちのうちに全身をその胴体に飲み込んでしまったのだった。

第五十八話

急峻なマツセナ川の上流に群雲のように押し寄せる影がある。

「どうやら来たようですね」

「存外に早いわね……………」

アリシアは土煙をあげて迫り来るブリストルの精鋭に目を向けてわずかに口の端を歪ませた。

貯められた水量はいまだ決壊させるに及ばない。

どうやらケルドランの城塞を突破するためには今少し堰き止めた水量が増すまでの時間を稼がなくてはならないようであった。

「……………では手はずどうりに頼む」

ブリストルの圧倒的な戦力を前にしても逃げるといふ選択肢はアリシアにはない。

オルパシアの未来を担う軍司令官のため、愛する未来の夫のためアリシアはたとえ命果てようとも任務を遂行する覚悟なのであった。

ブリストル分遣隊の隊長であるロンドベル・アイゼン・スタンリー大尉はあまりに少なすぎるオルパシア軍の姿に疑念を募らせていた。見たところでわずかに二十名足らず。一個小隊にすら満たない数で

ある。

マツセナ川の水量をせき止めるといふ大規模土木工事を行ったとするならば、少なくとも数千に及ぶ非戦闘員がいなければならぬはずであった。

「逃げた……………？いや、それにしても兵が少なすぎる……………」

オルパシア軍に十分な軍兵がいるのであれば、いったん後方に退かせることも考えうるのだがあの兵力を見る限りそれはないだろう。ならば工作をあきらめたのか……………？

それもありえない。オルパシア軍がどうにか戦線を維持していられるのはマツセナ川を氾濫させようとする奇計があればこそなのだ。このまま計略が実行されずに終わればオルパシア軍の敗北は免れない。

わからない。ロンドベルはオルパシア軍の行動に論理的整合性を見出せずにいた。

しかし思考のほとんどは謎の究明に割かれていても、足だけは決して止まることなくオルパシア軍へと動いている。

たとえその行く先が畏であれ、噛みやぶるだけの力と矜持が彼らにはあるのだった。

「火行を以って炎の嵐と為す、焼けよ」

怒涛の勢いでアリシアたちが陣取る断崖へと迫るブリストル軍の鼻先に、巨大な紅蓮の炎が炸裂した。

「馬鹿な……………オルパシアにこんな魔術師の精鋭がいるはずが……………！！」

その盛大な火力の前に先頭の兵士たちがたちまち火だるまとなって

絶息する。

少なくともロンドベルの知るかぎり、一般の魔術師が為しうる破壊の容量は一人をようやく殺すに留まる非効率極まりないものだ。

中には一個小隊をまるごと焼き払えるような非常識な魔術師も存在するが、通常そんな魔術師は一国に五人とはいえない。

にもかかわらず今炸裂した炎の威力は、そうした超一流の魔術師に次ぐものであった。

いったいなぜそんな貴重な魔術師がこんな敵中深くに孤立しているものか。

あまりのことに思考が麻痺しつつあることをロンドベルは自覚した。そしてそうしたときにいかにすべきであるかは長年の彼の経験が知っていた。

すなわち直感に従ってただ攻撃に専念すべきなのであった。

「……………全く戸惑う気配もない。やはりブリストルは強兵の国だな」
嘆息とともにアリシアはひとりごちた。

魔術の集中砲火を浴びれば、あわよくば壊乱してくれるのではと思っていたがそれはどうやら虫が良すぎたらしい。

「そんな落ち着いてる場合ですかい、……………いいから下がってください副官殿」

屈強な槍兵とともに進み出たのはアリシアが小隊長時代から付き合いの長いバロールであった。

今のところは敵に先手をとられている。

真人が打った策が効力を発揮するまでには今しばらくの持久が必要

なのだ。

「いいか？お前ら！嫁入り前の副官殿の玉の肌に傷ひとつつけさすんじゃないぞ！」

「了解！！」

彼らはそのほとんどが第377歩兵小隊からの戦友だった。

軍という非情で生臭い組織にあつて、アリシアのような清廉な穢れを知らぬ乙女は気高くも甘い偶像である。

彼らにとつて、そうした愛らしい偶像を守るために身体を張るといふことはむしろ名誉とするべき十分な事由なのであつた。

「矢を射掛ける！奴らに頭を上げさせるな！」

断崖へと駆け上るブリストル軍の前列から弓兵が弾幕を張る。

戦闘正面を極限され、断崖へ至る一本道を攻め上らざるを得ないブリストル軍としては当然の選択であつた。

兵力的にはわずかとはいえ、高所に陣取つた魔術師を含む精鋭を相手するのはあまりに危険が大きすぎるのだ。

槍兵の防御力と魔術師の攻撃力を極限させるためには弓兵での漸減は必須ですらある。

ところがロンドベルの目算は初手から躓きを余儀なくされた。

「矢を禁ずれば則ち当ること能わず」

降り注ぐ矢の雨がまるで不可視の壁に弾かれたかのように明後日の

方向へと向きを変えるのをロンドベルは呆然と見つめていた。少なくとも彼の知る魔術はこんな非常識な事象を引き起こせるほど弾力的なものではなかったはずなのだ。

それは同時に、ここに存在するオルパシア兵を倒さずにはおれないということでもあった。

彼らが強力であればあるほど彼らに課せられた使命は重く、彼らの有用性はオルパシアにとって貴重なものであるはずであった。

損害を省みず肉薄して骨を絶つことこそが栄えあるブリストル軍のとるべき道であることを、ロンドベルは確信していた。

「ちっ……槍先を乱すな！副官殿は早く退避を！」

バラールは今こそブリストルの精兵ぶりに恐怖していた。

未知の魔術にこれほどひどい損害を与えられてなお士気を高められる軍隊は大陸にブリストル帝国を置いてほかにないだろう。

自分たちが想定していた防御策が初期の機能を果たさなかったことをバラールは認めないわけにはいかなかった。

少なくともアリシアには生き延びて使命を果たしてもらわなくてはならない。

そのための命の盾となることに否やはなかった。

「そんな簡単にあきらめるなバラール。指令官がケルドランから生還したときに比べればこの程度の危機は危機のうちにも入らんぞ！」

あまりにも意外なアリシアの言葉にバラールは改めて瞠目した。

今まで庇護すべき対象だと信じていた上司が、アリシアが全く勝利をあきらめていないという事実に驚愕せずにはいられなかったのだ。

「土行に依りて岩の壁と成す、塞げ」

アリシアたちの前に高さ二メートルになんなんとする岩の壁が出現する。

これで真人から与えられた呪符は完全に底をついた。後は自らの武力によって持久を果たすのみであった。

「……………負けはしない……………たとえこの身が朽ちようとも、決して私はあきらめない……………！」

バラールは苦笑いとともに剣を握る手に力をこめた。

この甘さこそが我らが愛すべき指揮官の本質であることを彼は今更ながらに思い知らされていた。

それは前線指揮官としては失格でさえあるかもしれない。

戦場において任務の達成は絶対である。そのためには親兄弟ですら平然と見捨てる非情さが要求される。

部下を大事にすることと、部下を死地に送り込む非情さを併せ持たなければ前線指揮官は勤まらない。

それを二つながら守り抜こうとするのは夢想家のすることだ。

アリシアの本質はそうした非情さとは対極にある。能吏として最上級に入るといふ側面がなければ軍人としては適性がないと判断せざるを得ない。

しかしだからこそバラールにとって愛しくも得がたい上司に違いなかった。

「お前らみんな死ぬ覚悟はできてるな？」

「まあ、これでも男ですし」

「見せ場くらいは心得ておりますよ」

部下たちの心もバラールと同様であるらしい。

男ならば一度は女を守るために命を賭けてしかるべきだ。少なくともそう信じる事が出来ることこそが男たるの証明であるべきだっ

た。
バラルたちが雄叫びとともに岩の壁を乗り越えたブリストル兵に突撃を開始したとき、それはやってきた。

「……て、敵です！これは……メイファンのカニングム子爵の……！」

「そんな馬鹿な……！」

今日はいったいどれだけの想定外の事態が勃発するのだろうか。ロンドベルは戦慄とともに獐猛な牙を剥きだしにする一千名に近い兵団を見つめた。

それは長くメイファン国内でゲリラ戦を戦い、オルパシア国内のメイファン残党軍とは対立関係にあるはずのカニングム子爵率いる部隊であった。

なぜその彼らが今この場に現れるというのか。まさか全ては

「間諜がいると知っていて本当のことをいう馬鹿がいるか！」

野太い声でせせら笑いながらカニングムは無防備に晒されたブリストル軍の背後へと駆け出した。

もとより警戒の薄いブリストル領側から別働隊を率いるアリシアの援護に向かうというのは真人との間であらかじめ決められた作戦行動である。

ブリストルの対応の早さからいささか到着が遅れたものの、奇襲効果としてはこのうえないタイミングであった。残り二百名余まで討ち減らされていたブリストル軍にこれを支えることは不可能だった。

食いつかれた後方から戦列は崩され、本来がゲリラ戦用でしかないはずのメイファンの残党に手も足もでない。

組織力を生かせない地形上の不利も問題である。

断崖上のオルパシア軍を捕捉するために隊列が伸びきり、各個撃破するには理想的な隊形になってしまっていたのだ。

「シエラファイータ様ならば我が忠誠を捧げるに何の不足もないわ！ものども今こそメイファンに勝利を奪い返すときは来たれり！」

自らも最前線で戦斧を振り上げながらカニンガムは絶叫した。

確たる戦場においてブリストルに勝利するということが、今後の戦いにおいてどれだけ重要な要素になるかということ、彼もまた十分に承知していたのだ。

ロンドベルは死を覚悟した。

もはや敗北は免れない。あるいは彼の武力をもつてすれば血路を開いて生き延びるといふ選択肢もあったかもしれない。

しかし目の前のオルパシア軍の行動を見過ごすことはできなかった。友軍三万の死命は今自らの掌中にあるのだ。

「死に場所を飾りたい奴はオレに続け！」

狙うは指揮官らしき女将校ただひとり。

槍襖を剣ではじきながら致命傷だけを避けて突貫する。

ロンドベルに付き従った兵の半分が槍の穂先にかけられて絶息した。後方からカニンガムの兵によるクロスボウの狙撃でさらにもう半分の兵が倒れる。

しかしもはやロンドベルが味方の末路にも自らの負傷にも一切の注意を向けることはなかった。

ただ敵の指揮官を見据えて突き進むことだけが彼の衝動の全てであった。

あと少し　敵意と怯えの入り混じった瞳で見つめる女将校をこの剣の間合いに捕らえるまであと一息………！

大小無数の傷で全身の感覚を失いつつもロンドベルは恐るべき速度で剣を振り下ろした。

それはブリストルの軍人としての誇りが生み出した一種奇跡のような斬撃であった。

深々と腹部まで食い込んだ剣の感触を得てロンドベルは心からの達成感とともに、永遠にその意識を手放したのだった。

「……………お嬢と心中するにゃお前さんじゃちと器量が足らんよ」

諧謔の笑みを浮かべながらバラル・ヴォルフラム・ヴィンセント少尉は愛しすべき上司とロンドベルの間に自らの身体をすべりこませていた。

肩口から鎖骨を叩き割って腹部にまで達した傷からは、まるで地面に落下した柔らかかな果実のような惨状が広がっていた。

「……死に方としては悪くないな。娘のような上官を守って死ぬというのも……そう悪い死に方ではない」

耳元で慣れ親しんだ上官が何か叫んでいるのが聞こえる。

まあそうわめきなさんな。

本当はあの司令官を一発殴ってやる役目を引き受けたくもあつたが、あんたが泣くから我慢しておいてやる。
だから必ず

……………幸せになつてくれ。

即死に近い損傷を受けながら、バラールの最後の言葉は、確かに空気を震わせてアリシアの耳へと届いた。

第五十九話

数時間にも渡る死闘は真人の身体に大きな傷跡を刻んでいた。かろうじて致命傷だけは避けているものの、体力の疲弊は隠せない。そもそも真人でなければ立っていること事態がありえないのだ。太ももや肩口には矢が生々しく突き刺さり、上手く避けてはいるものの腹部や背中には決して浅くはない複数の斬り傷から少なくない量の血が流れ出していた。

……わかつちやあいたが相変わらずの化けもんだぜ……！

フィリオは舌打ちを禁じえない。

長時間に及ぶ戦闘で先に自分の方が体力の限界を迎えてしまいそんな気配であった。

槍をしごく両腕はまるで鉛で出来ているかのように重く、大地を踏みしめる両足は棒のように弾力をなくしてしまっている。

フィリオ以外の武芸者たちも同様で、灰の魔女ベアトリスなどはどうに魔力が底をついてしまっていた。

「……………無傷のオレが満身創痍の奴より先に根を上げられるかよお……………！」

気力を振り絞ってフィリオは槍をあらためて握りしめた。

ブリストルの誇る五人の武芸者がたったひとり相手を先に根負けするなどという不名誉を認めるわけにはいかなかったのだ。

真人の身体には大小無数の傷が走っている。術の行使を禁じられた影響は真人が想像していた以上に深刻なものであった。

攻撃魔術のみならず、身体能力強化や治癒にいたるまでの全ての術の行使は不可能であり、唯一体内で気を練ることによる防御力と体力の上昇だけが

真人に残された救いであったのである。

とはいえいかに内気をめぐらし体力を底上げしようとも、血を失うことによる気力と体力の低下は避けようがない。

傷が増え、失血の量が増えると共に加速度的に力が失われていくのを止める術は真人にはなかった。

ややもすれば遠のきかける意識を気力でねじ伏せて真人はフィリオの槍を、シンクロードの剣を、シンクレアの矢を弾き返す。

体力の限界に達しようとしているのは真人も同じであったのだ。

……あと少し……あと少しでアリシアの策が成る………！

違いがあるとするならば、戦いの週末点を真人が明確な形として持っているということであろうか。

気力と気力、意地と意地の戦いにあって勝利の術を知ることの意味は大きい。

疲れ果てた身体を意志の力で奮い立たせながら、真人は咆哮した。

その光景を見る観客がいたならば、それは超一流の舞踏のようにも感じられたことだろう。

光の軌跡しか残さぬ神速の刺突が予定調和のように弾かれ、流され、

受け止められていく様はそう表現する以外にない。

この違和感をなんと表現すればよいものか。

一撃必殺の威力を秘めた刺突のひとつひとつが、まるで最初からそこに誘導されているかのような……。

「中御神流戦舞死番」

一流の武芸者は相手の呼吸を読んで攻撃を予測するという。

だが、中御神の術者はそこからさらに自分の呼吸を相手に呼吸を同調させ、遂には相手の呼吸を操るに至る。

これこそが死番が中御神の戦舞で最強を称される所以なのであった。残り少ない体力を効率的に使用することが必須の真人にとってまさに最上の技であると言えるだろう。

タイミングを変えても速度を変えても全ては予定調和の手のひらのうえ。

その予定調和を崩さぬ限りフィリオたち武芸者に勝ちはない。

だが、いかにしてその予定調和を崩せるのだろうか。フェイントすらも予定調和のうちだというのに。

アルセイルは戦いの膠着と時間の経過を憂慮していた。

特に時間の経過に最も深刻な危惧を抱く者はブリストル帝国軍軍司令官アルセイルとアウフレーブを置いてほかにないだろう。

現状のまま何事もなく推移すればブリストルの勝ちは動くまい。

左翼を指揮するアウフレーブの軍はすでにオルパシア軍左翼を最終防衛線にまで追い込んでおり、突破は時間の問題となっている。

正面こそメイファン軍の奮戦で押し込まれているもののいかに高い士気の軍隊であっても消耗はさけられない以上、数において優位な

プリストル軍が最終的な勝利を得ることは確定的だ。

この戦の最大の目的である真人の殺害についても、順調な成果を挙げつつあると言える。

あの超一流の武芸者五人を相手に致命傷を避け続ける技量はさすがだが体力の衰えはアルセイルの目にも明らかだった。

疲弊しきつた超一流の武芸者ならば一流の武芸者でも十分倒すことができる。

最悪あの五人が敗れることになろうとも、戦をプリストルが支配するかぎり、他の者が真人を討つことは容易であるはずなのだ。

それも全てはこのままオルパシアの工作の手が及ぶ前に戦を終わらせることが出来ればの話であった。

「ロンドベル………なんとか今しばしの猶予をくれ………」

アルセイルはマッセナ川の上流へと送りだした己の信頼する戦術指揮官の名を独語せずにはいられなかった。

このまま後二時間の時間を稼げるなら、アウフレーベによる左翼からの分断ばかりか街道正面からの中央突破ですらも可能であるというのがアルセイルの見解であったからである。

少なくともアウフレーベの別働隊が左翼を浸透突破するのにあと二時間はいらぬはずであった。

「ええい、くそっ！ 予備は全員隊伍を組んで方陣を敷け！ 損耗した部隊は後ろに下がって後詰の連中との後退を急げ！ ここを突破されたら後はないぞ！」

マグレープの率いるオルパシア軍右翼はアウフレーベの猛攻に遂に最終防衛線までの後退を余儀なくされていた。

地形的に集団の威力を発揮しづらいこともあってその歩みは決して速いものではないが、確実に土地を稼いでいくアウフレーベの手腕は華麗なものではないがおそろしくあしらいの難しいものだったのだ。

山岳戦では槍はむしろ邪魔になる。とりまわしのスペースを取るほどの余裕がないからだ。

必然的に剣が主力武器となるのだが、肉弾戦となりやすい剣は、槍以上に熟練度を必要とする武器であった。

個人的武勇において間違いなくオルパシアを凌駕するブリストル軍が、遭遇戦で優位に立つのは当然の帰結である。

これに対しオルパシア軍はあらかじめ設置した井楼や防御壁によって当初はブリストル軍を相手に優位に戦いを進めていたが、地形的防御力に頼ったその戦いぶりはある一点を突破されてしまえば後ほもろい。

損害を省みぬ勇敢で忠誠心の高いブリストル軍ならではの強襲と、アウフレーベの絶妙な相互支援はオルパシアの防御施設に初期に予定された防御効果をあげてことを許さなかった。

精鋭を浸透させ、人海戦術で精鋭が開けた穴を拡大するという手段は決して目新しいものではない。

だが目新しいものでないが故に対応が難しいのである。

マグレープの指揮する右翼が突破されれば、もはや中央で奮闘するディアナの後方は目と鼻の先だ。

「お前らここで男を見せにや姉御に合わす顔がないぞ！」

総予備として投入された部隊は不正規戦の練達である傭兵部隊であった。

その中には山岳でも速射の利く長弓兵が含まれるというオルパシア

傭兵部隊の切り札である。

真人とディアナが用意した勝利のお膳立てを自らの無能によって崩すような事態だけは許すわけにはいかなかった。

確かにアウフレーベは優れた戦術指揮官だが、マグレープもまた長年無駄に傭兵部隊の長を勤めてきたわけではないのだ。

「傭兵の底力つてのを見せてやるよ、プリストルの女將軍殿！」

メイファン軍の奮戦で一時的に全軍の士気が高まったこともあってディアナの指揮する街道正面ではオルパシアの優位が続いている。しかしその優位が予備兵力の加速度的な損耗に支えられていることをディアナだけは知っていた。

既にメイファン王国軍にも先刻までの爆発的な高揚感は残されていない。

元はといえば列強中最弱の練度でしかないメイファン軍だが、確固たるものとなったシエラファイターへの忠誠がかるうじて彼らを支えているにすぎないのだ。

近い時期に彼らを下げ新たな予備と交替させる必要があるだろう。

ディアナほどの戦術指揮官でもオルパシア軍が戦力限界点に達するのはそう遠いことではないのであった。

だがディアナの表情は味方のそうした戦略的劣勢にもかかわらず明るく不敵な笑みに満ちていた。

「あと二時間……あと二時間あればあんたらの勝ちが決まってたかもしれないねえ……」

そういつて見上げるディアナの視線の先には、アリシアが分け入ったコラウル山脈の溪谷が広がっていた。理屈ではない。ディアナには戦の潮目を見る特殊な能力があり、それが彼女をして闘神の名に相応しいものとしているのである。彼女の見るところ戦の変わり目まではあとごくわずかな時を残すのみであるはずだった。

バラールの遺体を前に嘆く暇はアリシアには与えられていなかった。彼女に与えられた任務は一刻を争う。

嘆くのならば任務を完了した後で思う存分嘆けばよいのである。

「各自所定の地点へ急げ。堰を切るぞ」

態度は冷静そのものだが、震える声だけが彼女を裏切っていた。忘れられるはずがない。年の離れたバラールがどれだけ若すぎる自分を庇護してくれていたかということ。

そして自分が老練で世慣れた彼にどれだけ軍人たる部分以外をさらけ出していたことが。

だからこそ完璧に任務は果たされなければならなかった。

もはやこれ以上自分と同じ思いをする味方を増やす気はアリシアにはなかった。

部下たちが瓦礫に塞がれた堰の各所に散っていく。

秩序だった土木工事の成果とも思われない乱暴な堰の造りの正体は、これが真人の作成した呪符によって引き起こされた山崩れによるも

のであるせいであつた。

山肌に巨大な岩盤が露出した水源近いこの渓谷は、真人に託された呪符を使用するには最適の場所なのだ。

なぜなら巨大な岩を砕き砂礫とすることがこの呪符には可能なのだから。

わずか十分ほどで配置を完了した部下から手旗が振られると、アリアは万感の思いをこめて呪符を放った。

「土行に依りて石の礫と為す、砕け」

八箇所と同時に放たれた呪符は、マツセナ川を堰きとめる最も大きな力となっていた岩石を砂礫と化し、砂礫を砂の塊へと変えた。

満々と湛えられた水量は、もはや弱体化した抵抗力で抑えられるほどに小さな圧力ではありえない。

まるで子供が砂浜に築いた砂の城が崩れるかのように、ぐしゃりと無造作な音が聞こえそうな容易さで、マツセナ川の莫大な水量を押し留めてきた堰は瞬時にして崩壊した。

遠雷が轟いたかのような小さな轟音をディアナとアルセイルが聞いたのは同時であつた。

それがいったい何を意味するのかを二人は誰よりもよく承知していた。

すなわちマツセナ川を干上がらせていた堰はたった今をもって切られたのである。

「総がかりだ！なんとしてもオルパシアの前線を潰せ！」

「追い落とせ！ブリストルの戦馬鹿どもにたらふく水を飲ませてやれ！」

高所に陣取るオルパシア軍の陣営内に逃げ込めば濁流に飲み込まれることはない。

今となつてはそれだけがブリストル軍を助ける術であつた。

全ての予備を投入して犠牲に構わず突破することだけに専念すればあるいはそれも可能であるとアルセイルは信じていた。

ブリストルが養つた強兵がその力を十全に發揮することさえ出来たならば……………。

だが地鳴りとともに見たこともない激流がコラウルの山を下つてくるのを目撃した兵士たちが、アルセイルが必要とするだけの士気を維持することは不可能だつた。

兵士対兵士の戦いであれば無類の勇猛ぶりを發揮するブリストル兵も、個人では決して敵しえない大自然の力を前にしては無力な一個の人間にすぎない。

マッセナ川からほど近いブリストル軍の後方から徐々に崩壊が始まつた。

彼らはみな武器を捨て、鎧を捨てて身一つでコラウルの山中へと我先に逃走を開始する。

濁流が迫るにつれて前線の兵もついに統制を失つて暴走した。

重さ数十トンはありそうな巨石が濁流の流れに乗つて転がり落ちてくる様はブリストル軍にとって悪夢の具現としか思えなかつた。

山系を下る間に、マッセナ川の巨大な水量は砕かれた岩の数々とコラウル山脈の木々を飲み込みその顎に相応しい牙を手に入れていたのである。

見る見るうちに逃げ遅れたブリストル兵が腰まで水に浸かり、バランスを失つて流されていく。

激流に飲み込まれた兵に待っているのは確実な死だけだ。

激しい勢いで巨石をぶつけられたケルドランの城壁もまた耐え切ることはできなかった。

外壁は打ち砕かれ、城塞内を行き場を失ったマツセナ川の水が所狭しと暴れ狂う。

なまじ外壁に囲まれているために、ケルドランの城塞の主郭部分はほぼ水没していると言ってもよかった。

もっとも大きな損害を受けたのは戦闘正面が確保できないため後方で待機していたプリストル軍の中軍であろう。

彼らの半数が戦闘を放棄して逃亡し、残り半数が後方へと搬送されていた負傷者とともに激流のただ中へと飲み込まれた。

その損害の合計は一万を軽く上回る。

かろうじて激流からの損害を免れていた前線の兵も、恐怖に駆られて狂躁した結果甚大な被害を受けて戦闘能力を喪失していた。

アルセイルやアウフレイベがいかにかに良将といえども、抗戦意欲を失った兵を押し留めることは出来ないのだ。

ここにケルドラン城塞をめぐる攻防戦はオルパシア軍の勝利という形で決着した。

だが、真人をめぐる攻防戦はいまだ勝敗定かならぬまま攻防の絶頂を迎えようとしていた。

第六十話

戦いの行方は決した。

それはマツセナ川の氾濫とは直接関係のないアウフレーベの左翼軍でも例外ではない。

最大戦力であったアルセイルの軍とケルドラン城塞が壊滅してなお兵の戦意を保つのはアウフレーベにもかなわぬのだ。

あと少し、マグレープの率いるオルパシア軍を突破するまであと半時の時間が与えられなかったのがプリストル軍の不幸であった。

「……………兵たちの掌握を急げ。今は一兵でも多くの兵を故国に帰してやらねばならぬゆえな」

未練を切り捨てアウフレーベは被害の極減へと思考を切り替えた。

超自然的な現象による味方の壊滅に誰もが動揺し混乱を余儀なくされている。

混乱を収束し、秩序を回復しなければ撤退戦は戦えない。

幸いにして左翼軍にはアウフレーベに長年付き従ってきた子飼いが多かった。

たちまちアウフレーベは子飼いを中心に連動する二個の方陣を作り上げることに成功した。

……もちろん追撃はあるだろう。

しかしアウフレーベの予想ではオルパシアの損害も決して軽いものではないうえ、ケルドラン城塞の戦後処理などを考えればそれは一時的なものにとどまるはずであった。

アウフレーベは自ら殿の指揮を執りながら手際よく退却を開始した。

「……全く嫌味なくらいに隙がねえ……」

マグレープはいち早く無理な追撃の愚を悟った。

大半の兵は戦意を失い逃げ惑っているにせよ、アウフレーベの直率する殿部隊の統制は見事に一言に尽きた。

よほど兵の心を掴んでいなければこんな真似はできまい。

このまま追撃を続行すれば彼らに倍する損害を受けることは確実だった。

それを押してまでも敵を殲滅するという考えは少なくとも傭兵にはないのである。

「どつちらあの姉さんにはまた会うことになりそうです……」

同じころ、ディアナは壊乱したブリストル軍正面に対し一斉に攻勢に転じていた。

組織力を生かせぬ烏合の衆と化している今のブリストル軍にこれを押さえ込む力はない。

アルセイルが直率する一個大隊ほどがどうにか軍としての体裁を保っているが残りの大半はもはや戦える状態にはなかった。

後方の濁流と前面のオルパシア軍の鋭鋒を避けるために必死になってコラウル山脈の道なき道へと分け入っていく。

逃走に邪魔な鎧や槍は打ち捨てられ、力なき兵は味方であるはずの兵によって引きずり倒され、あるいは見捨てられていくという惨劇が続出した。

山岳行軍の装備を用意していないプリストル軍の兵士たちが山脈越えを果たしてプリストル本国へとたどりつく確率は、実のところそれほど高くはない。

おそらくはこの先にも生き延びるために味方同士を食い合う地獄が現出するはずであった。

本来ならばそうした兵を統率し、退却戦を指揮すべきアルセイルは、指揮下の精鋭を率いて真人を押し包む五人の武者の警護に中っていた。

究極的にこの戦いの戦略目標は真人の生命なのであって、今守らなくてはならないものは真人を倒すための時間を確保するということなのだ。

アルセイルの見るところそのときは遠くない未来にやってくるはずだった。

もちろんアルセイルのこうした動きをディアナが見過ぐすということとはありえない。

既に残兵掃討に移りつつあるこの戦況ではディアナの手腕が必要なのは限られている。

追撃戦の継続を配下の士官に命ずるとディアナは騎兵の一部を駆ってアルセイルへと駆け出した。

真人の戦況が決して思わしくないことは遠目にもわかっていた。

自分こそは真人を守る存在となってみせる。

己の心奥に誓った誓約はたとえ命に代えても果たされねばならないのであった。

真人を取り囲む五人の武芸者たちにも味方の敗北の動揺がないわけではない。

否、むしろ深刻であると言ってよいだろう。なんといってもフィリオアやベアトリスやウエルキンといった面々は傭兵なのだ。

滅びの美学など薬にもならない人種である。

まして長い真人との戦闘で疲れきったこの身では雑兵にすら不覚を

とりかねない。

生き延びるといふ傭兵にとって最も重要な命題を前にして動揺するな、というほうがおかしかった。

アルセイルの強固な防御壁はただ武者たちをオルパシア軍から守るためのみではなく、むしろ彼らの逃亡を抑止するためにこそあるのであった。

「くそっ！いい加減に墜ちやがれ！」

フィリオは忌々しげに舌打ちをした。

ジリジリと真人の余力を削っているという確信はある。

しかしどんな手妻かはわからないが、予知能力でも備えたかのような真人の鉄壁の防御の前に短時間で真人を討ち取るとは至難の技に思われた。

かといって時を無駄に過ごせばオルパシア軍の重囲に孤立して敗死も避けられない。

傭兵は正規兵のために使い捨てられるのが運命だ。

当然フィリオたちはアルセイルの真意に気づいていたし、そのうえで生き残るための算段を考えなければならなかったのである。

そうした焦りが剣先を鈍らせ、とりわけ前衛の主力であったフィリオとウエルキンの集中力が乱れてきたことに、ともに肩を並べているシンクロードが気づかぬはずもなかった。

彼らの頭の中が真人に対する勝利ではなく、いかにしてこの場を生きて逃げ延びるかということが占められているのは間違いない。

それでも真人を追い込み続ける力量はさすがだが、これでは真人が施す予定調和の流れを引き裂くことは期待するのは難しかった。

視線を真人から一瞬たりともはずしていなくともオルパシアの精鋭軍とアルセイルの軍が交戦状態に入ったことは感覚でわかる。

そう遠くない時期にアルセイルは敗れ、恐ろしくも美しい武芸者たちの饗宴は雑兵たちの乱戦の巷に投げ出されてしまっただろう。

その結果がもたらす打撃を想像すればシンクロードのような一兵士であっても背筋の凍る戦慄を禁じえない。

ケルドラン城塞の喪失

東部方面軍三万の壊滅

マヒト・ナカオカミの排除の失敗と、それに伴うマヒトのオルパシア国内での発言力の向上

どれひとつとってもブリストルにとってあってはならない戦略的打

撃に他ならなかった。

ここで一矢報わなくては近隣の小国は雪崩をうってオルパシア王国に加担し、祖国は累卵の危機にたたされることだろう。

どうやら最後の覚悟を固める時がきたようだった。

「すまんが時間稼ぎを頼む」

フィリオとウエルキンにしばし真人の相手を任せ、シンクロードは自らの鎧をはずした。

籠手も兜もはずして剣を握りなおす。

真人のような超絶の体力と防御力を持たないシンクロードが防御力を捨て去ることは正しく自殺行為であった。

鎧をはずしたくらいで簡単に攻撃力があがるくらいなら最初からそうしている。

つまり鎧や兜を脱ぎ捨てたことは、精々が持続力の確保程度の効果しか望めないものだ。

だがシンクロードの真の狙いはそんなことにはなかった。

そのことを同じブリストルの軍人であるシンクレアだけが、万感の

思いとともに承知していた。

「……………闘神ディアナ……………まさかこれほどとはな……………」

アルセイルはブリストルの精鋭一個大隊を持つてすれば、オルパシア軍相手に体力の尽きるまで持久することは難しくないと考えていた。

体力の限界さえなければ半日でも耐えられると思えるほどにブリストル軍の武力は圧倒的なものだ。

地形防御力の傘から出てきた弱兵など物の数ではない、というアルセイルの確信はディアナが率いてきた弓騎兵の霍乱と、ディアナ直率の騎兵による衝撃にあっさりと打ち砕かれようとしていた。

「決して後ろを振り返るな！取りこぼしは歩兵に任せて突き進め！」

ブリストル軍の方陣は確かに強固なものであったが、兵数の少なさから弓兵の戦力を欠いていた。

そもそも歩兵密度の高い方陣は、騎兵の突撃に対する防御力は申し分ないが、弓戦には相性が悪いものなのだ。

連射力に優れた弓騎兵の攻撃に均等であったはずの密度が歪む。

ディアナが配下の騎兵とともに突撃したのはまさにその瞬間であった。

「悪いがダーリンの敵には容赦はしないよ！」

鉄壁の防御陣がなす術なく切り裂かれていくのをアルセイルは感嘆とともに見つめていた。

指揮力もさることながらディアナの個人的武勇も空恐ろしいものだ。

人間の頭部を柘榴のように破砕する鉄鎖の威力は、相当な達人をもつてしても防ぎきることは難しい。

予備の投入を指示し、ディアナの鋭鋒を食い止めるべく部下を叱咤しながらもアルセイルはそれが不可能であることを予感していた。

一瞬たりとも動くことをやめず、守りの堅い場所を避け守りの薄いところから確実に方陣の懐へと近づくと彼女の用兵は正しく騎兵の本性に合致したものだった。

騎兵は防御力に乏しいために機動によって敵の弱点を探りその衝撃力を生かすのが正しい使い方である。

しかしその実践には極めて高度な戦術眼と統率力が必要となるのであった。

なぜ彼女ほどの知勇兼備の良将がオルパシアなどに仕えたものか……。

そう考えかけてアルセイルは首を振る。

オルパシアにはない。あの国にそうした武人を惹く魅力のあるはずがない。ディアナを惹きつけたのは、マヒト・ナカオカミの存在であるに決まっていた。

だからこそ彼はなんとしてもこの場で倒されなければならない存在なのだ。

たとえ年来の戦友の命を奪うことになったとしても。

シンクロードは愛剣を握り締め、雄たけびをあげて呐喊した。

区々たる防御などはもはや考慮するに値しない。紛れもなく決死の行動だった。

彼ほどの達人は必ず避けられたり反撃されたりしたときのために思考の一部を防御に割り振っている。

しかし己の死を前提にしたとき、思考の全ては攻撃に向けられるのだ。

誰もが防御すべきときに防御せず、たとえ自分が致命傷を受けようとも相手に剣を突き立てずにはおかない。

その危険性を、何度も命をドブにさらしてきた真人は十分に承知していた。

この敵は危険だ。

真人のなかでシンクロードに対する優先順位が跳ね上がる。

こうした敵には生半の攻撃手段では相討ちに持ち込まれてしまう。

致命傷を与えるだけでは足りない。意識を完全に断ち切ってしまうだけの打撃力が必要であった。

あるいは軽傷を負わせて疲弊を待つ手段もあるが、既に自らが疲弊しきる一歩手前である現状では危険が高い。

突きの衝撃力を叩きつけて意識を刈り取る。

かつてケルドランの夜戦でアムルタートに使用した技だが、こうした相討ちを防ぐには有効な技である。

ほとんど光の軌跡にしか見えないシンクロードの剣戟を捌きつつ、慎重に機会を窺って真人は腰溜めに構えた剣の力を解き放った。

「……………シンクロード殿……………貴兄は本当に最高の戦友でした……………！」

シンクレアは魔力を帯びた特製の矢を番えると、渾身の力を持って弓を引き起こした。

同い年とはいえ、シンクロードを同輩としてとらえたことはない。

階級が上になった今でも、彼こそはシンクレアにとってかけがえない武の先達なのであった。

生まれ持ったその美貌も、生来の膂力も決して鼻にかけることはなく、ただひたすらに己の武を突き詰める彼に嫉妬さえした。

彼とともに戦場に立ち、戦うことが誇りだった。

だからこそ、彼の生命を賭けた最後の策を無駄にするわけにはいかなかった。

惜別の悲しみに涙を流しながら、シンクレアは魔矢を撃ち放した。

放たれたその先には鍛え上げられた大きなシンクロードの背中が肉薄する真人の視界を覆い隠そうとしていた。

真人の突きが決まった瞬間、シンクロードは確かに即死していたことは間違いない。

しかし彼はその生涯の最後に、シンクレアの魔矢が自分の鎖骨下を潜り抜けたのを知覚し、勢いを減ずることなく真人の左肺に突き立ったのを見届けていた。

第六十一話

シンクレアの魔矢が真人の左胸に吸い込まれるのを、アルセイルは歓喜とともに目撃した。

勝った

あまりに多くの犠牲を払った。

ブリストルが大陸に誇る三万の軍団は消滅し、故国の英雄シンクロードもまた外道とも言える自分の策のために失われた。

しかしその犠牲は決して無駄死にはない。

あのマヒト・ナカオカミの命を引き換えに得たのだから。

「真人おおおおお！」

崩れ落ちる真人の姿に絶叫ながらも、ディアナはどこまでも闘神ディアナであった。

彼女の本心は今すぐにでも真人の救援に赴きたかったが、戦術指揮官としての彼女はあくまでもプリストルの指揮中枢である本陣の破壊と要人の殺傷を優先するべきであると考えていた。

味方の損害を極減し、敵の被害を極大化することが戦場を支配する者としての宿命なのである。

それに愛すべき伴侶たる男が、こんなところで自分を置いて死んでしまっはうがない。

この先戦いはまだまだ続き、その戦いの中心にシエラとプリムは間違いなく立たされることになるだろう。

守護者たる真人が、そんな二人を残して倒されるはずがない、これはディアナの確信だった。

彼女の率いる騎兵はアルセイルの懸命の防御にもかかわらず、堤防を壊す水のように瞬く間に彼の本陣を直撃し、これを蹂躪した。

人的被害は見た目ほど大きくはないものの、騎兵による蹂躪によってプリストル軍の指揮系統には深刻な支障が発生したのである。

これでは第二波のオルパシア歩兵に対する効果的な迎撃など望むべくもない。

もはや軍組織としてプリストル軍が死に体なのは明らかだった。

「見事な用兵だ。だが、少々遅かったようだな……………」

マヒト・ナカオカミは助からない。

ディアナにはわからないだろうが、あの魔矢には治癒を阻害する高度な術式がこめられているのだ。

いかに真人が人を超越した能力を誇ろうと、内臓に魔矢を突き刺したまま生きる術はないのである。

後はプリストルの将として恥ずかしくない最後を飾るのみ！

できつればあの見事なオルパシアの女将と雌雄を決してみたい。

しかし練達の戦術指揮官であるディアナがその機会を与えてくれる確率が低いことにアルセイルは気づいていた。

既に本陣は壊滅状態にあり、ただ個々の武勇に優れた精鋭の一部が必死の抗戦を継続している。

組織的な防戦を再び行うことは不可能だ。

ならば一個の武人としてただひとりの戦士として力の限り抗ってみ

せるのも悪くはない。

……アルセイルはあるひとつのことを見落としていた。

それは真人に対する刺客としての役目を達成したという高揚感によるものかもしれず、あるいはアルセイルが優れた武人であるがゆえに武を重視しすぎた結果であったかもしれない。

何よりシンクロードの命を糧にした必殺の策が破れることを認めるには彼らの存在はアルセイルの中で大き過ぎたのだ。

結果的に本陣を蹂躪することを選択したディアナの勘は完全に正しかった。

神を依り憑かせトランス状態にあったストラト神殿の司祭たちは、自分たちに何が起こったのかを自覚することもなく、オルパシア騎兵の馬蹄に踏みにじられていたのである。

ゴポリ

真人の口から血胞があふれ出すのを見てフィリオは逆上したと言ってよい。

国のために殉じる兵士としてシンクロードとシンクレアの選択は尊く美しいものである。

一命を賭して雄敵を屠り去るその自己犠牲の精神は長くブリストルに英雄譚として語り継がれることだろう。

しかし一個の戦士としては最低の行為だった。

武を競うものが死を覚悟するのはもとより必要なことだが、死を囿として戦士の命を狙うことが許されようはずがない。

戦士が競うべきものはただ武の強さのみであり、死とは武の強弱の結果のひとつであるにすぎないのだ。

こんな詐術のような暗殺紛いの勝利のためにフィリオは戦ってきたわけではないのであった。

こんな、こんな結末を受け入れられるか！

だがフィリオの目から見ても真人の怪我が致命傷であるのは明らかだった。

真人の唇からこぼれる血胞は肺が傷ついて気管に血が逆流している証拠である。

フィリオの経験上こうした臓器の損傷は、宮廷魔術師のような高度な治療魔術を使えでもしないかぎり生還は難しい。

「やめる！シンクレア！」

がっくりと片膝をついた真人に、シンクレアが止めの一矢を放とうとしているのがフィリオの視界に写った。

今の真人にシンクレアの神弓は避けられない。

終わってしまう。

自分が追いつき追い越すべき無二の好敵手が永遠に失われてしまうのをフィリオは恐れずにはいられなかった。

いつの日か真人の武を凌駕して大陸中に最強の称号を轟かせる……その機会は今フィリオの手から永久にこぼれおちようとしているのだ。

「……………我がプリストルに仇為す怨敵め……………！あの世でシンクロード殿に詫びるがいい！」

「やめろおおお！！！」

フィリオの絶叫がシンクレアに届くことはない。

シンクレアにとって武とは国家に仕えるためのひとつの手段にしかすぎないからだ。

残された最後の魔矢を真人の額に向けて、亡き僚友への哀悼とともにシンクレアは矢をとぎ放った。

動くこともままならないはずの真人が迫り来る矢を打ち払い、背中にまで突き抜けていた左胸の矢を一瞬の躊躇もなく引き抜いて見せたのはそのときだった。

「……………誰だ？おまえ……………」

否、真人ではない。

顔立ちはよく似ているが、真人より二・三歳は年長であるように見える。

信じられないことに異国風の民族衣装を身に纏った、それでも一目で傑出した戦士であることがわかる青年が、真人と入れ替わるようにそこにいた。

「……………終の式、大和推参」

真人によく似たその青年はニヤリと不敵な笑みを浮かべながら悠然と名乗りをあげた。

いつたい真人はどこに消えたのか？

そもそもこれほどの武芸者を前にして全く気づかれずに人を入れ替えるなどという技が本当に可能なものなのか？

残されたフィリオたち武芸者は目の前の現実に驚きの色を隠せない。
なかでもシンクレアの動揺は深刻だった。

「貴様……マヒト・ナカオカミをどこにやった!？」

シンクレアが激高するのも当然であろう。

尊敬する僚友シンクロードの命を犠牲にしてまでしとめることにならなければならぬ。いつの間にか逃げられていましたではあの世でシンクロードに合わせる顔がなかった。

「……我が主なら狭間に隠させてもらったぞ?……といってもお主

らにはわかるまいが」

大和と名乗った青年は自分の心臓を指差すと謎めいた表現をしながら薄く嗤った。

「それにしても大した腕だな。神の封鎖があと数分解けずにおればいかに我が主でも危うかったぞ」

青年の言葉に初めてフィリオたち武芸者は神殿の司祭が倒れたであろうことを知った。

ふと顧みればアルセイル率いるブリストール軍は完全に崩壊しもはや虫の息である。固有の武力を持たない司祭たちが真つ先に倒されるのは自明の理であるというべきだった。

「……それはつまりオレたちはもう真人には手が出せないというわけだな？」

フィリオは大和に尋ねた。

もちろん彼の答えはわかっている。しかし儀式的な意味でその確認は必要なのだった。

「然り、狭間には我ら眷属たるものにしか手を出せぬ」

「……ならばよし！」

フィリオはウエルキンとベアトリスを振り返った。

形式は既に出来上がっている。あとはそのタイミングと実行があるのみであった。

「マヒト・ナカオカミに重傷は負わせたが、どうやら間一髪で取り逃がした！再戦を期すためにも今はなんとすることもここを退くぞ！」

「そうね」

「うむ」

ここに真人がいれば逃亡することはできない。

それは契約違反であり、傭兵にとって犯してはならない犯罪行為であるからだ。

しかし討伐の対象であるマヒト・ナカオカミが戦場から消え去った今、優先されるべきは自らの生存であるのは当然だった。

傭兵契約のなかに討伐対象の搜索までは含まれていないのだから。

「そ、そんな馬鹿な！認められるかそんなことが！ならばシンクロード殿はいつたいたいなんのために命を散らしたと言うのだ！」

油断のない足運びで早くも遁走に移ったフィリオたちとは違い、シンクレアはそう簡単に真人の命を諦める気にはなれなかった。

既にシンクレアにこの戦いを生き延びるつもりはない。

しかしあの世でシンクロードと胸を張って見えるためにも、真人の命を奪わずにはいられないのだ。

「命は確かに尊いが、死が願いを購うことはない。生こそが希みを叶える唯一の力と知れ」

「戯言を　　！」

シンクレアの雄たけびとともに神速の矢が大和に向かって放たれる。だがブリストルに神技を謳われるはずの矢の数々が、なぜか一矢たりとも当たらない。

「……………水行を以って鏡と為す、幻せ」

水分が複数の鏡を構成して大和の姿を晦ませていることに、シンクレアはいまだ気づいてはいない。

矢の射手として最も大切な遠近感を狂わされてしまっただけはもとより矢の当るうはずがなかった。

「何故だ？何故当らぬ？何故神は私を嘉し賜らぬのか？」

なく、ただ純粹な力のみ」

超然としていた大和の表情に初めて苦渋の色が走る。

善が悪に負け、愛情が欲望に敗北する。それは善悪好悪ではなく、ただ純然たる力の量によって勝負が決するためだ。

それがこの悪しき世界の理なのであった。

「我世の理を知りて斬を飛ばす、切り裂け、アメノハハキリ」

大和が剣を振りぬいた不可視の斬撃は、遠く離れたシンクレアの四肢を容易く寸断し、彼を悪しき世界から永久に解放した。

「よお、大和とか言ったか？参考までに聞きたいんだが、お前真人のなんなんだ？」

フィリオは群がるオルパシア兵をなぎ払いながらも視線だけは大和に向けたまま叫んだ。

まさに洒落にならない攻撃だった。

だが真人に匹敵する武の存在に気づいた以上、彼ともいわずれ手を合
わせずにはいられないというのがフィリオの悪しき宿願なのである。

それに真人との再戦の前に彼がどうして真人を逃したのかを知る必
要があった。

「我が名は大和……中御神家守護司の眷属にして……かつて守護
司を指して果たせなかった、不甲斐のない真人の兄であった者の
残滓だ」

雄敵を葬りながら、大和の表情はどこまでも深い哀切に満ちていた。

第六十二話

かつて幼い弟妹を守ろうと志した兄がいた。

狂気の沙汰としか思えない修業の果てに、残酷な宿命からの弟妹の解放を信じて戦った兄がいた。

そして才能、努力、信念そのいずれもが常人の域を超えていたその兄の名を　　中御神大和、と言った。

いつしか兄は中御神家でも最強の術者に成長し、カムナビとの最終決戦に挑む守護司の最有力候補として一族に認定された。

そして想像を遥かに絶する苦難を超えて、ついに中御神家の守護司が受ける最後の試練に望む。

中御神家の守護司が絶対に成し遂げなければならない最後の試練……だが中御神家の創始からいまだただの一人も成し遂げた者のないその試練とは、神代の宝剣十拳剣を人の身で制御することにはかならなかった。

すなわち、スサノオ命が八岐大蛇を退治するときに使ったとされる神剣アメノハハキリである。

本来人が神を打倒するということはありえない。

もしも人が神を打倒することができるとすれば、それはもう人ではない。

もちろんごく稀に神が人界に転生するということはあるが、そんな不確定な事象に世界の運命を任せるといふ選択肢は一族のなかには存在しなかった。

中御神家の最終的結論とは、限りなく神に近い人を造りだすこと…
…そして神代の武器を制御させるといふことであつたのだつた。

神代の秘宝は例外なく人の手を嫌う。

それは人という存在と神という存在は本質的に相容れないものであるからだ。

かろうじて、物質として人界にある存在である分だけ神よりは人に近い存在であることが制御を叶える唯一の望みであつた。

神が神を殺すために鍛え上げられた神代の武器を人が使うことが出

来たときこそ神殺しの奇蹟は成る。

人が人のままに神代の秘宝の器となるために、中御神家は千年余の時を捧げてきたのだ。

必ず最初の制御者になってみせる。

絶望的な確率を前にしても兄　大和の決意は微塵も揺るがなかった。

彼の見るところ、弟の真人は心根が優しすぎ、妹の真砂は心根が弱すぎる。もしも自分が失敗してしまえば二人もまた無駄に命を散らしてしまうことは明白に思われたのである。

才能はあっても適性という点で二人は大和に遠く及ばない。二人は神を殺す人ではないなにかより、人に愛される存在になるべきだった。

だからこそ、自分が一族の悲しき宿命の輪をここで断ち切つてしまわなくてはならないのだ。

真人の優しく無垢な性は多くの人に安らぎを与えるだろう。あの微

笑を向けられて悪意を抱ける人間は少ない。

そして真砂の可憐な佇まいと、繊細ながらも伸びやかな明るさはどんなにか人に愛されることだろう。

二人を守るためならば、この身を捨てることになんのためらいもない。

だからこのオレに力を貸してくれ。

この国に仇為す渡り神カムナビを倒す力を

！

家族を守る断固たる決意

国の命運を担う至誠

命を捨てて使命を果たす至情

そのいずれもが歴史に名を残した偉人たちに勝るとも劣らぬ強い思いとなつて大和の胸にあつた。

胸のうちの思いの深さと強さを自覚するたびに確信は深まっていく。たとえ神すら許さぬことであつても今の自分なら成し遂げることができるだろうと。

だがそれは、十拳剣の圧倒的な力の前には大和の意志など塵芥に等しき無力な幻にすぎなかった。

いったい誰が想像しえただろう。

意志のないただ純粹な力……それだけを制御することがこんなにも遠い。

それは意志のない力を意志のもとに制御しようとするのに、意志のない力のほうが圧倒的に強いためだ。

歴代の候補者たちもその事実に気づきながらこう思ってきたに違いなかった。

すなわち、意志のない力より、断固たる決意を固めた自分の意志の
ほうが強いはずだ、と。

人が陥りやすい錯覚であるというべきだった。

確かに固い意志は人の力を強くする。

しかしそうして強くなった力も結局のところ純粹により強い力には
かなわないのである。

………死ねない………オレがここで死ねば真人が…真砂が………二人と
もどうかオレに力を貸してくれ………！

幼い弟妹を守らなくてはならない。

彼らに一族の業のない未来を届けてやらなくては、いったい何のた
めに人生を賭けて修行に耐えてきたのか。

心ではそう叫びながらも現実には絶望的であった。

十拳劍の力に自分が飲まれていく。

意志のない力によって、己の意志がかき消され、漂白されていくのをどうする術もない。

薄れ行く意識の中で、大和は己の魂の所有権を真人に譲り渡すことで、かろうじて魂の消滅を免れたのだった。

この日から大和は真人の式神の一人となった。

本来式神とは幽世に住まう異形の者を現世に呼び出すことで使役するものだが、大和は違う。

大和は己の魂の所有権を真人に譲り渡しているのである。

つまり、未来永劫真人と一心同体であり、真人とともに生き、真人とともに死すものとなった。眷属になるとするのはそういうことなのだ。

それは実のところ真人を思う大和が為した奇蹟のような、本来ありえないはずの出来事であったのだが、その事実を決して大和の心を慰めはしなかった。

結果的に弟妹を戦いから解放するという彼の目的を達成することは叶わなかったのだから……。

ふたつの魂を所有することとなった真人は大和をも遙かに上回る術者へと成長した。

だが、本来ありえるはずのないふたつの魂や強制的な眷属契約の弊害からか、大和は真人が幽世に退避しないかぎり現界できない存在となっていた。

真人が現界して活動を続けるかぎり、大和には何一つ為しうることはない。

そして運命の日、大和の見守る目の前で、真人はカムナビと相討ちに絶命した。

……またしても大和は真人を守れなかった。

どんなに強く願ってたとしても、現実はいつだって無慈悲で残酷なものなのだ。

カムナビが真人の命を拾ってくれたのは奇蹟を幾重にも重ねたような奇蹟中の奇蹟なのであって、真人に再び死が訪れればそれを回避

する術はない。

決意だけでは何も守れない。

大和はまさにその魂に己の無力さがもたらした非情な現実を刻み付けていたのだった。

「死は命題を決して解決はしない……だが強くあらねば死に抗うこともできない、だから………」

強さだけがすべてと思いたくないのも事実であった。

真人が優しさを失わずに最強の術師として成長したことからしても、愛情が少なからず力となるのは確かなのだ。

ただし、神の力という圧倒的な障害へ対抗するには無力だというだけで。

「死を恐れよ。そして生に驕るな。」

「いいな真人？」

次の瞬間、シンクレアの鋭鋒を退けた青年は陽炎のように姿を変え……重傷の身体から回復した真人がそこにいた。

「……………ありがとうございます。兄さん」

兄に見守られていることを片時も忘れたことはない。

真人が力に溺れずに強さの在り方を見失わずに済んだのは、この偉大で優しい兄が心の内であればこそなのだった。

気がつけばすでに戦いは終わっていた。

アルセイルは激戦のすえに傭兵のひとりに討ち取られ配下の兵とともに玉砕して果てている。

三万を数えたはずのブリストル軍は一万名以上が死傷し、さらに一万名弱が捕虜となった。

アウフレーベが率いて撤退した兵たちも最終的に数割が脱落を余議なくされるであろう。

もはや西部にブリストルの兵力は潰えたといってよい大勝であった。

だがその勝利は運命の天秤如何によっては容易くブリストル側にもたらされたであろうことは真人が一番よくわかっていた。

あと五分、ストラトの司祭が生きのびていたら真人にも自分が無事であったという確信はない。

それほどにブリストルの用意した武芸者の力量は恐るべきものであったのだ。

「……………それにしてもこれほどまでに術に頼りすぎていたとは……オレもまだまだ修行が足りぬ……………」

真人にとって中御神家守護司ともあるうものが、術を使えなくなっただけで遅れをとるなどということは恥辱以外のなにものでもない。

己を守ることは基本中の基本、弱きものを守れて初めて守護司であるということを考えれば、真人はこの戦いで何も守れていないも同然なのである。

ディアナとシエラがいなければオルパシア軍はとうの昔に敗北していただろう。

だが今はそれでもよいと思える。

一昔前なら想像すらしえなかった心境の変化であった。

真人がただひとりで全てを守らなければならないのではなく、ディアナやシエラの手を借りて仲間と手を携えていけばいい。

自分が本来守るべき人を信じて運命を委ねることができる……………それが真人がこの世界で生まれて初めて他者との間に手に入れた絆なのである。

「真人　　！」

「真人様！」

戦の事後処理をすつ飛ばして一目散に駆けてくる愛しい女性の健気な姿に真人は目を細めて微笑んだ。

ディアナはまさに宣言通り真人に守られるばかりではなく守るものとしての役割を果たした。

そしてシエラは将の将たる器を見せ、メイファン王国の指導者としてそのカリスマ性をあまねく将兵に植え付けた。

何より二人ともどれだけ真人が苦戦しようとも、真人を信じることをやめようとはしなかった。

これほどの信頼を寄せられて真人が裏切れることなどあるはずもなかったのである。

力任せにディアナの巨体が真人の胸に飛び込んでくる。

若干の遅れをとったシエラはやむを得ず真人の背後から腰にかじりついた。

血と汗に自分が汚れることなど構いもせず、真人の生の実感を己の五感で確かめるかのように二人は頬をこすりつけ続けた。

「全く……心配させるな……バカ」

「後でおしおきですからね？」

二人の表情から、つい先刻までの戦場を支配していた指揮官としての気配を感じることはできない。

今このときばかりは二人ともただの恋人に甘える乙女でしかなかったのである。

そして安全のため遠く殿軍に取り残されていたプリムもまた、恋する乙女の勅で二人が抜け駆けに及んでいるであろうことを正確に洞

察していた。

「……………ずるい……………二人とも絶対にずるいことしてるよ！」

げに恐ろしきは乙女の勘ということであろうか。

長時間にわたる戦いで疲れきっていたオルパシア軍のなかから二騎の騎兵が王都へ向けて慌しく出立していた。

この戦いの勝利を一日千秋の思いで待ち続ける人々のために、たとえ疲れた身体に鞭打つてでも一刻も早く戦勝の報告を為さなければならなかったからだ。

だが、真人の戦勝を望まぬものたちも今の王都には数多く存在する。

騎兵の一騎は国王アルハンブラのもとへ、

そしてもう一騎はマンシュタイン公爵のもとへとコラウル山脈を矢のように東へ向かっていた。

第六十三話

「またあの小僧が勝ちおつただと!？」

マンシュタイン公爵は激昂の色も露わに反射的に机に飾られた青磁の壺を払いのけた。

慣性の法則にしたがつて大理石の床に叩きつけられた壺は、甲高い音とともに破滅の調べを響かせる。

冗談ではなかった。

難攻不落をもつてなるケルドランの城塞に三万を超える精強な軍。加えて間諜からの情報とブリストルが敗北すべき理由はなにひとつとしてありはしないはずではなかったか。

無謀とは思えない遠征計画に諸手をあげて賛成したのは、今度こそマヒト・ナカオカミの息の根を止められると信じたからだ。

そして主戦力を喪失したオルパシアの支配権をこの手に握る手はずは整っていた。

そのはずなのに

!

「お、お待ちください閣下。報せはなにも悪いことばかりではありませんせぬ……!」

「……………それはいったいどういことか？」

マンシュタインの目が不審に見開かれる。

オルパシアの大勝が確定した今、いったいどんな良報があるというのだ……………？

「怨敵マヒト・ナカオカミがブリストルの武者との戦いにおいて

左胸に矢を受け生死不明の状態にあると……………」

「なんだとっ!?!」

確かに良報というべきであった。

オルパシアの軍事力に対する信頼は、その大半を英雄マヒト・ナカオカミに依存することで成り立っている。

ブリストルとの開戦以来戦果をあげた将がマヒトよりほかにいないのだから当然であった。

その彼が生死不明?

死亡確定でないのがなんと口惜しいが身動きの出来ぬ重傷であることは疑いない。

そうであるならばとるべき手段はある。

「……………その報告間違いないのであろうな?」

「かろうじて心臓ははずしたようですが、左胸に矢を受けたことについては使者ばかりでなく複数の筋からの証言が」

腹心の報告を聞きながらマンシュタインの脳内はめまぐるしく回転を続けていた。

幸い、自分の構想は全面的に破綻したわけではないらしい。

選択肢はおおまかに分けて三つある。

ひとつは反乱を諦めて傍観に徹することだが、これは問題外だ。

今後のブリストルとの戦の推移によってはマンシュタイン公爵家の権勢は大幅に衰退を余儀なくされてしまうだろう。

少なくとも今はなんらかの能動的な行動が必要な時なのである。

ふたつめはこの際ブリストルとは手を切って積極的に対ブリストル戦に加わっていくということだ。

いかにブリストルが軍事強国といえども、ケルドランに散った三万

の大兵の抜けた穴を埋めるのは容易なことではない。

この期に乗じてプリストル領土を蚕食することも、決して夢物語ではないのであった。

だが、この場合功績の最も重要な部分を外務卿と軍務卿がもっていくことになるのは確実だった。

亡国の危機を乗り切った英雄として、そして巫女姫の婿としてあのマヒト・ナカオカミがメイファン王国の国王に即位するという話も現実味を帯びてくる。

どこの馬の骨ともわからぬ男が成り上がり遂には一国の王となるなど、決して認めるわけにはいかない。

大陸全土の秩序を維持するためにも、ここでマンシュタイン家が伝統と秩序を擁護する義務があるはずであった。

つまりふたつめの選択肢もとるわけにはいかないということである。そしてみつつめは言うまでもなく、オルパシア王家に叛旗をひるがえし、プリストル帝国に恩を売って自らが新王となることにほかならない。

さすがにこの決断は危険を伴うだけにマンシュタインも軽々しい判断はできなかった。

オルパシア側に形勢が傾いたことでプリストル帝国に恩を売るという意味ではこのうえないタイミングであることも確かだ。

今ならプリストルの蛮人どもも、一も二もなくマンシュタインのオルパシア王即位を認めるだろう。

逆にオルパシア王国の戦力が予想以上に残存してしまったため、反乱が失敗し地位も名誉も失う可能性も決して低いものではない。よほどの勝算が見込めなければ実行などできるはずがなかった。

だがここでマヒト・ナカオカミが倒れて行動不能に陥っているのは大きい。

王国の戦力の大半は三方面に展開された戦線に八割以上が拘束され

ているため、王都の守備兵力は王室近衛を残すのみとなっているからだ。

ブリストル軍の拘束を受けずに機動できる兵力がマヒト・ナカオカミ率いる西部方面軍であることを考えれば王都に早急に援軍に駆けつける戦力がいないのも確かであった。

……配下の兵が三千余……息のかかった貴族たちを含めると一万にはなるうか……王都の近衛は確か二千程度であったはず……

マンシュタインとその系列の門閥貴族はブリストルとの戦でほとんどと言っていいほど疲弊していない。

王室近衛兵団を除けば数少ない貴重な予備兵力である。

ブリストルとの戦いから戦力を温存し続けてきたのはまさにこの日のためだ。

その全力をもって王都を陥とし実権を掌握することができれば後はブリストルの底力がものをいうだろう。

いかにマヒトが大勝をもたらしたといえども、王都を落とされ補給を断たれてはまず南部と北部の両戦線がもつはずがなかった。

国王たちを逃がさず速やかに王都を制圧することができれば、長年の夢は実現するのである。

おそらく今の王都は戦勝の報告に沸きたっているはずであった。

まさか敵に攻め込まれるなど考えてもいまい。

さらに王都のなかにはマンシュタインに賛同する門閥貴族派の人間も数多くいるのだ。

協力する人材には事欠かないに違いなかった。

とうとう……このわしが王となる日が来たか……！

比類なき名門にして伝統の擁護者たる自分が即位するのは当然の権

利である。

どごその馬の骨に爵位を授ける愚かな王にこのオルパシアの王位を欲しいままにさせるなど犯罪に等しい。

貴族の権威あつてこそその王権であるというのにあの男はそんな基本すら忘れる忘恩の輩だ。

ならばこのわしが王たるの見本を見せてくれよう。

アルハンブラ、貴様に王冠は相応しくない。

人は己の見たいものを見ると言う。

マンシュタインの脳裏に浮かぶのは自らに有利な条件ばかりで、否定的な推測は全く考慮されることはなかった。

部下たちもまた主君の命令はこなしても、自ら策を主導するようなことはできない。しようとも思わない。

なぜなら公爵の求めるものは耳に痛い諫言をしてくれる現実主義の徒ではないからだ。

すでにマンシュタインは圧倒的多数の軍勢で王都に雪崩れ込み、玉座に座る自分を幻視していた。

彼にとってそれは必ずや実現すべき理なのだから。

「……………それで穴熊は罨にかかりそうなのかね？」

アルハンブラ王はご機嫌であった。

どうやら今までの忍耐がよほど腹に据えかねていたらしい。

「確率は八割ほど……と見ておりましたがやはり動き出しましたよ
うで。しかし予断は許しませぬぞ陛下。この宮廷にはどこに奴の味
方がいるか知れたものではないのですから」

シエレンベルグの言葉にアルハンブラも表情を改めた。

門閥貴族の血縁と縁故で張り巡らされた王宮のスパイは、彼らが把
握しているだけでも二桁を超える。

そしておそらくはそれと同数以上が王宮内に入り込んでいるのに違
いないのだ。

絶対数に劣る彼らにとって予期せぬ裏切りには最大限の警戒を怠る
わけにはいかないのであった。

「確かに裏切り者に足をすくわれては泣くに泣けん。してその対策
はどうなのだ、外務卿？」

「既に王都からの街道は全て近衛騎兵が封鎖しております。城門で
の規制も強化しておりますから間諜が公爵のもとに向かうのは難し
いでしょうな」

ギリギリまでこちらが公爵の謀反に気づいていることを悟られては
ならない。

公爵はこちらを奇襲するつもりなのだろうが、奇襲をするのは実は
こちら側なのだ。

兵力に劣る以上奇襲の成否は勝敗の鍵ですらある。

なんとしても機密は守りぬかなければならなかった。

「公爵とその縁戚だけでも六千は優に超えるぞ。その気になれば一
万は集まるだろうが……王都の守りはどうか？軍務卿」

アルハンブラ王の右に控えていたハースバルドは重々しく頭を垂れた。

この日のためにマヒトの遠征軍を削り、心痛に耐えてきたのだ。完璧な迎撃計画は彼のマヒトへの誓いでもある。

「近衛兵団二千の精鋭に加え、公爵家の影響下にはない選抜部隊を千名手配しております。あとは当ハースバルド家の手兵五百が全てではございますが……」

言葉を区切ってハースバルドは力強く断言した。

「指揮系統の定かならぬ雑軍など一万でも物の数ではございませぬ」

ただ正面からぶつかっても圧勝するだけの自信がハースバルドにはある。

プリストルという未曾有の強敵との間で鍛えられた兵が、ぬくぬくと領地でくすぶっていた門閥貴族軍に負けるはずがないのだ。

また街道を封鎖している騎兵部隊は、公爵の接近を確認次第、後方で再集結して背後を襲う手はずになっていた。

攻めるつもりが攻められて、少ないはずの敵が予想以上に多いと知ってそれでもなお門閥貴族が戦意を保てるとはハースバルドには思えなかった。

そして王都で敗北した公爵が逃げ込むべき公爵領にも手は打ってある。

すでに別働隊三千が公爵領へ向けて進撃を開始していた。

本領から兵を呼び寄せている以上、公爵の所領の守備が空きのものは明らかだ。

おそらく手もなく公爵の本領は陥ちるであろう。

公爵が生き延びる術は、なんとしても王都を陥としアルハンブラ王を亡き者にするほかないのである。

「戦というものは貴族の遊戯とは違うということを教えてやりましょう。たとえ生きて教訓とする機会がなくとも」

もとより軍務卿として軍政に携わるようになったのはハースバルドにとって本来の姿ではない。

軍に奉職して二十余年、その大半を戦塵の中で過ごしてきたのは伊達ではなかった。

実戦での野戦指揮官こそ、ハースバルドにとって最大の力を発揮できる天職にほかならぬ。

長年の友人であるシエレンベルグはそのことをよく熟知していた。

「……………では私は民を煽動して参るとしましょう。まあ、公爵が口でいうほどに民を思っているのなら効果はないかもしれませぬが」

シエレンベルグの言葉も辛辣を極めた。

マヒトの大勝利に酔う民に、公爵の謀反を知らせたうえで、どちらに協力するかを問いかければ答えは火を見るより明らかである。

そして門閥貴族に対する民の怒りが爆発すると同時に、ひそかに公爵を助けようとする間諜は全く身動きができなくなるはずであった。迂闊に公爵を利用する動きをすればたちまち民に見つかって袋叩きに合うからだ。

公爵に組する貴族の屋敷なども、たちまち民に取り囲まれて立錐の隙間もなくなるだろう。

シエレンベルグはこの際、国内の不安要因にはまとめて消えてもらうつもりであった。

確かにこれによりオルパシア王国の戦力は一時的な減少を余儀なく

されるであろうが、不安を抱えたままにいるよりはよほどいい。しかもケルドランでの大勝は、これまで中立を保っていた小国のほとんどをオルパシア側に引き寄せるには十分なインパクトを持っていた。

減った分の兵力は、同盟国によって十分以上に補填が可能なのだ。

「滑稽だな、マンシュタイン。名門の力が真実ならばこの程度に畏にかかる道理があるのか」

いささか自分が感情的になっている自覚はある。

だが、今や実の息子以上に大事に思っている義息子が一時は瀕死に陥ったと知ってなお公爵に含むものがないわけがないのだ。

シエレンベルグにとってマンシュタインの誇りなど、マヒトの髪の毛一筋ほどの価値もない。

……どうせ不要な存在ならばせいぜい見苦しく悪あがきしながら滅ぶがいいのだ。

オルパシア王国首脳部の憎悪を一身に浴びた門閥貴族軍にとっては、思いもよらぬ厄災が降りかかるうとしていた。

ハースバルド家の手兵五百をまとめるのはルーシアである。マヒトとともに出陣することを許されなかった彼女ではあるが、とんだところで重大な使命を背負わされるはめとなっていた。しかし彼女にとってはマヒトの敵を討つのはむしろ望むところである。

「任せて真人……！貴方の帰る場所は必ず私が守って見せる！」

第六十四話

マンシュタインが違和感を覚えたのは王都を囲む城壁が遠目にも確認できるほどに接近した後のことであった。

……静かすぎるのではないか？

賛同する門閥貴族たちと合流果たしたマンシュタインの門閥貴族軍は総勢一万弱を数えていた。

しかし当初はさらに千名ほどは集まろうと予想していたのだ。

王都内に留まっていた関係貴族たちがなぜかいまだ参集しないことが原因であった。

しかも王都に放っている間諜からの報告が一向に入らない。

王都の守備兵力の配置状況を把握するばかりか、できれば城門を内から開け放つことまで期待していただけに失望と懸念は大きくなるばかりである。

……もしかしてこの反乱は見破られていたのではないか？

背筋から寒気にも似たものが立ち上ってくるのをマンシュタインは自覚しつつあった。

それは公爵が初めて感じる破滅への恐怖であったのだが、公爵はそれを認めるつもりは毛頭ない。

圧倒的に優勢な兵力を保持しているのが明らかな以上、たとえシェンベルグやハースバルドが策を弄しようとも噛み破るまでのことなのだ。

……少なくとも公爵はそう信じて疑おうとはしなかった。

王都の人口は約二十万を数える。
今やその二十万名は老若男女を問わずマンシュタインたち門閥貴族への敵対を明らかにしていた。

貴族の居館が立ち並ぶ西地区は、数万の王都民によつて蟻の出る隙間もないほど物理的に包囲されていた。

これによりマンシュタインに呼応するつもりであった貴族たちは分断され逼塞し傍観することを余儀なくされている。

迂闊に敵対を明らかにすれば数の暴力によつてたちまち打ち倒されることは明白だからだ。

その事実を公爵に連絡することもできない。

王都の全ての出入り口は封鎖され、王都から外に出ようとするものも圧倒的多数の民によつて監視されていたからであった。

公爵への不満を煽ったシエレンベルグの煽動は、意図した以上の効果をあげつつあった。

もともと王都は国王の直轄地でもあり、王の名の下に住民の自治がある程度保障されている。

また貴族であっても法に反した行為を王都の民に振るえば処罰は免れないのは王の庇護があればこそだ。

こうした法治が行き届いた都市はオルパシア広しといえども王都以外にはない。

だからこそ王都の民はことさら国王への忠誠心を厚くし、門閥貴族の愚拳を心の底から憎んでいた。

王の直接的な支配化にあることこそが彼らの誇りであったのだ。

本来弱者たる民がいくら貴族への反感を抱いてもそれが実力を持つにはいたらないが、その力の組織化にはハースバルドが辣腕を揮っていた。

まず彼は門閥貴族に対する防壁役と、王都城門付近の監視、さらに油を炊き出し城壁から浴びせる係りの三つに民を分けたのである。

王都に残存する門閥貴族派の戦力を合計すれば千名を越す数になるだろうが、それはあくまで全てを合わせればの話であって、貴族一人あたりの戦力は微々たるものにすぎない。

路上にひしめく数万の民のなかに身体を乗り入れて戦力の結集を図る度胸が門閥貴族にあるはずもなかった。

失敗すれば激高した民に鬨り殺しにされるのは目に見えているからだ。

ほとんど戦力らしい戦力を持たぬ民は、ただその数によって王都内貴族の戦力を無効化したのである。

また王都内にひしめく間諜たちはなんとか脱出の機会を伺っていたが、現状は絶望的であった。

聳え立つ城壁によって守られた王都には都合八つの門があるが、これらの門は近衛兵によって物理的に封鎖されてしまっていた。

強行突破を図ろうにもこれまた数万の民が物理的な障害となっておりはだかっている。

ひとりひとりに攻撃力は皆無でも、数万の民はその存在自体が強固な十分な障壁であり、こうした際に最も重要な機動力を彼らから奪っていたのであった。

門閥貴族に対し三割程度にすぎない兵力の補填にも抜かりはない。そもそも防御側は防御施設の効果だけで攻撃側の三倍の有利を得るとされているし、こと攻城戦にかぎっては使いようによっては素人にすぎない一般人もあなどれぬ力となる。

攻城側が攻城塔や投石器を用意できない今回のような速戦のケースでは特にそうだ。

王都中からかき集められた油を煮えたぎらせて、城壁から下に注ぎこむだけでもかけられた兵士にとっては十分すぎる凶器であった。たかが二千程度と考えられていた王都の防御力は想定を遥かに超えて頑強だった。

「開門せよ！我に従うものには寛大な処分を約束するぞ！」

王都の兵も民も大軍の出現に恐れおののいていることを確信していたマンシュタインにとって、王都の反応はあまりに心外なものであった。

「アルハンブラ王万歳！」

「マヒト子爵万歳！」

「くたばれ門閥貴族どもめ！」

恐れおののくどころか意気軒昂、戦意万全といった有様である。

もともと王都民は自立心が旺盛で貴族に対する敬意に欠けるとはいえ、こつこつ悪し様に罵ってくるとは思わなかった。

……やはりマヒト・ナカオカミなどという氏素性の知れぬものを登用するから平民から貴族に対する忠誠心が失われるのだ！

貴族階級というものは一朝一夕に培われたものではない。

建国の王ミーティアの手によってオルパシア王国が統一されたそのときに、その功臣として四公八侯が叙爵されており、これを特別に根源の貴族と呼ぶ。

マンシュタインは四公の筆頭たる家柄に生まれついていた。シエレンベルグは八侯の筆頭である。

根源貴族を統率すべき人間が本分を忘れ愚かにもその血統を汚すとは嘆かわしいことこのうえないであった。

誤りは正されるべきであり、大義はやはり自分のもとにあるのだ。

「殲滅せよ。奴らに生まれた身の程というものを教えてやれ」

もう一度この国の在り方を作り直してみせる。

その邪魔をするものは一人残らず滅べばよいのだ。

門閥貴族軍が前進を開始した。

急な進撃であったために攻城兵器はない。

王都を攻略するためにはもっぱら梯子と縄によって城壁を越えるやり方法はないのである。

マンシュタインは手勢は温存しつつ兵を城壁に登るものと弓で援護するものの二手に分けた。

「一番乗りには金貨百枚の報償を授けるぞ！」

これみよがしな利益誘導だが、それでも確実に兵士たちの士気はあがる。

今の状況では巧緻より拙速が望ましいことは戦の素人であるマンシユタインでも十分にわかっていた。

王都の外周は広すぎて、二千足らずの守備兵ではその全周を守りきることは難しいのだ。

敵に対応の時間的余裕を与えるわけにはいかない。

「ぐわあああああああー!!」

梯子を登る複数の兵士から悲鳴があがったのはそのときだった。

見れば大きな柄杓のようなものから白い煙をあげながら煮えたぎった油が撒き散らされている。

その数およそ三千以上、それはマンシユタインが予想していた近衛全軍の数を遥かに上回るものであった。

「そんな馬鹿な……!!」

高温の油を浴びせられた兵士たちが次々と梯子から落下していく。

落下したただけならば命には別状はないが、さすがに負傷は免れず、たちまちのうちには数百の兵が戦力としての価値を喪失した。

そればかりか、今度は火矢が追い討ちをかけ油を浴びた梯子ごと兵士たちを炎の渦に飲み込んでいく。

城門を斧で斬り割ろうとしていたものたちも同様の運命を辿らざるをえなかった。

「なぜだ？ いったいどこから湧いて出た？」

「おそらくは油を撒いているのは兵士ではございません……姿

は見えずともあおして柄杓を振るときに見え隠れする手……近衛であれば白銀の籠手をつけているはず。

それがどうも粗末な服を身に着けているだけのようには思われません」

そう答えたのはマンシュタインの参謀格でもあるダウディング伯爵であった。

確かによくみれば柄杓をふりかぶる手は武装したもののそれではない。

王都の民が近衛に協力して防衛戦を戦っているのに違いなかった。

本来ならば鎧袖一触になぎ払える存在のはずだが、こうして近衛と手を組まれて支援に専念されるとなかなか煩わしい存在であると言わざるを得ない。

「おのれっ……この平民ずれが……!!」

平民が武装して貴族に立ち向かう……それはマンシュタインにとって想像の埒外にある。

そもそもそんなことがあつてはならないのだ。もしもそれを許せばこのオルパシアを支える秩序は失われてしまうだろう。

何をもって善とし何をもって悪とするか……そうした価値観そのものが混沌の彼方に消えてしまうのだ。

身勝手な理屈ではあるが、マンシュタインは本気でそう信じていた。

「ひるむな！平民ごときに退くは末代までの恥ぞ！」

とはいえバカ正直に突撃を繰り返しては損害が増えるばかりである。貴族のプライドも、純粹な戦闘行為には役に立たないばかりかむしろ有害でさえあった。

冷静に考えれば王都に援軍が到着するためには少なくとも一定以上の時間が必要であり、その時間を有効に使えば破城槌や投石器程度

は用意できたかもしれないのだ。
味方の劣勢に血が上ってしまったマンシュタインにはそんな悠長な
思考を持つことはできなかったが。

「……………おいおい、いくらなんでもこりゃねえだろ……………」

リュシマコス配下の大隊を率いながら嘆息することしきりであっ
た。

マンシュタイン派の軍閥に属する彼は、マヒトに左遷させられた形
で王都に戻ってきていたが、マンシュタインの肝いりで新編の大隊
の指揮を任せられ大尉に昇進していた。

ところが新編された大隊ということは、要するに大隊のほとんどが
新兵であるということだ。

訓練も経験も十分ではない兵が実戦の場で活躍することはありえな
い。

現に右往左往するのみでろくな戦果もあげられぬままにリュシマコ
スの大隊は二割に近い損害を与えられてしまっていた。

リュシマコスの見るところ、この戦いはすでに終わっている。

最初から待ち構えていたとしか思えぬ王都側の対応が、ただ王都の
守備のみであるはずがないのだ。

必ずやこちらを撃破する手を打っているはずであった。

城壁に見える近衛の数は多く見ても一千余にすぎないということは、
おそらくは千から二千の予備兵力を反撃のために温存しているに違
いなかった。

そんなあたりまえのことが公爵とそのとりまきには見えていない。

気づいているものの中にはいるはずなのだが余計なことを言って反
感を買いたくないのだろう。愚かしいことだ。

仕える主人を間違えたか、とリュシマコスと思う。

血縁を利用して何かと力にはなってもらったが気位ばかり高すぎて現実に対応する判断力がない。

このままでは戦いに負けるのはもちろん自分の命まで危かった。

かといって主人を変えシエレンベルグ　ハースバルド連合に尻尾を振る気にもなれなかった。

それはすなわち、あのマヒト・ナカオカミに屈服することに等しいからだ。

アリシアを黽っていたあの日、マヒトに受けた屈辱を片時も忘れたことはない。

あれは武に己を託してきた矜持が根こそぎ踏みにじられた瞬間であった。

あの時以来、己の強さ………拗って立つ土台を失ったリュシマコスは鬱々とした日々を送ってきたのである。

かつての矜持を取り戻すためにはマヒトに挑み、かつ勝利するしかないのだ。

あるいは、マヒトに対する復讐を成し遂げたとき、リュシマコスは武とは全く別の強さを得るのかもしれない。

「……………頃あいだな」

城壁上から戦況を見守ってきたハースバルドはおもむろに右手をあげた。

戦闘開始からすでに二時間、ほとんど戦果らしい戦果をあげぬまま

に門閥貴族軍の損害は千に手が届こうとしている。

兵士も目に見える戦果がないままに戦意を維持することは難しく、一部に逃亡する兵が出始めていた。

マンシユタイン家の手勢が全く無傷で待機しているとはいえ、そのことが逆に味方の士気を奪いつつあるのだ。

自ら好んで貧乏くじをひきたがる人間はいないのである。

それに後方で再編された近衛騎兵が戻る時間が迫ってもいた。タイミングを合わせなければ今度は彼らが敵中に孤立するはめになる。

このまま籠城していても勝つことはできるだろうが、早急に叛乱を鎮めなければ対ブリストルで共闘関係を築く予定の周辺各国に影響がでないとも限らなかった。

出来うる限り予定どおり早めに撃破しておくべきであった。

八つの城門のうち二つがゆっくりと開けられた。

開け放たれた門のなかから解き放たれた矢のように二つの集団が疾駆する。

ひとつはスターリング少佐の率いる正規軍千名であり、もうひとつはルーシア大尉の率いるハースバルド家の手兵であった。

軍務卿が手塩にかけたハースバルドの手兵の練度は、通常の正規軍のそれを遥かに上回る。

ほとんど一撃でルーシアのハースバルド軍は門閥貴族の一軍を撃破した。

数だけは多くとも、門閥貴族の軍は指揮系統も明確ではなく、戦意も薄く、しかもろくな実戦を経験していないのだ。

精鋭を集めた逆襲部隊に敵うはずもなかった。

双方向から城壁にとりついていた部隊を次々に剥がされていくのを、もはや誰も止めることは出来ずにいたのである。

「ええい！あの程度の小勢に何を恐れる！」

マンシュタインがようやく重い腰をあげて手勢を投入しようとしたのもつかの間、今度は偵察にあたっていた近衛部隊の騎兵三百が後方に到着した。

背後を捕られ、退路を断たれたことに動揺が伝播していくのは致し方ないと言えるだろう。

包囲するほうが圧倒的に少数ではあるが、門閥貴族軍は三方面から包囲され事実上その戦闘力を喪失しつつあった。

退路を断たれ、しかも練度の高い部隊を相手にしてなお戦意を保つことは難しい。

なんといっても最前線で戦う兵士は平民なのであり、死ぬまで貴族に付き合う義理は持ち合わせていないのだから。

「雑魚に構うな！公爵の軍を捕捉せよ！」

ルーシアは精銳の五百を錐のように突出させ、門閥貴族軍の中央に位置するマンシュタイン公爵を指呼の間に捉えようとしていた。

門閥貴族軍一万といえども、本気で戦う気のある部隊はそれぞれの貴族が抱える手兵のなかでも古参の一握りにすぎない。

まじめに全てを相手にする必要はないのである。

「防げ！馬鹿者、あんな小娘の軍など蹴散らしてしまえ！」

マンシュタインの檄にもかかわらず二時間もの戦闘に疲れきった部隊は、ルーシアの素早い機動に追隨できないでいた。

門閥貴族の首魁、マンシュタインさえ捕らえることが出来れば貴族軍の瓦解は免れない。

勢いをいささかも減じずにルーシアたちがマンシュタイン軍に襲いかかるうとしたそのとき、横合いから百名足らずの小集団が割り込

んでいた。

「マヒト・ナカオカミの女か。手土産には悪くない」

その小集団の正体はリュシマコス率いる一隊であった。

マヒトの武に結局自分が及ばないであろうことにリュシマコスは気づいている。あれは人が到達しうる領域を超えているのだ。

だからといってマヒトに対する負けを認める気にもならなかった。

ならば門閥貴族による政権奪取を　とも思ったがどうやらそれもかなわぬ気配が濃厚であった。

奴に一矢報いるまでは死ねぬ。

そんなときリュシマコスの目の前にルーシアが現れた。

マヒト・ナカオカミをオルパシアへと引き込み、同時にマヒトの妻の一人になることが噂されている女だ。

せめてこの女を奴から奪い去り、ブリストルにでも亡命するとしよう。

あの男が失望に顔をゆがめるのを鑑賞できないのは残念だが。

マヒトを除けばオルパシア内に自分と張り合える武の持ち主は五人としない。

リュシマコスは復讐の快感に全身を震わせていた。

立ちはだかる男が虎殺しリュシーであることにルーシアは気づいていた。

今のルーシアの武力では手に余る男だ。

しかしここでわざわざ機動を変えていてはマンシュタインを取り逃がす恐れがある。
どうやら奥の手を使う必要があるようだった。

愚かな

リュシマコスとしては全く自分を避けるつもりのないルーシアの蛮勇に苦笑を禁じえない。

付き従う兵とともにいれば大丈夫だとも思ったのであろうか。

だがリュシマコスほどの男にとって兵卒が多少いることはなんの障害にもならないのだ。

「一足先にあの世へ行け」

リュシマコスがルーシアへ必殺の刃を振り上げようとしたそのとき、意識とは別に身体があらぬ方向へ傾いていくことにリュシマコスは気づいた。

……ありえない。こんなことはありえない。

オレは誰からの攻撃も受けていないし、馬にも地形にも障害はないはずだ。

なのになぜ勝手にオレは大地に落ちようとしているのか。

起き上がらなくては。

身体をもう一度垂直に立て直さなくては。

ああ、それなのになぜ、こんなにも地面が近いのだ！

無情にも大地に伏したまま身動きの取れぬリュシマコスを、無数の馬蹄が踏みにじっていった。

「……ありがとう、真宵」

八の式、蝙蝠の式神真宵がユラユラと空を舞っている。
戦闘力は皆無ではあるが、狙った相手の平衡感覚を狂わすことが真宵の能力なのであった。

第六十五話

リュシマコスが果敢に挑みかかったときには相好を崩したマンシュタインだが、それもつかの間武勇自慢のリュシマコスがいともあっさりと敗れると隷下の部隊の士気は加速度的に阻喪しつつあった。

「えええいつ！リュシマコスめ、役に立たぬ奴！」

しかしいつもの罵声にも勢いのなさは隠せない。

ルーシア率いる精銳はついにマンシュタイン家の誇る私軍をその射程に捉えようとしていたからだ。

「雑魚に構うな！公爵の首を上げることだけを考えよ！」

ルーシアの戦力はわずかに五百。

通常ならマンシュタインを守る三千余の兵にかなうはずはない。戦場において数の差はたやすく兵の質の差を覆すからである。

だが、ルーシアは充分な勝算とともに兵をマンシュタイン軍へ正面から叩きつけることを選択した。

ルーシアの考えが正しければ、マンシュタイン軍はわずか五百の騎兵の衝撃力にすら耐えることはできないはずだからであった。

首をあげよ、というルーシアの怒号にマンシュタインは目に見えて取り乱していた。

いったいあの娘は何を考えているのか。何を血迷ったものかまさか四公筆頭たるこのマンシュタイン家当主の首をあげよとは！

もとより負けるつもりなど微塵もなかったが、マンシュタインは仮に蜂起が失敗に終わったとしてもアルハンブラ王に出来ることはせいぜい自分を隠居に追い込むことぐらいであると信じて疑わずにいた。

オルパシア王国の身分制度の根幹である四公八侯を完全に取り潰すことなどありえない。

それはオルパシア王国の身分制度の否定であり、現存する統治機構の障害にしかならぬものだからである。

だからこそオルパシアの長い歴史の中で四公八侯は表立った処分をされることなくその血脈を受け継がせてきたのであった。

まして自分はオルパシアの伝統と文化の守護者であり、根源の貴族中最も高貴なマンシュタイン家の当主なのだ。

これを殺してよい法があるはずがなかった。

その程度、貴族ならば子供でもわかるはずの理屈を、あの小娘は理解していない。

しかし理解していないことこそが大問題であった。そのような無法によってマンシュタインの血が流されることなどあつてはならないのだ。

「殺せ！あの娘を殺してしまえ！」

攻城戦に疲弊した門閥貴族軍の大半は、挟撃された瞬間に指揮系統を乱されて巨大だが統制のとれぬ烏合の衆と化していたが、さすがにマンシュタインの直属軍だけは色合いが異なる。

これまで戦闘に参加していなかったこともあるが、マンシュタインが大陸に誇る精鋭ぞろいであつたことがその大きな理由だった。

獅子の紋章に彩られた特注の鎧で着飾つた雄姿は王国ばかりか大陸中にその名を知られていた。

マンシュタイン家が金に糸目をつけずに王国中から集められたエリートたちだけの精鋭中の精鋭、その鍛え上げられた練度はブリスト

ル帝国ですら及ぶものがないのだと。

剣ひとつとっても王国兵士が一般的に使用する量産品ではなく、マンシュタイン家に抱えられた刀工たちの逸品であり、その戦闘力が開放されればルーシアごとき鎧袖一触に討ち払われるだろう。マンシュタインはそう信じて疑ってはいなかった。

「気にするな、このまま乗り崩すぞ」

ルーシアは槍衾を敷くマンシュタインの堅陣を前にしてもいささかの躊躇もすることなく鞭を振るった。

軍務の柱石たるハースバルド家とて精鋭の英名はマンシュタイン家に決して劣るものではない。

しかし両者の間にはある決定的な差が存在した。

それはすなわち、実戦経験の有無であり、実戦での実力であったのである。

マンシュタイン家の兵士は身体つきも逞しく見た目もよいものが揃っているが、実戦の場ではそんなものは何の役にも立たない。

また自家の兵力を温存するため、マンシュタイン家の兵士はそのほとんどが実戦をいまだ経験せずにいたのだ。

これで平時の力を十全に発揮できるほうがおかしかった。

人間には決して真似することのできない速力で突進してくる馬の集団は、ただそれだけで恐ろしい存在である。

ましてそれぞれの馬には武装した騎士がおり、下から上を仰ぐようにして戦わなくてはならない歩兵の心理的負担は実戦の場では計り知れぬほど強大なものだ。

そんなときには日々の訓練や、戦友との連帯感や、実戦慣れした上官の檄が目に見えぬ力となるのだが、そのいずれもがマンシュタイン軍には存在しない。

まずもってマンシュタイン軍の兵士に求められるのは騎馬試合や決

闘でのわかりやすい一対一の強さなのだ。

なぜならそれが、御前試合でマンシュタインの知遇を得て出世する早道だからである。

味方同士が出世にしのぎを削りあう状況では、互いの命を預けあう絆など生まれようはずもない。

せめて実戦を経験して生死の境をともしに乗り切るようなことがあれば改善の余地があつたのかもしれないが、その機会さえも失つたマンシュタイン軍はルーシアにとって張子の虎も同然であつた。

案の定、騎馬の迫力に恐れをなしたマンシュタイン軍の前列が目に見えて戦列を乱している。

彼らは待遇のよい、安全な職場に慣れすぎていた。

これが普通の王国兵士ならばこんな無様は晒さなかつたであろう。どの国においてもそうだが、兵士というものは入隊と同時に命令への服従を骨の髄まで覚えこまされるものだ。

上官の命令には絶対服従という鉄の規律なくして軍隊は成り立たない。

しかし人は困つたことに闇雲な服従をよしとする生物ではない。ゆえにそこには国家への忠誠といった精神的な抜け道が用意されてい

た。ところがそうした大義名分を持たず、金回りがよいだけで忠誠に見合うだけの器量を当主が発揮できないマンシュタイン家にとって、軍隊は軍隊の体裁を成していないのが実情なのである。

ルーシアや軍務卿がマンシュタインおそるるに足らず、としたのはその現実を認識していたからだ。

「命が惜しくば道を開けよ！手向かうならば皆殺しにするぞ！」

甘やかされてきた兵士は命を惜しむ。

だからこそ兵士にはいつ命を失うかもしれぬという緊張感を与え続けおこななくてはならないのである。

しかも決して本気で言ったわけではないが、ルーシアの脅しをマンシュタイン軍兵士は心の底から信じてしまった。

彼らは立場をいいことに好き勝手をしてきたことに十分な自覚があったからだった。

「こらっ！うろたえるな貴様ら！敵は小勢だぞ！押し包んで討ち取ってしまえ！」

前線指揮を任されていたのはマンシュタイン家の係累にあたるザイドリッツ男爵である。

上級指揮官らしく勇気を發揮して兵の動揺を収めようとした彼だが、彼自身が実のところ一番に動揺していた。

本来衝撃力と機動力に勝る騎兵を歩兵が迎撃するためには、陣形を乱さず槍先を揃えて後の先を取る以外にない。

それを逆に歩兵側から戦列を乱して包囲に出るなど愚の骨頂といふべきものだった。

戦理に従えば、ここは広さよりも縦深を厚くして防御力を増すべきところなのだ。

もちろんそんな好機を見逃すルーシアではなかった。

「いまだ！一気に戦列を突破せよ！」

結束力の弱い軍隊のしかも一点に集中して攻撃されては、防御の破綻は薄皮を剥くよりも容易いことだった。

マンシュタイン軍前衛部隊はルーシア率いるハースバルド騎兵部隊の突破を許したのである。

ほとんど目と鼻の先まで死神の魔の手が迫っていることを知るとマンシュタインはほとんど反射的に身を翻して恥も外聞もなく逃亡を選択した。

マンシュタインがこの世に生を受けてこのかた死の恐怖など味わったことはない。

いつだって当然のように誰かに守られて生きてきた。

その彼が生まれては初めて感じる凶暴な殺意を前にして、なお戦場に留まり続けるなどできようはずがなかったのだ。

「ふ、防げ！死んでも奴らを通すな！あんな気違いどもにオルパシアの歴史と栄光を失わせてなるものか！」

これは何かの間違いだ。

いくらアルハンブラ王が愚昧といえども、マンシュタイン家当主の命を奪うような命令を出すはずがない。

あの小癩なハースバルドの小娘が、私怨に我を忘れて己が為そうとしている行為の罪深さに気づかずにいるのに違いなかった。

とりあえず安全な領内まで逃げ込み、アルハンブラ王に謝罪の使者を送ればこの件は落着するはずだ。

しばらく逼塞することはやむを得ないだろうが、ハースバルドとシエレンベルグに権力が集中すればそれを妬む貴族は必ず出る。

それを糾合するのは名門の筆頭家たるマンシュタイン家においてほかにないだろう。

旧来の権威をありがたがっている貴族は国王の考える以上に多いのだ。

たとえどれほど時がかかろうとも、必ずや復讐を遂げ、オルパシアに正統な秩序を回復してみせる。

そのためにも今は小娘の魔の手から逃げ切らなくてはならなかった。

「公爵様が逃げたぞ！」

「この戦は負けだ！」

「降伏する！殺さないでくれ！」

悪いことは重なるものだ。

少なくとも個人的武勇は水準以上であるマンシュタイン軍が、最低限の秩序を発揮して一矢を報いるとすれば、それはマンシュタインの直率以外にはありえなかった。

彼らにとってマンシュタインは生殺与奪の権限を握った絶対者であったし、人もうらやむ給料を支払ってくれるかけがえのないパトロンでもあったからだ。

だからこそ今の生活を守るためにマンシュタインを守ろうと考える人間は少なからずいた。

しかしそれもマンシュタインに勝ち目があると思えばこそである。命がけて守った主君が結局敗北して功に報いることが出来なくなつては尽くしても甲斐がないのだ。

マンシュタインが逃亡を選択した瞬間こそが、門閥貴族軍の敗北の決定的瞬間だった。

わずか一時の時間すら稼ぐことが出来ずにマンシュタイン軍はその戦力を喪失した。

勢いにのるルーシアをさえぎる兵はマンシュタインに追隨したごくわずかな側近以外にはない。

「逃げるな公爵！貴様に口ほどの気概があるのなら正々堂々と戦つたらどうだ！この腰抜けめ！」

ルーシアの挑発にもマンシュタインは一顧だにせず逃げの一手を固

守した。

もちろん胸の中に煮えたぎるものはある。

しかし自らの武勇にいささかの自信もないマンシュタインが剣をとることなどありえなかった。

そんなことは部下たちが勝手にしてくれるものであったからだ。

何より、本気で自分の首を狙っているルーシアが、まるで言葉の通じない異形の怪物のように感じられてとても立ち向かうどころではなかった。

「わしはマンシュタイン家の当主であるのだぞ！」

正しくマンシュタインは悲鳴をあげた。

ルーシアたちの操る騎馬の群れが地響きも高らかに接近しつつあることを肌で感じ取ったからである。

素人同然のマンシュタインがいかに名馬とはいえ、鍛え上げられた騎兵より早く馬を走らせられるはずがなかったのだ。

そもそも名馬が本来の名馬らしい速度を発揮しては、マンシュタインはたちまち振り落とされてしまっただろう。

凡庸な騎手は、その腕以上に馬を走らせることは出来ない。

マンシュタインが信じてきた世界の常識は、現実によってその存在全てを否定されつつあった。

金にあかせて作り上げた最強の軍隊。

平民とは比べるべくもなく有能な貴族たち。

最高の馬、最高の剣、最高の鎧、そして部下たちの忠誠。

なにより根源の貴族としての権威。

それは全てマンシュタインの脳内にだけ存在した砂上の楼閣だったのだ。

もつともそれをマンシュタインが認めることはなかったのだが。

「救え！誰でもよいからわしを救え！わしは四公筆頭、根源の貴族たるマンシュタイン公爵なるぞ！オルパシアでもっとも高貴な血を引くものじゃ！オルパシアの栄光を守護することが出来るはわしのみぞ！」

この世に神がいるとしたらこの理不尽を訴えたかった。

マンシュタイン家の血は、このような小娘の気まぐれに左右されてよいものではない。

根源の貴族の血は神聖にして犯すべからざるものではないのか？

早くこんな愚かな過ちを正してくれ、そうでないならば早くこの悪夢を終わらせてくれ。

「ギャツ！」

獣のような悲鳴をあげて側近の一人が馬から転がり落ちた。

喉を一本の矢が深々と貫いていた。

ついにマンシュタインはハースバルド家の弓騎兵の射程に捉えられたのだ。

マンシュタイン家の領地に逃げ込むまで援軍が訪れる可能性は無きに等しかった。

もっともマンシュタイン家の領地も別働隊によって武装解除されているはずだからこのオルパシアの地にマンシュタイン家の支援者は潰えていたのだが、とうのマンシュタインにそれを知るよしもない。いずれにしろ逃げ切る可能性が限りなく低くなったことは確かであった。

「ハースバルドの小娘よ、わしを手にかけることがどういうことかわかっておるか？」

進退窮まったマンシュタインはこの期に及んでルーシアを論難した。

「今はよいかも知れぬ。しかしオルパシアという国が続いていく以上、初めて根源の貴族の血を流したという汚名は未来永劫ハースバルド家についてまわるのだぞ。

そればかりではない。表面的には頭を下げたかに見える貴族たちも、心の底では貴様らを嘲笑いつか天誅を下してくれんと誓いを新たにするのであるう。死ぬまで

その恐怖に耐えて生きていくことが貴様にできるか？いや、まずもつて天寿を全うすることすら適うまいよ」

くだらない。

門閥貴族の嫉妬も憎悪も取るに足らない。

ルーシアはマンシュタインほどに貴族の力というものを評価していなかった。

それに……………。

「悪いけど女は惚れた男のためなら神にだって喧嘩を売るのはよ？」

マンシュタインが殺されなければならないのは、何も国王に謀反したからばかりではないのだ。

真人を窮地に陥れ、幾度も危機にさらしたことがルーシアにとって一番の問題だった。

あまりに想像の埒外のルーシアの発言に、マンシュタインはしばし言葉を失って呆然としていたが、理解が及ぶと同時に狂したように憤激した。

「貴様はそれでも貴族か！この売女め！恥を知れ！」

とるに足らぬ平民。

男のために貴族の誇りも名誉も捨てる女。
何たることだ。オルパシア貴族がここまで墮落していたとは！

「目を覚ませ！オルパシアの正義は我にこそある。本当の敵はそこ
におるぞ」

「往生が悪うございますぞ、公爵殿」

いつの間にか残党を掃討し終えたウーデットがそこにいた。

これを見たマンシュタインはルーシアよりは話を通じると思ったの
だろうか、明らかにホツとした様子で声を荒げる。

「貴殿は娘にどういう教育をしてきたのかね。いまだかつて一度も
血を流されたことのない根源の貴族たるわしを殺そうとするなど正
気とも思えぬ」

気の毒なものでも見るような目でウーデットは首を振った。

「それを言うなら今まで王家に叛旗を翻した根源の貴族もまた一人
もいなかった。貴殿がその一人目だ」

大貴族であるウーデットもまた自分を殺そうと考えていることにマ
ンシュタインはようやく気づいた。

これだから成り上がりの伯爵風情は……………！

「よいか、根源の貴族を殺すということは……………」

マンシュタインの舌が停止した。

正確には抜く手も見せぬウーデットの斬撃に首が落ちるまでもわず
かな時間、それと気づかずにマンシュタインはしゃべり続けていた

のだった。

「……………嫁に出る娘に余計な宿業を背負わせるわけにはいかないの
でね」

それは短い内乱の終結であると同時に、ウーデットが初めてルーシ
アの伴侶として真人を認めた記念すべき瞬間でもあった。

第六十六話

ケルドランをめぐる攻防は大陸の勢力図を完全に塗り替えたと言っている。

もともとブリストルの覇権主義に戦々恐々としていた小国の王たちは、ここが千載一遇の機会とばかりに次々とブリストル帝国に宣戦を布告したからである。

外務卿シエレンベルグが構築した対ブリストル包囲網は、オルパシア王国を中心に五つの小国から成り立っている。

ケルドランをオルパシア王国が奪取し、なおかつブリストルの野戦軍が壊滅したら、というほとんど達成不可能に思われた条件を真人が見事に達成した結果だった。

メイファン王国の滅亡以来大陸に敵無しと思われてきたブリストル帝国は、西方を除く三方向全てから強力な圧迫を受け、今や存亡の危機に立たされようとしていた。

「賢明な卿にはわかつているはずだ。我々が決してメイファンに見返りなど求めていないということが……」

そういつてフェルナンド・ロンドベル・ヴィルヌーブ卿はニコリと邪気のない笑いを浮かべた。

ブリストルきつての知将であるフェルナンドにとって目の前の男の返答は答える前から明らかだったのだ。

「そうして同胞同士を争わせようというのか？ブリストルの武も地に落ちたものだな」

軽蔑も新たに男はフェルナンドを睨む。

男にとってブリストル帝国は不倶戴天の敵であった。

何しろ彼の母国メイファンを滅ぼしたのは目の前のブリストル帝国軍なのだから。

しかしケルドランの攻防戦に大敗して兵力数に劣るブリストル帝国はロドネーやエルネスティアといった小国と、何よりマヒト・ナカオカミの率いるオルパシア王国軍を迎撃するために戦線を縮小する必要に迫られていた。

つまりメイファンの占領維持に大軍を割いている余裕はなくなったのだ。

戦わずして怨敵プリストル帝国軍はこのメイファンの地から去っていくことは確実だった。

問題は、プリストルなきこのメイファンを支配するのは誰か、ということなのである。

「……………それでは諸手をあげて歓迎なさいますか？無能な巫女姫とその夫マヒト・ナカオカミを」

憤怒の気配を隠そうともせず男はグツとのどを鳴らした。

それこそが彼をして怨敵と席を共にさせている最大の理由でもある。

メイファン滅亡後、ここメイファンの地で、友を失い、家族を犠牲にして抵抗が続けてきたのは彼とその仲間をおいて他にない。

決して何の助けにもならなかったカムナビの巫女姫や、素性の知れぬオルパシアの犬などではないのだ。

「王家が何をしてくれたのか、上流貴族が何の役に立ったのか、そ

う卿は言われた。まさにそのとおり、このメイファンを守るために彼らは何一つとして貢献していない。では巫女姫とオルパシア王国はどうなのです？彼らはメイファンの未来を託するに足る存在ですか？」

「我らはもはや王家に忠誠を誓うつもりはない」

それが男の答えだった。

男の名はバーデルベス、爵位を持たぬ下級貴族であり、メイファン滅亡後唯一国内に潜伏して対ブリストルの武装闘争を続けてきた男だった。

バーデルベスは思う。

国を滅ぼし、国を見捨てた者たちにはいかなる権利も与えられるべきではない。

いったい亡国と化したこの国で何人の民が死に、何人の民が飢え、何人の民が慟哭の涙を流したか彼らには理解できないだろう。

もしもそれが出来たなら、家財を持ち出して他国へ逃亡するような

真似ができるはずがないのだ。

さいわい王族や大領の諸侯のほとんどが命を失い、残るのは王位継承権の末席に名を連ねていただけの巫女姫のみ。

オルパシアの後ろ盾がなければ何の影響力もないただの小娘である。逆にいえば、その小娘にメイファンを託すということはオルパシアの属国としてメイファンを献上するに等しい。

長いブリストルの圧政に苦しめられてきた国民がそれを許すとも思えなかった。

フェルナンドがバーデルベスに提案して見せたのはメイファン国内におけるブリストル軍の武器、糧食、資金の大部分の無償譲渡であった。

正面からブリストルと決戦を行うだけの兵力がないバーデルベスにとってこの提案が意味するところは大きい。

下級貴族と平民を母体とするバーデルベスの組織は他国の支援を受けた上流貴族たちと違い、資金難からろくな武装も揃えられずにいたからだ。

さらなるブリストルの支援を当てに出来るならば、メイファンに新たな国家体制と軍備を敷きなおすことすら可能であるはずだった。

それだけではない、フェルナンドは王都を立ち退く際にバーデルベ

スのゲリラを見て退却する演出をして見せることすら申し出ている。解放者の実績を手中に収めるということはバーデルベスの勢力が今後メイファンを指導していくのに少なからぬ力になるだろう。

……………このメイファンを守るべきは我々なのだ。

かつての上司、あるいはそれに率いられた同胞と刃を交えることに抵抗がないわけではない。

しかし彼らにメイファンを任せては再び同じことの繰り返しになる。また危機至れば彼らは自らの生命と権力の維持を優先して容易く民を見捨てることだろう。

この国を一步も退かず見捨てなかったのは自分たちだけだ、という自負がバーデルベスにはあるのであった。

「よかろう……………我らメイファン解放同盟は卿の提案を受け入れよう。たとえそれでプリストルに対する怨念がいささかも癒えるものではないとしても」

フェルナンドは相変わらずニコリと邪気のない笑みを浮かべていた。だが、内心では声を上げて笑い出したいのをこらえることで忙しい。バーデルベスは己の正義を疑っていないのだろうが、ブリストルと裏取引した事実が明らかになれば国民の支持は根本から崩壊することは確実だった。

すなわち、目先の利益に目がくらんで決して借りを作ってはならない相手に借りを作ってしまったのだ。

その闘志と理想は敬意に値するが、一国の指導者としては政治的センスが乏しすぎる。

あの甘っちょろいマヒトとシェラが、バーデルベスにどう対するか、想像しただけでフェルナンドは歓喜が噴出すのを押さえられずにいた。

ケルドラン城塞での戦闘に勝利した真人たちに、王都でマンシユタイン公爵が討ち取られたという報せが届いたのは戦闘の終了から十

日以上経ってのことであつた。

マンシュタイン公爵領は国王の直轄領となり、溜め込んでいた代々の資産を没収したことでオルパシア王国は、苦しんでいた莫大な軍の維持費にやって一息つくことが可能となったのである。

また北部と南部に展開していたプリストル軍が自国へと撤退したことで、戦力に余剰さえ生じていた。

だからといって数万規模の遠征軍を何年も支えることは容易なことではない。

この期を逃さず戦果を拡張し、短期に決着をつけてしまふのが望ましいのは言つまでもなかつた。

近日中に援軍と輜重の補充が行われ、新たな戦場へ進発すべきことが真人への命令書には書かれていた。

すなわち、シエラとプリムの故郷であるメイファン王国を解放する時が近づいていたのである。

「残念ながらバーデルベスが指揮下に入る可能性は低いと言わざ

るをえません」

カニンガム子爵は沈痛な面持ちとともにそう告げないわけにはいかなかった。

ようやく負傷兵の後送や補充兵の再編が終わりかけた頃、衝撃の報せがメイファンから舞い込んだのだ。

バーデルベスが率いるわずか千名余のレジスタンスが、ブリストル駐留軍を打ち破り王都フォーセリオンを奪還したという報せであった。

十倍以上の兵力を誇るブリストル軍を打ち破ったという事実メイファン国民は狂喜したと言っている。

たちまちバーデルベスのもとに志願兵が集まり、兵力が一万を突破するに及んで、バーデルベスはメイファン臨時政府の樹立を宣言した。

それは紛れもなく、真人たちオルパシア王国軍への牽制であることは明白であった。

「まずいな……国民の支持があちらにある以上力押しは禍根を残すことになるぞ」

ディアナも苦い表情は隠せない。

手強い雄敵と相見えるのは戦士の誉れだが、素人同然の国民兵を相手にする後味の悪さをディアナは十分に承知していた。

勝つても負けても禄でもないことになるのは明らかだった。

「素人同然の兵があのでプリストルを破ることなどありえません。間違ひなくプリストルと裏取引をしているはず。そんな真似をして何が正義かっ！」

憤懣やるかたなく顔を真っ赤にして憤っているのはシェラの副官としてメイファン軍を統率しているハイデル中佐である。

少なくとも軍事学上の常識を知るものにとって今回のプリストル軍の敗北は演技以外の何者でもあるまい。

おそらく斥候にプリストルの陣営を偵察させれば、彼らが何ら損害を受けていないことは、すぐにでも判明するだろう。

しかもバーデルベスがシェラフィータとプリムローゼは真っ赤な偽物であると国民に宣伝していることは、二人とかけがえのない主君と仰ぐハイデルにとって

絶対に許容できないことなのだった。

「あの男は……バーデルベス少佐は王政府に欺かれ多くを失った者なのです。彼はシェラフイータ様に剣を向けるに躊躇することはないでしょう」

カニンガム子爵の声音はどこまでも苦かった。

いったい何がバーデルベスを今の立場に追い込んだのか、あの絶望的な国内戦を戦ったカニンガムは知っているのであった。

「……………訳を……………お聞かせください、カニンガム様……………」

重苦しい沈黙が支配するなか初めてシェラは口を開いた。

その瞳にはある種の決意の光がある。おそらくはその決心を固めるために今までの時間を必要としたのであろう。

カニンガムはわずかな逡巡の後に苦い記憶を紡ぎだしたのだった。

「あれは国王陛下が討ち取られ、なんとか王族を国外に退去させねばならぬと第三王子バルガルド殿下の避退作戦中のことであつたと聞きます。バーデルベスはノルダムの村に逗留中である殿下の警護を下命され、村の外周に野戦陣地を構築して警護にあたっておりましたが……追撃してきたブリストル軍と交戦するも部隊は壊滅、せめて殿下だけでも落とそうと本陣に駆けつけた彼は見てはならぬものを見たのです」

あつたはならぬことだとカニングムは思う。

貴人には貴人たるの誇りがなくては貴人ではない。

しかしそのことを自覚できぬ者のなんと多かつたことだろう。

残念ながらバルガルド殿下も他の王族たちも為政者としての資格があるとは思われなかつた。

「バルガルド殿下などおりませんでした。全ては敵を吸引するため
の罠でしかなかつたのです。殿下の代わりに座らされていたのは、
殿下に良く似た背格好の少年……バーデルベスの従兄弟であつたと
聞きます。逃亡を阻止するために両足の躰が切られておりました」

バーデルベスに深刻な怒りを燃やすハイデルでさえも、その事実

は息を吞まざるをえなかった。

もしも同じ命令を自分に出された場合、変わらぬ忠誠を抱き続けられるかは疑問だった。

「そればかりかノルダムの村民たちも一部の兵たちによって村を疎開することを禁じられておりました。王子がいる村に村民が不在であるのはおかしいという判断からです。つまり……老若男女全ての村民はバルガルド殿下のために生贄へと捧げられたのです」

因果の報いというべきだろうか。

そうまでして助かろうとしたバルガルドは国境を目の前にして入り込んだ間諜にその命を奪われている。

ノルダムに散った生命は、何もかもが無駄だったのだ。

「バーデルベスはもはや王政府の統治には従えないと判断しました。名も無き民たちを守るためには自ら統治者に成り上がるほかはないと決心したのです。もともと軍内に彼を慕う人間は数多くおりました。間違いなく彼はかつての王政府のように私欲を貪る人間ではない。ゆえにこそ、我々にとっては打倒せねばならぬ最悪の敵なのです」

バーデルベスがシェラに忠誠を誓うことはありえない。

それをするには彼の絶望は深すぎるのだ。

だからといって放置しておくわけにはいかなかった。

彼は人間の私欲を憎みすぎている。それでは統治者としていずれ国家を誤らせることは明らかだった。

何より彼には政治家としての才能が致命的といっていいほど不足していた。

対ブリストルとの闘争において、かたくなに他国からの援助を拒否し、独自路線を貫いたことがそのいい例だ。

しかもその彼がブリストルとの協定を受け入れたという事実が、彼の不転の決意を何よりも強くあらわしていた。

戦わずに済む可能性は限りなく零に近かったのである。

「少し寄り道をしていただてよろしいでしょうか、真人様」

シエラファイータの決意の瞳が揺らいでいないことにカニングムは驚きを隠せなかった。

下手をすれば罪悪感から故国への復帰をあきらめかねないのではないだろうか、とすら危惧していたのだ。

このことすらもシエラの覚悟のうちだったというのだろうか。

真人が優しくうなづくのを確認してシエラは立ち上がった。

「やはりケジメをつけなくては先に進むことは適いますまい。参りましょう、私という人間の始まりの地、カムナビの大神殿へ………」

第六十七話

神殿都市リニューボック。

メイファン王国の東南に位置するそこそはシエラとプリムの人生が始まった地でもあった。

王国の国教たるカムナビの大神殿……その地を支配する枢機卿の娘として二人は生を受けたのだ。

ものごころついたときから二人を見つめる目は冷たくあるいはいやらしい媚に満ちたものであった。

お世辞にも子供が成長するのにいい環境とは言えない場所であることは疑いない。

おそらくは戦神ストラトの神殿ですら、このカムナビ神殿ほどに腐敗はしていないに違いなかった。

そう断言できてしまうほど、神殿の腐敗は著しかったのだ。

原因はわかっている。

大国に存在するあまたの神殿の中で、カムナビの神官だけが神の力の具現である神術を行使することができないからであった。

異世界へとカムナビが放逐された以上、アヌビア世界でカムナビの力を振るうことができないのは自明の理である。

しかし救いを求める信者たちに目に見える癒しを与えることの出来ない無力な神官に対しての国民の失望は大きかった。

なんとなれば各国において神官とは、調停者であり、学者であり、技術者であり、医者であったからだ。

では役に立たなくなつた神など見限つて他の神に乗り換えればよいだろうか？

残念ながら問題はそれほど簡単なものではない。

メイファン王国の始祖はカムナビに仕えた戦士であったという。カムナビの帰還を待ち、カムナビの神座所を保つことはメイファン国王に課せられた神聖な使命であった。

だからこそ枢機卿は代々王族の一人が務めることと決められていたのである。

だが、神の力を振るうことの出来ぬ神官たちはいつしか信仰心を失い、己の利益を追求することに汲々とするようになっていった。

神殿とはいわば神の現世における代理人であり、代理すべき主権者がいないとなれば代理人が好き勝手を始めるのは、このままならぬ人の世の運命のようなものであった。

国家の精神的支柱である信仰を病んだメイファン王国がその求心力を失っていくのを避けることは、もはや誰にもできぬ相談であったのだ。

本来アヌビア世界における六大国の一員であったメイファン王国が大国の地位を失い、残された五国が五大国と呼ばれるようになったのは今から七百年ほど前のことであったという。

もはや坂道を転がる石のようにメイファンの転落は止まらなかった。

信仰という足枷がはずれたことで商業主義が発達し、一時はメイファンの首都バルバリアはアヌビアでもっとも華やかな都とさえ言われた。

その半面、拝金主義が横行し、貴族と官僚は腐敗して膨大な数の下層民を生み出してもいたのである。

あまりにひどい貧富の格差は国民の国家への信頼を決定的に失わせた。

それを止めるべき神殿も王家も、止めるどころか率先して蓄財にあ

たっていたと言う。

シエラがメイファンは国家としての命数を使い果たしたと言ったのは決して誇張な表現ではない。

メイファン王国はまさに命数を使い果たし、滅ぶべくして滅んだのであった。

「……………まさかここまで破壊されているとは思いませんでした……………」

原型をとどめないまでに破壊されつくした瓦礫の山。

いまだそこかしこに横たわる誰とも知れぬ白骨とさび付いた矢の数々が、当時のものものしい雰囲気を与えている。

シエラは自らの声がひび割れていることを自覚した。

決して楽しい思い出の多い故郷ではなかったが、やはり生まれ育った故郷は心の中に大きな比重を占めていたらしかった。

おそらくは火をかけられたのである。う煤と瓦礫の山と化した故郷を見るのは、思っていた以上にシエラとプリムに精神的負担を強いていた。

「……………おのれ……………ブリストルめっ！なんという非道な……………」

憤りを露わに副官のハイデルが吐き捨てる。

壁面を焦がす爪あとの大きさは、それが単なる炎ではなく、高度な

破壊神術の成果であることを告げていた。

戦神ストラトの直接的なライバルであるカムナビは、ストラト神の信者にとってもとうてい見過ごすことはできない存在であったのだ。これほど執拗に破壊しなくてはならなかったところに、真人は憎悪よりもむしろ恐怖を感じ取っていた。

「おうち……………なくなっちゃったね……………」

力なくプリムが瞳を向けた先では、かつては瀟洒であったはずの屋敷の焼け跡が広がっている。

旧アウストリア侯爵邸の無惨な姿がそこにあった。

あの日、蒼白になった父に痛いほど手を引かれて出入りの商人のもとへ連れて行かれたことが、まるで昨日のことのようにシエラファイターの脳裏に去来した。

思えばいつも無口ではあるが優しかった父の初めて見せる鬼気迫る表情だった。

「私たちはいったいどうすればよいのですか？」

「……………オルパシア王国へ向かうよう手はずは出来ている。かの国に着いたならば身分を明かして保護を求めよ。なんとしても王家の血筋だけは守らなくてはならんだ！」

父の双眸に狂気の色が宿っているのに気づいたシエラは、両手に力をこめてプリムを抱きしめるのが精一杯であった。

シエラとプリムが、メイファン復興の旗頭として立つことを忌避し

ていた理由の根源がここにある。

確かに侯爵は娘を愛してはいただろう。そして無事メイファンを生きて脱出させたいとも思っていたに違いない。

だが、それ以上に王家の血筋のほうに彼にとってかけがえのない何かであつたのだ。

たとえシエラとプリムが奴隷として慰みものにされたとしても、その結果子を生み血筋さえ残せればそれでも構わないというような狂気を二人は無意識のうちに感じ取っていた。

形骸化し、なんら国民の役に立つことのできぬ王家の血に家族以上の崇敬を抱くことなど二人には不可能である。

だから呪つた。

自らのうちを流れる王族の血を。

そして真人に救われて、王族でも巫女でもなく、ただのシエラフィータとプリムローゼになつて新たな家族を得たと信じた。

運命の変転はシエラとプリムを一市井にしてはおかなかつたが、個人としてのシエラとプリムの帰るべき場所は王国でもなく神殿でもなく真人の傍以外にはありえなかつた。

だが今はその王族の血に用がある。

他の誰でもない真人のために、シエラたちには王族の血が必要なのだつた。

「……………神殿は破壊されたようですがあれはただの形式にすぎません。本当にカムナビ教徒にとって大切な場所は別にあります」

代々の巫女のみ伝えられてきた口伝。

表向きの枢要部は神殿の奥にそびえていたカムナビ大神像だが、本当に大切な聖地は実は神殿から離れた巨石群にこそあると口伝は伝えていた。

ただ巨大なだけの石に神官たちはなんらの価値も認めていなかったが、その実、代々の巫女の交代は巨石の神座でなされてきたのである。

「磐座……………か！」

巨石が一定の規則によって配列されたその姿に真人は驚きを隠せなかった。

かつてカムナビの力の源となり、各地で千年以上が経過した後になってもパワースポットとして機能した神に対するエネルギープラン

ト。
真人にとって最後の土地となった黒又山にもそれが静かに鎮座していたのを真人は鮮明に覚えていた。

……………もともとアヌビア由来のものだったのか……………！

カムナビが主に東北地方に張り巡らせた磐座の総数はおよそ百に届こうとしていたという。

現代においても、少なくとも十以上が稼動した状態にあつたはずだ。だがさすがに目の前の巨岩を超える磐座はひとつも存在しない。

重さ百トンを超えて超えるであろう巨岩が、餅のように重ねられた光景は人智を超えた存在を想像させるに十分だった。

「……………これから先は私とプリムだけで参ります。真人様たちはここでお待ちを」

磐座に刻まれた階段に足をかけながらシエラは真人を振り返った。うまく笑えたものか自信はないが、胸に秘めた決意はいささかも揺るがない。

もはや不信感と無力感に支配されていた過去の自分とは違うのだ。カムナビが再臨した今、どれだけ望んでも得られなかった真人と真人を取り巻く人々を守るだけの力が、自分の手中に得られるはずなのだから。

ケルドランの攻防戦で最前線に立っていたシエラにはわかつている。ストラトの神官たちは真人の魔術を封印する術を心得ていた。

人の力ではなく、戦神ストラトの神の力だけが真人の力を封じることができるとの証であった。

その結果としての真人の苦戦を、シエラは苦い思いとともに見守ることしかできなかった。

シエラにはディアナのような武力も統率力もなかったからだ。

しかし神の力に対抗するには神の力がもつとも有効だということは、長い大陸の歴史が証明していることでもあった。

すなわち、カムナビの巫女たる自分とプリムが本来の力を発揮することが出来たならば、ストラト神官の術力を最小限に抑えることが可能なはずであった。

「……………行きますよ、プリム」

「はい、姉さま」

真人を守るために戦う力が必要なら、ためらうことは何もない。

たとえそれが目を背けたくなくなるような過去の思い出の向こうにあるのだとしても、戦えずに見守るしかない苦痛に比べれば何ほどのこともないのだから。

磐座の上は清浄な空気に満ちていた。

地上からおよそ10メートル以上も離れたそこは、千年の無為に耐え、神域としての役割を果たし続けていたのであった。

かつてここで、先代の巫女から受け継いだ祝詞をシエラは高らかに謳いあげた。

「我らが神、我らが父カムナビ様に汝が巫女、シエラファイター・ラルフ・グランデル・アウストリア同じくプリムローゼ・ラルフ・グランデル・アウストリアが謹みて言上奉る。

両名を汝が巫女として信仰を捧げることをお許し願えるならば、どうかこの磐座で験を刻み、もって巫女の承継の儀と成したく願ひ奉り申し上げる」

かつて代々の巫女たちはカムナビの手によりじきじきに験を与えられたという。

しかしこの千年の間、巫女の前にカムナビが現れたことはない。

真人の言葉がなければ、シエラも異世界に消えた神に救いを求めようなどとは考えもしなかったであろう。

だが、シエラもプリムもほんの一片も真人を疑うつもりはなかった。

「……………久しいな、我が巫女よ」

遠い時の彼方に失われたはずの愛神カムナビが千年ぶりに地上へと降臨したのはそのときであった。

信じてはいた。

しかし現実に神を目の当たりにするとごく自然に畏敬と歡喜が胸に湧き上がるのを抑えることができない。

目も眩まんばかりの美貌、涼やかな董色の瞳。

ただそこに立っているだけで平伏してしまいたくなる人外の威風。取り戻した。

今こそメイファンは国の魂を取り戻したのだ。

「祝福を与えよう。親愛なる我が娘が決して愛しい男を失わぬように」

シエラとプリムの額にカムナビの指先が押し当てられた。

身体の隅々にまで清冽な神気に満ちた力が行き渡っていくのをシエラとプリムは自覚し、そして確信した。

おそらくはこれまで決して発現することのなかった神術が自分たちに行使できるようになったことを。

「長らく世界を留守にしていたことを詫びよう。だが人を救えるのは神ではない。いつの世も人を救うのは人なのだ。お前たちならそれがわかっていよう」

シエラとプリムは頷いた。
二人を救ったのは神ではなく、間違いなく真人という一人の人間であつたのだから。

「神にすぐることは容易い。だが、本当に強い人の意思はときとして神をも超える。余は誰よりもよくそのことを知っている……………」

カムナビは念願の力を手に入れたシエラとプリムに忠告しているのであつた。

神の力に頼つてばかりでは結局そこで人の進歩は止まってしまふ。

人は神に祈るだけの人形であつてはならないのだ。

千年のときを超えて神の帰還を知つた国民が、いたずらに神の力に頼り欲望を充足させようとしないためにはシエラとプリムのリーダーシップが絶対に必要であつた。

「幸せとは神に与えられるものではありません……………神の力は、勝ち取つた幸せを守るためにこそあるのです……………」

カムナビに言われるまでもなくシエラたちにはわかっている。

努力もせずに与えられただけの幸せに価値などない。

しかしようやく勝ち取つた幸せが理不尽な暴力に奪われたりしないためには、やはり明確な力が必要なのだつた。

「かしこきかな我が娘たちよ。ここに約定は果たされた」

長く断絶していた神と巫女の契約は、ここに完全な復活を見たのである。

第六十八話

敗残のプリストル兵がコラウル山脈を越えてプリストリル本国へと辿り着いたのは、ケルドランの敗北からおよそ二週間後のことであった。

方向感覚を狂わされる森の中で、組織から孤立した兵士たちはそのほとんどが山中内で餓死に至っている。

マツセナ川の激流に飲み込まれた者五千名、オルパシア王国兵との戦いで戦死した者一万名、敗戦の当初まだ半数の一万五千名以上がプリストル軍には健在だった。

だがその後の餓死者行方不明者一万……結局生きて戻れた兵は二割にも満たぬものとなった。

鍛え上げられた精鋭で、なおかつ指揮官のよろしきを得た部隊だけが絶望的な退却戦を戦い抜くことができる、否、そうでなくして退却戦を生き残ることなど出来はしないのだ。

「……………まったく……………ひどい有様だな……………」

部下の前では決して見せられぬ言いようのない虚無感がアウフレーベを襲っていた。

退却戦の開始時には五千を数えたはずの部隊であったが、今は半分以上近い兵士を失ってしまった。

副官などはアウフレーベの手腕あらばこそこれだけの兵士を救うことが出来たのだと言うが、その言葉はアウフレーベをいささかも慰めはしなかった。

おそらく、退却戦の非情さは経験したものにしか理解できまい。

プリストルの誇る十二将軍の中でも本格的な退却戦を行ったものが

はたして何人いることか。

退却戦の最中にどちらを選択しても犠牲なしにはいくぬ究極の選択を幾度もアウフレーベは断腸の思いで下してきたのである。

退却戦の本質は味方の効率的な切捨てだ。

どんな美辞麗句で装飾しようとも、一言で本質を表そうとすればそうなる。

殿軍は味方を逃がすためにたとえ勝ち目がなかるうとも死ぬまで戦い続けなくてはならないし、補給のまったく見込めない山岳を退却する場合に負傷兵の完全な介護など絵空事に過ぎる。

体力の尽きたものは打ち捨て、見捨てて黙々と行軍を維持することだけが結果的により多くの将兵を救うのであった。

だからといって用兵家としてかくも無為な死を兵に強制することに心が痛まぬはずがなかった。

できるものなら兵士たちを残らず故国へ連れて帰りたかった。

それが不可能な夢想なのだとわかっていても。

「……………力が……………力が欲しい」

片足を失って軍列に見捨てられた男はアウフレーベが指揮する兵士の中でも古参に位置する男だった。

勇猛かつ沈着でいずれただの兵士ではなく小隊長くらいは任せられるものと思っていた。

基礎体力がまだ足りないためにうずくまって置き去りにされた兵士がいた。

彼は新兵としてアウフレーベの部隊に配属になったことをことのほか喜んでいたはずであった。

なぜならアウフレーベの指揮下は生還確率が高いことで知られていたからだ。

オルパシア軍の猛攻の前に身動きのできぬほど重傷を負った患者たちがいいた。

降伏が認められるなら彼らが命を捨つこともあるかもしれない。

しかし治療するものがいなくなつた急ごしらえの野戦病院で、彼らがいっただい何日生きながらえることができるかは誰よりもアフウレーベがよく知っていた。

誰も助けられなかった。

大を救うために数え切れぬ小を見捨てて自分は生き延びたのだ。

だからこそ、あのマヒト・ナカオカミに一矢を報いなければアフウレーベの扱つてた誇りが許されようはずもなかった。

「この借りは……必ず返す！プリストルの民を預かる將軍として、マヒト・ナカオカミ……貴様を生かしておくわけにはいかぬ……」

アフウレーベは個人として真人に含むものは何もない。

いや、ケルドランで命を助けられたときに抱いたほのかな慕情は今も変わらず胸のなかにある。

しかし一人の女性として振舞うにはアフウレーベはあまりにも責任感が強すぎた。

自分が身も心もプリストル軍に捧げつくすことに、アフウレーベはいささかの後悔も感じなかつたのである。

同じ頃、アフウレーベと同様に抑えきれぬ激情に身を悶えさせていたものがある。

再び真人の前に敗北を喫したフィリオであった。

傭兵らしいしぶとさでケルドランを無事脱出したものの、時を追う

ごとにごみあげてくる呪いにも似た無念は隠すべくもなくフィリオの胸を締め付けていた。

ブリストルでも指折りの六人が総がかりで真人一人に勝てなかったという事実は、フィリオの誇りをいたく傷つけていたのだ。

もしも自分と真人の立場を逆にすれば寸暇を置かずに殺されていたことは明らかだった。

「いつたいオレと奴のどこが違う？経験か？才能か？同じ人間じゃねえか！」

にもかかわらずあまりに圧倒的なその戦力差。

真人の見せた強さの前にフィリオ自身の武が挑める日ははるかに遠い。

それがどうしても許せなかった。

戦場に身を置いて十五年、ひたすらに強さだけを追い求めてきた。

あんな小僧に才能だけで超えられるほどフィリオのくぐり抜けてきた死線は安くはない。

友も女も捨てた。

ただ強くなるためだけに。

「負けるわけにはいかねえ……たとえどんな理由があったとしても……たとえどんな手をつかったとしても！」

フィリオが強さを欲する執念はすでに妄念の域に達しようとしていた。

真人とフィリオの間にある絶望的な戦力さがフィリオをそうさせずには置かなかつたのだ。

もはやそこに純粋な戦士としてのフィリオはいない。

狂える獣が低くうめく声が、聞くもののない夜空へと吸い込まれていった。

リユーボツクを進發したオルパシア・メイファン連合軍は、メイファンの国土を北西へ順調な進軍を続けていた。カニンガム子爵の軍を加えた連合軍は補充の兵を加えて総数二万を維持している。

わずか千名程度のレジスタンスにすぎなかったバーデルベスが正面から相手のできる兵力ではありえなかった。

バーデルベスの率いる新政権軍はろくな訓練を受けていない民兵まで含めてもようやく二万を超える程度であり、とうてい野戦に打つて出る力はなかったのである。

彼が王都に拠つて籠城を選択するのは当然の理の歸結であつた。

だが兵力的には圧倒的に劣勢のバーデルベスにも王都の民の支持という一点においては連合軍を遙かに上回っていた。

やはり国民の旧支配者への不信はもはや抜き差しならぬものにまでなつていたのである。

かろつじてオルパシア国境に近い辺境部はまだシエラたちを歓迎していたが、王都が近づくとつれて民衆の連合軍を見る目が険しくなつてきているのは誰の目にも明らかであつた。

現実には違つにせよ、シエラとプリムが客觀的にオルパシアの傀儡に見えてしまうのはある程度やむを得ないところなのだ。

オルパシアの貴族である真人が夫となることが決まっている現状では特にそうだつた。

これまでブリストルの意のままにされてきたところに、またぞろオルパシアの軍兵に蹂躪されるなどメイファンの国民にとっては悪夢

でしかあるまい。

「いやな雲行きだえねえ……………」

こうした民衆の動向にはやはりディアナがもつとも敏感であった。民衆を味方につけた軍というものは情報や補給で相手より遙かに優位に立つことを、戦巧者なディアナは経験から良く知っていたのである。

ディアナの見るところ、メイファン民衆の支持はおよそ七割方がバーデルベスに流れている。

今黙って連合軍を見守っている民も、連合軍の武力が恐ろしいからこそ沈黙しているのであって心の中ではメイファンにようやく訪れた平和を乱す邪魔者として蛇蝎のごとく内心では忌み嫌っていることだろう。

そうした民と争えばたとえ勝ったとしても巨大な損害と労力を必要とすることは歴史が証明していた。

この先、王都に近づけば近づくほどさらに明瞭な敵意にさらされることは確実だ。

そればかりではない。

おそらくここにいる民の幾人かはバーデルベスに通じて連合軍の陣容を探っているはずだった。

機会さえあるならばシエラとプリムの暗殺すら狙っているかもしれない。

「……………メイファンの王族たちの所業を思えば民の反応は当然のものです。私たちはかつての王族と同列に扱われるためにここまで戦ってきたわけではありません」

胸を疼かせる美声でありながらかつ支配者としての威厳に満ちた声

が聞こえた。

つい先ごろまでほんの餓鬼にすぎなかった恋敵の成長にディアナは口の端をゆがめて苦笑した。

…………… ホント、化けたもんだよ……………。

今や女王たる風格に満ち、メイファン残党軍の忠誠を一身に浴びるシエラファイタの姿がそこにあった。

生まれて初めて戦場に立った新兵が、一つの戦いを機会にまるで古参の下士官のように老成した成長を遂げることが稀にある。

死線をくぐり抜けるギリギリの緊張感が、秘められた才能を強制的に開花させるこの現象をディアナは数多く目にしていた。

それにしても今のシエラほどの成長は記憶にない。

並び立とうとする真人の非常さがまるでシエラにまで乗り移ったかのようにあった。

「この戦いはメイファンの新たな指導者を決めるためのもの、そこに旧支配者のである幕はありません。もちろん……………」

そこで言葉を区切ってシエラは笑った。

凄絶な迫力を感じさせる女の笑いだった。

「私の夫に負けをつけさせるわけには参りませんけど」

シエラにとってメイファン最後の王族として不本意ながら名乗りをあげたのは真人の力になりたかったからにほかならない。

巫女としての崇敬も王族としての忠誠もシエラにとってはそれほど価値のあるものではない。

真人の傍にい続けること、愛する真人の力になることこそがシエラにとって至高の幸福なのであった。

だからこそ、バーデルベスの理想と高潔さに共感を覚えながらも容赦するつもりは微塵もなかった。

できればメイファンのためにも手を携えたい。

しかしそれが叶わぬならば完膚なきまでに粉碎して勝利の凱歌をあげるまでのことだ。

シエラのそうした思い切りをディアナは正しく受け取った。

それでこそ、だ。

いずれ追いつき追い越すとはいえ、自分に先んじて真人の妻の座を射止めた女だ。

せめて真人への想いが自分に負けぬものであることを証明してもらわねばとうてい納得できるものではない。

もちろん真人へを一番に想っているのは自分に決まっているのだが。

「本命のプリストルを前に無様を晒すんじゃないよ？」

シエラはディアナの挑発を傲然と受け止めて言った。

「もちろんですわ。だからディアナさんの出番はございませんのよ、お気の毒ですけれど」

言外にこめられた意志を正しく受け取ってディアナのこめかみに青筋が浮かぶ。

いい度胸じゃないか、この闘神ディアナに喧嘩を売ろうつてんだね？

「真打ちは最後に登場して観客をさらっていくもんさ。前座がいい気になるのは見苦しいよ？」

「私たちの中ではディアナさんが一番最初に登場したように思いますが、」

最も触れられたくない年齢を引き合いに出されてディアナは我を忘れて赫怒した。

「本当に嫌な性格になったな！お前っ！」

第六十九話

メイファン・オルパシア連合軍がメイファン王都バルバリアへと達するのにはさらに一週間近い時間を必要とした。

周辺住民のサボタージユが活発化してきたためである。

二万という大軍を擁する連合軍にとって、非協力的な住民のもとの補給活動ほど労力の大きいものはない。

決して戦力的なダメージを受けたわけではないが、連合軍は物心両面から少なからぬ疲弊を余儀なくされていたのであった。

「全く……厄介なもんだよ……」

ディアナとしてはため息をつくより他はない。

出来ることならこんな土地は投げ出して、直接的な敵であるブリストールとの対決に備えたいところだ。

もちろんメイファンを再興するという政治的効果や、その後の戦力化を考えた場合、今メイファンを手中に置くという方針は変えられないのだが、

こうした国民全体を敵とするような戦はディアナのもっとも嫌うところなのだった。

おそらく戦って勝つことは難しくないだろう。

メイファン兵は自他ともに認める弱兵であり、バルバリアはケルドランほどに難攻不落の要塞と化しているわけではない。

城門を打ち破ればそれだけで決着がついてしまうこともありうる。

だがその後が問題であった。

バーデルバス率いるメイファン共和国軍は、数を大きく膨れ上がらせたとはいえ本質的には不正規兵の集まりである。

つまり戦いは王都を占領してからが本番になるのは明らかだ。

しかも不正規兵を相手にする場合に誤って無実の民を殺害してしまうという事件を確率的になくすことは不可能だった。

それによってメイファン国民の対オルパシア感情はさらに悪化することであろう。

泥沼の消耗が連合軍を待ち受けているといっても過言ではない。

シエラフィータという切り札が効果を発揮することなくば十中八九そうなる、と言ってもよかった。

「やはり……………失った信頼というものを取り戻すのは難しいですね……………」

顔色ひとつ変えてはいないが、ディアナにはシエラがひどく落ち込んでいることがわかっていた。

この娘にしては甘いことだが、どうやらいまだにバーデルベスと和解することをあきらめきれずにいるらしかった。

「人は誰にも譲れないものがあるのさ」

そう、自分たちが決して真人を譲れないのと同じように……………。

わかっている。

バーデルベスの不信を解くにはシエラではあまりに実績が無さ過ぎるのだ。

これがカニンガムのようにプリストルとの抗戦やそれ以前からの国政に対する姿勢などが明らかであればまだ交渉の余地はあったかもしれない。

しかしシエラには奴隷の身分に落ちながら真人によって救出され、オルパシア王国貴族の重鎮となった真人の伴侶となった以外にこれといった事跡がなかった。

先だつてのケルドランの戦いではメイファンの指揮官として非凡な輝きを見せはしたが、それは真人が放つ圧倒的な輝きの前には真昼の月よりもはかない輝きに過ぎなかった。

バーデルベスにとってシエラはいまだに真人に踊らされているだけの傀儡の小娘に過ぎないのだ。

だが、だからといって簡単にあきらめてしまうには大きすぎる覚悟をシエラは必要としていた。

実のところ現在の戦局を一変させてしまう切り札がシエラにはある。

しかしそれを使ってしまつてはシエラはもはや今までのシエラに戻れぬ可能性が高かった。

それほどにこの切り札は諸刃の刃のような危険性に満ちたものであったのだ。

シエラにとっても、国民にとっても。

志は同じだというのに、ままならぬもの

民を守れぬ王に王たる資格はない。

また民を犠牲に自らの利益を図った為政者には罰が必要だ。

そういうバーデルベスの主張にシエラも特に否やはない。

シエラも、今後旧貴族がいくら擦り寄ってこようとも、かつてと同じ権利を決して認めるつもりはなかった。

貴族の数が激減した今、メイファン王国は王と官僚を中心とした中央集権国家に生まれ変わるべきなのである。

当然王として君臨するのは夫たる真人でなくてはならなかった。

これは戦後、オルパシア王国があまりに大きな力を得て周辺各国に強圧的な態度をとらぬようするための手段として絶対に必要な条件だったのだ。

メイファン王国の解放と、ブリストル帝国の滅亡。

この大陸の歴史を揺るがす大事が二つながらオルパシア王国によって達成されたということになれば、オルパシア王国は大陸で唯一の超大国になることが可能だ。

少なくとも五大国のひとつであるプリストル帝国を併呑すればそうなる可能性は高かった。

だが、その功績の大部分をメイファン国王たる中御神真人が担っていたということになれば現実が変わる。

プリストルの分割にメイファンが介入することでメイファン王国は新たな五大国のひとつとして再起し、大陸に新たな秩序が誕生することになるだろう。

それもこれも真人の絶対的な武がなくしては成立するはずのない空想であった。

バーデルベスを首班とするのは戦後政治を見据えたうえで決して認めることの出来ぬものなのだ。

それでなくともバーデルベスには国を動かす政治力がない。

清廉さと人望だけで国の首班となることは、それだけで国を危うくする悪となることをシエラはよく知っていた。

なんとなればシエラの父も枢機卿として人望にだけは厚い男であったからだ。

指導者としては無能のそしりを免れぬものであったが。

「現実と理想が対立するときは必ず現実を選択しなくてはならない。理想を語るものは現実と理想が対立しなただけの強さを持たなくてはならない……。そうでしたわね、お父様」

在りし日父が哀しそうにそう呟いていたのを、シエラは深い哀しみとともに受け止めていた。

シエラは真人に生きる、ということを強要している。

いつ死んでもよいというかつての真人の生き方は、尊いように見えるが実は死んだ後の問題を放棄している。

生きているということとはただそれだけで尊いのだ。

しかし生きるために力と犠牲が必要なことも、この悪しき世界の真実というものであった。

「異国の兵たちに屈するな！メイファンの誇りは決してオルパシアの下に着くことを認めぬ！」

バーデルベスの熱弁に王都の民は歓声をあげていた。

やはりあのブリストル軍を追い払ったという実績が、バーデルベスを大きく後押ししていたのである。

さらに食料や武具が極秘裏にブリストルから無償供与されているという事実も見逃せない。

それなくして二万に膨れ上がった共和国兵をこうして戦力化することとは不可能であっただろう。

だからといって簡単に連合軍に勝利できるなどとはバーデルベスも考えてはいなかった。

おそらく戦いが始まれば早々に城壁は突破され、市街戦となることは目に見えている。

だがオルパシアという新たな敵を迎えた今、王都の民もメイファンという国を守るためにむしろ率先して戦うべきだ。

バーデルベスは自らの正義を全ての民が進んで受け入れてくれることを露ほどにも疑っていなかった。

「閣下、市街での遊撃部隊、全て配置に着きましてございます」

「うむ」

バーデルベスは市街戦に引きずりこんだ連合軍を王都の各所で同時に火を放つことにより殲滅するつもりでいた。

そのための民の避退はすでに完了している。

戦場区画から遠ざけるといふ布告によって王都の民は中心から東よりの区画に集められていたのであった。

オルパシア王国にとっての主敵は間違いなくブリストル帝国である。

ここで甚大な損害を蒙れば本来の主敵であるブリストルとの戦いに備えてメイファンへの介入をあきらめる可能性は高い。

バーデルベスは味方の損害に構わず連合軍に出血を強要するのに躊躇するつもりはなかった。

「さあこい、愚かな王族の末裔よ。世界は貴様の思うようにはいかぬということを書いて知らせる！」

メイファンを食い物にしながら、あっさりと民と国を見捨てた王族。

血の涙に明け暮れる民を見殺しにした愚かで無力な巫女。

いずれにしてもこメイファンの統治者には相応しくない。

誓って奴らは民の総意によって打ち倒されるべきなのだ。

「さて、どうする真人？真人が魔術で城門吹き飛ばせば勝つのは難しくないと思っけどね」

意地の悪い質問だ、と真人は思う。勝つのは難しくはないだろうが、ただ勝つだけでよいなら誰も苦勞はしない。

「それで勝つのにどれほどの犠牲が必要ですか？」

ディアナは真人が事態を正しく洞察していることを理解して相好を崩した。

「まあ、少なくとも五千は持って行かれるだろうね」

そしてバリバリアの民の損害は老若男女を含め数万に達するであろう。

それはメイファン全土の国民を敵に回すことと同義であった。

今後ブリストルとの決戦を控えた連合軍が許容してよい損害ではないのは明らかである。

つまり現時点での正面決戦は下策であるということだ。

不正規戦でしかまともに戦えないような敵を相手にするにはやはり
攻囲持久戦を戦うのが合理的というものであった。

「……………今、ムダに時を過ごす余裕はありません。今こそカム
ナビの巫女としての勤めを果たすことにいたしましょう」

悲壮なほどの決意とともに、薄絹であつらえた巫女装束に身を固め
たシエラフィータが進み出たのはそのときだった。

シエラがいったい何を決意しているのかということ、ただ真人だ
けが熟知していた。

「……………シエラ……………人以上のものになるためには決意以上の何か
がある。君にそれはあるのかい？」

人外の武力を手にした真人にはわかっていた。

なんの犠牲もなしに力が手に入ることはない。そして手に入れた力はただそこにあるだけで持ち主に負担を強いるのだ。

覚悟だけでは足りない。力に押しつぶされることなく生きていくためには絶対に覚悟以上の何かが必要だった。

「不安がないわけではありません……それでまきつと後悔はしないと信じています。真人様と共にあるためですもの」

人以上の何かとなって真人を守る一翼となる。

大きすぎるその力が負担になったとしてもそれを喜びこそすれ厭うことはありえない。

今シエラに必要なのは、その負担に負けないだけの覚悟を固めることだけなのだった。

「プリムだってお姉ちゃんを助けるもん！」

もう一人の巫女たるプリムも姉の決意を本能的に感じ取っていた。

姉はメイファンの指導者以上の何かになることを決意したのだということを。

「言祝ぎ」

両軍の戦意が渦巻くバルバリアの上空に、七色の輝きとともに天上の美神が降臨した。

「長らく苦勞をかけたな、わが民よ」

寂として言葉もない。

王城のそこかしこにレリーフとして刻まれたままの見慣れた姿がそこにあつた。

それはメイファンの守護神カムナビの姿にほかならなかつた。

「異世界へ追放されてよりこの永きときを見守ることができなかつたことをここに詫びよう。しかし、余は再びこのアヌビアへ、わが子らのもとへと帰還を果たした。

余の加護はカムナビの巫女の名の下に、あまねくこのメイファンの民へ与えられるだろう」

大陸で唯一守護神の加護がないという汚名はもはや過去のものであつた。

そうと気づいた瞬間、民たちの間で歓呼が爆発した。

信仰心の薄いメイファン国民だからこそ、心の奥では確かな信仰のよりどころを求めていたのだ。

「カムナビ様万歳！」

「巫女様に祝福あれ！」

「神を取り戻したメイファンに栄光あれ！」

「静まらぬか！　いつたい神が何をしてくれた！？」

そう叫んでバーデルベスは怒りに任せて抜刀した。

大事なときに不在であった神が今さらノコノコと現れて支配者を気どるなどとうてい許せるものではない。

ましてその巫女があの特徴に足らぬ無能な小娘だなどと。

「この戯言をこれ以上聞かせるな。齒向かうものは切り捨てて構わぬ」

バーデルベスには自信がある。

自分ほどこの国を思っているものはいない。

自分ほどこの国のために私を捨てているものはいない。

旧支配者のように薄汚れた存在は、新たな美しいメイファンの地には必要のないものだ。

愚かな民よ、なぜこんな簡単なことがわからぬのか。

ごくわずかなバーデルベスの腹心が、主の言葉を実行しようとしたが、大多数の部下たちは逆にそれを阻み拘束していった。

彼らにとって本当に大事なことは、メイファンを救うことのできるより大きな現実的な保障なのであった。

「しかし心せよわが子らよ。神の力は人を決して救わぬ。ただ癒し、守るのみ」

神に全てを委ねた人間に未来はない。

人を幸せにすることは人にしか出来ないのである。

そうでなくして人が生きている意味があるつか。

「詭弁を弄する愚かな神よ！ならば私がこのメイファンを救ってくれる！」

バーデルベスは絶叫した。

現実の前に神の力は無力である。

やはりこのメイファンを救うためには自分の力こそが必要なのだ。

しかしバーデルベスの決意はいかなる感銘も民のなかに呼び起こしはしなかった。

彼らにとってようやく得られた神の加護を貶めるバーデルベスの言はずでに容認しがたいものになるうとしていたのであった。

そうした不満を敏感に察したのは遅れてバーデルベスに組した義勇

兵の一団だった。

「流神の輩を討ち取ってカムナビ様をお迎えするのだ！」

ある男の叫びとともに、二万名近くにまで膨れ上がった共和国軍の
実に九割以上が一斉にバーデルベスへと刃を向けた。

「目を覚ませ！またあの悲劇を繰り返したいのか！」

王族や貴族たちは必ずや善良な民を己の欲望のために貪る。

それを防ぐには民たちを代表する無私な指導者が必要不可欠ではな
いか。

これほどの自明の理がなぜ理解してもらえぬのか。

「何故だ！！」

悲痛な叫びが数百を超える軍兵の波に飲みこまれるまでに、そう時間がかからなかった。

「民にとって正しいか正しくないか、はそれほど大事なことはないのです……………」

そう呟くシエラの声は哀惜に満ちていた。

カムナビの言葉を伝えたときからこうなることはわかっていた。

清廉なバーデルベスの主張は、その清廉さゆえに民に裏切られるであらうということとは。

神に対する民の期待は過大に過ぎる。

エスカレーターする欲求にシエラが応えられなかったとき、民は容易く手のひらを返すであろう。

それがわかっているだけにシエラはカムナビの巫女としての責務の困難さを思わぬわけにはいかなかった。

「人には人を救う力がある。オレがシエラに救ってもらったように……それを信じよう」

……確かに困難な責務かもしれないが、自分にはかくも心強い味方がいる。

真人もプリムもディアナも、それは神よりもはるかに心強い存在なのは間違いなかった。

優しく真人に肩を抱かれたシエラは幸せそうに微笑んで真人の広い胸へ頬を摺り寄せた。

「そんなこと……真人様に初めてあったあの瞬間から信じていま

१
.....
[

第七十話

いかにオルパシア・メイファン連合軍が行動を急いだにせよ、メイファン王国の解放が軍の歩みを拘束することは避けられなかった。

王都バルバリアを解放しただけではメイファン王国を掌握したことにはならないのだ。

なによりプリストルの荒政はメイファンの地方行政組織を根幹から失わせようとしていただけに、困窮した外縁部の領民を救済し新たな行政機構がその場のしぎであつても

稼動するまではとうてい軍を動かすことはかなわないのであつた。

軍というものはただ移動するだけで領民に負担を強いるものだからである。

「それで、どう出るのかね敵さんは……………」

ディアナはケルドランで疲弊した傭兵部隊を再編し、新兵を合わせた教練に余念がない。

自国領内を決戦の場としたブリストル軍の強さは、これまでの数倍を優に上回ることは確実であった。

ただでさえ強兵をもってなるブリストル軍が地の利を得て、同胞を守るという士気に燃えれば苦戦はさすがのディアナをもってしても免れない。

それだけでなくもディアナと真人が率いる兵数は決して多勢というわけではないのだ。

しかし全く悪いことばかりではない。

北から南から同盟軍がブリストルに迫りつつあるからある程度はブリストル軍も疲弊を余儀なくされるであろうし、シエラのもとに降った共和国軍を戦力化する猶予も

与えられるからだ。

それに連戦で疲労した軍を休ませるにはちょうどいい機会であるとも言えた。

「ま、お嬢ちゃんはいせいで苦勞するがいいぞ」

つかの間の平和は兵は英気を養うには十分だが、そうした休養とは正反対の立場にシエラがいることをディアナは正確に承知していた。

「……………もう一度言ってみなさい」

凍気が室温を五度は引き下げたかに思われた。

いや、気配に敏感な者ならあまりの冷気に凍えそうなほどの震えを感じたであろう。

しかし残念なことにシエラの目前にいる男はそうした察知力をどこかに置き忘れてきたかのようであった。

「殿下が戦場に立つなどあってはならぬことですぞ！もはやメイファンの王家の血脈はシェラフィータ殿下とプリムローゼ殿下しか残されておらぬのです！」

いや、そもそもわがメイファンの血脈にどこの馬の骨とも知れぬ男を入れること事態が……………」

「ならばお前が戦ってメイファンの優位性を証明してみせなさい。もちろん最前線で」

メイファンという国家が仮にとはいえ自らの手に主権を取り戻したことで、諸外国や辺境に身を潜めていた貴族たちがこのところ大挙して帰国しつつあった。

さすがに王族が発見されたという報告はないが、もしも王族の生き残りがいたとすればそれはメイファンの勢力圏に深刻な影を投げかけたであろう。

目の前の男もそうした貴族の一人でステーリア伯爵という。

親戚筋の商家に匿われていたらしく、偶然にも貴族狩りの追っ手にかからずに住んだのだ。

なんらメイファンの解放に功績のない彼らが異口同音に唱えるのはメイファン王国の自決と異国からの干渉の排除なのは当然である。

オルパシア王国とシエラに付き従った身分の低い亡命者達が体制の主軸となれば彼らは疎外される運命を免れない。

そうであるならばかつての栄光と長年の縁故を主張することだけが彼らに残された最後の手段なのは当然とすべきだろう。

だがその発言が真人との婚約の事実にまで及んだのは取り返しのつかない失策であった。

「……………な、何をおっしゃられる……………？」

ステーリアはようやくシエラの纏う空気が一変していることに気づいた。

もっともそれは一変していることに気づいただけであり、そこで氷雪の女王が生贄をもとめて舌なめずりしていることにまではとうてい気づくことはできなかつたのだが。

「貴方とほかの亡命貴族を中心に挺身連隊を設立いたしましょう。貴方がおっしゃるようなメイファンの誇りと優位性を戦場で証明してくださいることを望みます」

「わ、わたしに一兵卒の真似事をしるとおっしゃるのか!？」

ステーリアは絶句した。

そんな勇気があるならばメイファンの解放まで逼塞していたりはしない。

メイファン貴族の重鎮たる自分が自ら槍をとって戦うなどステーリアの想像の埒外であったのである。

「オルパシア王国の英雄を馬の骨と断じる貴方のことです。きっと目を見張るほどの戦果をもたらしてくれるでしょう。期待していますよ」

もう用は済んだとばかりに軽やかにシエラは右手を打ち振るった。

「神殿に戻ります。今日の面会はこれまでとさせていただきますしよ
う」

「よろしいので……………」

そう言いつつもハイデルはそう簡単にシエラの怒りが解けるはずがないことを確信していた。

真人との婚約を撤回させ、旧メイファン貴族の者とシャラを結婚させようとする勢力はこのところ大きくなるばかりであった。

その勢力のほとんどは旧貴族と現在の行政官僚たちによる。

軍部と民衆のなかでこそ真人の支持は絶対的であるが、だからこそ既得権益を狙う者たちにとって真人は排除しなくてはならない障害なのであった。

彼らにとって組織の枠組みに収まらない英雄は忌避すべき何かであるのだから。

「明日には体調を崩して引きこもるのが関の山です。戦場に立つ気

概のあるわけがないでしょう」

いい加減にして欲しい。

シエラは嘆息せずにはいられなかった。

覚悟はしていたが、やはり為政者の座は決して安楽なものではありえなかった。

シエラの掌握している将兵には行政官が完全に不足していたために、行政組織を立て直すためには現行の行政官の協力が必須であったのだが、その多くは

プリストルの暴虐を座視した者達であり、むしろプリストルから民を守ろうとした気骨の持ち主はすでにその多くが命を絶たれてしまっていたのである。

国のために命を投げ打つ気概もなく、ただ己の地位に恋々として既得権益にしがみつく魑魅魍魎との戦いからシエラは始めざるをえなかったのだ。

さらにそうした行政官と癒着していた旧貴族の帰還が混乱に拍車をかけていた。

直接的な武力をもたない彼らは互いに手を取り合い、まずメイファンの主体であるシエラとプリムを懐柔することで自らの権益を図ろうとしていた。

そんなことで真人とシエラたちの絆が裂けようはずもなかったが、彼らにとってシエラとプリムはまだまだ年端の行かぬ小娘という認識でしかなかったのである。

「早く真人様に会ってこの不快さを拭ってもらわなくては」

ところが実際のところシエラは彼らが思うような小娘どころか狡猾な女怪といってよい人物であった。

すでにシエラの頭の中で彼らをいずれ排除する青写真は出来ているのだ。

所詮安全なところから陰謀をめぐらすことしかできない彼らにシエラに対抗する実力はない。

そもそも神の加護を取り戻した巫女姫にはほぼ一切の実力行使が不可能と言える。

シエラが真人への愛情を失わぬ以上、これ以上の干渉はマイナスにしかならぬことを彼らは知るべきであった。

手遅れかもしれないが……………。

「ウフフフフフフ……………」

サディスティックに微笑むシエラをハイデルは痛ましいものでも見るようにかぶりを振っていた。

……あの純情可憐であったシエラフィータ様が……

どうもこのところ黒い妖気をまといだしたシエラがおそろしくも哀れである。

少なくともシエラが望んで黒化しているわけではないことは、日頃シエラの副官を務めているハイデルが一番よく承知していた。

「今日はあの年増もいないしクーデレの副官もいない……プリムには悪いけれど今日こそは一線を超えて見せるわ!」

……いや、もしかするとともに黒かったただけかもしれない。

濁いた笑いを浮かべてハイデルはうなだれるしかなかった。

「ただいまっ！真人様！」

神殿の一室にあてがわれた真人の私室にシエラが飛び込むと、そこには予想外の光景が広がっていた。

「……………ちっ……………思ったより早かったわね……………」

「ル、ルーシアさん！貴女がなぜここに……………」

真人の肩に頭を乗せ完全に身を委ねきつたルーシアが、最終的に真人とどのような行為に及ぼうとしたのかは明らかであった。

すなわち、シエラの際をついての抜け駆け……………！

「ハースバルド家騎兵二百、これよりお世話になるわ、シエラ」

どうやらオルパシア王国の内乱がひと段落したことで送り出された援軍ということらしい。

もちろんルーシアが熱烈に志願したであろうことは想像に難くないのだが。

846

ギリリ…………と歯を食いしばってシエラはかろうじて声を絞り出した。

「それは心強い援軍でございますわ。遠路はるばるご苦労様です。長旅の疲れを癒すために湯浴みと最上級の寝室の用意をさせましよう」

「悪いけど湯浴みは済ませたわ。あと、今日は真人と一緒に過ごす

つもりだから」

ピシリ

空間に走る亀裂を真人は幻視した。

事態が最悪の方向に進みつつあることを承知しながらも、真人はそれを阻む有効な手段を考え付かずに行ったのである。

げに恐ろしきは女の情念なのであった。

「……………そのような振る舞いハースバルド伯爵がお許しになりましたよ
うか」

シエラは切り札を切ったつもりであった。

堅物であるハースバルド伯爵は娘が真人を伴侶とすることを望んでいないフシがある。

オルパシア王国の軍事の要であるハースバルド家の一人娘が他国の王に嫁ぐということは国際政治上おおいに問題であることは確かなのだ。

「ああ、お父様から婚姻の了承はもらったから」

「なんですって!!」

「なんだって!」

「……………どうして真人まで驚くのよ」

……………ハースバルド伯爵……………あなただけは常識人としての見識を持つお方と思っていましたのに!

もちろんルーシアが真人のもとに嫁ぐことに関しては多くの異論が存在した。

しかしよくも悪くも真人という存在はこのアヌビア世界であまりに大きくなりすぎていた。

戦後を見据えたうえで、真人と敵対関係に陥ることだけは絶対に避けなくてはならない。

このままメイファン国王の座についたとしても、オルパシア国内に真人の親派は数多いのである。

また巨大になりすぎたオルパシア王国への諸国の警戒を解くためにも、メイファン王国との強調は欠かせぬものであった。

アルハンブラ王の王女を嫁がせるといふ意見もなかったのだが、こればかりは国王と王女の双方が一致して反対した。

「ア、アリエノールにはまだ早すぎる！」

「どうして妾があんな女つたらしに嫁がねばならぬのじゃ！」

そして結局のところアナスタシアとルーシアが嫁ぐことが本人の希望どおりに了承されたのだ。

政治的状況が許すのであればハースバルド伯爵といえども娘の恋を適えるのにやぶさかではなかった。

何より真人はハースバルドが知るかぎり最上の武人であったからである。

「んんん、真人、これからはずっと私が傍にいるからねえ！」

勝ち誇るようにルーシアはシエラに視線を送った。

武官であるルーシアは四六時中真人と行動をともにすることが可能だが、メイファンの実質的指導者であるシエラにはそれが出来ない。

「ハイデル……………この泥棒猫をつまみ出さない、可及的速やかに」

抑揚のない声音にハイデルは不幸にも冷や汗をかきながら首を振ることしか出来なかった。

……………真人様何とかして下さい！

……………すまん、オレにはムリだ！

漢達の熱いアイコンタクトも悪化する状況には何の力にもならなかったのである。

「「真人様!!」」

……………こうなることはわかっていた。

諦念とともに真人は運命を受け入れた。

「「今夜はどちらかちと過しすおつもりですか?」」

「あはははは……………」

渴いた唾いとともに、真人は禁じられた術を解放することを決意していた。

第七十一話

真人によつて強制的に絶頂を極めさせられたルーシアとシエラの二人は死んだように真人の両手にすがりついて熟睡していた。

……しまった……こんなことなら手をつかうんじゃない……
……。

真人は二人に絶頂を与えた弾みで両手に激しく抱きつかれてしまい、身動きが取れなくなっていた。

今まさに開花し始めたばかりの美少女に抱きつかれて夜をとにもするというのは精神衛生上決してよいものではない。

正直、上気して朱に染まった頬のなまめかしさが視界に入り、ほのかに甘い香りのまじった吐息が鼻腔をくすぐるたびに理性が悲鳴をあげているのがわかる。

かつて房中術の修行中には一切感じなかつたことだが、自分が女を欲することがあるのだということも真人は初めて知つた。

思わず瞳がなまめかしく開かれたシエラの唇に吸い寄せられる。

桜色に濡れた小さな唇はまるで真人を誘うかのように規則正しく上下していた。

ごくりと無意識に生唾を飲み込んだ真人は花の蜜に群がる蜂のようにその可愛らしい花卉に触れようと……。

「……そでいったい何をしてるのかな？お兄ちゃん」

おそろしく冷たい汗が真人の背筋を伝った。
どうやら本当の地獄はこれからになりそうであった。

メイファン王国が滅亡するより少し前、ブリストルの南方にはひとつの小国が存在した。

その名をメディーナ王国という。

水資源に豊富な王国は小なりといえど大陸でも有数の穀倉地帯として栄華と繁栄を誇っていたのだが、豊かな資金と食糧は飢えたブリストルの暴虐の前にほとんど抵抗らしい抵抗をすることさえ許さなかった。

豊かさは時として戦の力を失わせるよい例であろう。

この肥沃な平原を虎視眈々と狙っていたのが隣国であるワルサレム王国だ。

長年メディーナ王国と対立関係にあったワルサレム王国は国家戦略の一環としてメディーナの地を欲してきた。

一度はブリストルという強すぎる隣国によつてその夢は断たれたかに思われたのだが、常勝の名を欲しいままにしてきたブリストルの精鋭がオルパシアとの戦役で大打撃を受けた
事実を考えれば、この機会にかつての宿望を叶えんと欲してしまうのはあるいはやむをえないことなのかもしれない。

「……………その意気は買うがものを見る目がなすぎるな」

フェルナンド・ロンドベル・ヴィルヌーブ卿は苦笑にも似た嗤いをその口元に貼り付けながら指揮杖を取り上げた。

ブリストルきつての知将として知られる彼にとって、どうやらワルサレム王国は名誉ある敵とするに値しない存在であるようであった。もっともそうするためこそフェルナンドはメイファンをオルパシア軍に差し出したのだが。

「もうしばらくの間はオルパシア軍は動こうにも動けない……マヒト・ナカオカミならばいざしらず、貴様ら小国ごときにどうにかされるブリストル帝国と思うたか」

フェルナンドのとつた手段は典型的な各個撃破である。

侵攻の主軸であるオルパシア軍を足止めしている間に南北から迫る小国の連合軍をなぎ払う。

だが、そのためには連合軍がもはやブリストル恐れるに足らず、と戦意を募らせてくれる必要があった。

オルパシアと歩調を完全に整えられてしまつては元も子もない。だからこそフェルナンドはメイファン共和国の非正規部隊に惨敗する真似をして見せたのだ。

度重なる敗退で熟練兵を失つたブリストル軍にもはや往時の強さはない。そんな根拠のない噂すら流された。

戦後の国際政治を考えれば戦果をオルパシア王国に独占させるのは得策ではないことは言うまでもない。

そうして恐る恐る国境を突破してみればブリストル軍は右往左往するばかりでとても有効な反撃を行うどころではないではないか。

今こそ戦果を拡張して長年の宿望を叶えるときだ！

ワルサレム国王ハーリツシュ二世がそう決断することはフェルナン

ドの予想を一步たりとも超えるものではなかった。
メイファン方面に対する防備を引き抜いて編成されたプリストル軍
二万は、いまだ静かに生きのいい獲物の前で見事な擬態を続けてい
たのであった。

「奴ら……………逃げ出すのが早すぎはしないか？」

ワルサレム軍の副将であるゲルハイム將軍は、あまりにもろいプリ
ストル軍に違和感を隠せなかった。
主将である王子はすぐさま追撃を下令したが、居心地の悪さが拭え
ない。

訓練された兵というものはそう簡単に逃げ散るものではないことを
ゲルハイムはよく知っていたからだ。

ほとんど戦いもしないうちに逃げ去る兵というものは、いまだ訓練
の足りない新兵かあるいは……………。

心臓が急に不可視の手によって締め付けられたかのようにゲルハイ
ムは感じた。

そしてもつとも先に逃げ散ったはずの歩兵が後方で再集結を図って
いることに気づいたのはゲルハイム一人であった。

擬兵か……………！

よくよく見れば敵の退却スピードが速すぎる。

瞬く間に壊乱してしまうような新兵があればほどの健脚を見せて戦場
を走れるはずがなかった。

そうゲルハイムが気がついたときには既にワルサレム軍は敵中に踏
み込みすぎていた。

フェルナンドの将旗である剣と梟の紋章が燦然と翻ったのはまさに
その瞬間であった。

「殲滅せよ、身の程知らずにその代価を購わせるときは来た」

偽装されていた警兵が左右から矢の雨を降らせると同時に、退却しながら整然と戦列を整えたプリストル軍が反撃に転じるとワルサレム軍は

一気に狩人から獲物へと、主役から道化へと転落した。

罨に落ちた。

勝利はうたかたの幻でしかなかった。

勝てると思ったのはただ敵の術策であるにすぎなかったのだ。

勝利への信念を打ち砕かれた兵ほどもろいものはない。

無慈悲な鉄槌が加速度的な速さでワルサレム軍兵士の命を刈り取っていった。

ワルサレム軍の壊滅はすでに確定した事実であった。

「……………殿下を無事に落とし参らせよ。近衛以外はオレに続け！」

ゲルハイムは歴戦の宿将らしく決然としてこの戦場を己の死地と決めた。

長年の愛槍を手に手早く配下の手勢をまとめる。

そのほとんどは自分が名もない小隊長のころからの家族のような部下達だった。

「……………すまんがお前達の命オレにくれ」

いつときの逡巡さえなく一斉にうなづく部下を前にゲルハイムは莞爾と笑った。

あるいは武人の本懐と言うべきかもしれない。

ここで死なずして王子を救うことはできまい。
決死の兵はたとえ寡兵であっても容易に除去することはできないこ
とをゲルハイムは経験的に知っていた。
もつともプリストルの指揮官が有能であればみすみす被害を拡大す
るような愚策はとらぬであろうが。

「……………ワルサレムにも土つわものがいたか」

ゲルハイムの読みどおりフェルナンドは死兵を相手に正面から戦つ
愚を犯すつもりはなかった。

今のプリストルの置かれた状況を鑑みればただの一兵でも惜しいと
ころなのだ。

ここで無理にワルサレムの王族を殺さなければならぬ戦略的理由
もない。

二度とプリストルと敵対することのないだけの大打撃を与えること
ができればそれで十分であるはずだった。

「手数で疲労を蓄積させろ、無理押しはするな。……………但し、決し
て生かして帰すな」

どの国においても、本当の死戦をくぐりぬけた将兵は宝石よりも貴
重だ。

王族を見逃す以上、そうした貴重な国の宝をみすみす帰してやるわ
けにはいかないのである。

オルパシア王国を打ち破った暁には、ワルサレムもまたプリストル
の贄となることは確定した未来なのだから。

メディーナの平原でワルサレム王国軍が壊乱しているころ、ブリストル北部でもネルソン・ロドネーの連合軍がマンセル將軍率いるブリストル軍に壊滅的打撃を蒙っていた。

この戦いを機に、ブリストル健在の報は再び大陸全土に鳴り響いた。獰猛な虎は決して牙を失ったわけではなかったのだ。

これにより対ブリストル包囲網は小国のほとんどが脱落し、オルパシア王国とメイファン王国の軸を残すのみとなった。

結局のところ戦いの行方は真人の率いる連合軍主力の手に委ねられたのである。

ブリストル国内の山中でフィリオは懊悩していた。

ブリストルの誇る五人の武芸者が総力をあげての言い訳も出来ぬ完敗。

その後日ごとに強くなる無力感に苛まれるたび、フィリオは狂したように剣を振るいさらなる過酷な修行を己に課さずにはいられなかった。

だが真人との間に横たわる力量の差はそうした修行程度では縮まらないことを、誰よりもよくフィリオが承知していた。

あの男は人の身で敵う男ではないのだ。

もし敵う人間がいたとすれば、それはもはや人ではない。

それでもなお強さの高みをあきらめきれないのが、アセンブラの猛虎ことフィリオの宿業というべきものなのだった。

……足りない。

真人を倒すためには絶対的に力が足りなかった。

いったいどうすればこの差を埋められる？

武器か？

剣技か？

腕力か？

魔術を組み合わせれば縮まるものなのか？

繰り返される問いは答えを導き出せぬままにフィリオの精神を切り刻む。

いつしかフィリオの脳裏は真人を上回ることだけに埋め尽くされようとしていた。

「フィリオ・セベステロス・アセンブラ殿でいらっしやるか？」

紫の法衣に身を包んだストラト教の司祭がフィリオの前に現れたのは、まさにフィリオの懊悩が極限に達しようとしていた夕暮れ時であった。

「神殿の司祭がオレに何の用だ？」

怪訝そうにフィリオは明らかに身分の高そうな司祭を眺めた。

大きな肩幅に意志の強そうな太い眉、その堂々たる威風から察するにおそらくただの司祭ではないだろう。

もしかしたら噂にしか聞いたことのないストラト神の祝福を受けた戦神司祭なのかもしれない。

フィリオは温厚そうな表情をした目の前の男が一流の武者並みの実力を持っていることを直感的に感じていた。

「……人の身ではあのマヒト・ナカオカミに対抗することは不可能です」

短い司祭の言葉はフィリオの肺腑を深く貫いた。

言葉にこそ出さなかったが、それはフィリオがいつも脳裏に描いていた結論であったからだ。

「あの人外を倒す主神の武器が欲しくはありませんか？フィリオ殿」

司祭の吐き出した言葉のもたらした効果は激甚であった。

あの男を倒せるといふのか？

かつてのフィリオなら易々と武器に頼ることを恥としてすぐさま一蹴したのであろう。

しかし神の名のもとに強さを約束されたそれは、まるで麻薬のようにフィリオの精神を甘く蝕んで離そうとはしなかった。

第七十二話

司祭の男はベルファストと己の名を告げた。

ストラトが武神である以上、高位の司祭が非常に高度な武人であることは周知のとおりだが、目の前の男も十分以上に強者であることは確実だった。

頑強に鍛え上げられた野太い首とあごがそれを証明している。

四肢や胸筋と違い鍛え上げることが難しく、しかもなかなか強さの実感を味わえぬ部位だが、ある水準以上の武人はそうした部位こそが生死を分かつことを知っているものなのだ。

もしもフィリオが平静な状態であれば真つ先に勝負を申し出ているはずの男であった。

しかしもはやフィリオの頭の中にそんな思考は存在しない。

強い男と勝負をしたかったのは過去の話であり、今のフィリオには真人に勝つことだけが全てであった。

真人に勝つためには尋常な力ではない、言うなれば人ではないそれ以上の何かの力が必要なのだ。

その考えをケルドランの戦い以前の自分であれば決して認めることはいないであろうことにフィリオは気づいてはいなかったが。

「さあ、こちらにございます」

ベルファストに促されてフィリオが招かれたのはストラト神殿でもごくわずかな高位な司祭しか立ち入ることを許されぬ神域であった。豪壮な神殿とは裏腹に、神域は実のところ巨大な神像以外には何も置かれてはいない簡素な場所である。

広大な空間にわずか八名ほどの司祭が神像の傍らにひっそりと佇む光景は幻想的な色彩を帯びてフィリオの網膜を焼いた。

これがストラトの教徒であれば感涙の涙を流すであろう光景なのだろうが、フィリオにはそれほど感慨ももたらすものではない。ただ、神像の足元に安置された剣の神々しい輝きに気づいた瞬間、もはやフィリオの魂は剣に囚われてしまっていた。

それこそがおそらくは神代の宝剣バルゴなのであろう。

溢れる膨大な魔力

どんな名工も真似することの出来ぬ煌びやかな輝き

そして何より、戦士の魂を惹きつけて離さぬその底知れぬ魔性！

誰よりも個人としての強さに惹かれた戦士、アセンブラの猛虎が落ちた瞬間であった。

「……………フィリオ殿……………この宝剣バルゴならば、かのマヒト・ナカオカミを打ち倒すこと必ずや叶いましょう」

フィリオは口元にねじけた笑みを貼り付けてバルゴをその手にとった。

司祭たちが表情を消したその奥に嘲りの色を浮かべていることに気づかぬままに。

「すげえ！……………この力だ……………！この力さえあれば……………！！」

魔力が気力が定かではないが、ただ体内に力が際限なく溢れてくることをフィリオは実感していた。

それは修行では味わうことの出来なかった人を超える何かに違いなかった。

「マヒト……………！オレは貴様に追いついたぞ……………！！」

「……………今なんと仰られた？」

ほぼ同時刻、もう一人の司祭であるライオットはアウフレーベの予想外の答えにうるたえの色を隠せなかった。

「聞こえなかったのか？私には十二將軍としての責務がある。神の一兵卒となる余裕はないのだよ」

ライオットが瞠目した理由はただ申し出を断られたことのみあるのではない。

むしろ目の前の女傑がどうやら神宝を託されるということの真実に気づいているということにこそあった。

すなわち、神の宝具の担い手は最終的に神の操り人形と化するのだということに。

「……………マヒト・ナカオカミは我々神殿の助力なしに倒すことはないませぬぞ？」

ライオットの脅しも軍の中枢たる十二將軍相手にはいささか迫力の欠けたものにならざるをえない。

なんといつでも武力組織として神殿は決して軍に対抗しえるものではないからだ。

それにしてもアウフレーベがいともあっさりと神殿の秘中の秘を見

破ったのが不審であつた。

神の宝具は本来人間の手に扱えるものではない。

ゆえに宝具は担い手を人ではない何かに担い手を変えてゆくのだ。亡国の危機が迫ったときのみを使用を許される神殿の切り札であり、その機密に触れられるのはわずか八人の大司祭と最高司祭の九人に限られるはずなのだ。

「司祭が疑問を感じるのは当然だがエルドリムの悪夢から祖国を救った英雄ウエールズについて研究した歴史家の間ではすでに有名な話だぞ。連合軍を打ち破つたとき、

もはやウエールズに人としての意識がなかったということとは」

かつてアウフレイベは軍で軍事史を研究していたときに、高名な歴史家ルーンファスと交友する機会を得た。

エルドリムの悪夢と呼ばれる大連合軍を相手に、亡国の一歩手前からブリストルが逆転勝利を収めたことは長く軍事史上の謎とされてきた。

兵数において十倍以上の差をつけられ有能な指揮官の多くを討ち取られたブリストルが逆転する可能性は限りなく低かつたはずなのだ。圧倒的優勢を誇つた連合軍がたつた一人の青年によつて敗れ去るなど誰が考えよう。

しかし連合軍五万が一人の青年に五千以上の戦死者を出して壊滅させられたことは紛れもない事実であつた。

そして常軌を逸した損害に怯えた連合軍は、いまだ戦力の七割以上を保持しながらもたちまち本国へと退却を開始したのである。

全身に矢傷と刀傷を負い、精根尽き果てたウエールズは戦場で息絶えて全ては伝説の彼方へ消えたかに思われていた。

「一人の武で五万に立ち向かう。人の身でなしえることではない。では誰がなしたというのか？神が介在したと考えるべきであろう」

歴史学者の間でウエールズの戦いぶりが真実であるか否かは長く論議の対象となってきた。

いわく、ウエールズが剣を振ればその衝撃波で十人以上が吹き飛んだ。

いわく、歴戦の老將軍の鎧をまるで臓腑を引き裂くように容易く真つ二つにした。

いわく、肺や心臓に致命傷を負っているはずなのになお戦い続けた。それは英雄譚にありがちな脚色なのか、あるいは真実であるのか。歴史学者の間でもなかなかその答えを導き出すことが出来ずにいたのである。

しかし歴史学者ルーンファスはかつて有能な軍人であったこともあり、軍部でウエールズに関する良質な資料に目を通す機会に恵まれていた。

彼はウエールズが神の啓示を受け、そのまま神殿の奥で最高司祭の手で洗礼を受けている事実に着目した。

すなわち、英雄は神殿によって人為的に作り出されたものなのではないか？

高位の司祭は神の力を自らに憑依させ、その命を犠牲に巨大な力を行使することが可能であるという。

選ばれた特殊な人間ならばさらに巨大な力を振るえる可能性は高い。英雄ウエールズはそうして選ばれた哀れな生贄なのではないか？

ルーンファスの仮説はアフレーベの中でケルドランでの神殿との共闘を経て確信に近いものとなっていた。

神代の宝具を手にマヒト・ナカオカミを倒す。

確かに魅力的な提案ではあった。

しかしアフレーベは真人を倒すことを欲しているが、それを観測するアフレーベという主体がいなくなつては意味がない。十二將軍たるアフレーベが、その意思と力によつて真人を倒してこそケルドランで散つた泉下の英霊に対して顔向けが出来るというものであつた。

意思のない神という名の現象に成り果てることはアフレーベの誇りが許さなかつた。

「ならばあのマヒト・ナカオカミにどうして對抗するといつのです？ 明らかに人を凌駕するあの男に！」

おそらくは真人の武は英雄ウェールズと性質を同じくするものであろう。

それは人の身では決して超えることの出来ぬことを意味する。

人は神に勝てはしない。否、勝つてはならないのだ。

「マヒト・ナカオカミは神ではない………奴は正しく人であり、人によつて打倒されなければならないのだ」

困惑するライオットにアフレーベは莞爾と微笑んだ。

本来アフレーベを説得し、神殿に連れ帰らねばならないライオットが思わず見惚れるほどの笑みであつた。

経験のないライオットにはわからない。

時として生死の観念を越えた武人が見せる透徹な笑みが、どれだけ人を惹きつけるかということ。

「……………よろしいのですか？」

ライオットが遂に説得をあきらめ野戦指揮所を辞するのと入れ替わりに入ってきたのは全軍の軍師であるフェルナンド卿であった。彼にとつても神殿の協力は不可欠であるだけにアウフレーベの対応に無関心ではられないのだ。

「それでは私が神殿の傀儡になったほうがよかったか？」

「よしてください。ただでさえ信頼できる野戦指揮官は少ないのですから」

マヒトとの決戦を前に神殿の協力が不可欠であると考えるフェルナンドですら、アウフレーベが神殿に引き抜かれるのを容認することはできなかった。

野戦指揮官は特殊な才能を必要とするだけに十二將軍のなかでも得意とする人間は数少ないのである。

もちろん得意でないからといって彼らが水準からすれば突出した指揮官であることは間違いないのだが、やはり流動的になりがちな野戦には戦機を読む独特の勘が

絶対に必要であった。

フェルナンドの見たところそれを備えているのはジェラルド卿とマONSEL卿とライオン卿のほかにはアウフレーベあるのみであったのである。

何より強大ではあるが制御不能な兵器など、フェルナンドにとつてはナンセンスなものでしかない。

戦に勝つためにはむしろそうした不確定要素は出来うるかぎり排除するべきものなのだ。

「勝てるか？あのマヒト・ナカオカミに」

「勝ちましょう」

二人は顔を見合わせておかしそうに笑った。

マヒト・ナカオカミの武は限りなく神に近いことはわかっている。しかし彼の意思は紛れもなく人としてのそれであった。

彼もまた人ならば人の身で超えることの出来ぬはずがない。人はかくも強き生き物なのだ。

その強さは人のままにあるからこそ価値がある。

「結局のところ戦とは国家がその国益のために行う政治の亜種にすぎません。彼もまた人である以上そうしたしがらみから逃れることはできないのですよ」

たとえば、真人が一人でゲリラ戦を展開すればこれを捕捉することはおよそ不可能に近い。

個人で戦ったほうがむしろ真人のような超絶の武力を持った人間は安全なのだ。

またオルパシア王国が和平を選択すれば真人もまたそれに従わざるをえないだろう。

今もって真人はオルパシア国王アルハンブラの臣下であり、率いる兵の大半はオルパシア王国兵であるからであった。

真人の力は決して全能なものではない。

その選択肢をさらに限定することができれば連合軍の打倒は可能であるはずだった。

ある意味ではフェルナンドは敵将であるマヒト・ナカオカミを誰よりも信用していると言ってよい。

マヒトは個人的な心情を国家利益に優先することのない極めて理性的な人物である。

これ以上の戦闘に利益がないとわかれば迷わず兵を退く。

もちろんマヒトを直接打倒することをあきらめているわけではないが、最悪戦いに利あらずと思わせるだけの手はずは整えていた。

一抹の不安があるとすれば神殿の動きが見えないということであろうか。

アウフフレーベに断られた以上、神殿が他の生贄を探す可能性は高かった。

神の依り代となる人間がそうそういるはずはないが、もし見つければ神殿が投入を躊躇する理由はなにもない。

「……………神は信仰の対象でありさえすれば良いのですがね……………」

生きるということは自分の意思で何かを為すということだ。

神に対する信仰心がないわけではないが、人としてこの世に生を受けた以上人として最善を尽くすべきであった。

フェルナンドもアウフフレーベもわずかばかりともそれを疑うつもりはなかった。

第七十三話

メイファンの王城では押しかけた十数人の貴族にシエラがたった一人を取り囲まれていた。

日ごろから思ったよりも自由に操れぬシエラに強い不満を募らせていた彼らだが、それでもこうした実力行使に及んだのにはある理由が存在した。

「殿下ご自身が戦に出られるなどとうてい承服できませんぞ！」

その理由の最たるものはシエラファイターが自らブリストルへ親征することを表明したためである。

首都の奪回から補給を整え、さらにメイファンの治安がある程度の落ち着きを取り戻すまでにすでに三ヶ月以上の時間が経過していた。その間の国際情勢の変転はおそるべきものである。

一旦はオルパシア・メイファン連合軍に傾きかけた形勢は、ブリストルの精鋭が小国の連合軍を各個撃破してしまったために再び五分の形勢にもちこまれていた。

攻者三倍の法則に鑑みれば、不利なのはむしろ連合軍側とも言えるであろう。

それほどにブリストルの兵と指揮官の質は高く、その士気は天を衝かんばかりであったのだ。

そんな危険な戦場に新たなメイファンの支配者たるべきシエラファイターが参陣しようとしているのを、メイファンの支配層が承服できるはずがなかった。

「……………貴殿たちはいつから私に命令できるようになったのか？」

シエラの抑揚のない冷たい声音は見た目の愛らしさからは想像もつかぬほどの圧迫感を与えずにはおかなかった。

彼らの無意識は己の生存本能のおもむくままに必死に主に対して危険を訴えていたのだが、残念なことにそれが彼らの意識の表層にのぼることはないようであった。

「殿下はもはや殿下一人のものにあらず、国家の柱石としての責任をどうかご自覚ください」

一見シエラの安否を気遣うように見えても彼らの真意は違う。

シエラは今後のメイファン支配には欠くべからざる御輿であり、しかも幼く国家を運営した経験のない非常に扱いやすい存在であるはずであった。

少なくとも彼らはそう受け取っていた。

しかも彼らにとって幸いなことにシエラは女性の身でありその夫には国王となるべき資格が与えられるのだ。

ここで真人がブリストルへ出征するのは彼らにとってまさに千載一遇の機会であった。

真人への一途な想いを隠そうともしないシエラではあるが、そこは所詮は幼い娘である。

流浪の生活を強いられた王族らしい贅沢もできなかった彼女たちに、いかにも貴族らしい洗練された楽しみを植えつけてやればいかに英雄といえど貴族としての気の利かない

朴念仁な真人などには見向きもしなくなるだろう。

それが彼らの都合のよい予想であった。

だがシエラが戦いの場に向向するとなれば彼らの計画は水泡に帰してしまう。

無論彼らの中にシエラとともにブリストルと戦おうなどという気概

はなかつたし、何よりメイファン王国の血脈が途絶えてしまうということは彼らにとつて最大の恐怖であつたのだ。

なんとなれば王族なきメイファンはオルパシア王国に併合されてしまふ可能性が高いためであつた。

仮にシエラを失つたとしても確かにプリムローゼが残されている。

しかし為政者として表舞台に立つシエラと役割を分担するように、プリムは神殿内で巫女としての役割に傾注していたために彼らにはひどく手を出しにくい状態にあつた。

大貴族といえども神域への立ち入りは巫女の許可がないかぎり決して許されないからだ。

彼らが徒党を組んでシエラの出征を妨害するのはあまりにも当然のことと言えた。

「ストラトの神官に対抗できるものはカムナビの巫女たる私しかおらぬ。それよりともに出征してメイファンの勇を示そうというものはおらんのか？」

もちろんそんな無謀な勇氣の持ち主が彼らの中にいるはずもなかった。

プリストルの圧倒的な武力の前に恥も外聞もなく逃げ出して命がえらえた者たちである。

わざわざプリストルの矢面に立とうなど思いもよらない。

「戦いは武人に任せられませ。素人が戦に手を出すことは何もせぬより性質が悪いと申します」

確かに言っていることは事実であつた。

かつてのメイファン軍は現場を知らぬ貴族指揮官によって十分な力を發揮できずに壊滅してしまつたからだ。

もつともどの口でそれを言うのか、とはシエラでなくとも言いたく

もなるだろう。

「……………私はこれ以上議論をするつもりはないぞ」

「何と言われましても殿下が戦場に出られるのは必ずやお止めしてみせますぞ！」

すでにシエラの側近は締め出してある。

メイファンの宮廷内においてシエラの味方は実のところ驚くほどに少なかった。

やはり宮廷政治においては長年の縁故と賄賂がものをいうものなのだ。

非力な娘一人拘束することなど彼らには造作もないことであった。

だからこそこれがシエラの後通牒であることに彼らが気づくことはなかった。

普段のシエラを見る限り彼女は決して暴君ではない。

建前だけでも彼らが忠臣を演じるかぎり無体な実力行使に出ることにはあるまい、と彼らは高をくくっていたのである。

それが致命的な誤りであることにも気づかずに。

「……………神意に背くものには天罰がある。私は何をされようと拒まぬ。私を止めることがカムナビの天意であると思うものは止めてみるがいい」

巫女としての法術が使えなければシエラは華奢で非力な少女にすぎない。

「……無礼仕る……………！」

好機と見て取った彼らは実力でシエラを拘束するべく手を伸ばした。シエラが自ら容認している以上彼らにも遠慮する理由はない。ここでシエラを半ば監禁して手中に収めることが出来れば彼らの王国支配は半ば成ったようなものであった。

「不実な者たちよ！余は巫女ほどに優しくはないぞ！」

彼らが気づいたときには遅かった。

よく考えれば実力的に巫女に手出しできる力が彼らにあるはずがなかったのだ。

神の怒りに満ちた声が耳朵をうったと思うまもなく、彼らは時の牢獄で全身を焼けつくような苦痛に苛まれることになった。

糸が切れた人形のようにクタリと十人を超える貴族たちが崩れ落ちる。

それに要した時間はほんの数秒に過ぎなかったが、彼らの体感した苦痛の時間は実に半日を超えるものとして肉体に認識されていた。あまりの苦痛に骨の髄まで恐怖を刷り込まれた彼らにはもはや満足にシエラと視線を合わせることもすら出来ない。

ようやくにして彼らは理解していた。

無力な小娘に見えた巫女は、無力どころかとうの昔に彼らの死命をその掌中に弄んでいたということに。

「……………もうよろしいでしょうね？私が真人様の傍にいつてしまっても」

口の端だけを釣り上げて嫣然とシエラは嗤った。

倒れ伏したまま壊れた人形のようにコクコクと首を振る貴族たちを

傲然と見下ろしながら。

遅れてシエラを救出するために衛兵を引き連れて現れたハイデルは涙と涎に醜く顔おを濡らす貴族たちを前に不覚にも同情の念を禁じえなかった。

彼の主は美しく儂げな見かけにもかかわらず、敵と定めた人間に全く情け容赦をしないことを彼は十分に知っていたのである。

「……………早まったかな……………」

君主としてのシエラに不満などないが、上司とするには一抹の不安を禁じえないハイデルであった。

オルパシア・メイファンの連合軍は援軍を加えてもその総数は三万をやや超す程度にすぎない。

逆にブリストル帝国は軍事大国の名にふさわしく、各地で損害を重ねたにもかかわらずなお四万以上の兵力が健在であった。

それどころか年齢の制限なく最大限に動員することが許されれば、その兵力はたちまち十万を超えるであろう。

それをしないのは彼らが自らの武に対する自信を失っていないからだった。

しかし小国たちを蹴散らして安定しつつあるとはいえ国境の兵力を

完全になくすわけにはいかない。

オルパシア・メイファン連合軍を迎え撃つべく首都に集結した兵力はおよそ三万余。

期せずして連合軍とプリストルの兵力はほぼ同数で拮抗していたのである。

「……………さて、それでどう戦う気だい？ 真人」

ディアナは豊かな胸を真人の背中に押し付けながら甘えるような声で呟いた。

傍目からは甘えている以外には全く見えなくとも言っていることはおそろしく重大である。

なぜならディアナは現在の連合軍の戦力ではプリストルに勝てないことを知り尽くしているからだ。

ケルドランの城塞で使ったような天変地異を使用することは地形的にほとんど平野部であるプリストル中央部では不可能に近い。

しかも真人を精鋭をもって拘束することが不可能でないのはケルドランの戦いで実証済みであった。

同様の条件で戦えば連合軍は間違いなく敗れる。
ディアナはそのことを言っているのだ。

「ストラトの司祭はシエラとプリムがある程度抑えてくれる。それに同じ兵力なら彼らは野戦に打って出る……………それが付け目さ」

プリストルの強兵ぶりは主に野戦で発揮されてきたことを真人は知っている。

常に攻勢戦略をとってきたプリストル兵には城壁に拠って長期戦を戦ってきた経験がほとんどといっていいほどないのだ。

士気の維持が困難な長期戦を戦うことが出来るのは一部の精鋭たち

だけであると言えた。

つまり、勝算さえ立つならばブリストル軍が野戦によって連合軍の撃滅を図るのは明らかなのである。

「野戦になったから勝ち目があがるってわけでもないと思うけどね……………」

ディアナの見たところ野戦でブリストルと戦えばむしろ勝率は低下するように思われた。

メイファンの弱兵ははまだ解消されたわけではなく、オルパシア正規軍もブリストルと正面から争うには練度が不足していた。

さらには兵の質もさることながら野戦のダイナミズムに対応できる指揮官が連合軍には決定的に不足しているのをディアナは危惧していたのである。

「もちろんまともに戦う気はないよ。詐術に近い手だけ……………やらなきゃ負けるんだからしょうがない」

個人としても戦士としても、真人が正々堂々たる漢であることは疑いない。

しかし指揮官としての真人は正々堂々とはほぼ対極に位置する人間であることもまた確かであった。

中御神の家で学んだ孫子に曰く、兵は詭道なりということを真人はその身に染みて叩き込まれていたのである。

万を越す兵を預かる以上、被害を極限するためには手段を選ぶ必要を真人は認めていなかった。

「……………楽しいねえ……………あたしは戦場に立つたびに真人に惚れ直しちまうよ……………」

傭兵であるディアナにも正々堂々などという言葉はない。
勝って生き残ることこそが傭兵にとっての正義であった。
だが傭兵としてのディアナではなく一人の女としてはまた別の意見
がある。

強さ溺れず己を律するだけの掟を持った人間 そんな人間を
ディアナは真人とフィリオ以外に知らなかった。

第七十四話

大陸中の諸国が数多くの密偵を送り固唾を呑んで戦いの行方を注視していた。

あるいはもつと積極的に介入したい君主のいるのかもしれないが、プリストルが土壇場で見せた精強ぶりの前には様子見るほかなかったと言えるかもしれない。

とはいえ帝都での最終攻防戦に敗ればいかなプリストル帝国といえども滅亡は免れないだろう。

それはプリストルという帝国があまりに武に特化した国家であるためだ。

必要最低限の行政機構しかなく、また長年の膨張主義によって国内に少なからぬ反抗的な被征服民を抱えるプリストルという国はその拠つて立つ武を失った瞬間に瓦解する運命なのであった。

帝都に集結した最後の精鋭を失えば征服されていた辺境での暴動はすぐさま内乱へと姿を変えるであろうし、撃退されて今は逼塞している小国の王達も

この絶好の機会を見逃すことなどありえない。

だがオルパシア・メイファン連合軍もまた敗北すれば同じく国家の存亡にかかわることは明らかだった。

メイファンにいたっては残してきた兵力は皆無と言っている。

敗ればわずか数千のプリストル軍ですら簡単に再征服が可能であろう。

もちろんオルパシア王国とて無事には済まない。

常勝を誇るマヒト・ナカオカミと常備兵力の七割以上の外征軍が壊滅すれば、それを立て直すには十年単位の時間が必要となるに違いない。

双方にとって後のない総力戦の結果は、今後の大陸における政治関

係にも深刻な影響を及ぼすであろうことを各国の君主はもちろんよく承知していた。さらにこの戦いは神話のときから続くストラトとカムナビの戦いでもある。

戦神ストラトとは相容れぬ他の五大神を崇める国々はプリストル帝国の打倒を望んではいたものの、こうした危機をプリストルが幾度も乗り越えてきたことも紛れもない事実なのだった。

「なんだか怖いよ、お兄ちゃん」

そう言つて真人の膝の上でプリムは背中を丸めて身じろぎしていた。今やカムナビの巫女としての能力においてプリムは既にシエラの遙か先を行く。

生来の巫女気もさることながら、やはり王都での雑事から離れ神域で修行を積むことが出来たことは大きい。

来るプリストルとの決戦においてプリムの力は必要不可欠なものであり、故にプリムは修行のため離れざるをえなかった時を

埋めるかのように真人にまとわりついたまま離れようとしなかった。シエラとしてはまことに不本意ではあるのだがそれを邪魔することはできない。

プリムを真人から引き離して神殿に残したときの、外征中における真人独占権は交換条件であったのだ。

げに恐ろしきは乙女たちのたくましさであった。

「兵気が張り詰めている………さすがはプリストルというところかな」

真人はプリストル軍の将兵にただ素直に感心していた。

おそらく巫女気の高いプリムは無自覚ながらにプリストル軍の不退転の士気を感じ取ったのであろう。

ここまで高い士気を維持することのできるプリストルの指揮官には同じ武に生きる者として敬意を禁じえない。

これまで敗北に敗北を重ねてきた軍であるならばなおさらである。悲壮感の欠片もなく、彼らが勝つ気満々であることは真人でなくとも感じることは難しくなかった。

やはり大陸最強の名は伊達ではなかったのだ。

「……………神気もただ事ではないわ。正直私とプリムだけで彼らを排除するのは無理ね」

宗教勢力として一旦は壊滅していたカムナビの巫女はわずかにシエラとプリムの二名。

対するストラトは長年の修行に支えられたが厚い神官の層がある。

高位の司祭が真人の力を押し留めることができるのはケルドランの攻防戦が証明していた。

ストラト神殿がその総力をあげれば真人の術力はおろか肉体的な武にすら干渉することが可能であろう。

条件をなんとかケルドランの戦いと五分にもつていくためにもシエラとプリムの力は欠かすべからざるものであったのだ。

「……………違う、違うよお兄ちゃん……………怖いのはそれとは違う……………何か別のものだよ」

プリムだけが得体の知れぬ恐怖感をひしひしと感じていた。

確かにプリストル軍の脅威は恐るべきものだが、そうした人知のものとは決定的に違う何かが悪な顎を開けているように思えてなら

なかったのである。

「さすがはプリストルの誇る野戦軍だね、付け入る隙の欠片もありやしない……………知将フェルナンドの名は伊達じゃないところかね」

ため息まじりに天幕から現れたのは斥候に出ていたディアナとアリシアの二人であった。

両名ともに緊張の色は隠せない。

それほどにプリストルの陣容は完璧に整えつくされていた。

「……………左翼にアウフレールベ將軍、右翼にマンセル將軍、中央をライオン將軍とフェルナンド將軍が固めています。陣形からして真人様が予想された

ように彼らが攻勢に打って出るとは疑いありません。しかし思っていた以上にプリストル軍の練度……………高いものがあります……………」

これが後のない背水の陣であることもあるのであろうが、プリストル軍の精強さはアリシアの予想を遙かに超えていた。

彼女は軍隊内の当然の常識として、戦いの直前にこそ最も兵士の練度の差が表れることを知っている。

新兵であれば闇雲に気を高ぶらせて戦う前に疲弊してしまうだろうし、練度の低い兵はたちまち緊張感を欠いてしまう。

覚悟の足りぬ兵は自らの命を惜しんで出来うる限り戦場の危険から遠ざかるうとし、野心の強い兵は自らの手柄のために秩序を乱す。

しかしプリストル軍のこの整然とした統制ぶりはどうだ。

これほど戦というものに熟練した見事な兵たちをアリシアは知らなかった。

闘神と呼ばれる歴戦のディアナですら数えるほどしかお目にかかったことはない。

少なくとも兵の質において連合軍が圧倒的に劣っていることは明らかだった。

真人という規格外の存在なくして、まともに相手をしたならば倍の兵力を揃えたとしても勝利することは難しいだろう。

「……………それともうつひとつ気にかかることがある……………」

一軍を預かる将としてはとるに足らぬ問題かもしれないが、絶対に厄介な裏があると第六感がディアナに警鐘を鳴らしていた。

こうした戦場での第六感においてディアナの勘はプリムの予知にすら匹敵するのである。

「あのフィリオがなぜかどこにも見当たらないんだ。ケルドランの一戦で奴が尻尾を巻くようなことは決してないはずなんだが……………」

おそらくは真人に対する専任部隊であろう武芸者の集団が確認できただけで三つ。

その中にはケルドラン城塞での攻防で真人を瀕死に追いやったあのシンクレアの姿もあった。

集団が三つも存在するのはケルドランのときほど卓越した武芸者を揃えられなかったからであろう。

だからといって尚武の国ブリストルの武芸者である。油断できるような使い手は一人としていない。

「ま、いくらあのフィリオでも真人に敵いはしないさ……………それでも私は気になる……………気になるんだよ……………」

かつての僚友がどれほど最強の武に固執しているかをディアナは知悉している。

そして壁にぶつかるたびにいつもフィリオはより強くなってきた。

それでも真人の理不尽なまでの強さには到底及ぶまいが、魔術を封じられた真人の敵として厄介な人間であることに変わりはない。ディアナの見るところフィリオを上回る武勇の士は三つの武者集団のいずれにも存在していなかった。ということはブリストル側からフィリオを排除したということはあるまい。

「……………今ほそれどころじゃないってのにね……………」

ブリストルの野戦軍と雌雄を決しようと言ったときにもかかわらず、脳裏の片隅を占有し続ける不安を払拭することができない。戦の勝敗に対する不安は戦場の消耗品たる傭兵には付物だ。

しかしこんな漠然とした得体の知れぬ不安を抱えたまま戦に臨むのは、歴戦のディアナにとっても初めてのことであった。

これが自分だけのことであればディアナも開き直ることができたかもしれない。

それが出来ないのは間違いなくその不安の対象となるのが真人本人になるであろうからだった。

「それである者の様子はどうだ……………?」

仕立てのよい真紅の神官服を纏った初老の男は苛立ちを隠そうともせずそう言った。

苛立つのにはもちろん理由がある。

ストラト神殿最高司祭である彼にとって信仰の危機を打破すべき最高にして最後の手段が思うに任せぬままにいるのだ。

苛立つなという方が無理というものである。

「相変わらず宝剣バルゴを振るうことに執心の様子でして……………」

最高司祭に言葉を返す男　　ベルファストの声も苦いものにならざるを得ない。

つい先日までフィリオは実に都合よく思い通りに動いてくれた。

直接交渉に当たったベルファストにとっても笑いが止まらなくなるほど単純な男であった。

しかしその愚直なまでの単純さが逆に仇になるうとしているのだ。

神の宝具たるバルゴを手にした者は少なくとも一週間のうちには自我を失うのが常であったのに、あの男に限っては一月以上が経過した今になっても自我を失う兆候が見られないのである。

そしてバルゴを十全に振るうために、今日もまた神域内で修行を繰り返していた。

こんなはずではなかった。

最高司祭であるアーベナルドの苦悩は深い。

フィリオの誤算もさることながら、神槍ルドラに依り憑かせようとしていたアフレーベに拒絶されたことも大きかった。

このままフィリオが万全な状態にならずとも、二人ながら神の依り代をそろえることが出来ればいかなマヒト・ナカオカミといえども抗することは

できないはずであったからだ。

もはや神殿には後がない　　後がないのだ。

帝国に十二将軍がいるように、ストラト神殿にも偉大なる十二人の大司祭がいた。

しかしケルドランと二人が殉職し、この帝都の攻防においても少なくとも四人は神の御許に召されるだろう。
場合によってはそれ以上が。

さらなるマヒトとの交戦の継続はストラト神殿が嘗々と築き上げてきた信仰の担い手の全滅を意味していた。

だからこそ万全の状態で戦いたい。

敗北はもはや許されないのだから。

だというのにアウフレーベにはにべもなく拒絶され、しかも神殿秘中の秘まで見抜かれる始末。

フィリオはどれほど強さに対する執念が強いものか、いまだ神へ自らの身体を差し出そうとする気配もない。

確かに神の宝具にすら抗うその執念は目を見張るものだ。

しかし人は人の器以上の力を決して引き出せない。

神だけが神の力を使えるのである。

堅い意志のもとに修行を続けるフィリオの武は人としての頂点を極めようとしていることにアーベナルドも否やはない。

あるいはそのままでもマヒト・ナカオカミの打倒すら可能であるのかもしれなかった。

だがそれは所詮人としての武であってあまりにも不確定要素が大き過ぎた。

人の力では足りない。

神の力が必要だ。圧倒的な神の力こそがこの地上にストラトの正義を約束してくれる。

なぜなら人が神の力を超えることはない。

人が神の力を超えることがあってはならないのだ。

第七十五話

大陸の覇権を占う最後の一戦は、プリストル軍が先手を取る形で開始されようとしていた。

いや、そうせざるをえなくなったと言ってもよい。

先日プリストル帝国全土に向けて布告されたマヒト・ナカオカミの布告は、当初取るに足らないものと考えられていた。

プリストルに併呑された国々、係争中の国々の権利を正統なものとする。

それで辺境の蛮族たちが気炎をあげたとしても大した問題ではないはずだった。

数を減じたとはいえ辺境守備軍は残っていたし、地の利なく蛮族が押し出してくるならばそれは格好のえじきに他ならないからだ。ところが想像していた以上に辺境の抵抗は苛烈なものとなった。

彼らにとって連合軍が帝都にまで侵攻したこのような好機はおそらく百年待っても訪れない。

後先を考えず友の屍を踏み越えて剣を振るう彼らの勢いはプリストル辺縁部の各所で無視することの出来ない損害を積み上げつつあったのである。

本来の充足率を半分も満たしていない辺境軍が悲鳴をあげたのはしごく当然の結果であった。

補給を考えれば長期戦は連合軍に不利と見られていた当初の観測は思いもかけぬ辺境の抵抗によって崩されようとしていた。

だがそればかりではない。

百年以上の長い年月が流れていることをつい忘れられがちなことなのだが、プリストルは覇権国家でありこれまでにあまたの国家を吸

収めている。

その多くはブリストルの一貴族として帝国に吸収されかつての栄華を思わせるものは何一つ残されていないはずであった。

しかしそれはブリストルが大陸最強の覇権国家であればこそだったとも言える。

ブリストルにとって不幸なことに、それに気づくにはマヒト・ナカオカミの強さはあまりに眩しすぎ、辺境の蛮族の抵抗は頑強でありすぎた。

そして何よりブリストルという国家に対する忠誠と絶大な武に対する自信が、一時彼らの目を眩ませたとしてもそれは無理からぬことと言わねばならないのかもしれない。かもしれなかった。

「いいか？マヒト・ナカオカミには目もくれるな。たとえ隣を走る戦友が打ち倒されようとも、ただオルパシアの軍兵だけを狙え」

これまで連合軍に苦杯を舐めさせられてきたブリストルの回答の一つがこれであった。

確かにマヒトの武力は脅威ではある。

しかし一流の武芸者が一命を賭して拘束すればいかにマヒトとて万を越す軍勢を相手にできるわけではない。

如何なる犠牲も顧みず、ただ主力たるオルパシアの外征軍を撃破することをフェルナンドは一兵卒にいたるまで周知徹底させていた。

ブリストルの精兵　の実力はオルパシア・メイファン連合軍の力に二倍する。

すなわち、たとえ一万がマヒトに倒されようとも残り二万が健在で

あればブリストルの勝利は動かない。

問題は鬼神のごときマヒトの武力の前に兵たちの心が折れないかどうかなのだが、あらかじめ事前に覚悟を促しておけばその心配は局限できるはずであった。

「まあ、最初からそんな損害を見込むのは用兵家として忸怩たるものがあるんだけどね……………」

思わずフェルナンドは自嘲する。

万を超える損害を最初から許容するなどということは用兵家にとっては恥以外の何物でもない。

最小限の損害で最大限の戦果をあげることこそが用兵家の誉れなのだ。

「勝つことこそが重要なのだ。ことこの戦に限ってはな」

ブリストルの誇る十二將軍としては内心不本意ではあるとしてもライオン卿の口調はよどみない。

負ければ祖国が滅びるのだ。

今更体裁を整えている場合ではないことは明らかだった。

「……………それにここで勝たねば武が廢ることにもなりかねぬ」

ライオンの懸念はフェルナンドも深刻に受け止めていた。

おそらく神殿がなんらかの神の奇蹟を切り札として考えていることはアウフレーブに対する要請からも見て取れる。

しかし神の力に頼った奇蹟で勝利をえることになんの価値があるだろうか。

武を鍛えることに人生を賭けてきた。

最強の武を目指し、大陸に武名を轟かせたのは決して神の力ゆえで

はない。

あくまでもそれは人としての努力がもたらしたものである。

神から与えられるだけのいつたい何に達成感を見出せばよいというのか。

それで本当に生きていると言えるのだろうか。

「勝たなくては……………軍そのものの存在意義に関わりましょうな……………」

神の力にすぎれば何の苦労もなく勝利が与えられるのなら、最初から軍などいなくてもよいではないか。

政ですらその意義を失い、そして神殿の力だけが加速度的に増大していくに違いなかった。

それは命を懸けて軍に奉職してきたあまたの兵士たちの命を無にすることに等しい。

「そうはさせぬ。我ら十二將軍の名にかけて」

ライオンもフェルナンドも真人との戦いに勝つことに何の疑いもなかった。

彼らこそは大陸最強のブリストル軍の体現であり、人が追い求める強さはいつか神をすら凌駕することを信じていた。

たとえ真人が神であろうと、それを屠ることこそが最強の武を極めた人の強さであるはずだった。

「見事なもんだね……………」

流れるように流麗な機動。

ディアナはその力強さとしなやかさを兼ね備えた鮮やかというほかないプリストル軍の機動に感嘆のため息をもらしていた。

これほどの練度はディアナの指揮する歴戦の傭兵部隊ですらなしえないだろう。

中央を少数の武芸者で固め、左右に騎兵戦力を集中させたその構えは典型的な両翼包囲であり、その速さは連合軍に対応する暇さえ与えぬかに見えた。

だが……………」

「ダーリンはあんたたちが考えるよりも少し複雑な人間なのさ」

ディアナは嗤う。

その恐るべき顎を開けて連合軍の両翼を捉えようとしたプリストル軍の前に、彼らのもつとも恐れる男が待ち構えていた。

「ま、マヒト・ナカオカミが左翼に！」

「いや！それは偽者だ！マヒト・ナカオカミは右翼にいるぞ！」

全く想定をしていないその事態はプリストル軍の精鋭の矛先を鈍らせるには十分すぎた。

彼らは決してマヒト・ナカオカミを直接相手にはならないという厳命を受けていたからだ。

軍律と統率が行き届いたプリストル軍だからこそ、その影響はあまりにも甚大だった。

「……………違つっ！！」

左翼を蹂躪する真人の武勇は、確かに優れたものだが決して本物のような規格外のものでないことをアウフレーベは見て取っていた。おそらくはオルパシア国内の武芸者を呼び寄せ、それになんらかの魔術で偽装を施したものだろう。

「偽者だ！構わぬから血祭りにあげる！」

ようやく真人への攻撃命令が出た後になっても、ブリストル軍の士気はなかなか回復しなかった。

もはや伝説の域にまで達した真人の武は、いかに精強なブリストル軍であっても一兵卒が相手にするには大きすぎたのだ。

「武芸者たちをマヒト・ナカオカミの偽者に向ける！」

フェルナンドは苦渋に唇をかみ締めながら武芸者の分散を命じざるをえなかった。

本物のマヒト・ナカオカミの行方が知れないのが気がかりだが、このままではブリストル軍は座して死を待つ運命を免れない。

対マヒト・ナカオカミに戦術を特化しすぎたことが完全に徒となっていた。

まさかこんな子供だましにブリストルの精鋭が振り回される日がこようとは　　！

「偽者でも構わぬから一刻も早くマヒト・ナカオカミの首を落と

せ！急げ！」

急がなくてはならなかった。

目の前の男全てがマヒト・ナカオカミなどということは現実的にありえないのだ。

兵士たちの恐怖を取り去るためには最低でも一人は偽者を倒しておく必要があった。

幸いにしてマヒト・ナカオカミの偽者はそれほど多くはない。

どうやら左右両翼に二人づつ、中央に一人の計五人に留まるようである。

これは真っ先に標的にされるであろう真人の影武者が務まるほどの武者が連合軍国内に見つからなかったためであろう。

「こんな小細工で我がブリストルが敗れると思うな」

両翼の指揮官はあのアウフレイベとマンセルだ。

すぐに混乱を建て直して通常どおりの正攻法に復帰するであろう。

マヒト・ナカオカミの偽者では一時的な混乱を誘発することはできても、ブリストル軍を打ち倒すことなどできるはずもない。

時間の経過はブリストルを最終的な勝利へと導くはずであった。だが……………。

「中央のオルパシア軍が動き出しました！先頭にマヒト・ナカオカミの姿が！」

やはり来たか。

このまま手をこまねいていても連合軍に勝利の目はない。

我が軍が混乱から回復せぬうちに次の手を打たねば敗れるのみだ。

それを考えればブリストル軍の中核たるライオンと自分を狙うのは戦理に適っているとと言えるだろう。

「その程度の策でこの私を打倒できると考えているのなら………思
いあがるのもいい加減にしてもらおうか」

分散したとはいえブリストルの誇る武芸者たちはいまだ一団が本陣
前に健在であった。

しかも本陣を統率するライオンは攻勢を得意とするアウフレーベヤ
マンセル將軍と異なり、野戦において守勢を得意とするブリストル
においても稀有な将帥である。

こんな性質の悪い手妻にしてやられる道理がなかった。

「重装歩兵を押し出せ。武芸者にはマヒト・ナカオカミを牽制させ
る。魔道師隊と弓兵は敵の騎兵を集中して狙え！急げ！」

中央から突出してくるオルパシア軍の主力は数百ばかりの騎兵であ
る。

騎兵は攻撃力こそ強いものの防御力に乏しい兵科だということは用
兵家にとっては常識であった。

堅牢をもって知られるブリストル重装歩兵にとっては格好の獲物と
言っべきだろう。

たとえその指揮を執るものがあのマヒト・ナカオカミであっても、
だ。

「いつまでも貴様の一人よがりが続くと思うな………ナカオカミ・
マヒト！」

マルティン・ベルドランドはブリストルでも屈指の剣の使い手として知られていた。

彼の得意技は日本で言うところの居合いに近い抜刀術である。

多対一の接近戦を強いられる戦場にはいささか向かない剣術ではあるが、もしも一対一であればその強さはあのシンクロードに迫るかもしれないなかった。

そして鉄壁の防御に定評のあるフランチと長槍の使い手であるトリスタン。

いずれもブリストルに隠れもない人斬りである。

彼らの力を持つてすればマヒオ・ナカオカミとて苦戦は免れないはずであった。

特に魔術行使を封じられた現在の状態においては。

「……………戦う気があるのか……………彼奴め」

マヒトを先頭に一気にブリストル中央軍へ突入するかに見えたオルパシア軍騎兵は次々に矢を射掛けるや一撃離脱に転じつつあった。たかだか数百の彼らに矢を射掛けられてもブリストル重装歩兵には痛痒にも感じられない。

味方の損害が少ないのはいいが、彼ら武者にとって拍子抜けする事態であることも確かであった。

彼らは超一流の武者ではあるが、フィリオやウエルキンといったケルドラン攻防戦に選抜された人間ほど多対一の戦に向いているわけではない。

このまま戦が集団戦に移行した場合、無用の長物と化すのは明らかだった。

かと思うとマヒトを中心に突撃の構えを見せたりするためなかなか心が休まる暇もない。

いつしかオルパシア軍の軽装歩兵が騎兵隊に追いつき、両軍の戦端がまさに開かれようとしていたその時、それは起きた。

感じられたのは一塵の風である。

万を越す人馬のいきれ、血と汗と戦場にしか存在することの出来ぬ熱を癒すかのように吹きぬける爽やかな涼風。

そんな心地よい風が汗ばんだ肌を潤していったと思ったそのとき、マルティンは不意に天と地が逆転する光景を目撃した。

何故だ？私は倒れたのか？いや、これはまるで地に向かって

マルティンが思考できたのはそこまでだった。

武者たちの首は胴を離れ、真つ逆さまに大地へと転がり落ちていたのである。

「……………中御神流抜刀術、風唄」

いかにも古強者然とした風体の男から漏れた声は意外にも少年らしい若々しさに満ちていた。

武者たちを制圧した彼は、ブリストル軍の本陣へとその身を躍らせる。

そして彼が頼もしそうに見たその視線の先では、マヒト・ナカオカ
ミが器用に鉄鎖を操ってブリストル兵をなぎ倒していた。

第七十六話

正面を守るべき武者たちが全滅した事実はブリストル中央軍に衝撃をもたらさずにはおかなかった。

マヒト・ナカオカミの武はいかにブリストルが尚武の国であろうとも、まともな歩兵が太刀打ちできる存在ではないからだ。

しかし疾風のように駆け抜けた一人のオルパシア兵を押し留めることができないのは明らかにおかしかった。

やすやすと一騎駆けを許すほどにブリストルの武は安くはない。

「そうか……………マヒト・ナカオカミ、お前か……………！」

フェルナンドは正しく事態を悟った。

我々はマヒト・ナカオカミに二重の詐術を弄されたのだ。

マヒト・ナカオカミでないものがマヒト・ナカオカミに化けたのなら当然逆のことも出来るはずであった。

すなわち、本陣目掛けて疾駆するあの壮年の兵がマヒト・ナカオカ

「その人なのだ。」

「フェルナンド……………ここはオレに任せてお前は他で指揮を執れ」

ライオン卿の言葉にフェルナンドは目を剥いた。

指揮所というものはそれほど簡単に変えられるものではない。

このような大戦が始まってしまつてから指揮所を動かすのはいたずらに指揮系統に混乱を生むであろう。

それでもなお指揮官を分離するということはライオンがマヒト・ナカオカミの来襲を防ぎきれないと判断していることを意味していた。

「お前さえいればなんとか軍集団の手綱を握ることは可能だろう。いかにマヒト・ナカオカミでも二手に分かれた本陣を潰すことは適うまい」

中央の武芸者は討ち果たされたとはいえ、まだまだ武芸者の数は残っている。

マヒトがライオンと戦っている隙に防御を固めればフェルナンドまで襲われる確率は限りなく低い。

しかしそれはこの場にライオンを見捨てていくに等しいことだ。

「……………口惜しいですね……………たった一人を止めることが適わないとは」

フェルナンドは苦渋とともにライオンの提案を呑んだ。

軍師らしい果敢な決断であった。

マヒトがいかに最強の武を誇ろうともそれは所詮個人の武であるにすぎない。

ならば軍として連合軍を圧倒することがブリストルが勝利する道であることは明らかであったからだ。

そのためには長年の僚友だとして捨てていくことを躊躇するつもりはなかった。

「どござい」武運を「

「いずれストラトの御許で会おう」

ブリストルの誇る十二將軍の至宝は己が命を糧にしても、連合軍に勝利することを欲したのだった。

「またあの姉さんとやりあうことになるとはなあ……………」

ディアナから傭兵団の指揮を任されたマグレープは己の運の悪さに歯噛みする思いであった。

アウフレイベ率いるブリストル軍はいち早く混乱を收拾し、連合軍右翼に再び攻勢に転じようとしていたのである。

中央でマヒトの影武者としてオルパシア軍主力の指揮を執るディアナの代わりに傭兵団の指揮を任されたのはよいが、ケルドランの攻防からアウフレイベの手ごわさを身にしみて

知っているマグレープとしては出来れば相手にしたくない女であった。

だからといって手をこまねいてはられない。

「野郎どもっ！槍を重ねて方陣を敷け！姉御と兄貴がブリストルの犬を血祭りあげるまで守りぬくんだ！」

連合軍右翼の主力は傭兵団とオルパシアからの補充部隊の混成である。

精鋭で固められた中央軍と異なり、メイファン軍を主力とする左翼同様二線級の戦力であることは否定できない。

しかし長年の経験と鍛錬は上手の相手であっても軍と言う組織は十分に粘ることができるということをマグレープに教えていた。

最初からアウフレーベを打ち破るなどということは期待されていない。

ただマヒトがブリストルの本陣を陥れるまで時間を稼ぐことだけがマグレープに求められる全てであった。

「気合を入れるよ野郎ども!!」

歴戦の傭兵はふてぶてしく嗤って剣を抜く。

彼らにとってこつした地獄こそがもっとも慣れ親しんだ故郷のようなものなのだから。

「カムナビの祝福がある今、ブリストルなど恐れるに足りぬ!」

高々と宣言したのはメイファン遠征軍を率いるハイデルである。

シエラの侍従武官であった彼は今回の遠征に伴い將軍へと出世していた。

一度歴戦の武官を失い、さらに何の役にも立たない老害を排除すると、彼のような若い士官を登用するほか道はなかったとも言える。

もっともシエラの黒い部分を見すぎた彼は宮廷を離れて最前線で指

揮を執れることを非常に喜んだという。

「死戦せよ！メイファンの誇りを取り戻すときは今ぞ！」

かつて弱兵のそしりを受けたメイファン軍の姿はそこにはない。

シエラとプリムという精神的支柱と、カムナビの神の加護を取り戻したメイファンにとってこの戦いは汚濁を雪ぐ場でもあった。

連合軍でもっとも高い士気を維持したメイファン軍の陣容にマンセル将軍も困惑を隠せなかった。

「戦いは士気でするものだとはわかっていたつもりなのだかな……
……」

かつてのメイファン軍ならば鎧袖一触に打ち破って見せるつもりであった。

しかし現在のメイファン軍はマンセルの手腕をもってしても容易に打ち破れるような相手ではありえなかったのである。

「切り崩すぞ。弓兵を先頭に立てろ」

こうなつては弓戦と槍兵と騎兵による波状攻撃でメイファンの消耗を強いるほかはない。

いかに気力が横溢していようと疲れたときにこそ兵の練度の差というのは如実に現れるものだからだ。

優秀な戦術家らしくマンセルは正攻法に復帰した。

「……………これは我慢比べになるな」

「乗り崩せ！弓兵を蹴散らしたら一気に離脱するんだ！」

中央ではマヒトの姿をしたディアナによって連合軍の攻勢が続いていた。

絶妙の戦術眼によってプリストルの指揮系統の乱れを衝き、ルーシア率いるハースバルドの騎兵部隊が神速で内部を蹂躪する。

手堅い防御と、一撃離脱の騎兵部隊を連携させたディアナの手腕は見事というほかはない。

両翼が持久している間にプリストルの本営を陥とす。

それが連合軍の基本戦略であった。

マヒトの影武者によって動揺していたプリストルが混乱を收拾する前に本営を陥とすことが出来れば連合軍の勝ち、出来なければプリストル軍の勝ちだ。

限られた時間のなかで己自身の焦燥と戦いながらディアナは彼方のマヒトに視線を送った。

「……………頼んだよ、ダーリン」

集団の力は個人の力に勝るといふ。

それはある意味では真実だ。

しかし一定の条件に限りその規格に当てはまらぬ例外の人間が存在する。

マヒト・ナカオカミはまさにその貴重な例外の一人であった。

たった一人の動きにブリストルの精鋭が翻弄され、中央軍集団の統制は乱れに乱れていた。

前線で戦う兵たちは相対するマヒト・ナカオカミが影武者であるということを知らない。

まさか蛮勇を奮う古強者を押し留めることができないなどは夢にも思っていなかったのである。

「なんだ？なんだ奴は！？」

被害こそ多くはないが早すぎる動きに捕捉が追いつかない。

瞬く間に本営へ接近されていくのを兵士たちは齒軋りしながら見送るほかないのであった。

えてして集団戦に慣れた兵士というものは、卓越した武芸者のように小回りの利かない存在であるからだった。

「いかん……いかんぞ！このままではライオン卿とフェルナンド卿が………！！！」

白昼堂々暗殺者を本営へ立ち入らせるなど誇り高きブリストルの精鋭として恥以外の何物でもない。

しかし彼らの思いは通じることなく、オルパシアの兵は遂にブリストルの本営を囲む木柵を突破した。

「マヒト・ナカオカミか

？」

將軍位を示す真紅の外套を身に纏った男がゆっくりとマヒトを値踏みするようにねめつけている。

その重厚な武の気配はまさに歴戦の勇者のそれであった。

抜刀した警護の兵が軽く百人はこちらを窺っているが、本当に自分の相手となるのはこの將軍位の男くらいであろう。

ライオンはもともと一兵卒から成り上がった一流の武者であり、個人的な武勇になんら不足するところはなかったのであった。

「然り、中御神家守護司、中御神真人、推参」

真人の瞳は抜け目なくもう一人の將軍を探していたが、まずは目の前のこと男を倒してしまわなくてはならなかった。

一瞬の間に二つの銀光が交錯し、ライオンは危ういところで真人の鋭鋒を退けた。

武芸者としての勘がなければ今の一撃で首を落とされていたかもしれない。

それほどに真人の抜き打ちは早く鋭かった。

「退いておれ」

本来ならば身を挺して自分をかばうはずの衛兵も、こうなっては邪魔にしかない。

縦横に武器を揮い、自由に動けるスペースを確保するためにも衛兵たちを遠ざける必要があった。

そう言う間にも真人の連撃は止まらない。

「くっ……………」

これほどに差があるものか。

致命傷を防ぐだけでライオンは精一杯であった。

たった数合剣を打ち交わし、ほんの半分の間に四肢を切り刻まれること数箇所、出血の量も決して少ないものではない。

これでは祿に時間稼ぎも出来ぬまま倒されてしまふやもしれぬ。

ライオンは獅子吼して気力を振り絞った。

ただ、まだ死ぬわけにはいかない。

時として人の精神力は肉体の限界を上回る。

真人はそのことをよく承知していた。

そして限界を超えた身体が決してそう長続きはしないということも。

肩を抉られ、太ももを斬りつけられ、わき腹から出血し、満身創痍となったライオンはまさに尊敬すべき雄敵ではあったがその命運は旦夕に迫っていた。

時間にしてわずか数分の惨劇であった。

あまりの早い攻防に衛兵たちも全く手を出すことが出来ない。

そもそも二人の剣跡を目が追えないのだから手を出せるはずもなかった。

しかしプリストルの誇る勇将の命が風前の灯であることだけは明らかに見て取ることが出来た。

「……………生涯の最後により敵にめぐり合えた……………本望なり」

「いずれ地獄にてまた勝負仕る……………御免！」

限界を超えた身体が急速に力を失っていくのをライオンは嘆息と共に受け入れた。

実に緊張感のある、己の限界以上の力を出し切った攻防であった。

たとえあの世で先達に見えようとも、胸を張って誇れるだけの戦いをしたという自負がライオンにはあった。

オレはオレの勤めを果たした。フェルナンド、お前は
前の勤めを果たせ。

わずか十分にも満たぬ短い攻防ではあるが、それはプリストル軍にして宝石にも勝る貴重な時間をもたらしていた。

「……………ライオン卿、貴方の死は無駄にはいたしません」

そのころフェルナンドは中央軍でもっとも強力な重装騎兵と魔法連隊を掌握し、自らは雑兵に扮して一気に連合軍へ攻勢に転じようとしていたのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0121f/>

世界を渡る少年

2010年10月13日01時44分発行